
メダロット2 ~クワガタversion~

鞍馬山のカブトムシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メダロット2 ～クワガタversion～

【Zコード】

Z5680V

【作者名】

鞍馬山のカブトムシ

【あらすじ】

僕は天領イッキ、小学三年生。

一学期が始まつて間もないある日、ママにレトルトカレーを買つてくるよう一万円を手渡されて、コンビニに行くと、ヒカル兄ちゃんが叱られていた。僕はヒカル兄ちゃんの横、インスタント食品のコーナーを人差し指で指した。すると、何を勘違いしたのかヒカル兄ちゃんは……。

ひょんな勘違いから、メダロッターとなつた少年イッキとメダロッタたちの笑いと涙（？）と友情の物語、ここに始動！

【メタロラッシュ?】（前書き）

概ねカブトバージョンと展開は同じですが、入手メダル・パート、一部のストーリー展開が異なったりします。

【メダロットとは?】

2001年度に発売されてから、2022年度まで広く世界の市場を席巻する日本独自の完全オリジナルロボット技術の最高峰、それがメダロット。

メダロットはコンピューターの頭脳ではなく、「メダル」を頭脳として動く、これまでのロボット学の常識を打ち破ったロボット。メダルで動くロボット、だから略して「メダロット」

メダロットは「aignepett」と呼ばれる骨組みをベースとして、様々なパーツを組み合わせることにより、無限の力を引き出すことができる。

メダロットの利用範囲は子供の遊び相手に止まらず、医療、果ては軍事利用にまでメダロットは普及している。

また、一部「レアメダル」という物があり、現在メダロット社（株）から発売されているメダルの殆どは、この幾枚かの「レアメダル」をコピーして製造されている。と、インターネットではこのようないい情報が流れている。

プロローグ きつかけは勘違い

キーン、コーン、カーン、コーン！

御神籠町ギンジョウ小学校始業式の終了を告げるチャイムが鳴る。

形式ばつた校長先生の長い挨拶に、生徒一同はやや疲労気味。

三年生の列にいるちゃんまげ頭の少年も、周りの生徒と同じく校長の挨拶が終わつたことに、ほつと胸を撫で下ろしていた。

僕は天領イツキ、小学三年生。歳は九歳。自分でいうのも何だけど、チヨンマゲ頭を除いて、これといった特徴が無い。更にメダロットを持つてないという点が、僕の存在の薄さに拍車をかけている。まあ、それというのも…。

イツキ少年の自己紹介はまだまだ続きosoなので、ここで打ち切る。それに、自己紹介は最初の一^イ行部分だけであり、後半はメダロットに対する願望と、メダロットを持つてない愚痴と決まつているから。

教室で暑苦しいオトコヤマ先生のホームルームも済むと、イツキはいつも通り靴箱に向かい、下履きから上履きに履き替えて、帰宅しようとしたが、

「イーツキ！」

と、元気一杯な女の子がイツキの名前を高々と叫んだ。

イツキは声の主のほうを振り向くと、パシャ！という音と共に眩しい閃光が目を襲つたので、イツキは立ちくらんだ。

「何するんだよ、アリカ」

イツキは閃光を放つた少女に文句を言つた。イツキにそつ文句を言わても、アリカと呼ばれた少女は悪びれる装い全く見せず、ただ、ニコニコと屈託ない笑みを浮かべている。

肩辺りでボーイッシュに切り揃えた茶色がかつた髪、ぱっちりくりくりとした二重の瞼に、意外にも整った目鼻立ち。少女は純白のワンピースやドレスなどがとても似合いそうだが、白シャツの上に着込む機能重視の紫のオーバーオールの服装と、屈託ない笑みの裏で相手を抜け目なく観察しているような目が、無言で周囲に少女が「女の子らしい」服装を拒んでいるかのような印象を与える。

アリカは見せつけるように、イッキの眼前にカメラを突き出したので、イッキは思わず顔だけ一步退いた。

「イッキ！ ねえ、これ見て！ 貯めた小遣いで変えたのよ」

この子はアリカ、僕の幼馴染。六歳の頃、父親にカメラを貸してもらい、撮った写真を両親に褒められたことがきっかけで、ジャーナリストを志すようになった。初めはジャーナリストという響きがかっこいいから憧れていただけのようだったが、去年、偶然にもスリラーの犯行の瞬間を撮るという、正に決定的なジャーナリズムな場面を撮つたことにより、単なる憧れから、本格的にジャーナリストを目指すようになった。

男っぽく姉御肌のアリカ、そのアリカにイッキはよく引っ張り回される。

「何を変えたんだよ？」

「んもう！ わかんないの？ ほら、レンズよ、レ・ン・ズ！」

「レンズが変わつて、どうしたつていうの？」

「はあー。あんたねえ、メダロット以外のこともちよつとは興味持ちなさいよ。前のレンズは古くて、写りに何かしら不調があつたけど、今度のは違うわよ。望遠・広角の一一種類対応、微妙な光量調節も可能で、状況に応じて撮影が可能。まあ、瞬間的なところを撮るのが難しいけど、そこはジャーナリストの感と腕でカバーするわ」「つまり、何が言いたいわけ？」

「だから！ バージョンアップした私の二ユーハイブ被写体第一号として、あんたを撮つてあげたのよ。ちょっと嬉しいとか思わない？」

そう言わても、素直に喜べない。不意打ちな状況で撮られたの

で、間の抜けたポーズに顔が写っていることが容易に想像できるからだ。

「じゃ、これで…」

「」の適当にあしらう感じの言葉が良くなかった。背後のアリカが不快のオーラを発していることを感じたイッキは、まるで地雷原を歩くかのようにそそくさと学校から出た。

イッキが去った後、アリカはぼやいた。

「…せつかく、記念として撮つてあげたのに…」

イッキの家は、ベッドタウンである御神籠町にはよくある一階建ての家に住んでいる。周囲の家と異なる点は、屋根が赤く塗られているぐらい。

イッキは帰宅すると、早速、母親のチドリから、今晚のお献立レトルトカレーを買ってくるよう言いつけられた。ママの手には、はたきが握られていた。

「ママ。僕、今帰つたばかりなんだけど」

イッキは両親のことをママ、パパと呼ぶ。

「そんなこと言わずに行つてきてちょうだい。私はお掃除で忙しいの。ちょうどお金も崩したいしころだつたし。今回は大サービスとして、お釣りの一百円をあげるから」

イッキママことチドリは、髪型からして何となくアリカに似ている。だが、アリカと違つてこちらは女性を意識しており、髪の毛も緩やかにウエーブがかかっている。

イッキママはご近所でも美人な良妻として評判である。大概の子供は親が褒められるのを聞いても、「何で、あんなおばさんやおじさんが褒められるの?」と思つが、いざ、自分の親の良い噂を聞くと、やはり嬉しいものである。

帰つたばかりで面倒臭いが、一百円の餌に釣られて、イッキはママの一万円を半分に折つて短パンのポケットに突つ込むと、近所の

「コンビニへと出かけた。

歩いて十分程度のところへ、そこにセブントゥエルブのコンビニがある。因みにメダロットは大型デパートばかりではなく、イッキが産まれる少し前から、コンビニでも売られるようになつた。

普通、コンビニといえば、入店したら店員が笑顔で「いらっしゃいませ」と挨拶するものだが、イッキが入店すると、挨拶ではなく怒号が叫ばれていた。

バッカもーん！給料ドロボー！間抜け！消費税三十パーセント人間！

店長の口から叫ばれる大量のお叱りの罵声が、若い店員を襲う。若い店員はロン毛で、額のところで髪を大きく左右に分けている。店長にこつぴどく叱られている彼の名は、アガタ・ヒカル、大学生。彼はどうやらあまり真面目に勤務するほうではないらしい。彼のシフトは週三日分のようだが、三日に最低でも一度は店長から厳しくお小言をもらっている様子を叩撃される。

店長は温厚な人柄だが、ヒカル店員の仕事ぶりには日に余るものがあるようだ。

今日は特に激しい。

いつもなら、店長は耳打ちでお小言を言うのだが、客が入つても気にせず怒号を叫ぶのは珍しいことだ。カウンターの店員も手をこまねいている。

「誰が！だ・れ・が！こんな高いおーユーパーツを仕入れると言つた！これの旧式型番を一体注文しようと、三度も言つたぞ」

「店長、それも三度め」

ああ、どうやらヒカル青年は雰囲気や状況を読み取れないタイプの人間のようだ。自らの手で油を注いだヒカル青年、店長のお説教もいつもより長く、イッキも呆然とそれを見つめるだけ。

「一ヶ月の間、お前の時給は九百五十円から八百五十円だ！…それと、何としてでもこれを片付けるよ」

反省しているように見えて、内心どこ吹く風だったヒカル青年だが、最期の台詞はズシンときたようだ。店長はそれに気づいたのか、鼻を鳴らすと、レジのお姉さんに「済まんが、今日は君とあいつで頑張ってくれ」と言い残して、店から出した。

横目でちらとイッキを見て、片手できまり悪げに頭を搔くヒカル。彼の右手には、K W G型ヘッドシザーズのパーティ式が入った箱が抱えられていた。イッキは週刊メダロットを毎週欠かさず見ているので、メダロットの知識だけなら、誰にも負けないつもりだ。

ヒカルが持っているヘッドシザースは、現在市場で出回っているヘッドシザースとは異なる。旧型のヘッドシザースの配色は主に白色なのに対し、新型のヘッドシザースは薄紫の配色が占める。旧型と異なるのは配色だけでなく、装甲全般に両腕の攻撃力などが改良された。

シアンドッグに並ぶ、メダロットの最有力候補の商品にこのヘッドシザースが名を連ねている。

「まいつたな…。試しにあいつに着けてやろうと思つたのに…」

誤魔化すように頭を搔くをヒカルをよそに、イッキはヒカルの横、インスタント食品コーナーの棚を指した。

「あの、そこ…」

もしも、イッキがこのとき叱られたばかりのヒカルを全く気遣うことなく「そこ」のレトルトカレーを買いたいです」とでも言えれば、イッキは無事にカレーを手に入れることができたはず。

ヒカルはイッキ少年を見た。イッキ少年が指す方向は自分の右手に抱えられている物、片手には、一万円札が一枚握られていた。ヒカルは目を輝かせて、イッキの元に近寄った。

「はいはい、わかりました！これですね、これ！いやー、これに目を付けるとは、以前から思つていたけど、君は本当に目の付け所がいいね」

田の付け所がいいねと言われたが、メダロットはまだ一度も購入したことは無い。

「いや、だから、そこの……」

「分かつていい、分かつていい。初めからこんな高いパーツを扱えるかどうか不安なんだろ？大丈夫、人間その気になれば、何でもできる」

「えーとですね…僕は…」

「よーし、今なら出血大サービスとして、ティンペットもお付けしちゃおう…今、こんなイケメンメダロットを近所に持つていいのは君だけになる。きっと、目立つよー？」

断ることもできた。しかし、今この機会を逃したら、意志の弱い僕ではしばらくどこか一生をメダロットを持てそうに無い。

何より、ヘッドシザースは男の子の憧れであるクワガタムシをモチーフとしたメダロット。イッキはクワガタムシが大好きであり、一号機田は絶対にヘッドシザースと決めていた。

そして、おまけにティンペットも付けられると聞いて、イッキの心の善が悪に押されてしまった。

ヒカル青年の押しにやられた面もあるが、一番の原因はメダロットに対する欲求を抑えられなかつた自分の心。

コンビニから出たイッキ少年の腕には、レトルトカレーの代わりに新型ヘッドシザースのパーティ式とティンペットが抱えられていた。

コンビニを出る前は心は天にも昇らんばかりの気持ちだったが、コンビニを出た途端、その気持ちは雲散霧消した。

後には、やつてしまつたという後悔ばかり。ママ「どうやつてしまつて言い訳しちよ。今更、「やっぱり要らないです」とは言い辛い。それ以上に、抱えている物を手放したくない気持ちがまさつていた。

家に帰りたくないと思つたが、帰る場所はそこしかないのでも、やはり自宅に帰るしかない。

溜め息をつくと、何となくヘッドシザースのページをじっと眺めた。まるで、それが起動して、ママから叱られる自分をかばってくれるよろに期待するかのような田舎き。

ある程度歩き、溜め息をつき、ページを眺める。そんな動作をすれば帰る時間も遅くなり、ママの堪忍袋の尾をますます切らせてしまふことを、イッキは気付いているのだろうか。

暗い、ここはどこだ？私は誰なのだ？

たまに目が覚めると、こんなことを自問自答した。目が覚めると
言つても、私には目を含む五感機能など存在しないが…。

ここは確かに暗いが、居心地は悪く無い。

ある日、動きを感じた。ざくざく、ざくざく、土を掘る音。彼には五感機能どころか体すら無いので何も感じないが、何かが起きる兆しを感じていた。

ざく、かつ！

スコップが金属物に当たつたので、掘る手つきが慎重になる。両手の刷毛とスコップで少しづつ土をどかし、まだ、僅かに泥を被るそれが無事なことを喜ぶ。

掘つた者の手の中には、金色の六角形状のコインのような物がある。コインの表には、何らかの幼虫と思しきがものが描かれていた。

やれやれ、あの人気紛れも困つたものだ。こんな貴重な物を、まだ年端もいかぬ子供たちに託すとは。

あの人は、あの子供に何かを感じると言つた。それを突つ込むと、はぐらかすような笑みで「何かは何かじゃ！」と答えた。この返答には呆れてしまつたが、どこか憎めない。

それはひとえに、私があの人を尊敬しているからだらう。

メダロットを愛し、メダロットに並みならぬ情熱を注ぐあの人。知的で大胆、それでいて、決して驕り高ぶる態度は一切見せず、ときには今日のような突拍子も無いことを思い付き、子供のよつにはしやぐあの人。そして、火急のときには何をすべきか行動できるあの人。

そんな人だからこそ、私は慕っている。

今から約三十分後にここを通るとある男性に、一いつの物を渡す手はずになっている。

あの人は少年に「これらの品を託す理由をもう一つ付け加えた、「可能性」と。

可能性か。果たして、彼らが一体どのような行動見せてくれるのか。私も見届けさせてもらおう。

家に帰ると言い訳する暇もなく、イッキは母親のチドリに叱られて、しばらく一階の自室で反省するよひ言い渡された。

部屋に入ると、イッキを慰めるよひに「フォックステリアの愛犬「ソルティ」が「くうーん」と甘えるよひに鳴いて、イッキの足元にすり寄ってきた。

「慰めてくれるのかい？ソルティ」

足元にすり寄るソルティの頭を撫でると、ソルティは尻尾を大きくふりふりした。

イッキは自室に入ったときあることに気がついた。メダロットの頭脳であるメダル、それと、メダロットを操作するメダロッチが無いことに。

とりあえず組み立ててみたが、肝心のメダルが無いので動くわけも無い。母親にきつく叱られた後でのこの事実、イッキは今日一番の深い嘆きの溜め息を吐いた。

一時間の間、ソルティをかまつなり漫画を見るなりして、時間を潰した。

「ただいまー！」

玄関から間延びした男性の声、パパだ。

イッキのパパの名前はジョウゾウ、歳は今年で三十六歳。だが、薄く無精髭をはやした顔と黒縁丸眼鏡のせいで、実年齢以上に見られ

る」ことがよくある。つい最近では、五十歳と間違われたほどだ。

十分後、パパが部屋に入ってきた。

「イッキ、母さんから話は聞いたぞ」

イッキはぎくっと背筋を伸ばした。叱られる。息子の気持ちを察したのか、ジョウゾウはイッキの気を落ち着かせるために、優しく微笑んだ。

「まあ、そう固くなるな。パパだつて、子供のときは一回や一回ぐらい、お使いのお金を使ったことがある。しかし、今回は少々規模がでかかつたな」

少々どこかではない。百円や一百円なりこそ知らず、一万円ともなれば、家計にダメージを与える金額だと分かる。

「反省したか？」

「うん…一重の意味でね」

イッキは今日起きたことを簡潔にパパに話した。

「はつはつ！ そうか、あの青年か。それにしても、興奮と後悔のあまり、肝心な物を一つも忘れるとは間抜けな話だな」

がっくりと肩を落とすイッキ。ジョウゾウは、元気出せとほんほんと肩を叩き、息子の顔を覗いた。

「反省したか？」

「うん」

「もうしないか？」

「うん、こんな馬鹿なことは一度としないよ」

「じゃあ、テストで必ず良い点取つてくるか？」

最後の問いかに、それはちょっとととイッキは首を捻つた。

「最後のは冗談だ。というわけで、お前にスペシャルビッグボーナスをやるわ」

父親のスペシャルビッグボーナスとやらを見せつけられた瞬間、イッキはあんぐりと口を開けて、絶句した。パパの右手にはメダル、左手にはメダロッヂがあるからだ。

「は…パパ、これは！？」

「いやー、実はな。いつも通りの道を歩いていると、突然、空から笑い声がしてな。上を見上げたが、特に怪しい物は見当たらない。で、顔を下げるに、道路に光る物があつて近づいて見ると、この二つがあつた。恐る恐る拾つたら、また、笑い声が聞こえた。それでな、『な、何だ？強盗か？』だとしたら、盗む相手を間違えているぞ』と言つと、その正体不明の奴は『ご安心なされ、今宵は『子息に贈り物を届けに参つた。プレゼントキヤンペーンで、『子息はヘッドシザース購入者千人目となり、その祝いとして弊社からプレゼントを持つて馳せ参じ参りました。好きな方法でその二つの品を『子息にお渡しなされ。あと、これからもメダロット社の製品購入をよろしくと伝えてください』と。そうして、正体不明の奴は姿を見せず消えた』

正直、パパが嘘をついているのではないかと疑つた。しかし、パパが持つてゐるメダルは間違ひなくクワガタメダル。カブトメダルとは違ひ、クワガタメダルは幼虫が左のほうを向いている。

パパが息子のプレゼントとして、イッキがメダロットをする上で不足していたメダルとメダロットの両方を買つてきた。更にそのメダルは、ヘッドシザースと相性ばつちりのクワガタメダル。偶然にしては出来すぎでいる。

因みにメダロットとは、メダロットに指示を送る時計のような形をした機械のことである。

こんなことを知つてゐる人物は一人しか思い浮かばないが、その考えは捨てた。その人物の普段の行動や姿勢を考えると、こんなことをするとは到底考えられない。

後でママにも聞いてみたが、ママは今日、パパに一度たりとも電話はしなかったと答えた。

「怪しいとは思つたが、もう疲れているし、一旦、帰宅してから確認しようと思つたら、ママからお前がメダロットを購入したこと聞いてな。大丈夫だろ？』という結論に至つた。というわけで、イッキ。ほら、試しにメダルを装着してみなさい』

イッキはパパからメダルとメダロッチを受け取った。軽いはずなのに、ずしりとした重みが伝わってくる。

深呼吸を一回、一回。「ばくばく、ばくばく、胸の鼓動が抑えられない。

ついにきた…。ついにきたんだ。僕が、メダロッターになる日がきたんだ。

まずはメダロッチを腕に装着し、次にヘッドシザースの背後に回る。メダル装着部を押さえるピンを外し、いざ、メダルを窪みに装着。メダルは装着すると同時に、自動的に外れないよう固定された。イッキはじつとヘッドシザースを見守り、パパも何故か緊張な面持ち、ソルティは呑気にあぐび。

三十秒後。メダロッチから、全身稼働可能。エネルギー充填マックス。メダロットを始動しますか?といふアナウンスが流れた。メダロッチの画像には、「YES/NO」の表示がある。

イッキは迷わず「YES」を押した。また因みに、押さずとも、声で「YES」と言つても動く。

ふしゅー。僅かな煙が排出され、ヘッドシザースの目に光りが宿る。

眩しい!眩しい光が私を襲う!

それはほんの一瞬のこと。すぐに目は光に慣れた。手を動かす。手…?手など無かつたはずなのに、何故、手を動かせるのだろう。しかし、現に私は手…。いや、手だけでなく、頭や足も動かせる。「やつ…たああ…!…!…!…!…!…!…!…!…!…!…!…!

誰かが叫ぶ。私はその叫びが、歓喜のあまりのものと理解した。「ここは…どこだ?」

ヘッドシザースの声は、凜と涼しげ。それでいて、どこか芯の強さを感じさせた。少年はヘッドシザースが声を発したことに驚いた

が、本人もそのことに驚いていた。

「ここ？ ここは僕の家」

少年がそう言つと、すかさず隣の大きい者が、
「イッキ、お前が建てたわけじゃないだろ。正確には、パパとママ
とイッキとソルティの家だ」

ワン！と、四つん這いに寝そべる生物が同意するように吠えた。
大きい者は、今度は私を見て申した。

「あと、今日から君が住まう家もある」

私は無言で頷いた。

「ところで、イッキ。名前は決めているのか？ それとも、機体名称
で呼ぶのか？」

「名前はもう決めてあるんだ。伝説のメダロッターと呼ばれる人の
愛機の名前」

私より少しばかり大きな小さい者は、私を見て、満面の笑みでこ
う呼ぶ。

「ロクショウ！ 今日からお前の名前は、ロクショウだ。よろしくな
！ ロクショウ！」

……ロクショウ……

私の現状理解が追い付いてないせいかもしれないが、「ロクショ
ウ」という呼び名は妙にしつくりする。

「……ロクショウ……それが、わたし私の名前……」

少年は私に左手を差し出した。

三つ、はっきりと分かることがある。私はこの「体」にとても馴
染んでいること。一つ目は、次々と情報が流れ、私は瞬間に一
定の物事を理解できることを「理解」したこと。そして、三つ目は、
私はこの少年これから「絆」を結んでいくことになること。

私は少年が差し出した手を握り返した。

2・ファーストロボトル

起動してから一日、ロクショウはそれなりに家族の一員として馴染み始めていた。

念願のメダロットを手に入れてご満悦のイッキ君。ただ、一つ不満を述べれば、ロクショウは少々大人しすぎるような気がする。あまりにも暑すぎる性格はどうかと思うが、できれば、もうちょっとくだけたところが欲しかった。

まだ、たった一日しか経つてない。そんなすぐに、全く見も知らぬ者たちと暮らす環境に馴染める者はそういない。

時間が経てば、ヘッドシザースことロクショウの別の一面が垣間見られるはず。

今日、イッキはロクショウを連れて、毎週足繁く通っているメダロット研究所に行く。メダロット研究所所長、アキハバラ・アトムことメダロット博士に自分のメダロットをお披露目するためだ。

今日、イッキは私をとあるところに連れて行くと言つた。

とあるところとは何ですか?と聞いても、イッキは答えをばぐらかした。着いてからのお楽しみというわけか。

道中、イッキは若い女性と出会い、親しげに話していた。傍目から見ても、イッキの友人だということは理解できる。女性の横には、女学生のような姿をしたメダロットが付き従っていた。自分以外のメダロットは初めて見た。私の視線に気付いたのか、彼女は私を見てお辞儀をしたので、私もお辞儀を返した。

「あつ!イッキもメダロットを買ったんだ」

少女は初めて私の存在に気が付いた。イッキは鼻高々に、

「うん、そう。名前はロクショウっていうんだ。かつこいいだろ」

「口クショウ！？あんた、大胆な名前を付けるわね」
少女は私を見て微笑み、自らと、自らが所持するメダロットの名を告げた。

「私は甘酒アリカ、ジャーナリスト志望の小学三年生。で、こっちはS-L-R型メダロット・セーラーマルチ」と「プラス」

「よろしくね、口クショウさん」

「こちらこそ、イッキの『友人とは知らずに、挨拶を忘れていたことを申し訳』ございません。では、改めて自己紹介を。天領家に居候の身の口クショウです」

「へえーと眩いで、アリカという少女は私とイッキを見比べた。

「随分礼儀正しいわね。イッキ、あんたにや相応しくないわね」

「な、何だよ。人がどういうメダロットを持とうが、人の自由だらうが」

「それもそうね。ところであんた？メダロット研究所に行くんでしょう？」

イッキは慌ててアリカ少女の口を塞ごうとしたが、もう遅い。

「メダロット研究所？」と私は眩いた。

アリカ少女は口を塞ごうとしたイッキの手を払うと、私にメダロット研究所の説明をしてくれた。

簡潔にまとめれば、メダロット研究所はメダロットの生みの親である「メダロット博士」と呼ばれる人がいるとのこと。イッキ君が目的地の名を告げなかつた訳は、メダロット研究所とメダロット博士なる人物を紹介したとき、私がどのような反応を見せるかという期待。そして、そのことを説明できる一種の優越感に浸れる自分。つまり、これら二つの目的があるから、イッキ君は私に目的地を告げなかつたのだろうと予測する。

当のイッキは舌打ちしていた。

「ちえつ。口クショウを驚かそつと思ったのに」

「ねえ、イッキ。私も付いて行つていいでしょ？博士から、何かネタになるような話が聞けるかもしれないし」

「別に、どっちでもいいんじゃない？」

こうして、メダロット研究所へ向かう道中の連れに、アリカ少女とプラスが加わった。

小高い丘の上に、メダロット研究所は建っていた。真っ白な六階建ての建物で、メダロット研究所と書かれた看板に、正門にある男型ティーンペットと女型ティーンペットの銅像以外には飾り気は見当たらず。別段、特徴の無い形のビルだった。

イッキたちが顔馴染みのあるが、メダロット研究所は一部の研究棟を除き、一般にも開放されている。

受付のコンパニオンガールをモチーフとしたC M P型メダロットのティンクルことキティちゃんが、四人を博士が居る個人研究室まで案内してくれた。

先だつて、イッキが博士の研究室のインターほんを押した。

「はい、アキハバラ・アトムですが」

インターほーんの向こうから、元気の良いおじいさんが話しかけてきた。

「こんにちわ、博士。天領イッキです。今日は友達も連れてきました。入つても構いませんか？」

「おお、イッキ君か。よろしい、友達と一緒に入りなさい」

個人研究室の扉が自動的に開いた。

メダロット界の権威もあるメダロット博士の部屋。外見から考えるに、きっと、訳のわからない機械に、沢山のケーブルやら変な液体が入った瓶が所狭しに置かれていると思いきや、案外そうでもない。

博士の研究室は小ぢつぱりとしており、立派な文机が二つにコンピューターが一台、研究用に置かれているメダロットが眠る三台のカプセルに、他は天井ほどの高さがある書棚が東西南北に一つずつ

配置されていいるだけ。大量の機械やらビーカーなどは見当たらない。

何故、実際に博士の部屋を訪れたことが無い人がそういう想像をするかといえば、最初に述べた博士の外見にある。

常ににんまりと笑つてゐる口元、大きな黒いサングラスにつるひかの頭頂部、後頭部周囲の髪をヤンキー風に逆立たせて、一見してマッドサイエンティストを彷彿させる。

でも、本当はメダロットに情熱を注ぐ、子供心を持ち合わせた優しい茶目つ氣のあるおじいさんだ。

イッキ、アリカ、プラス、ロクショウと、順にメダロット博士と挨拶を交わした。

メダロット博士は早速口クショウに手を付けた。

「イッキ君、今日わしのところへ来た目的はこれだな？」

「あの、迷惑でしたか？」

メダロット博士はにかっこ、子供っぽく微笑んだ。

「迷惑どころか大歓迎じや。我が社の製品を持った子供の生の意見を聞けるチャンスが増えた」

この寛容深い性格とちょっとしたことをアイデアに結び付けるところが、博士を現在の地位に就けたのかもしれない。もっとも、メダロット博士は地位とかには固執しない人だが。

「ところでヘッドシザース君、君の名前は？それとも、機体名称のままかね？」

いきなり話をふられてロクショウは戸惑つたが、すぐに落ち着きを取り戻すと、

「私はヘッドシザースことロクショウと申します。この名は、マスターであるイッキ少年から受け賜わりました」

ロクショウはいつも以上に礼儀正しかつた。どうやら、メダロット博士なる老人がただ者ではないことが分かり、彼なりに緊張して、少々しゃちほこばつた挨拶をさせたようだ。

「がつはつはつは！こら、また随分躊がなつてゐるな

「ううん。ロクショウの奴、初めからこんな調子なんだ」

「一つ一つのメダルには、それぞれ個性がある。その個性と上手く付き合うことも、メダロッターに求められるものじやぞ」

何度も聞いたアドバイスだが、イッキは真面目に「はい」と応えた。次に博士は、アリカとプラスを尋ねた。

「アリカ君、それと、プラス君だったね」

「覚えていてくれてありがとうございます」とプラス。

博士は先んじてアリカの話題を喋った。

「目的は記事のネタだね。もしも、わしの条件を聞いてくれるなら、イッキ君たちと一緒にある物を見せてもよいぞ」

「条件つて…まさか」

アリカは無い胸を両腕で抱いた。

「これこれ！わしが変態スケベ親父的な言動を話すような奴に見えるか？」

博士はまずそんなことを言つ人ではないが、変態っぽさを感じる頭をしている。

「イッキ君、君はロボトルの経験はまだか？」

「はい」

「アリカ君、条件とはイッキ君とロボトルをすることじや」

この条件に、アリカとイッキの兩人は面食らつた。ロボトルとは、ロボットバトルの略称である。イッキはためらいがちだが、アリカは乗り気になつたようだ。日が、獲物を追い求める記者の日になつた。

二人は肩を突き合わせて、怪しい笑みで密談した。

一分以内に密談は終了した。

「イッキ君、ロクショウ君、プラス君、付いて来たまえ。今から、ロボトルテスト試験場へ行くぞ」

ロボトルテスト試験場はメダロット研究所の地下にある、新開発されたメダロットの性能をテストする場所。

今、この場所に一体のメダロットがいる。

右はアリカの愛機、セーラーマルチのプラス。左はイッキの愛機、ヘッドラシザースことロクシヨウ。

試験場は真四角の正方形の部屋で、直径は五十メートル、天井の高さ十メートル。周りは分厚い防弾ガラスに囲われていて、どの角度からも戦いの様子を眺められるように設計されている。

アリカは自信満々、対するイッキは自信無さげだ。イッキは今日が初めてのロボトル。ロボトルをすることは考えていたが、今ではなく、一週間ほど様子を見てからロボトルするつもりだった。

とはいっても、後には引き下がれない。ここまで来たら、もつやつてやれという気持ちになった。

それでも、緊張で体が震える。初ロボトルがこんな整った設備、しかも、自分よりロボトル歴一年先輩のアリカと戦おうなんて、夢にも思わなかつた。

「イッキ君、そう固くなるな。勝つても負けてもこの試合ではパートの取り合い無しだし、壊れたところはわしが責任持つて治す。何よりも、今日は君の記念すべき初ロボトル、悔いが無いよう全力でぶつかつてみたまえ」

アキハバラが固くなつたイッキを宥める。メダロッチ越しから、ロクシヨウもイッキに声をかけた。

「イッキ、緊張しているのは私も同じだ。博士と同じことを言つてしまつが、イッキ、今日は思考を捨ててがむしゃらになれ」

アリカがとつととおっぱじめるわよ、と叫ぶ。

固くなつていてもしょうがない。やれるだけのことをやるだけ。イッキは挑むように一步前進した。

満足したように博士は頷くと、博士は試験場のマイクを握った。

「合意と見てよろしいか?」

「はい!」といッキ。

「いつでもオッケーよ」とアリカ。

博士は一拍置いて、

「それでは、ロボトルファイトー！」

ロクショウが切りかかろうとしたら、プラスはすかさず撃つて攻撃の勢いを削ぐ。この動作を五回繰り返した。

両者、中々決めてとなる攻撃ができない。距離さえあれば、素早いロクショウにプラスの弾丸は当たらないが、接近戦タイプのロクショウでは遠距離攻撃ができない。セーラーマルチは若干、装甲が薄いので、ロクショウの必殺武器である左腕の「ピロペコハンマー」の一撃でも食らわしたら、ロクショウの勝ちだ。

初めはロクショウがやや有利に思えたが、徐々にプラスの弾丸がロクショウのボディを掠る。

セーラーマルチの頭部には、「索敵」という能力がある。「隠蔽」によって姿を消した敵を発見するときに使われるが、こうした攻撃が当たらない、当たりにくい状況にある敵に対し、特殊なレーダーとコンピューターが動作や角度を素早く計算し、機体の攻撃命中率を上昇させる能力が索敵。

華麗なステップで易々とマシンガンとライフルの攻撃を避けていたロクショウだが、今は避けるのに必死な状態。このままでは、いつ蜂の巣になるか知れたものではない。

作戦もくそも無い。こうなれば、特攻あるのみ。

「ロクショウ！セーラーマルチの攻撃力はそんなに高くない。多少、弾丸を食らってでも、突っ込んで左腕のハンマー攻撃で決めるんだ」「ラジヤ、マスター！」

ロクショウはプラスに向かつて突っ込む。弾丸を食らうが、セーラーマルチの攻撃力では、改良型ヘッドシザースの装甲を簡単には落とせない。

弾丸の雨を耐えて、必殺のハンマーの一撃。勝つた。

「甘いわね」アリカが口端を釣り上げた。

空振りして、ロクショウの態勢は大きく崩れた。危ういところで攻撃を避けたプラスは、左腕のライフル攻撃・ショートショットを撃ち込んだ。

「ばがん！」

鈍い音と共に、無防備な状態のロクショウの左腕が吹っ飛ぶ。

「私のほうがロボトル歴は長いんだからね！その程度の戦法なんて通用しないわよ！プラス、もう一発お見舞いしなさい」

自分が勝利したかのように、アリカはプラスにライフルを撃つよう指示を出す。

しかし、アリカはイッキの戦法に引っかかっていた。

プラスがショートショットを撃つ直前、ロクショウは跳躍して弾丸を避けた。呆気にとられるプラスに、ロクショウは天井を蹴つて右腕の「チャンバラソード」でプラスの胸部を貫いた。

ピン、と。プラスの背中から装着したメダルが外れた。

「勝者、天領イッキ＆ロクショウ！」

メダロット博士が高らかに勝利を少年と一機に告げる。

信じられないという表情のままアリカがイッキに近づき、自問のような口調でイッキに話しかけた。

「どうして？ 何で？」

「アリカは玄人、僕は素人、そこが狙い目だと思ったんだ。僕が素人丸出しの指示で、ロクショウに全力で攻撃しているように見せかけたら、アリカとプラスに隙ができるんじゃないかな？」と、考えたんだ

アリカは合点した。

ピコペコハンマーなど、格闘系メダロットは人間でいうところの必殺のストレートを放つた後、対象に当たらずとも、攻撃による反動のため、一瞬、無防備な状態となる。

イッキはその危険を逆手に取り、全力に見せかけて、跳躍や左腕

で防御する余力を残しておいたのだ。

「あーあ。まさか、イッキに負けるとは…。でも、次は上手くいかないわよ」

「うん、分かっている。こんな戦法、初戦の相手ぐらいにしか通用しないよ」

アリカとイッキは、研究員さんたちに協力してもらつて一機を試験場から運び出した。

アリカがプラスのメダルをメダロットに装着して、申し訳無さそうに呟いた。

「プラス、ごめんね。私が気付かなかつたばかりに、痛い目合わせちゃつて」

「ううん、私も見抜けなかつたしお相子よ。お疲れ、アリカちゃん」

謝るアリカを逆に、プラスがメダロット越しから勞わつた。
メダロットは本体に装着せずとも、メダロットに装着すれば意志疎通が可能である。因みに、現在市販されているメダロットでは、最大三つのメダルを収容可能。

イッキも口クショウに一声かけた。

「口クショウ、お疲れさま。左腕、痛くないか？」

「ピリりとした感覚はしたが、痛いとは感じなかつた。ただ、自分の左腕が無くなる感覚をはつきりと感じるのは、良い気持ちとは言えなかつた」

「痛覚があるなんて、メダロットには損な話じゃぞ」

メダロット博士が会話に割つて入つた。

「四人とも、ご苦労さまじやつた。素晴らしいファイトじゃつたぞ。それはでは約束通り、君たちに良い物をお見せしよつ」

「博士！」と、イッキがメダロット博士を呼び止めた。

「あの、口クショウとプラスは？」

「案ずるな、イッキ君。この程度の損傷なら、田をつむつても修復できる」

「僕が言いたいのはそうじゃなくて…」

「行つてくるんだ、イッキ」とロクショウ。

「でも…」

「私はイッキの気遣う気持ちだけで十分だ。それに、この方は信用できる。だから、イッキは良い物とやらを見に行つてこい」

イッキはためらいがちに分かつたと言つた。

「決まりじやな。おい、白玉くん。この子たちをあそこまで案内してくれんか」

すつと、眼鏡をかけて、頭を七三に分けた長身瘦躯で色白肌の男が立つた。

イッキは試験場から去る際、一度、三度振り返つて、ロクショウのこと見た。

「まだ未熟じやが、良き相棒を持つたものじやな」

ロクショウは博士に返事をしなかつた。恥ずかしいからだ。

白玉という研究員に案内されてきたのは、「アキハバラ・ナエ個人研究室」という表札が掲げられた部屋だった。

「いいか、ナエさんの邪魔をするんじゃないぞ。絶対にだ！」

ドスの利いた声音で脅し文句を言つて、白玉は元来た道を戻つた。アキハバラ・ナエは、アキハバラ・アトムの孫娘。年齢は十九歳だが、その歳にして、既にメダロット界の権威である。祖父であるアトムと違い、穏やかで、緩やかにカーブがかかった黒い長髪が魅力的な女性だ。子供であるイッキから見ても、ナエは美人だとわかる。

インター ホーンを押すと、「祖父から話は聞いております。イッキさん、アリカさん、どうぞ入つてください」と、大人びた女性の声。それでいて、まだ子供っぽさも残る声、そこがまた可愛らしい。イッキはもちろん、博士には馴れ馴れしい態度だったアリカも、ナエに対してはかしこまったく面で挨拶した。

たおやかに一重の瞳を細め、ナエは一人に品良く微笑み返した。初見のとき、イッキはナエがメダロット博士の孫娘とは到底信じられなかつた。今もそつだが。

「さ、これが祖父があなたたちに見せると約束したものです」ナエは、イッキとアリカに、カプセルに収納された四体のメダロットをそれぞれ紹介した。

一時間後、ロクショウ・プラスの修復が完了したと、博士からナエさんの研究室に連絡がきた。

その頃には、ちょうど三人交えての談笑も終わっていた。

博士とナエさんは正門で僕らを見送つてくれた。

イッキ、ロクショウ、アリカ、プラスの四人は、肩を並べて歩いた。

それにしても、一日間で僕の世界が大きく広がつたように思えた。初のメダロット、初のロボトル。そのロボトルによつて感じた、今までに無い高揚した気分に、その後の反省。たつたこれだけのことだけ、とにかく驚きと新しい発見の連続が続いて、それが樂しくてしようがない。

どのくらい楽しいかつて？家族皆で旅行や遊びに行つたとき何かとは比べ物にならないや。

発見といえば、ナエさんが紹介した「エレメンタルシリーズ」という四体の女性型メダロット。まだ、マスクミにも完全極秘なメダロットを見られるなんて。一度目だけど、ほんと、驚きの連続だよ。因みにアリカが博士と交わした約束とは。例のエレメンタルシリーズの発売発表日が来たら、どこよりも早く、アリカの「甘酒新聞」に載せて公表していいとのことだつた。

「うつふつふ。熟成した情報を見たとき、大衆が一体どのような反応を見せるか気になるわ」

僕とのロボトルに負けて落ち込んでいたアリカもすっかり元気になって、来るべき特ダネをどう書くか思案していた。

まだ、始まつたばかり。これから、数多の艱難辛苦があの子を襲うだろう。

大丈夫、彼には家族もいて、メダロットもいる。今すぐ無理だろうが、時が経てば、必ず何か成し遂げるはず、あの子は。

今回のわしの勘は当たりそうだ。仮に外れたら、そのときはそのときだ。

2・ファーストロボトル（後書き）

戦闘結果がカブトバージョンとは異なります。

3・一人の日常（前書き）

閑話休題。メダロット「ロクショウ」メインの回、ゲームには無い完全オリジナル。

3・一人の日常

私という存在が起動してから、今日で一週間。

お母上は遠方まで買い物、お父上はお仕事、主人であるイッキは小学校で勉学に励んでいる。

アリカ嬢とのロボトル後、イッキと私は他三名の方と戦い、辛くも勝利を得ることができた。まだまだ、互いに成長段階。これからも、絶え間ない精進を重ねるのみ。

今日の私は留守役。片付けに我が家の大犬ソルティの餌やりも済まし、やることが無くなつた私は読書をした。速読は可能だが、あえて一ページずつ読むことにしている。そうすることにより、物語上的人物の心理、本を書いた筆者の気持ちなどをゆっくりと推測することができるからだ。

残り十ページ、犯人の動機には疑問を抱かざるを得ないが、主役の補完的説明台詞を読んで、何となく納得した。

おかしな話だ。機械であるはずの私が、「何となく」などという曖昧模糊な言葉に納得するとは。

わん、わん！

ソルティが散歩をしてくれて催促する。私は母上から自宅の鍵を預かっている。

「口クちゃん。ソルティを散歩するときだけは、外出してもいいわよ

母上はこう言つていた。私は思案した。ニュースなどを見ても、今の世の中は物騒。いくらこの辺一帯の治安が安定しているとはいえ、万が一という場合もある。しかし、ソルティと散歩をして、一人で歩く世界とはどのような感じものかという知的好奇心も湧いてくる。

一分思案したのち、結局、私はソルティの催促に応じることにした。

時期的にそんなに暑くないので、家の窓を閉めても熱気が籠もることはないだろう。

念には念を入れて、火元などもチェックした。問題無し。

最後はしっかりと施錠。ドアが閉まつたかどうか確認すると、地面に打ち込まれた太い釘に巻かれた綱を解き、私はソルティと外の世界へ出かけた。

外へ出ると、始めは隣人であるアリカ少女の母親が話しかけてきた。

「あら、あなたはイッキ君のメダロットで、名前は確か…」

「ロクショウと申します」

「そう、確かにそんな名前だつたわね。犬のお散歩、よね。どう見て

も」

「はい。イッキの母上からは留守を頼まれましたが、ソルティが散歩を催促したら、そのときに限り外出をしてもよろしい許可を貰いましたので」

「ロクちゃんつてば、作法がなつているわね。うちのアリカも見習つて欲しいわ」

「では、甘酒さん。私はこれにて」

ロクショウは近所からロクちゃんの愛称で通つていて、チドリが家でもロクショウのことをロクちゃんと呼び、「近所さんたちにロクショウのことを話すときもロクちゃんと言つてているので、この界隈でロクショウのことをロクショウと呼ぶのはイッキ、イッキパパ、アリカ、プラスの四人しかいない。

親しみを込めての呼び名なので特に嫌とは思わないが、イッキと同じ小学生から「よつ！ロクちゃん」と小馬鹿にされたときは、さすがに溜め息をついてしまった。

呼び名を気に病んでも仕方ない。私はソルティを連れての外界を

堪能することに気持ちを切り替えた。

国道に出て、信号に差し掛かる。赤ランプが点灯しているので、しばし待つ。車道側の信号が赤に切り替わる直前、一メートル離れた横に立つ者が歩き出した。安全と法規を考慮すれば、歩道の信号が青になつてから渡るのが普通。イッキにそのことを問うたが、イッキは無視するに限ると答えた。僕とロクショウが注意したところで、ああいう大人は無視するか、生意気なガキとガラクタだと逆切れする。この二つのパターンが専らであり、素直に聞く者は稀だと言つ。

その人物たちには、何かそう至る事情があつたのかもしれない。だが、私がそれらの人物に話を伺つても取り合つてくれそうにないし、私がそこまで首を突つ込む資格と必要性も無い。

御神籠町には、広々とした河原に面した歩道がある。

私は遊歩道の中でも、ここが一番好きだ。涼やかな風がそよぎ、風によつて揺らぐ揺れ茂る樹や草花を見ているだけで、心が安らぐ。いつまで眺めていても、飽きない。ソルティはそれでもないようだが。

緩慢な歩行にソルティは退屈してきたようだ。私は名残惜しみつつ、足早に河原道を通つた。

帰り道、セブントゥエルブが視界に入つた。

このコンビニには、イッキに半ば強制的に私の体を売りつけた店員がいる。その店員は、外でのんびりと体を伸ばしていた。店内で店番をしなくて大丈夫なのだろうか。

私が前を通ると、気の抜けた声で「ん、どうも」と挨拶した。店内を見たら、雑誌「一ナーダ」で立ち読みしている男が目に入った。表紙には、艶めかしい恰好の女が写っている。俗的な言い方をすれば、いわゆる「エロ本」であろう。

雌雄がある生物が、異性に興味を持つのは普遍的のこと。あの手合いの本を読む者は出来る状況ではないので、その欲求を解消するために読むのだろう。

さつき河原を通ったときの和やかな気持ちが吹き飛んでしまった。余計な雑念を考えてしまったためだな。

私は更に足早に歩いた。

家から歩いて五分ほどのところには公園がある。園内には、二人の幼児と一体のメダロットが砂場で遊んでいた。彼はカメレオンのような姿形をしている。そのメダロットは私に片目を向けた。

「よう、確かに『ロクちゃん』と呼ばれているんだっけ？」

ふむ、見も知らぬメダロットにすらロクちゃんと呼ばれるようになるとは、主婦の噂話の伝達速度は恐ろしい。

園児の一人が私に人差し指を向けて、「あーロクなんだ」と呼んだ。

あの子は知っている。確かに萩野香織という近所の幼稚園児だ。ソルティが少女のほうに行こうとする。ソルティは人懐っこく、見知っている人間を見たら、遊んでもらおうとする。まだ、時間はある。私は綱だけはしっかりと握つたまま、ソルティを園児一人と遊ばせた。

一つ気になる。それは、この子たちと遊んでいる彼だ。近所では見たことが無い。

「俺、ナチュラルカラーツていうメダロット。見てのとおり、カメレオン型メダロットさ。俺の主人は爬虫類とかが好きなんだな。ついでに、俺は機体名称がそのまま名前になっている」

私が聞くよりも早く、彼は自ら自己紹介した。

「何故、ここでこの子たちと」

「何故って？俺の主人はメダロットに関しては放任主義者でな。俺が勝手に出歩いて遊んでも、特に咎められたりはしない。名誉のために言つておくが、山彦は決していい加減な奴じやないぞ。ちょっと、マイペース過ぎる一面はあるが」

私と彼の間に、香織ちゃんが間に入ってきた。

「ねえ、口クちゃん。ナツちゃんと一緒に砂山作ろう? それで、トンネル開けよ?」「うう

人間の子供のこの無意味とも思える行動は、将来創造性を育む上で重要なものとなる。とはいって、後十五分ほどで母上も帰宅するので、申し訳ないが、香織ちゃんには事情を言って断った。

「じゃあ、今度時間があるときは遊ぼうね」

「良からう」「うう

公園から去る前、私は彼に一つ物を尋ねた。

「もう一度聞くが。君は、何でこの子たちの遊び相手になつてあげたのだ?」

「何つて、決まつているじゃん。楽しそうだつたから遊んだだけだ。なあ」「うう

彼は同意するよつに一人を見た。一人は邪氣の無い笑顔でうんと頷いた。

彼のきさくな一面は、私に欠けているところだな。私は公園から去つた。

私はイッキのことが好きだ。イッキだけではない、母上に父上、ソルティも好きだ。

一週間しか経つていないが、私は彼らのことを好いている。ただ、四六時中付き合いたいかと聞かれたら、首を振る。イッキも首を振るだろう。人間もメダロットも、時には適度に誰かと離れられる時間が必要。だが、彼が助けを求めるよつならば、私は四六時中どころかずつと付き合つことも厭わない。

ソルティの綱を釘に巻き付け、私が家の鍵を開けたら、聞き慣れた車のエンジン音が近づく。ちょうど、母上が遠方の買い物から戻ってきたようだ。

3・一人の日常（後書き）

CMO型カメレオンメダロット・ナチュラルカラー
カメレオンらしく、隠蔽の能力で景色に同調して敵の攻撃から身を
守る機体。オリジナルメダロットではない。

後、萩野香織という子の名前は、「はぎのかおり」という名称のお
米が由来です。

4・校内ロボトル大会【前編】（前書き）

スクリューズ初登場。ちょっと子悪党な感じです。
戦闘と台詞以外は全く同じなので、両バージョンのどちらかを先に
読めば、片方の最初の文章は飛ばしても構いません。

4・校内口ボトル大会【前編】

四月中旬。ギンジョウ小学校最大の行事、ギンジョウ小学校校内口ボトル大会が行われる。

イッキと口クショウは、この口ボトル大会に向けて四人の人間に口ボトルを挑んだ。実力はまだまだ未熟。口クショウの実力と性能に頼つて勝つている面が大きいが、イッキは何となく口ボトルにおける戦略、ここぞというときの勘と勢いの乗り方が分かつてきたような気がした。

アリカは、イッキの口ボトルの嵌り具合に呆れた表情をしてみせた。

「そりや、私だつて口ボトルはするけど。去年から今年にかけての口ボトル回数は、通算十八回ぐらいのものよ」

イッキは自分が中途半端な人間と知っている。その自分が、こんなにも熱く物事に取り組めるのは初めてかもしれない。だが、イッキが口ボトルに熱中するのはそれだけではない。

それにはまず、口ボトル以外についても詳しい説明をしなければならない。

メダロットを持つ者が、必ずしも口ボトルをするとは限らない。精々十人に一人ぐらいの割り合いであり、それも、あくまでメダロットの体を動かしてやろうというものが大半。

口ボトルには二種類ある。

一つはスポーツとして、自分の手持ちのメダロットの体を動かす目的で行われるもの。前のイッキとアリカの口ボトルはこの部類に入る。

二つ目は、真剣口ボトル。これは、互いのメダロットの頭部・脚部・右腕・左腕のどれか一パーツを賭けて行われる口ボトル。イッキは一万円でティンペットとパー一式を揃えたが、あれは例外中の例外。本来、男性型ティンペットは二万円、女性型ティンペット

は倍の四万円もする。

パー^ツも安くない。現在市場で出回っている一番安いメダロ^ツトは、サル型メダロ^ツトのモンキー^ゴングというメダロ^ツトだが、パー^ツ一式全価格六千円もする。

イッキの新型ヘッジザースのパー^ツは現在の市場価格では一式六万円、高額の部類に入る。

後で配送先の勘違いも判明したが、ヒカルはわざとらしく知らぬふりをした。事情はどうあれ、仕入れる側にとつても決して安くない買い物。こんな高い物を勝手に仕入れてしまったのだから、平常から勤務態度に問題あるヒカルが店長に大目玉を食らうのも致し方ない。

真剣口ボトルは、子供が持つにとつてはお高い物を賭けて戦うのである。なけなしの小遣い貯めた。あるいは、一、二年分の誕生日とクリスマスプレゼントを我慢するのを条件に買ってもらつた物。それが、奪われてしまうのである。

そして、負けることは即ち、自分の友達や相棒と呼べる存在が無残な姿になるのを見ることになる。朽ち果てた状態の自分の愛機から、パー^ツをもぎ取り他人の手には渡すのは、正に苦痛と屈辱の二重苦だ。

イッキはママから罰として、一年間お小遣い抜きとなつた。

自分が真剣に取り組めて、尚且つ、お小遣いを稼げる。この二つの条件に当て嵌まるのが、真剣口ボトルだつた。イッキはこれまでの間、三人と真剣口ボトルをした。

一人目は銀行勤めの若い女性。こちらは、すんなりと蝶型メダロ^ツト・レッドスカーレスの右腕を渡してくれた。

二人目は男子高生。いかにも不良っぽく、ハリネズミ型メダロ^ツト・ソニックタンクの頭部を受け取る際、舌打ちされたのは怖かつた。

三人目は同じ小学三年生の男子。泣きながら蛇型メダロ^ツト・マックスネイクの左腕パー^ツを渡されたときは、自分がいじめっ子と

勘違いされないか冷や冷やした。

余談だが、メダロットにはスラフシステムという自己修復機能がある。これも語ると長いので、また別の機会に語りうつ。

イッキはレッドスカーレスの右腕をコンビニで下取りに出して、千五百円を手に入れた。メダロット社の規定により、「コンビニやパートではメダロットのパート単品買い取りシステム導入がされている。

千五百円。たった僅かな金額だが、自分とロクショウの力で本氣で取り組み手に入れたお金。

いけないことで手に入れたメダロットだったが、イッキに本氣で物事に取り組む苦労、そして、その楽しさを気付かせた。

今日と明日の休日の二日、校内ロボトル大会が開催される。優勝は期待してないが、僕とロクショウの実力を試す絶好の機会。仮に優勝すれば、賞状と男性型ティンペット一台が授与される。

学校開催のイベントだが、参加費用には千五百円取られる。見物だけでも、一般・保護者は五百円。児童も二百円支払わなければならぬ。学校はロボトル大会の行事に本腰だ。

参加には、クラス担任の教師に参加する旨を告げる。イッキは大会参加募集締切日の水曜日に担任のオトコヤマ先生に参加表明を申し出て、千五百円の参加費用を入れた封筒を提出した。

大会参加募集人数は七十人。今年は六九人と、中々の盛況ぶり。

大会は午前の部で第一回戦。一回戦が済むと、一時間のお昼休み。午後の部で第二回戦が行われ、三十分の休憩をはさんだのち、第三回戦が行われる。続く日曜日。午前の部第四回戦、二十分の休憩をはさみ、そのまま準決勝戦。昼食攝取の時間も兼ねて一時間半の休憩のあと、決勝戦が行われる。

準決勝と決勝になると応援の生徒の親が減る代わりに、一般の見

物客が詰めかけてくる割合が高い。学校側は自治体と協力して、休憩時間の間に校内と周辺の見物客・交通整備を行う。

イッキパパは仕事の都合で今日は来れない。明日は休めるから、今日勝ち残つたら応援に行くとパパは言つていたが、それは無さそうだ。

イッキの一回戦の相手は、スクリューズの一番手であるカガミヤマが対戦相手だからだ。

スクリューズは三人いて、一番手カガミヤマ、二番手イワノイ、そして、キクヒメという女の子がリーダーを務める。イッキと同じ三年生でクラスが隣り合っている。イッキが羨ましそうにロボトルの光景を眺めていると、いつも決まってこの三人はイッキのことをからかつた。

三人は三年生の番格であり、イッキを含むメダロットを持つ同学校の生徒は、できる限りこの三人とは目を合わせないようにしている。

スクリューズは常に三人がかりで対戦し、パーティを奪つては荒稼ぎをしているという噂がある。噂の真偽はともかく、この三人は個々の実力も高い。学校で、この三人の誰かと一対一でやりあつて勝てるような生徒はあまりいない。

「」臨終だねえ、イッキ

声にドスを利かせて、スクリューズのリーダーキクヒメが声をかけてきた。少女ながら、声には一種の威圧感があった。茶髪に顔立ちからして、キクヒメはどこか日本人離れしていて、両親のどちらかは外国人だと聞く。

キクヒメの右側に控える腕白い細めの少年が、半笑いな目付きで小馬鹿にしたようにイッキを見やる。

「いやー。メダロットを初めて一ヶ月も経たない初心者」ときが大

会に出るなんて。ほんと、身に余る行為つすよね姉御」

焦げ茶色のジーパン、肩のラインに沿つて白筋が入つた深青色のティーシャツ、僅かに垂れた臉まぶたと斜め上に逆立つ黒髪が目立つ彼は、スクリューズの「一番手イワノイ」。

キクヒメの左側に控える少年がイワノイの意見に同意する。任天堂の某RPGの主人公を連想させる赤帽子を被り、日焼けがかつた浅黒い肌に丸みを帯びた体型、閉じているのか開いているのか分からぬ糸目をした少年だ。

「うん、ほんとほんと。家事炊事洗濯に慣れていない奴が、適量も分からず洗濯機に洗濯剤をぶち込んで、洗濯物を駄目にするみたい」意味不明な例えを話す彼は、スクリューズの三番手力ガガミヤマ。近くに三人のメダロットが見当たらない。スクリューズは試合直前に自身の愛機を呼び出すつもりだ。

メダロットとメダロットの本体には、「転送機能」がある。電波を受信することにより、何千メートルと離れたところにあるメダロットの本体を、メダロットを通して瞬時に目の前まで送ることができるシステム。メダロットのこの「転送機能」も各分野における利用が試みられている。

「あんたがどの程度抗えるか見物だねえ。カガミヤマ、たっぷりと可愛がつてやりな」

キクヒメはそう言つと、近くの売店へと足を向けた。イワノイ、カガミヤマも後に続く。

これまでのところ全く負け無しで自信もついてきたが、イッキは自信を無くした。今まで無言だったロクショウが、メダロット越しからイッキに喝を入れる。

「イッキ、前と同じアドバイスを送ろう。がむしゃらになれ、イッキ。それに、この大会が始まるまでの間、私とお前は決して遊び呆けていたわけじゃない。勝つにせよ、負けるにせよ。あの三人には我々と対峙したらどうなるか、目に物を見せてやろうではないか!」常日頃は知的で落ち着きがあるロクショウ。だが、ロボトルとな

ると秘めたる魂が目を覚ます。

ロクショウの言つとおりだな。今は勝敗を気にせず、全力で物事にぶつかろう。

「イッキ

チドリとアリカの二人がイッキを呼ぶ。

ママとアリカとアリカの母親、三人は伴つて校門を潜つた。アリカの横にプラスがないのを見て、イッキはママの横まで来ると、アリカにそれとなくプラスがどこにいるか聞いてみた。

「プラス？先に行つてもらつて、見物の場所取りをしてもらつておいたの？」

「アリカちゃん！」

遠目から、プラスが跳ねてアリカに手を振つていた。

「イッキ、あんた何よその自信無さげな顔は」

ロクショウの喝で元気になつたつもりだが、アリカや他から見ると、どうもそうではないらしい。本音を漏らせば、実はまだ怖い。

「あんた、一回戦の相手は確かカガミヤマだったわね。スクリューズがなによーあんさんとロクショウなら、カガミヤマ程度なら一発ノックダウンや」

アリカが大阪弁も交えた男っぽい声でイッキを激励するのを聞いて、アリカの母親が注意した。

「こら、アリカ。せめて口調ぐらい女の子っぽくしたらどうなの」「別にいいじゃん、お母さん。じゃ、イッキ。三回戦で会いましょうね」

アリカは元気良くプラスの元に駆け寄つた。アリカの母親は、やれやれと首を振つた。

「ほんと、あの子ときたら……」

「いえいえ、子供はあれぐらい元気のほうがいいですわ。うちのイッキに見習わせたいくらいですよ」

ママは僕の頭を撫で回した。イッキは撫で回すママの手を煩わしそうに払い除けた。

「…ママーこんな人前で」

「あら、いいじゃない？もしかして、これぐらいで禿げちゃうと心配しているの」

チドリがもう一度イッキの頭を撫でようとしたら、イッキは逃げるようアリカとプラスが座るシートに向かった。

「逃げられちゃいましたね」

アリカの母親が笑顔で言つ。

「ええ」

今は撫で回せる高さにあの子の頭も、そのうち、自分の頭に手を伸ばすくらいの大きさになるんでしょうね。ふとして過る感慨を消すように、大会開始十分前の放送が流れる。

イッキとアリカが一人に早くくるよつ促す。

「さて、あの子たち一人がどこまで頑張れるか。見届けさせてもらいましょうか」

チドリの言葉に、アリカの母親は小さく相槌を打つた。

試合台は警戒網を張ったグラウンド内部の中央。そこを、相撲の土俵のように土で盛り上げただけだった。

一分で一回戦は終了した。飛行系パーツの脚部を装着した機体に、相手はランドモーターの対空攻撃パーツでこれを撃墜した。

続く一回戦第二試合、天領イッキ＆ロクショウ対カガミヤマ。カガミヤマは既にメダロットの本体を自宅から転送していた。

カメ型メダロットのキースタートルこと鋼太夫。カメ型だけあって移動速度は鈍いが、その分装甲が厚い。また、両腕と頭部から発射されるレーザーはかなりの威力と速度を誇る。

東はイッキとロクショウ、西はカガミヤマと鋼太夫。

黒い紳士ズボン、白い半そでの紳士ティーシャツに蝶ネクタイと、出で立ちで、鼻と口の間に立派に生やした鬚を蓄えた初老の男

性が、試合台中央で両者を交互に見やる。

「先ほども申し上げましたが。私、ロボトル協会公認レフューリーのミスター・うるちと申します。メダロットが機能停止、あるいはマスターがギブアップの意を表明した場合、一方の勝利とします。それでは、このロボトル合意と見てよろしいですか？」

イッキとカガミヤマは一つ首を縦に振った。ロクショウと鋼太夫は睨み合っている。

「ロボトルファイトー！」

開戦合図と同時に鋼太夫はいきなり左腕のレーザーを発射した。不安でしようがなかつたが、この試合は自分とロクショウが優位だと分かつた。何故なら、周りは観客だらけで、格闘タイプのロクショウの攻撃は余程のことが無ければ安全だが、レーザーだとそもそもいかない。人に当たつても死には至らないだろうが、何らかの被害は確実に出る。

カガミヤマは威力を速度を高めた左腕の極細のレーザー一発で決めたたかつたようだが、そうは問屋が卸さない。ロクショウの脚部の一部であるスカート状のものを一部焦がしただけであり、ロクショウは全くの無傷で済んだ。

「ロクショウ、もう下手な作戦は要らない。正攻法で攻めろ」「御意！」

近づいては、チャンバラソードで一番装甲が厚い脚部を攻撃した。鋼太夫は腕を振るうなりして抵抗を試みるが、元来射撃タイプのキースタートルのパンチが当たるわけも無い。四回右腕のソードで攻撃して、ロクショウは鋼太夫の四本ある足を全て切断した。

レーザーやビーム系の攻撃は、次の一発を撃つのに時間要する。更に観客は高い壁から見下ろして観戦ではないので、思い切った攻撃ができない。

やけくそといわんばかりに三門レーザー一斉発射。ロクショウはこれも難なく避わす。試合台に三つの風穴が開いた。無茶な攻撃で身動きが取れなくなつた鋼太夫の頭部を、ロクショウは左腕の必殺

武器・ピコペコハンマーで叩いた。鋼太夫の頭頂部がひしゃげ、メダルらしき物体が弧を描いて飛ぶ様が見えた。

「鋼太夫機能停止！ 勝者、天領イッキとロクショウ」

マイクも使わず、ミスター・つるちの勝利者宣言は観客全員の耳に届いた。

その後も消化試合は行われて、お昼の十二時五十分頃には一回戦が終了した。

「イッキ、ロクちゃん。一人とも意外とやるじゃない」

「アリカ、プラスおめでとう。けどね、アリカ。あんな風にがなり声で叫ぶのは、できれば控えてちょうだい」

イッキ、甘酒の両母親が自分の子供たちとその相棒の戦いぶりを褒めた。

四人はピクニック用のシートに座り込み、昼食を取っていた。今日は特別に、チドリはイッキの大好物の一つであるトンカツを持ってきた。ここにカレーも加われば、イッキにとっては最高の食事である。

アリカはパセリに野菜サラダなど、意外にも青野菜系の料理を好む。

食べて、出す物も出してリラックスしたあとは一回戦へと突入。一回戦の相手は五年生。一回戦で使用したパーツを全て別のに替えていた。

脚部がラビウオンバット、右腕は付けた機体の行動速度を高めるチャージドシーブのパーツで、残る左腕と頭部は何とソニックタンクのパーツだつた。

ソニックタンクとなら、一度手合わせたしがある。だが、この前と違つてこちらはソニックタンク一式で組み立てず、スピードがあるパーツを二つも装着している。

イッキはまずロクショウに索敵するよう指示を出した。記述していなかつたが、実はロクショウにもセーラーマルチと同じ索敵の機能が備わっている。

相手の左腕から放たれるナパーームを避けつつ、ロクショウは相手の行動速度とパターーンを分析した。二分経過、ソニックタンクが後ろに飛んだのを見計らい、ロクショウはダッシュした。頭部からのナパーームを頭上ギリギリのところで回避し、ロクショウは相手を切り伏せて勝利した。

この試合では全くの無傷とはいかず。一発、左腕にナパーームを食らってしまった。

運営委員会のメダロット、ホーリーナースとムーンドラゴーンの二体がロクショウの腕を治療した。スラムシステムを異常促進させてパーティの自己修復機能を高めさせる、いわゆる回復系のパーティを二体は備えている。損傷具合が浅かつたため、五分後にはロクショウの左腕はすっかり元通り。

第三回戦、これで前半戦は終了する。

対戦相手はスクリューズの一番手イワノイ。使用する機体はシアンドッグの後続機、DOG型イヌメダロットのブルースドッグ。イワノイは名前を付けず、機体名称を名前としている。

「イッキ、仇を討とうなんて思わないで。ただ、滅多切りにしてくれるだけでいいから」

「イッキ、アリカちゃんの仇を討つのよ」
「イッキ君、適度に頑張ってね」

アリカ、ママ、アリカの母親の三人の応援はバラバラだ。

「イワノイ！あたいらの力を今度こそ見せつけてやりな」

「合点承知の助だ姉御」

キクヒメの啖呵に、イワノイはガツツポーズで応えた。前の第二試合で、プラスはイワノイのブルースドッグに敗北を喫した。

治療を施されたが、体中の弾痕跡が消えるには時間がかかりそうだ。

痛ましいプラスの姿を見て、ロクショウに、イッキも珍しく燃え上がつた。

ロクショウがポーズを取る。クラウチングスタートの姿勢だ。

「何だあ？まさか、真正面から突っ込む氣か？」

二人は答えない。

「あんま調子に乗るんじやないぜイッキ。おいらのブルースドッグの実力は、そちらの同機種なんかとは比べ物になんねえぜ」

イッキはイワノイの挑発に全く乗らなかつた。

思えば、ことあるごとにメダロットを持つてないことでからかわれてきた。だけど、もうそうじやない。今は、ロクショウと「うお堅い」が最高の相棒がいる。

イッキは一回戦でカガミヤマがとつた戦法と全く同じことをやろうとしていた。試合開始合図と共に、全力の一撃をぶちかます。男のガチンコアタック。失敗すれば、待つのは蜂の巣。

ミスター・うるちのロボトルファイトの叫びと同時に、ロクショウはブルースドッグに向かつて疾風の如く駆ける。

右腕を撃たれ、更に脚部に三発を食らつて素つ転ぶロクショウ。観客の誰もが駄目だと思ったとき、ロクショウは勢い殺さず撃たれた右手を地面に叩きつけると、宙返りしてブルースドッグの顔面をぶん殴つた。

「ぼつがーん！」

ブルースドッグは観客席まで吹つ飛んだ。審判がカウントを取る。

「…ヒイト、ナイン、テーン！ブルースドッグ機能停止！勝者、天領イッキ＆ロクショウ」

試合開始から十五秒で決着。今大会最速勝利。

今度は数人だけでなく、イッキとロクショウは多くの観客から拍手と称賛が贈られた。決着の速さに何が起きたか分からず、イワノイは呆けた表情をしていた。

4・校内ロボトル大会【前編】（後書き）

都合上、何型か記載されないメダロットがいるのはお許しください。
因みに、ラビウオンバットはウサギ型。チャージドシーズは花型です。

キースタートルの名前は小説オリジナル。ブルースドッグはアニメ版を参考にしています。

4・校内ロボトル大会【後編】（前書き）

数日ぶりの更新。やっぱ、前編だけで何日も待たすのはあまりにも決まりが悪い。

4・校内ロボトル大会【後編】

尿意をもよおしたイッキは、四人に先に帰るよう言つた。
「寄り道せずに帰つてくるのよ」

「分かつたよ、ママ！」

イッキは一目散にトイレへと向かつた。

思つたとおり、トイレはどこの階も混雑していた。股で股間にあら物を抑えつけて、イッキは数分間トイレを我慢した。

カシャ、カシャと、機械的な歩調。尻尾と手足が電気コードの接続部のような形をしており、真っ赤なぶかぶかなスカートと服を着たような体、頭に猫耳を付けたネコ型メダロットのペッパー・キヤットが男子トイレにやつてきた。主人である女の子でも探しているのだろうと、気にかける者はいなかつた。

「ブルースドッグと鋼太夫倒したぐらいでいい気になるにや。私はあいつらとは比べ物にならない。あんたはあのクワガタムシの命日でも待つておくことだにや」

イッキにさり気無く近寄つたペッパー・キヤットは、イッキを小声で齧した。そのペッパー・キヤットの齧しを聞いて、イッキは青ざめ辛そうな表情をした。だが、それは限界まで近づいている辛さであり、そのメダロットの齧しの台詞はとんと聞こえてなかつた。

そのメダロットはそのことに気が付かず、自分の台詞で相手がびびつていると勘違いして、満足した様子で去つて行つた。

正門を出てすぐのところに、スクリューズの三人が立つていた。キクヒメが例のペッパー・キヤットに話しかけた。

「セリー・ニヤ、イッキとあの虫の様子はどうだつた？」

「クワガタの奴はいなかつたけど、イッキにはバッチリ。青ざめた顔で身を震わせていただにや」

「このペッパー・キヤットはキクヒメの愛機で、名前はセリー・ニヤ。

「へつ！イッキの奴、明日、自分がどういう目に遭うか分かつてい

るらしいな」とイワノイ。

「ああ。泥塗れにしてやるう」とカガミヤマ。

「あたりを舐めたらどうこう田に遭つか。あいつの虫の体にしつかりと刻んでやりな、セリーーヤ」

そして、スクリューズは既に勝利したかのように高笑いした。その頃、用を済ましたイッキは児童玄関で待つロクショウと会つた。

「気分は?」

「死ぬかと思つたけど、何とか間に合つたよ。でも、辛かつたな。人を押し倒しても行こうとしたら、僕の心を読んだのかな?赤いボディのメダロットが『待つておくことだにゃ』と注意したんだ。おかげで、間違いを犯さずに済んだよ」

「…赤いボディのメダロットといえば、先ほどここを通りましたな。猫のような姿をした」

「猫…ペツパー・キヤットか。まあ、あのメダロットを持つているのは他にもいるし。僕の間違いを押し止めてくれるよつな心優しいメダロットが、まかり間違つてもあいつらのメダロットということは無いな」

イッキとロクショウは人混みに揉まれながら、ゆっくりと歩いてくれていた四人を見つけて合流した。スクリューズはほくそ笑み、イッキの気持ち爽やか。双方、互いの思惑に全く気付かず。知らぬが仏とはこのこと。

帰宅すると、ちょうどパパも帰つてきた。

夕食の時間帯、イッキとチドリママはパパに試合模様をこと細かく話した。特に、イワノイと対戦したときの心境と戦い方を伝えると、ジョウヅウはいたく感心した。

「男のガチンコアタックつてか。まさか、イッキからそんな言葉を

聞く日がくるとは夢には思わなかつたな

父親にも褒められて鼻が高くなつたイッキを、チドリは諫めた。
「勝手に一円も使って購入した物なんだし、一回戦で負けていち
やしゃれにならないわ。それに、明日の
対戦相手の子はあなたより経験が豊富らしいじゃない。褒めといて
何だけど、そうやってすぐ鼻を伸ばしちゃうのがイッキのわるいと
ころよ」

ママに諫められて、イッキは明日の対戦相手が誰か思い直した。
第四回戦第一試合の相手は、スクリューズのリーダー・キクヒメ。僕
より一年半も早くロボトルを初めて、通算ロボトル数はイッキとは
比べ物にならない。

ママに諫められてイッキは身を引き締めたが、本音は違つていた。
未熟者の僕が力ガミヤマ、イワノイも倒せた。キクヒメが強いこと
には間違いないだろうが、何、僕とロクショウならまず勝てる。
この思考を無理に抑えていたが、ともすると、つい本音が頭をよ
ぎつてしまつ。

居間のフローリングの床で正座するロクショウも、ついそういう考え方
てしまつたりしていたが。精神統一することにより、その思考を自
重していた。

日曜日、校内ロボトル大会後半戦。三回戦で人数が絞られて、応
援席には保護者や参加生徒の友人の代わりに一般の客が詰めかけて
いた。それでも、昨日より幾分か空いていた。

第一試合が終わり、イッキとキクヒメの第一試合が行われようと
していた。

だが、昨日までの調子はどこへいったのやら、イッキはすっかり
固くなつていた。キクヒメと相方のペッパー・キャットのセリーナ
は、もう慣れているという感じ。

企業参加の一大ロボトルイベントと比べれば、小規模な大会。とはいっても、メダロットを持って一か月も経たない自分が、小規模ながらよく勝ち抜いたな。

やるだけやってみるか。そう思つて足を踏み出そうとしたら、思うように進まない。アリカときのほどではないが、また緊張しているようだ。見かねたロクショウが一声かけようしたら、イッキはそれを制止した。

「大丈夫…。何時間とはかけられないけど、ちゃんと前進だけはするから」

イッキは綱を渡るようにそっとメダロッター立ち位置についた。

「じゃ、ロクショウ。頑張るか…」

どこかまだ引きずつているが、イッキは多くの人がいる前で潑刺とした調子で喋つた。

ロクショウは「うむ」とだけ言ひて、試合台上あがに上つた。

ロクショウが跳躍したセリーニャに切りかかる。空中で動きが取れない状態、勝つた。

と、思いきや、セリーニャは猫のように大きく背を反らしてロクショウの一刀を避わし、右腕の電流を帶びたジャブをロクショウに浴びせた。

セリーニャは着地するとバック宙反転、今度も右腕の電流ジャブをロクショウに浴びせた。ロクショウもやられっぱなしではなかつた。セリーニャの右腕を掴むと、針状の形をしたマックスネイクの左腕で殴り掛かつた。致命傷には至らなかつたが、ペッパー・キヤットのをバランスを支える尻尾と、右腕の接続コードの形をした指一本を貫いた。

セリーニャはロクショウを蹴飛ばし、離れて態勢を整えた。

思つていた以上に、キクヒメとその愛機セリーニャは手強い。イ

ツキはロクショウに索敵の支持を出した。まあ、これで攻撃が当たるようになる。

しかし、相手は当然それを読んでいた。セリーニャは逃げの一手に集中したので、索敵でセリーニャの行動を読んでいるはずのロクショウの攻撃は悉く空振りした。

ロクショウの攻撃は当たらず、セリーニャが逃げるだけの光景が一分間続いた。このままでは埒があかない。少々危険だけど、相手から攻撃してくるのを待つて、カウンターでソードの一撃を食らわせる。

「ロクショウ、後二回ぐらい切りかかったら、相手の出方を待つてカウンターだ」

「了解」

試合台の隅に逃げたセリーニャに一刀、セリーニャは転がつて回避。最後の一刀を振るうとしたら、立ち上がったセリーニャが事を急いでバランスを崩した。チャンスだ。

「ロクショウ！そのまま攻撃」

イツキは勝利を確信した。だが、バランスを崩したのはセリーニャの巧妙なフェイントだった。

セリーニャはブリッジで難なくソードの一撃を避わし、ロクショウの無防備な体に左腕からの電流を浴びせた。

「ぐわああああ！」

ロクショウが悲鳴を上げる。

バランスを崩したのはセリーニャのフェイントだったと、イツキは気が付いたがもう遅かった。ロクショウはセリーニャの左腕と尻尾でがっちりと挟まれていた。

「セリーニャ、頭部ライトサークットで止めだよ」

キクヒメは余裕を浮かべた酷な笑みで指示を伝える。

「はいにゃ！」

セリーニャの頭部の両耳から、一本の針が生えた。ぼしゅしゅ！と、ワイヤー付きの両耳が音を立てて飛び出し、右耳がロクショウ

の左腕肩部、左耳が太腿上部に刺さる。

「ばちばちばち！」

人の目から見ても、ロクショウの体に電流が流れ込んでいるのが分かる。

イワノイ、カガミヤマが密かに野次を飛ばす。

「このままでは不味い。どうすれば打開できる。焦るイッキを尻目に、キクヒメはどうだ言わんばかりに顔を突き出し腕を組む。やっぱり、僕らではまだ力量不足だったんだ。既に諦めかけたイッキに、悶えるロクショウがメダロツチから発声する。

「諦めるな、イッキ！」

「…ロクショウ！でも、もう」

「確かに今のままでは勝てんだろうが。まだ、私は全ての武器。それと、戦う意欲も…失つていない。勝利には…至らずとも…何か方法があるはず」

そうして、メダロツチからのロクショウの通信が途絶えた。

全く考えが無いわけでも無い。でも、あれは元々武器用として設計されたわけではない。威力は知れており、攻撃したこっちのほうがダメージは大きいかもしない。これで倒せなければ、こっちの負けは確実。それでも、これしか方法が無い。

「ロクショウ！アンテナ！」

これを聞いたキクヒメ、イワノイ、カガミヤマは、何を今更と鼻で笑つた。

だが、次の瞬間三人組は目を丸くした。何と、相手のヘッドシザースがあくまで索敵レーダーの補助の役割をする両角で、セリーニヤに頭突きをかましたからだ。

セリーニヤの顔面と胸部がへこみ、ロクショウの両角が根元から折れる。薄れゆく意識の中、セリーニヤはロクショウの顔面を蹴つ飛ばした。

ピン！ロクショウの背面からメダルが外れるのが見えた。初めて見る、自分のメダロットが機能停止する様。ショックのあまり、イ

ツキの思考は停滞した。続け様、また、ピンーと、セリーーナのメダルが外れる音が聞こえた。

引き分け？見ている誰もがそう思つたが、審判の下した判断は違つていた。

「勝者、キクヒメ＆セリーーナ」

呆然としているイツキの代わりに、アリカがミスター・うるのの判断に抗議した。

「ちょっと！ どう見ても引き分けじゃない！」

「いーえ、セリーーナ選手はロクショウ選手より遅くメダルが外れました。あなたも見ましたよね？」

そう言わればそうだった。確かに、セリーーナのメダルが外れるのはロクショウより僅かに遅かった。

審判にそのことを指摘されて、アリカは悔しげに口をつぐんだ。

今だ呆然とするイツキに、キクヒメが手を差し出す。
「おー！ 何とスポーツマンシップ精神に乗つ取つた行動」と、ミスター・うるちが歓喜した。

そうではない。イツキを含む生徒は裏に何かがあると読み取つた。イツキが手を握り返すと、キクヒメがぼそりと呟く。

「形はどうあれ、あたいらの勝ち。これに懲りて、今度はでしゃばるんじやないよ」

ある程度思つたとおりのことを言つてきたので、イツキはさしてショックを受けなかつた。イワノイ、カガミヤマがセリーーナのメダルとバーツを拾うのを手伝い。イツキがロクショウの本体を抱えると、アリカがメダルを拾つてイツキに差し出した。

「ナイスファイト、イツキ

いつもと違い、アリカの*声*音は優しかつた。

イツキとロクちゃん、負けちゃつたのね。負けたら、こんな高い

物を買つておきながら負けるなんて。と、さつに一言を言おうと思つていたけど止めておこう。試合からアリカちゃんと一緒に戻ってきたイッキの顔は悔しさと悲しさで一杯に溢れていて、メダロッチにいるロクちゃんに謝つていた。その態度を見たら、言えるわけが無い。

イッキは優しい子だけど、どこか中途半端というか事無かれ主義で、どんな物事に対しても、それなりにやればいいだらうという感じだった。

そのイッキが、今は一つの物事に真剣全力に考えぶつかつている。言わなくとも、顔も見れば分かる。今のイッキの表情は、物事に全力に取り組んだ物しかできない者の顔をしている。

戻ってきたイッキの肩を抱こうとしたら、ジョウゾウさんが先にイッキの肩に手を置いて、「負けてしまったが、今のイッキとロクショウは本当にかつこう良かつたぞ」と我が子の健闘を称えた。

私が言おうとしていたのに。この人、本当こういふところは抜け目なく思える。イッキはまだ立ち直れないようだ。しょうがない、この単語なら少しでも現実に引き戻せるかも知れない。

「イッキ、今晚は大好物のカツカレーよ」

「…カツカレー…」

カツカレーという言葉に一番反応したイッキを見て、やつぱりまだ子供だなとチドリは思った。

5・おひり山探索記（打ち捨てられた者）（前書き）

ゲームの順序からすれば、本来はスカートめぐり事件が来るべきであり、あの一組が登場する話でもありましたが、必要性が感じなかつたのでカットしました。

5・おどり山探索記（打ち捨てられた者）

校内口ボトル大会は六年生の男子生徒が優勝を飾った。キクヒメのセリー「やはイッキとの試合での負傷がたたり、惜しくも優勝を逃した。

そのイッキとロクシヨウだが、校内口ボトル大会以降、挑戦者が増えた。負けはしたがスクリューズの子分一人に打ち勝ち、あのキクヒメとも善戦した光景は主に小学生の見物客の口から伝わった。ゴールデンウィークまでの間、イッキは十一人と口ボトルを繰り広げた。

まだまだ未熟な一人だが、十三戦して十一勝一敗した。一敗目は、学校の校長先生の愛機である侍型メダロットのナンテツとの対戦。伊達に歳は取つておらず、イッキとロクシヨウはコテインパンにされた。

一敗目は潜水系メダロットを持つ中学生が相手。相手の有利な川での戦闘だったから、徐々に装甲を削られて敗れてしまい、ロクシヨウの右腕を取られてしまった。

後日、アリカが男性型アンチシーパーツを持つていたので、イッキはアリカからカツパロードの右腕を借りてリベンジを果たし、ロクシヨウの右腕を取り返した。

アリカは心地よくパーツを貸してくれたが、絶対裏に何かあるとイッキは直観した。ゴールデンウィーク前日の金曜日、学校が終わったあと、イッキはアリカに自宅へ来るよう言われた。

「ねえ、イッキ。今度のゴールデンウィークさあ、おどり山に行かない？」

甘えた声を出しながら、アリカは部屋にいるイッキを逃がさないよう詰めていた。

「何で？」

「何でつて？あんた、私に貸しがあるでしょ。だからさあ、おどり

山の幽霊の正体を見抜く取材に同行してくれない？お父さんとお母さん、今回のゴールデンウィークはどこにも連れて行つてくれそうにないから

イッキは迷つた。

僕のパパも今回は忙しくて、夏休みにメダロツ島へ連れて行つてくれる約束した代わりに、今回のゴールデンウィークは我慢してくれと言つた。どこへ行けそうにもない。といって、ずっと日がな一日、おどろくするものどうだらう。イッキは「ゴールデンウィークの間、アリカと共におどろく山の幽霊調査に出かけることにした。

「やつりー！ そこなくつちや

期待どおりの返事が聞けて、アリカは喜んだ。

ロボトルにおける借りを返すためでもあるが、イッキも俄然、この最近のおどろ山幽霊騒動の正体が何なのか知りたかった。

おどろ山は御神籠町の数少ない観光スポットの一つ。のっぺりとした山群の連なりで、登山には向かないが、豊かな自然があふっていて、休日での家族や友人を連れての気軽なハイキングになら持つてこいの場所。

事は今年の一月に起きた。小学生の男の子がメダロツトを連れて山に入り、越冬中の昆虫を採集しようとしたら、「……置いてけ……森を汚す機械を置いてけ……。……そもそも……お前の魂をいただく……」と、不気味な声が森に響いた。

怯えた少年は、自身のメダロツトを使って周囲に声の主がいないか探させた。すると、メダロツトの悲鳴が上がつた。少年が駆け寄ると、自身の愛機が無残な姿で樹の根本に倒れていた。

「……出ていけ……。そもそも……今度はお前を喰う……」

すつかり恐怖した少年は、千切るようにティンペットからメダルだけを掴み、必死の思いで下山した。その日のうちに管理事務所から青年団に連絡が入り、少年の証言を下に、五名が少年のメダロツトの本体を捜索したが、一切そのような痕跡は見当たらなかつた。そのメダロツトは旧式であり、少年がメダロツト社の保険を利用し

て、パーティやティンペットを貰うための一芝居を打つたのではない
かと、あらぬ疑いもかけられた。

三月、大学生のグループが四名入山した。内一名はメダロットを
連れていた。大学生グループがおどろ山にあるおどろ池の近くを通
ると、また、あの声が四人を脅した。

四人と二体のメダロットは鼻で笑い、二人一組に分かれて声の主
を探した。そしたら、徐々に辺りに霧が立ち込めてきた。その霧に
包まれているうちに、四人は気を失った。目が覚めると、二体のメ
ダロットは忽然と姿を消していた。

同月、最初の被害者である少年のクラスメイト十人が、夜、全員
メダロットを連れて山に入つた。

一時間後、十人は恐怖に顔を歪めて山の管理事務所に助けを求め
た。

十人の話を整理すると、何でも一本の黄色い角を生やした鬼が一
匹に、宙に浮かぶ白い幽霊がわらわらと姿を現し、例の脅迫台詞を
言った。子供たちは果敢にメダロットを使って攻撃したが、何と全
てすり抜けた。攻撃は当たらず、徐々に狭まる幽霊たち。仕方なく、
子供たちはメダルだけでも持つて、本体を置いて下山した。これを
聞いた役所も、ようやく重い腰を上げることにした。

青年団に自治体と協力して、町は一日に一回は山の巡回をさせた。
また、子供一人の入山に夕方以降の入山も一時規制した。

四月。今度はその巡回者が被害に遭つた。二人一組でメダロット
を連れていたが、おどろ池の近くを通りとあの声がした。一人とメ
ダロットは固まつて行動した。その日は雨が降り、山は霧が立ち込
めていた。二人は警戒して歩いていたが、何故か頭が重くなり、気
付くと眠つていた。目覚めると、後には何も残つていなかつた。

そして、このことは「おみくじ新聞」だけでなく、ついには全国
紙とニュースにも取り上げられてしまい、インターネットでも話題
を読んだ。おかげで、ゴールデンウィーク前日だというのに、ハイ
キング客を相手にした宿泊業やお土産による売り上げが昨年より落

ち込むことが予想された。悪い噂が広まり、町の安全のために買つたメダロットも一體奪われて、役所は椅子に座つて頭を悩ますばかり。

一体の汚れたメダロットがおどる池近くに横たわつていた。そのメダロットは騒動が起きる前からそこにあり、とある者たちはあまりの汚れ具合から、それを見つけても触るのを躊躇つていた。

男性型ティンペットとバービー式を付けたそのメダロットは機能停止しているが、メダルは装着されたままなので、まだ生きていた。それは、ちょうどおどる山のごみが集積しているところもあり、山狩りの者たちも朽ち果てたその存在を無視した。

ふう。エネルギーはすっからかんでも、一応、思考能力とかは失われないみたいやな。それにしても、人間つて酷いもんやほんまに。爺さんが死んだら、エネルギーを抜いて山にぼいやもんな。そもそも、憎み切れへんのは、爺さんというお人の存在があるからやろうな。けけけ！まつ、このまま残り一生、しうつもないこと考えながら朽ちるのもええかも。

にしても、あーあ…。何や、じゅりでもいいから興味持つて拾うてくれる人はおらんかな。無理やうな。見えるわけじゃないけど、多分、こんなに朽ち果てたもん拾うような物好きおらんやろ。

そのメダロットは一旦、思考世界での言動を打ち切り、心を無にした。

ママにアリカとおどる山に行へることを話すと、ママは陽が落ちないうちに帰つてくるよつ言い渡し、お弁当を渡してくれた。お弁当を渡すときのママの目が、変というか、妙に浮いているよつな気が

したけど、何でかな？イツキが家から出たあとも、チドリはちよつと嬉しげに浮ついた顔をしていた。

「ふふ。イツキがアリカちゃんとデートねえ」

「このとき、イツキは何故かくしゃみをした。

歩いて三十分後、イツキたち四人はおどろ山前に到着した。去年のゴールデンウィークでは、ある程度の人数が見受けられたが、今年は物寂しい。イツキたち四人以外に、敬老会の人たちが八人と、山伏が数人ほど。おどろ山は意外なことに歴史が古く、何とかの高名な和尚さんが眠るというお岩さんがあり、たまに修験者などが訪れたりする。

入山する前、管理事務所のおじさんが注意を呼びかけた。

「もう知っているかもしれないが。危険だから、夕刻までには必ず降りてくるんだよ」

四人は小さく会釈して、入山した。

「幽霊といつても、こんなまっぴるまから出るわけもないわね」

最初はジャー・ナリストとして身構えていたアリカも、すぐに足取りが軽くなり、プラスと手を組んで楽しげに山中の眺めを見渡していた。イツキはロクショウと手を組まなかつたが、のんびりとした気持ちで歩んだ。

「幽霊騒動で騒がしいと聞いていたが。いざ現地に来てみると、とてもそこには思えませんな」

イツキはロクショウの言つたことに同意した。山は日当たりが良く、木漏れ日がまた風情を醸し出していた。幽霊はもちらんのこと、とても鬼とか人魂が出そうな気配はしない。陽が落ちれば、こののどかな景色も違つた物に見えるかもしれないが。

先を行くアリカが振り返つた。

「イツキ、おどろ池に行ってみましょ。幽霊の目撃情報が一番はつきりしているのはそこだから」

おどろ山にあるおどろ池は、山の中腹地点で曲がつてずつと七百メートル登つた先にある。池は大よそで直径四十メートルほどあり、

真ん中は土が盛つていて小島のよう видим. 溢水が出る池で、眞夏日においても涼しさを感じるおどる山名所の一つ。だが、今は幽靈騒動とは別の問題を抱えている。池を見たイッキは顔をしかめた。

「…話には聞いていたけど…。ちょっと、酷いな」

綺麗な湧水の池には、ぶかぶかと空き缶にビニール袋などのごみが目立つ。おどる山は牧歌的な山道とこの池が見所。そのせいか、こうして心無い観光客がごみを捨てていくときがある。町もこの山ばかりに金を回すわけにはいかず、ボランティアを募集して年に年に一回の大掃除でごみを集め。それでも、こうした不法投棄が跡を絶たない。

イッキたちはこじらで一休みした。少しごみが気にかかるが、冷えた山頂の空気がちょうど火照った体を冷やしてくれて、心地よい。イッキとロクショウは池の周囲を徘徊した。

池を半周したところは急峻。樹が懸命に張り付いているようだ。その下を見下ろすと、薄汚れた物が樹の根元にもたれかかっていた。イッキとロクショウは互いに見合つた。

「あれって、メダロットかな？」

「泥で汚れ、あちこち苔やキノコが生えていますが、恐らく」

イッキたちの様子に気付き、アリカとプラスも半周地点まで行き、下を見下した。イッキはペンライトの光を当てた。酷い有様だが、間違いないメダロットだ。近寄らないと分からぬが、脚部の形からして飛行タイプと思われる。

「こんなところにポイするなんて！あんまりよー！」

アリカが怒り心頭のあまり吠えた。メダロットが捨てられることが今年が初めてではない。去年も、三体のメダロットが山に捨てられていた。大抵の場合、動けないようエネルギーを抜かれて捨てられるので、可哀想なことにメダロットたちは何もすることができるなくなる。

そして、今イッキたちが見ているメダロットのよつた末路を迎える。

「まだ、あいつ動けるかな？」

「イッキ、気持ちは分かるけど、それは止めといたほうがいいわ」

アリカはイッキが助けることに反対した。

「絶対とは言い切れない。けど、エネルギーを抜かれても微かに意識はあるらしいわ。それで、自分たちが捨てられたことも何となく分かるみたいよ。だから、仮に彼、彼女を助けたとしても、人を攻撃するかもしれないって」

メダロットの頭脳であるメダルは謎が多い。機械のボディが無ければ動けないはずなのに、メダロットはその状態でも思考による生体活動を続けられることが最近、判明した。イッキとアリカも週間メダロットの視聴者なので、そのことはよく知つていてるつもりだ。

イッキはアリカの言つことを理解していた。ただ、あの朽ち果てた存在を一度見た以上、手を差し伸べずにはいられなかつた。

「危険かもしれない。…それでも、頼むよアリカ。今回だけ！今回だけは、見逃してくれないか？」

「見逃すって…。助けたあと、あんたあの子をどうするつもり？まさか、里親でも募集するの？」

イッキはしばし考えたのち、おもむろに顔を上げた。

「僕が…引き取るよ」

「でも、あんたのお父さんは許しても、お母さんは厳しいから駄目なんじや」

「何日かかっても説得してみせるよ」

イッキは真っ直ぐにアリカを見据えた。いつものイッキらしからぬ真剣な眼差しに、アリカはながば自嘲気味に首を振つた。

「しゃあない。協力してあげる。もしかしたら、幽霊騒動の犠牲者の線もありうるし」

「ありがとう、アリカ」

そうと決まつたら、次にどう救出するかだつた。取つ掛りは多いが、所々ぬかるんでいるので安全ではない。

「アリカ殿、イッキ。その役目、私とプラスに任せてくれないか？」

仮に全員で降りていふといふを見られたら、あらぬ疑いをかけられるかもしれん」

今すぐ来ないだろ？が、他の観光客が訪れない保障はない。ロクショウの言つとおり、全員で降りるところを直撃されたら、言い訳に時間がかかる。というわけで、ロクシショウとブラスの一体であるメダロットを引っ張り上げることにした。

「ねえ、皆さん。あの櫟くぬぎに絡みつく蔓は使えるかもしれないわ」

ブラスの見る方角には太めの櫟があり、ちょうどイッキの小指ぐらいの太さの蔓が絡まっていた。ロクシショウは櫟を傷付けぬよう、チャンバラソードで慎重に蔓を切り落とした。ロクシショウは肩に蔓を巻いて、まるで軽業師のとき軽快な動きで急峻を下り、あのメダロットの体に蔓を巻き付けた。イッキ、アリカ、ブラスが例のメダロットを引き上げ、ロクシショウが朽ちた体を後ろから押し上げて、樹などにぶつからぬよう補正した。

「皆、ありがとう」

イッキは心を込めて礼を述べた。

イッキ、アリカは生えた植物を手で払いのけ、池で濡らしたタオルでメダロットの体を拭いた。大体検討は付いていたが、そのメダロットは間違いなくトンボ型メダロットのドラゴンビートルだった。ドラゴンビートルは重力系攻撃のメダロット。重力攻撃を得意分野とするメダルは「クマ」だから、普通に考えたらクマメダルが装着されているかもしれない。

イッキは背部の歪な形になつたメダル装着部のハッチを開き、メダルが装着されているか確認した。想像どおり、クマメダルが装着されていた。しかも、メダルは一段階進化していた。

イッキたちは下山した。途中、他の人や管理事務所のおじさんなどがめられたら、調子に乗つてはしゃいでいたら、樹などに体を打ち付けて機能停止したと誤魔化した。

5・おどり山探索記（打ち捨てられた者）（後書き）

ティンペットとメダル入手方法に、入手メダルが原作と異なります。次回から、ゲーム本編でも活躍するあの一人と一機が初登場します。また、スカートめぐり事件は何らかの形で挿入したいと考えています。

イッキたちが下山してから一時間経ったあの「」。

管理人の男性が山の様子を見に行こうとしたら、女の子が助けを求めて事務所に駆け寄つてくる。

「君、どうしたのかね！？」君？

管理人は少女に声をかけた。少女は涙ぐんで管理人の傍まで寄り、いじらしげに顔を上げた。管理人の男性は目を見張つた。ピンクの洋服シャツを着た少女は一言で表せば、美しい。程よく丸みを帯びた顔立ちに、ふんわりと柔らかいオレンジがかつたツインテールの金髪、少女漫画のように澄んで潤んだエメラルド色の瞳。そして、全身から漂う優げな雰囲気が、管理人に少女を守つてあげなければという気持ちを湧き起こさせた。管理人はガラス細工でも持つような手付きで、少女の肩に優しく手をかけた。

「もう大丈夫。ここは安全だ」

「本当ですか？」

両手を握り締め、ゆっくりと潤んだ瞳で見上げる動作がまた可愛らしい。

「ああ、おじさんは嘘をつかない。ところで、君の名前は？そして、一体何があつて助けを叫んだのかい？」

「…ナースちゃんが…。ナースちゃんが…連れ去られちゃつたんです」

「ナースちゃん？」

管理人がオウム返しに聞くと、少女はメダロットですと答えた。

「君はそのとき、謎の声とか変な物を目撃したかい？」

「いえ、変な物は見当たりませんでしたが、変な声なら…。少し、落ち着きを取り戻しましたから、詳しくお話ができます」

「そうか。では一旦、中で座つて落ち着いてからにしよう」

管理人は事務所の中に少女を招き、椅子を差し出した。事務所内

は小型の液晶テレビや小型冷蔵庫、他、里山のパンフレットに本など幾つか細々とした物が置かれていた。

「さ、あまり綺麗なところではないが。ひとまず、座りなさい」

「ありがとうございます」

少女は丁寧に謝辞を述べて着席した。その座る動作からして、管理人に少女が深窓生まれの者と悟らせた。

少女は順を追つて、自己紹介とここに駆け付けた経緯を話した。

「私の性は純米、名はカリンと申します。御神籠町のお隣のメダロポリスに暮らしています。ここにきたのは、以前から一人で山に登るというはどんなものか知りたくて、この近隣のおぢる山に来ました。山の中腹地點近くまで下山したとき、がさごそと、茂みから物音が聞こえました。ナースちゃんが茂みの裏に様子を見に行くとナースちゃんが悲鳴を上げたんです！ 私、急いでナースちゃんの身を確認しようとしたら、突然、この世の物とは思えない声で『……』と言わされました。でも、ナースちゃんは私の友達です。私は勇気を出して茂みの裏を覗くと、そこにはナースちゃんの姿がありませんでした。そしたら、今度は同じ声で不気味な笑い声がしたものです。……私……」

カリンという少女はまた涙ぐんだ。管理人はせかさず、少女が自ら話を再開するのを待つた。少女は震える手でハンカチで涙を拭うと、小さく咳払いした。

「……ほん。すみません。……私、怖くてナースちゃんを置いて逃げてしまつたのです……」

カリン少女はそこで言葉を切つた。色々と詳しく聞きたいが、一つ言えることは、幽霊騒動における新たな被害者が出了た。

今日もまた、イッキ、アリカ、ロクショウ、プラスの四人はおど

る山に向かった。拾つたメダロットは昨日、帰りにメダロット研究所に立ち寄り、事情を話すと、メダロット博士はあのメダロットの修復を快諾してくれた。

「ティンペットまで傷ついておるの? わしも忙しいからな……。そんな不安そうな顔するな。今日の夜にはひやんと終わらせておくから、日を改めて迎えにきなさい」

明日か。今になつてイッキは少々不安になつた。両親の前に、あのメダロットが僕を受け入れてくれるかどうかが問題だ。だが、引き下がる気はない。こうなつた以上、何としても彼、彼女を迎えるたい。ただの偽善かもしれないけど……。

「イッキ、どうして落ち込んでいるの?」

アリカが心配そうに僕の顔を覗いていた。自分でも気付かなかいうちに、顔を下に向けていたようだ。

「何でもないよ」

「あのメダロットのことじょう」

イッキは思わず背筋を伸ばした。それを見て、アリカはやつぱりと言つた。

「今更、悩んだところでしようがないでしょ。あんた一人で説得が無理なら、私も拾うのを協力したちやつたし。いざというときは、それなりに手伝つてあげる」

アリカのこないう積極的な面はときとして疎ましくも思うが、こういつときには頼り甲斐がある。ただ、今回のこととは自分が撒いた火種。イッキは出来る限りアリカの手を借りないよう心がけた。

四人はおどろ山まで来て、いざ入山しようとしたら、管理事務所のおじさんに止められた。

「駄目駄目。せめて、大人の人も連れてきなさい」

「昨日までは入つて良かつたのに、どうして…?」

アリカがおじさんに聞いた。

「いやな。実は昨日、小学生ぐらいの女の子が被害に遭つたんだ。昼間から幽霊なんて出やしないだろ? が、安全の為、ゴールデンウ

イークいっぽいまでは高校生以下は保護者同伴じゃなきゃ入れないことになった。というわけで、今度から保護者と一緒に来てくれ」イッキはアリカが噛み付くと思ったが、意外にもアリカは大人しく引き下がった。おじさん一安心していたが、イッキは絶対にアリカはこの程度のことじゃ諦めないことが分かつていて。イッキはアリカに連れていかれるまま、おどる山周囲を歩いた。アリカが足を止めた。入山口から一キロ離れたところ、見回りの人もいなくて、辺りに人家もなく人気が無い。フェンスはよく見かける緑色のもので、上に沢山の棘が付いた鉄条網も巻かれていない。イッキはアリカにおずおずと尋ねた。

「アリカ、まさかだけど、ここから入山する気？」

アリカは満面の笑みで答えた。

「ええ、そうよ」

「アリカちゃん、それはしていけないことじゃ…」

プラスはアリカを止めようとしたが、アリカはもうプラスの言葉にすら耳を傾けなかつた。

「ジャーナリストたる者、この程度のことで根を上げてちややつてられないわ。仮に見つかっても、まだ子供だから、小一時間お説教されるだけで済むわ」

「…僕は根を上げてほしい…」

「イッキとロクショウは来なくていいわ。これは、私一人の問題だから」

アリカはそう言って、フェンスを越えた。

「しようがないわね」

プラスはまるでわがままな妹に手を焼くお姉さんのようだ。プラスも遅れてアリカの後を追つた。

「どうする、イッキ？アリカとプラスの一人を追うのか？」

「…うん、行こうと思う。アリカには昨日の恩があるし、それにプラスだけだと、幽霊たちに襲われたとき対処できそうにないし」

イッキとロクショウも、仕方なしにフェンスを越えての入山をし

た。しばらく山を登ると、何とスクリューズと出くわした。スクリューズの三人は血相をえていた。スクリューズが口を開く前に、アリカがいち早く喋つた。

「ちょっと！ あんたたちが何で山にいるわけ！」

「それはあたいらの台詞だよ」

キクヒメはポケットから櫛を出して乱れた髪を整えた。スクリューズとそのメダロットの様子はおかしかつた。イワノイ、カガミヤマは自身の愛機のブルースドッグと鋼太夫を背に抱き、キクヒメの愛機、セリーニヤはぼろぼろだった。

「一体何があったの。 ていうか、あんたら何の目的があつてここにきたの？」

「だから、それはあたいらの台詞だつて言つてるでしょ」

イワノイが口を挟んだ。

「姉御、無駄話している暇ありやせんぜ。 あいつが来るかもしれません」

「あいつ？」

「お前らー！」

そのあいつが高らかに叫んでスクリューズを追いかけてきた。キリリとしたきつくなめられた意志の強そうな二重の瞳と、端正な顔立ちにヒカルとよく似た髪型をしたイッキたちと同い年ぐらいの少年は、怒りも露わにスクリューズを睨んだ。少年の後ろには、メダロットが控えていた。

「あれは……！」

イッキ、アリカは目を奪られた。名も知らぬ少年のメダロットは、ライオン型メダロットのウォーバニットだつた。昨年、改良型ヘッドラシザースと同時期に発売された射撃タイプのメダロット。装甲、戦闘能力のバランスが取れており、パークー式だけでも現在の最低市場価格で十三万円もする。セレブご用達と言つても過言ではない超高级品。その分、扱いが難しく、玄人向けのメダロットである。イッキは思い切つて少年に聞いてみた。

「その、まさか。それ一体だけでこの二人を…？」

「何でお前は」

高飛車な物言いにむかつときたが、イッキは名乗り上げた。

「僕、天領イッキ。ギンジヨウ小学校の三年生。で、隣にいるのはヘッドシザースのロクショウ。…えっと、それで君…は、こいつらに何をされて怒ったの？」

「イッキといったな。ひょっとして、こいつらの関係者が親玉か？」「僕がこいつらの親玉？」

「お前ら…さつきから、俺らのことをこいつら、こいつら呼ばわりしゃがつて！俺ら、泣く子も黙るスクリューズつていうんだぞ」イワノイが呼び捨てに耐えられず、横槍を入れた。一人とも、イワノイは無視して話を進めた。

「で、君はスクリューズに何かされたの？」

謎の少年は、じつとスクリューズとイッキたちの様子を見た。そして、少なくともイッキたちとスクリューズとやらは、そこまでの仲ではないことだけは理解した。

「コウジさん！」

また、誰かがこちらに来た。

「またくるの？」

アリカはいい加減にしろという感じで言った。イッキもまたかと思つたが、その誰かが視界に入った途端、その思考は彼方へと消えた。ピンク色のシルクの洋シャツを着た、オレンジがかつた金髪ツインテールの美少女が、謎の少年のものと思わしき名を呼びながら、一触即発のこの場にきた。

「カリン！しまった。頭に熱が上って、君を置いて行つてしまふなんて…何たる失態！」

「コウジという少年は自分の失敗を悔やむように拳を握った。少年の後ろに控えるメダロットが、初めて口を開いた。

「コウジ、俺もカリンのことをつかり忘れてたから、お互い様だ。次からは、互いに注意しよう」

「…アーチュ…」

若干、わざとらしさを感じると展開と会話のおかげで、四人は少年がコウジという名前、彼の愛機の名がアーチュ、そして、カリンとこう美少女がコウジという少年の関係者だということを知った。アリカは問い合わせるようにキクヒメに視線を据えた。

「キクヒメ。ひょっとして、あんたたちあの女の子にまた卑怯な勝負を挑んで、彼を怒らせたんでしょう」

「やっぱりそうなのか！」

荒ぶるコウジ少年。コウジ少年に同調するように、アーチュというウォーバニットも一つの長い銃口が付いた右腕をスクリューズに向けた。キクヒメは観念して、両手を上げてぶらぶらと動かし、降参の意を示した。

「わーった、わーった。こっちの負け。理由も話すから、それで勘弁」

「コウジは荒ぶる気持ちを抑え、ウォーバニットも銃口を下げた。だが、姿勢はいつでも発射しやすいよう崩さなかつた。

スクリューズの話を搔い摘むと、三人は幽霊騒動におけるパーティの隠し場所を探しにきた。正義のためとかではなく、あくまで自分たちの物にするためである。そしたら、コウジとカリンの二人に出会った。互いに何があつてここに来たか聞きあい、だんまりを決めて行こうとしたら、コウジが聞こえよがしに下らないと言つたのが癪に障り、勝負を挑んだら返り討ちに遭つた。

イッキもそうだが、アリカにコウジも心底呆れかえっていた。

「挑まれた勝負は受けて立つ！それ以上に、俺はそいつらの火事場泥棒のような行為が許せねえ」

「そんなに叫ばないでよ。もう懲りたから、これで勘弁」

「待て。そのリーダー機のペッパー・キャットはまだ機能停止してないぞ」

キクヒメは困ったように頬を搔いた。そして、イッキを見て怪しげにほくそ笑み、イワノイ、カガミヤマに視線を送り、二人は無言

で了解した。

「あーっ！！！後ろー！！！」

三人は同時に叫び、コウジとカリンの後ろを指した。思わず、スクリューズ以外の者は振り返つてしまつた。気付いたときには遅し、スクリューズの三人はメダロットのパートを自宅へメダロッチに収納にし、とんずらをこいていた。

「じゃ、後は任せたぜいイッキ」

キクヒメの捨て台詞が虚空に響く。イッキ、アリカ、プラスは肩を落としたが、コウジとアーチェはその気のようだ。二人はイッキとロクショウにじり寄る。

「俺はどっちでも構わない。イッキといつたな。お前がやる気なら、俺は受けて立つぜ。安心しろ。さっきの奴らには援護役としてもう一機も戦わせたが、お前との戦いでは、このアーチェ一体だけだ」「君がその気なら、私もその気になろう

イッキが断るうとしたら、今度はロクショウが自ら戦いを申し出た。前にも述べたが、常日頃は冷静なロクショウも戦いとなると人が変わる。それも、援護役を受けたとはい、スクリューズ三人三機を一機で追い返したほどの相手だ。やる気を見せるロクショウに對し、アーチェはどこか涼しげな感じだ。

今日は何となく嫌な予感がしていたが、その予感は当たつていた。しううがない。一度乗りかかった船だ。やるだけやつてみるか…。

「コウジさん」

展開についていけないカリン少女はコウジを止めようとしたが、コウジは「カリン、大丈夫。俺は負ける気はないから」とカリンの制止を先に止めた。

「はいはい！私、審判やる」

審判役を買つて出たアリカは、いきなりロボトルファイトと言つた。イッキは吹つ切れた。

ええい、ままよーもう、やけくそだあ！矢でも幽靈でもなんでもこい！

ばばあん！ばばあん！

ウォーバーニットの右腕から、高出力の弾丸が一発発射される。ロクショウは避けるのに必死だ。三対一とはいえ、あのスクリューズを相手に優勢に立ち回っていたのだ。手強い。連續した鋭利なライフル攻撃に、あのロクショウが反撃に転じられないでいる。

コウジが指示を出し、ウォーバーニットのアーチェは左腕のマシンガンも撃ち始めた。一発、右足首と右腕上腕部に食らったしまった。威力の低いマシンガンだったので、幸い、腕と脚はまだ壊れていな。右腕のライフルなら、一発でおじやんになっていた。やはり、コウジはただの物頼りではない。扱いが難しいウォーバーニットのパスを使いこなさせているのだから、腕前は本物だ。

「アーチェ！ チャージ準備」

アーチェの動きが止まり、ロクショウが攻撃に出る。

「一、二。『オー！』

ロクショウのソードがアーチェを襲う。しかし、アーチェは常識では考えられないほどのスピードで、ロクショウの一刀を避けた。いや、ウォーバーニットの雄ライオンの^{たてがみ}鬚を模した部分が一箇所、枯葉に落ちた。

「コウジが感心そうに呟く。

「へえ。一秒の隙があつたとはいえ、よく当たられたな。だが、次はそうはいかんぞ」

ウォーバーニットの頭部の能力は自身のスピードを急上昇させる。その分、エネルギー充填にタイムロスがあり、その隙に決定打を浴びせられなかつたのが惜しい。

ウォーバーニットの掃射は益々激しさを増し、ロクショウは確実に弾が当たっていた。スピードか。でも、そこに隙ができるといいんだけどな。イッキはロクショウに逃げの一手を選ぶよう、命令した。

ロクショウはとにかく逃げ回ったが、スピードアップしたアーチェからは逃げられない。ロクショウが迫るアーチェに小石を投げた。

ウォーバーナットは小石を撃つた。小石は大破した。もう、駄目だ。そのとき、奇跡が起きた。何と、小枝がウォーバーナットのカメラアイにぶち当たった。右腕ライフルの弾丸は小石を大破し、樹の小枝を折った。その衝撃で、小枝はアーチェのほうに飛んできたのだ。アーチェの動きが止まる。今しかない！

イッキの号令と、ロクショウの動きはほぼ同時だった。ロクショウのハンマーがアーチェの右側頭部を襲う。アーチェは横ざまに倒れ、背中からメダルが飛んだ。

「そんな馬鹿な！」

コウジよりも、そう叫びたいのはイッキだつた。実力的には、自分たちより上のはずのコウジとアーチェに運で勝つてしまったのだから。イッキはどう感情を表現すれば分からなくなつた。

口を開け放しの一人にお構いなく、アリカはイッキとロクショウの勝利を告げる。

「イッキ、ロクショウおめでとう！勝負は時の運といつし。運も実力の一つと考えれば、あなたたちのほうが強かつたといつことよ」「ふつ……。そのとおりだな」

アリカの言動に納得したように、コウジは冷静さを取り戻した。「例え小さくとも、あのスピードで対象物に当たるのはまずい。だから、石や枝を投げつけてきたら、すぐに撃ち落とすよう指示を出しておいた。だが、それによって後方の物まで飛んでくる計算をしていなかつたのは、僕のミスだ。……というわけでだ、俺の負けだイッキ……だけ？君にアーチェの右腕を進呈しよう」

「えつ？いいの？今の別に真剣口ボトルしたと決めたわけでもないし」

「いいんだ。この分だと、君らはあの三人と無関係のようだし。迷惑も兼ねてだ。まあ、受け取ってくれたまえ」

直接戦つたのはロクショウのほうだし、やると言い出したのも口

クショウ。つまり、ロクショウの取り分である物を自分が断るのは、コウジにもロクショウに対しても失礼だと思い、イッキはパートを受け取ることにした。

アリカがコウジ、カリンに聞こえるよう耳打ちする。

「熱い友情の中悪いけど。人がきそうよ」

全員、耳をそばだてた。

「ここいらだな？銃の音とかが聞こえた場所は」

「ああ。多分、どつかの馬鹿がロボトルでもしているのかもしれん」四人は顔を見合わせて、イッキとアリカはロクショウを。コウジとカリンはアーチェを抱え、二手に別れた。

「コウジ君と言ったわね。機会があれば、合流しましょ。私、修復系パートを一つ持つていてるから」

「何故？」

「あなたたちの目的も幽霊でしょ。だから、情報交換も兼ねて、ね」コウジとカリンはその場から去った。何も言わなかつたが、アリカは親指と人差し指で丸を作り、「片目瞑つてオーケーって返事した。おきざなこと」と言つた。そういえば、慌てていたので、まだウォーバーナイトのパートを貰つていなかつたな。

6・おじり山探険記I（少年と少女）（後書き）

よつやく、カリンとロウジの一組登場。バージョンが違うので、スミロードナッシュの出番はなし。話の都合上、カリンの愛機であるセントナースの出番も無しです。

次回でおどり山回の決着をつけるよつ頑張ります。

7・おひり山探索記III（謎の集団）（前書き）

一話でまとめるため、とんでもない文字数になつてしましました。
先にカブトバージョンを完成させたので推敲作業がはかどり、カブトバージョンの誤字脱字の訂正にも役立てた。

イッキたちはじつにか山頂まで着いた。おどろ山は緩やかな傾斜だから、子供の足でも普通に登る分にはあまりきつくない。だが、見つかると面倒なので、急ぎ足で登ったイッキたちは汗だくで肩で息をしていた。少し遅れて、コウジ、カリンも到着した。

全員、人に見えず、尚且つシートが無くても座れる木陰がある場所を選んだ。コウジが腰のベルトに付けたストラップ型の水筒に入れ入れたペットボトルを取り出し、一口飲んでから、用件を切り出した。

「アリカと言つたな。さつきの約束どおり、情報交換だ。あと、イッキ

「うん？」

見ると、コウジがアーチェの右腕を差し出した。

「さつき渡せなかつたから、今この場で受け取つてくれ」

イッキはこくりと頷き、ありがたがくアーチェの右腕を戴いた。陽光の下で座禅するククショウが微かに

反応した。喜びをかみしめているのかもしれない。

「ねえ、コウジくんと言つたわね？ 修復はしなくていいの？」

アリカがさつきの約束の件を聞くと、コウジはウォーバーナットのアーチェを転送した。アーチェは、ほぼ無傷な形でそこに立つていた。

「回復パーク……じゃなくて、予備のパークも持つていいとか？」

「ああ、そのとおりだ。一セット予備がある」

「じゃ、計三セット！」

イッキとアリカはすつこけそつになつた。超高価なウォーバーナットのパークを持っている時点でコウジが金持ちだということは分かつたが、予備の一式が一セットもあるとはかなりのぼんぼんと考えられる。

カリンは以前から一人で野山に出かけてみたかった。愛機の看護婦型メダロットのセントナースをお供に近郊のおどろ山に向かい、例の幽霊と思しき者にナースが連れ去られた。コウジは連れ去られたナースの心配もしたが、それ以上にカリンを怖がらせた者に怒り、カリンもナースを連れ戻したい一心で山に向かつた。しかし、子供だけの入山は事務所のおじさんに止められてしまい、仕方なく裏側のフェンスを越えて入山した。そして、ことは前回起きた顛末にまで繋がる。

一方、イッキとアリカから話せることは特になく。ニュースなどで既に語られているようなものばかりで、コウジはやや不満気だった。

「お前たちの情報はそれだけか。それなら、昨日、ネットで調べた情報とあんまり変わらないな」

「ごめんね。一方的に話させちゃつただけみたいね」

アリカが珍しく詫びた。

探索は振り出しに戻り、一同、落胆したとき。機械じみた声が聞こえた。

「ヤナギー！ヤナギー！ドコにイルのー？」るなら、カンちゃんもイルからお返事してちょーだい！」

四人と三機は隠れて様子を窺つた。色んなバーツを付け合せた飛行メダロットが、「ヤナギ」という人物へ懸命に呼びかけていた。そのメダロットの近くには、「カンちゃん」と思しき腰の曲がった老婆がいた。

四人と一機は小声で会話をした。

「お子様でしようか？お孫様でしようか？」とカリン。

「男にも聞こえるけど、女に聞こえないこともない」とイッキ。

「試しに聞いてみる？」とアリカ。

「子供だけで来ている」と突つ込まれるかも知れないから、もう少し様子を見てからのはづがいい」と口ウジ。

「誰かしらねえ?」

プラスにいきなり話を振られて、アーチュは首を捻るしかなかつた。

「私が行ひ」

ロクショウが白いあの一組に話しかけた。

「失礼。やちらの」老体と、やこの空を飛んでいる方。誰をお探しかな?」

「君は誰?」空を飛ぶメダロットが尋ねる。

「ロクショウと申す」

「ロクショウ。中々カツコイイ名前だね。僕、タロウ。カンちゃんと一緒にヤナギを捜しにきたんだ」

今がその機会と、イッキたちは白田の下に身をさらした。

おばあさんとタロウと飛乗るメダロットは驚いた。

「あれまあーお前たち、今は子供だけで山に入っちゃあかんぞ」

「口ウジの言つたとおり、おばあさんそのことを指摘した。

「おばあさん。私、友達を連れ戻しにきたんです」

「何ー?どうじつ?」とぞな

イッキ、アリカが心の言に訳しようか思考していたら、カリンが正直に事を話した。

「ふむふむ。なるほど、なるほど。お友達のメダロットを助けるために來たと、な」

「一つ聞いてもよひしこどしゅつか?おばあさん」

「娘さんや。私を呼ぶときは、できればカンちゃんと呼んでおくれ」

「分かりました。では、カンちゃんさん。先ほど、やちらのタロウさんがヤナギとこつ方を捜しておられましたが、ヤナギとはどなたですか?」

カリンの質問に、カンちゃんとこつおばあさんとタロウも押し黙つた。

「すみません…。聞き入ったことをお尋ねしまつて」

「…いや…いいんだ。どうやら、娘さんとそのお友達がここに来た動機と私の動機は同じようだし。役に立つどうか分からんが、お前さんたち、一つこの老婆の話を聞いてくれないかい?」

カリン以外の者は顔を見合させて同意し、このカンちゃんという人の話を聞くことにした。カンちゃんはビニール製のシートを敷き、座るよう促した。

「あ、どうも」と、人もメダロットも一礼を述べてからシートに座つた。正座をすると、カンちゃんは「あー、かめへん、かめへん。足伸ばすなり、股広げるなりかまへん」と、自ら正座を崩した。それに倣つてカリン以外の者は皆、楽な姿勢を取つた。

「ほれ、飲みんさい」

カンちゃんは全員に冷たい麦茶を配つた。冷たい麦茶は不安と一緒に喉の奥まで流れ込んだ。子供たちの気持ちが落ち着いた頃を見計らい、カンちゃんは語り出した。

ここでは、カンちゃんの語りを要約する。カンちゃんはメダロットたちと一緒に暮らしているが、どこかで孤独を感じている。だから、偶然とはいえ久しぶりにじつくりと人と話せることが嬉しくて、本題とは無関係なことまで話してしまう。正直で純なカリンは喜んで耳を傾けたが、それ以外の者は、ためらいがちに語りを本題へ戻すように言つた。

カンちゃんにはナツコという孫娘がいる。ナツコは高校生のときに両親が他界し、祖母であるカンちゃんが引き取つた。

多感な時期に両親を亡くし、ナツコは度々苛立ちを周囲にぶつけ、よくトラブルを起こした。そんなナツコを支えたのがカンちゃん以外にもう一人いた。それが、機体名称がミスティゴーストという幽霊型メダロットのヤナギ。カンちゃんとヤナギの支えもあり、ナツコは頑張つて大学に進学し、一流のキャリアウーマンとして成長した。

そのナツコが長期海外転勤して一日経つた日のこと。ヤナギが忽

然と姿を消した。それから程なくして、巷で話題の幽霊騒動を耳にした。カンちゃんは悪い予感がして、毎日拾つた野良メダロットたちに搜索させて、自身も週に二三回、おどろくと足を運んだ。

「ヤナギは間違つてもこんなことをする子じゃないよ。ヤナギもきっと、どつかの幽霊だかを使つた奴らに去らわれたに違いない」

カンちゃんはヤナギも被害に遭つたに違いないと言つていたが、反面、ヤナギが一枚絡んでいるのではないかという不安も読み取れた。

イッキたちは小半時ほど雑談したのち、カンちゃんたちと別れた。意外なところで有力な情報を得た。最初の被害者、あるいは、ヤナギというメダロットが加害者の可能性がある。

おばあさんが警察に連絡しないのは、どちらか判別しかねているからだろ?」

「あれほどいの」「高齢だと、山に登るだけでも一苦労だらうし、心労も大きいだらうな」

ロクショウが今日初めて会つたばかりのカンちゃんを心配してい るようだ。

「はい、注目!」

アリカが先頭に躍り出た。

「何だよ、アリカ?」

イッキがアリカの意図を聞いた。

「あのさあ、私の推測を聞いてほしいんだけど」

「時間の無駄にならないか」

情報交換の件を気にしているのか。コウジの腕を組んだ態度から、アリカの推測を拒んでいることが知れた。

「そう言わいでコウジくん。拝聴の価値はあると思うわ」

イッキやコウジに有無を言わさず、アリカはまくしたてるよう

推測を並べた。

「いい、第一の犯行から昨日の犯行まで、全ておどろ池とそこに通じる道でおきたわ」

「だから、そこに行こうと……」

「イッキは黙つて。あと、コウジくんも。そこで、私思つたんだけど、もうおどろ池とその周辺では幽霊は出ないと思つの」

「何故ですか？」

カリンの質問に、アリカはグッドタイミングな突つ込みと言わんばかりににやついた。

「単純なこと。犯行現場として、おどろ池は目立ち過ぎるからよ。本当の幽霊ならどうしようもないけど、人が関わっていたとしたら、話は別。私が犯人なら、昨日のカリンちゃんを中途に移動するわ」

「じゃあ、ナースちゃんは……もつ……」

「気を落とさないで。おどろ池周辺での犯行はカリンちゃんが最後であつて、おどろ山での犯行は後一回か二回ぐらいする可能性がある。考えられる場所はおどろ沼よ。山頂もありうるけど、あそごだとあまりにも人の出入りが多い上に、見晴らしもいいから実行するにはリスクが大きい場所。でも、湿地帯であまり人が寄り付かないおどろ沼は別。あの周辺で犯行はまだ起きていないし、それに、来るとしたら物好きな子供や昆虫採集とかを目的にした人だけだと思う。あくまで推論だけど、犯人は後一回か二回、おどろ沼の周辺で犯行に及ぶかもしれない。あと、市場で強奪されたメダロットが出て回つていないとこを見ると、犯人はある程度まとまってからどこかに売りさばくつもりかも」

名探偵気取りのジャーナリストアリカの推論に、イッキ、コウジ、カリンは納得した。

「あくまで推測の域を出でていなが、理に適つてゐるな。それにしても、よくそこまで考えられるもんだ」

「そりやー、こう見えてもジャーナリストの端くれよ。良い記事を書くには、一定の想像力も必要よ」

「ウジの言葉にアリカはちょっと得意氣だ。

「では、これからどうするのですか？」

「ええと、まずはおどろ池に行って軽く証拠探し。そのあと、夕方までおどろ沼に張り込みましょう」

「その流れだと、我々が囮になるということか。当然といえば当然だが……」

「口クシヨウは躊躇つていいようだ。それもそうだ。囮になれと言

われて、喜んではいそうですかと言う者などいやしない。それでも、

口クシヨウ、プラス、アーチェは渋々同意した。

「まあまあ、危険な目に遭うのは私たちも同じなんだし」

「ウジも不安を隠せない。

「これで奪われたりでもしたら、ご近所どころか末代までの恥だな」イッキも同じことを言いたかった。子供だけで上手くいくどうか丸つきり自信が無いし、仮にパー・ツとティインペットを奪われて、しかも子供禁制のときに勝手に入山したことがばれたら、どんな大玉を食らつか予想できない。

人目を避けておどろ池へ行き、その後、おどろ沼へと向かった。おどろ池は山の中腹地点の右のほう。おどろ沼は、中腹地点より百メートル登り、左に曲がって少し登り、まっすぐにきつめの傾斜を降りたところにおどろ沼がある。おどろ沼へ向かおうとした途中、「山伏」一行のメダロットにあやつり姿を見られそうになつたときは、生きた心地がしなかつた。

おどろ池と違い、おどろ沼は整備が行き届いていない。あつちこつちに草が生えて、手付かずな自然の状態。そのおかげで、おどろ沼と周辺の湿地帯にはトンボにカエル、ゲンゴロウ、タガメなど、数を減らした水生生物が生息しているから、たまに訪れる人がいる。アリカの推測を頼りにここで張つたが、夕方の五時以降になつて

も現れない。皆、早く出ないかと待ちくたびれていた。

これなら、家でのんびりゲームでもしていたほうが良かったかな。イッキは陽が沈む西の方角を見た。見たところで何も起きないが、他にやることがないから見た。うん、今日も夕陽は綺麗だな。そう思つて夕陽を眺めていたら、黒い一点が夕陽に浮かんだ。鳥か目の錯覚かなと思つたが、黒い点は明らかにこちらのほうへとやってくる。

だんだんと距離が縮まり、黒い物体の正体が判明した。

メダロットだった。イッキはそれに見覚えがあるような気がした。イッキの異変に気付き、近くのロクショウ、アリカも西の方角を見上げた。

「あれは、昼間会ったご老体のメダロットではないか！」

そうだった。樹上の枝葉が邪魔をして見えにくいが、あのメダロットは昼間会ったカンちゃんというおばあさんのメダロット、タロウだ。ヤナギというメダロットを捜しにきたのかな？ その割りには、様子がおかしいようにも思える。

「人のこと言えないけど、何でこんな時間帯に飛んでいるのかな？ ちょっと、一声かけてみようか」

イッキ、アリカ、ロクショウは、あらん限りの大声で叫んだ。声はタロウの耳に届き、彼はすーっと、沼の近くまで降りてきた。

「何でこんなところまで飛んできたの！？ ヤナギとかいうメダロット捜しにきたの？」

イッキがタロウに尋ねると、タロウは首を振り、子供のような涙声で危機を伝えた。

「うう…あのね…幽霊が…幽霊がね…僕ら…僕らひとつのは、僕と同じカンちゃんに拾われた仲間のこと…」

「それで、君の仲間がどうしたの！？」

イッキは先を話すよう促した。

「…うん。それでね…幽霊たちがね、僕らとカンちゃんを襲つて、仲間を連れ去つちゃつたんだ…。僕は何とか助かって、急いで救け

を求めたんだけど。君たちに声をかけられて、方向を間違つたことに気が付いたんだ…」

「わーん!と、彼は堰を切つたように泣き出した。

「落ち着いて!君の来た方向は西だよね!じゃあ、ここを真つ直ぐ降りれば、カンちゃんの居るところに行けるの」

「ひつく、ひつく…うん、そうだよ…でも、酷い悪路だから人の足だと最低三十分もかかるし、僕一人じゃ、とてもじゃないけど君ら全員を運べないよ」

三十分。とてもじゃないが、間に合はない。かといって、このまま見捨てる事もできない。コウジ、カリン、プラス、ラムタムが彼らのここまで寄り、「コウジが良い提案があると言つた。

「イッキ、アリカ。飛行パーツは持つているか?」

アリカは女性型のが一つあると答え、イッキは無いと答えた。

「そうか。なら、イッキには俺の飛行パーツを貸してやる。そこで、タロウ。俺ぐらいの重さなら運べるか?」

タロウは「うん」と首肯した。

「よし、そうと決まりや善は急げ!まず、カリンはアーチェに乗る。そこで、アリカはプラスにイッキはロクショウに乗つて、俺はタロウに乗る。ちょうどメダロットが四体もいるわけだし、その四体で一人ずつ運べばすぐに着ける」

そうして、彼らは細かいことは一切言わず。すぐに準備を整えた。怖いと言つている暇はない、イッキは覚悟してロクショウの背に乗つた。

案内人として最初にコウジとタロウが飛び立ち、次にアリカとプラス、イッキとロクショウ、最後にカリンとアーチェが飛び立つた。カリンが最後なのは、スカートを履いているためだから。

三十分もかかるところを、五分程度で目的地に到着した。タロウがおどろ沼に来るまでの時間、会話と準備時間によるロスタイルムを差し引いても、十三分。犯人がいる場合、まだそんなに遠くには行つてないはず。

樹に囲まれた平らな土地に立つ一階建ての古風な民家に降り立ち、

四人と四体はカンちゃんの名を呼んだが、返事が無い。

「もしかしたら、連れ去られたメダロットたちを追いかけたのかも

！」

アリカはすぐにプラスの背に飛び乗った。

再び、彼らは上空を行く。

「カンちゃんの声が聞こえる！」

先頭を飛ぶタロウが下降した。森の中を、カンちゃんらしき人がさらわれたメダロットたちの名前を懸命に呼んでいた。四体は乗つた人間が枝で傷付かぬよう降り立ち、四人と四体はカンちゃんの後を追つた。

時を同じくして、イッキたちとはまた別に、連れ去られたメダロットの救出を試みる者がいた。その者は現在では使われなくなつた廃工場にメダロットが保管されていることを知つた。廃工場の中をこそそと怪しげな者たちが出入りし、メダロット運搬の準備を計つていた。

物陰から、謎の集団の動きを観察するその者のメダロットに文章が送信された。

K少年とその友達たちが、集団と交戦する可能性有。

その者は困つた。自分はこの持ち場を担当するだけで手一杯。しかし、監視役メダロット一体だけではどうにもならない。そこでその者は、ある人物に連絡した。

「ほい、もしもし。わしじや」

陽気なしげがれ声を聞くだけで、その者の緊張感がほぐれた。その者は手短に監視役メダロットの電文を伝えた。

「分かった。お前さんはそのまま任務にあたれ。わしは、彼が拾つたあやつを救援にあてる」

電話先の人物は極秘の特別回線を切り、早速、隣部屋にいるメダロットを訪ねた。

「『機嫌はいかがじや？』

「んー…。まつ、ぼちぼちなところですな。メダロット博士

彼はメダロット博士に会釈した。そのメダロットは昨日、イッキがおどろ池周辺で拾つたトンボ型メダロットのドラゴンビートルこと、光太郎。という光太郎名は、修復中に彼自らがその名を告げた。今は故人となつた前マスターから授けられた名前らしい。

彼は誰かに拾われることを望んだ。だが、こうして再び起動してみると、心は喜びよりも、喉に物が詰まつたような正体不明のえも言われぬものが覆つた。ほんま、また人間を拠り所にしてええんやろか。それよか、上手くやつていけるのやろか。

そんな彼の気持ちなどお構いなしに、メダロット博士は至急、光太郎に地図で示した地点へ行くよう指示した。光太郎は訳を尋ねたが、肝心のところははぐらかされてしまう。

「わしが何故知つているかよりも、君の新たな友達となる少年が窮地に陥るかもしれないのじや。君自身の整理がついてないときに悪いが、今は黙つて彼とその友達を救うほうが先決じや」

光太郎はいざというときには明白をつけられる性格だった。引っ掛かるところはあるが、光太郎は新たなマスターとなつうるイッキ少年を救いに行くと決めた。

飛び立つ直前、メダロット博士はある物を光太郎に渡した。

「こんな物を使って、お上が見逃してくれますか？」という光太郎の問いかに、メダロット博士は笑顔で返した。「大丈夫！しかるべきところには話を通しておる。きっと、これが役に立つはずじや。さあ、行つてきたまえ！」

ええい、ままよ！

首にある物を巻くと、光太郎は迷い振り切るように夕暮れへと向かつてひとつ飛びした。

イッキたちはすぐにカンちゃんに追いつき、タロウにカンちゃんを任せて、イッキたちは前を行く者たちを追いかけた。

「あれって、どうみても幽霊じゃないじゃん！」

前を行くのは、白い金魚鉢のような形をしたヘルメットを被り、同色のスーツを着込む四人組と、黒いゴムスーツを着た一本の黄色い角を生やした大柄な者が、メダロットたちと一緒にカンちゃんのメダロットを抱えて走っていた。

「こらー！あんらた待ちなさい！」

アリカの叫びに謎の集団は振り返り、金魚鉢頭の一人が声を出した。

「口ボ！？ババアが若返った口ボ！？」

「くおらあ！誰がババアよ！？」

「ひえつ！おつかない口ボよ」

「ていうか、お前ら何者なんだ！？」

「ウジの指摘に、一本の角を生やした黒いゴムスーツを着た大柄な者が立ち止った。

「全く…何故にわしの嫌いな子供がこんなにあるのだ」

金魚鉢四人も立ち止り、イッキたちと対峙した。大柄な男が口を開いた。

「ふん、どうせ今日でこんな寂れた場所とおさらばするし。最後の手土産にガキ共のメダロットを奪うのもよからう」

アリカは集団のリーダーらしき男に食つてかかった。

「あんたらが幽霊騒動の犯人なの！」

「ふおふお。威勢のいい小娘じや。そのとおりといえどそのとおりであるが、実行犯はほれ、こいつじや」

大柄な男は肩に抱えたボロボロのメダロットを指した。そのメダ

ロットはミスティゴーストだった。ミスティゴースト…？まさか！

「ヤナギー君はひょつとして、ヤナギなのかい！」

イツキは男に抱えられたメダロットに呼びかけた。ミスティゴーストは酷い損傷をしており、機能停止しているかもしない。だが、ミスティゴーストはゆっくりと反応した。

「誰…？僕の名前を呼ぶのは…？カンちゃん？」

やはり、このミスティゴーストは例の「ヤナギ」であつた。アーチェが大柄の男の足元を撃ち、ロクショウがヤナギをキャッチした。ヤナギは体を震わせながら、独り言のように謝罪した。

「皆…カンちゃん…ごめんね。…ごめんね。皆とカンちゃんを酷い目に遭わせて…ごめんね」

「ヤナギといつたな。一体何があつた？」

そつとヤナギを地面に置き、ロクショウがヤナギに聞くと、邪魔するかのように大柄の男が叫ぶ。

「こりー！そいつを放さんか！そいつは、ちょいとわしらの仕事を知りすぎた」

「もう、さつきからあんたたちは何者なのよ…」

大男は不敵な笑い声を上げ、金魚鉢たちも怪しく笑つた。

「しらないなら教えてやろう。聞いて驚け！そして、恐怖するがいい！我らは、悪の秘密結社ロボロボ団。わしは、そこで幹部を務める者だ」

「ロボロボ団…」

ロクショウ、プラス、アーチュ。メダロット以外の者は驚愕した。ロボロボ団といえば、十年前。メダロット史上最悪ともいわれる「魔の十日間事件」を引き起こした組織。単なる悪戯集団かと思われていただけに、この事件は世間をおおいに揺るがした。しかし、事件の幕引きと同時に組織は忽然と姿を消した。

以来、組織は自然解体したと考えられたが。よもや、まさかこんな形で幻となりつつあるロボロボ団と出くわすとは、イツキたちの予想を遥かに上回つており、四人は思考を停止した。

「ふあふあふあ！腰が抜けてしもうたか」

幹部と名乗る男はイツキたちの態度に満足したようだ。

人間と違つて、三機のメダロットには特に驚きが見られなかつた。ロクシヨウが幹部の男に話しかける。

「ふむ。それで、そのロボロボ団がこんな山奥でコソ泥する訳は何故だ？」

「な、何だとうロボ！」

金魚鉢の一人がコソ泥という言葉に反応した。

「反応しているところを見ると、自覺しているようですね」

プラスが無愛想に突つ込む。地団駄を踏む金魚鉢を押さえ、幹部の男が返した。

「ふん。秘密結社が毎回派手なことやるとは限らない。大願を果たすには、こうした人材を集めための地道な活動もしなければならない」

「大願だと？」

アーチェが口走つた疑問に、大男は先ほどより更に不気味に微笑んだ。

「我らの大願…それは、世界征服だ！！」

一同、しーんと静まつた。大男に金魚鉢たちは、心底震えあがつているなど内心とても喜んでいた。だが、そうではなかつた。アリカは吹き出しそうになる口を強く押さえた。

「ア…アリカ、こんなき、緊迫したときに寄せつて」

そういうイッキもこみ上げる感情を抑えるのに必死だ。この緊迫した場でいきなり世界征服と言われては、笑わずにいられなかつた。どうせなら、普通に資金源調達とか言われたほうが良かつた。

ロクシヨウ、プラス、アーチェも肩を震わしていた。

笑いを堪えるアリカ、イッキをよそに、カリンはふつと吹き出していた。

「お、お前ら何が可笑しい」

これが返答だと、コウジがわざとらしく高笑いした。

「あーはつはつはつは…どんな動機かなと思ひきや。まさか、世界征服とはね」

今度は幹部の男が地団駄を踏んだ。

「おのれい。だから、子供は嫌いなんじゃ！えーい！お前たちメダロットを転送せい！」

ロボロボ団五人はメダロッチからメダロットを転送した。計十五体のメダロットがイッキたちの眼前に出現した。すっとんきょんな雰囲気は去り、シリアルスな空気が再び漂つ。

ロクショウ、プラス、アーチェはさつき全速力で空を飛んだことにより、エネルギーを消耗していた。飛行系パートはエネルギーの消費率が他の脚部より高い。その上、相手は数だけでもこちらの五倍以上。

「不味い状況になつたわね」
あのアリカが弱音を吐いた。

自分たちを逃がさぬよう、ロボロボ団は囲いを広げ、徐々に縮めてきた。

ピピー。

イッキのメダロッチに電文が送信された。こんな状況に誰だ。イッキは素早くメダロッチの電文を默読した。

スタングレード（閃光弾）を上空から落とす。至急、地面に伏せて、目と耳をきつくなげや。b y . 修復完了のクマメダル

閃光弾！？クマメダル！？瞬時に沢山の疑問が浮かんだが、イッキはこの電文の送信者を信用することにした。

「皆、地面に伏せて目と耳をきつくなげや」
どうしてという質問も意に介さず、イッキはとにかくそうしてくれと頼んだ。

「どうなつてもしらないぞ！」

文句を言いながら、コウジは率先して目と耳を塞いだ。イッキ、アリカ、カリンも地面に伏せた。メダロットたちには、一時的に視覚・聴覚機能をシャットアウトさせた。

「それは降参という合図か？今更遅いわ。やつてしまえ、者共！」
時代劇のような掛け声を上げて、ロボロボ団が襲つてくる。その

とき、強烈な閃光と音が辺りを覆つた。続いて、熱風を肌に感じて、イッキは飛び上がつて目を開いた。五人のロボロボ団員が転げまわり、一体のロボロボ団メダロットの全身がひしゃげていた。

イッキやんと、真上からドラゴンビートルがイッキの名前を呼んだ。

「あんさんがイッキですか？」

イッキは頷いた。

「わての名は光太郎と申します。以後、お見知りおきを。新しいマスターのイッキやんのピンチやと聞いて、居ても立つてもいられなくなつたんですね」

礼儀正しいロクショウとは逆の、ちゃきちゃきの関西弁を話すくだけた性格のメダロットだ。

「金衛門か。こんな状況でなんだけど、よろしくな。そこで、ありがとうな」

「どういたしまして。それよりも、他のメダロットも動かしてえな。今 のうちに一機でも多くはつたおしたといたほうがええ」

イッキが起こす前に、コウジ、アリカは行動していた。アーチェは五感機能が麻痺した近くのメダロットを狙撃。もう一体、プラスが空クメイルの左腕を付けたアーマーパラディンが援護し、プラスが空を飛ぶゴーフバレットを撃墜。イッキもロクショウを起動した。ロクショウも負けじとソードで敵を切りまくり、ハンマーで頭をかち割つた。光太郎は樹を傷付けぬよう、精巧な重力波射撃で相手を攻撃した。

ぱつたぱつたと、ロボロボ団メダロットが薙ぎ倒されていく。

態勢を立ち直す頃には、五対五の同数になつていた。それなのに、幹部の男はまだ余裕そうだ。

「ふおふお…。閃光弾とな！こりや、たまげたわい！だがのう、雑魚をいくらやつたところで、わし自慢の三体を倒せなかつたのは惜しいな」

その三体とは恐らく、大王イカ型メダロットのアビスグレーター

一体、スペクター型メダロットのデーヴのことである。一体に付
き、各自一体をぶつけあう正攻法での戦いとなる。

相手は横一列に並んだ。何かしてくる。コウジ

「火薬系をぶつ放してくるぞ！」

二体のアビスグレーター、マジカルピエロの右腕を付けたデーヴ、セキゾーが大量のミサイルを放った。コウジのアーマーパラディンが盾となり、背後のアーチエ、プラスが数発のミサイルを破壊した。

わあー

後ろから、タロウが悲鳴を上げた。タロウの横には息を切らした
カンちゃんもいる。一発のミサイルがタロウとカンちゃんに飛ぶ。
助けられそうにない。

た。

カノンセイハノミコト

爆音のあと、ぼろ屑となつたものが叢に落ちた。

「カンちゃんとタロウは！？ヤナギは？」

身を縮こませたカンちゃんとタロウは無事だった。だが、身を挺して二人を守つたヤナギは、パーティとティインペシトまでも爆発の影響は及んでいた。がくがくと震えながら手を伸ばすヤナギ。その手がティインペシトとともにげた。

「ヤナギー！！」

イッキとカソちゃんの悲痛な叫びが重なる。アリカとカリンは目を逸らし、コウジはイッキたち会ったときよりも激しい怒気を含む目で口ボロボロを睨む。

「お前ら何を悲しんでおる? メダロジトはメダルさえ無事なら動ける。たかが、パーティとティンペットが壊れただぐらいで何を嘆いておる」

かちん。ロクショウの何かが切れた。ここ最近の幾多の戦闘を経て、ロクショウメダルは確実に成長していた。ロボロボ団の目的と

が、ヤナギを唆した方法など知らない。ただ、今、ヤナギの取つた行動とその姿。そして、そのヤナギに対するロボロボ団の発言がもう一步で成長するロクショウのメダルを進化させた。できる。今の私に何かができる。

夢遊病者のような足取りでロボロボ団に近寄るロクショウを見て、コウジ、アーチェが止めに入った。

「何を考えている？ 一人で勝てるわけないだろ？」

ロクショウは乱暴に二人の手を払つた。あのロクショウからぬ態度だ。イッキも止めにかかつたが、ロクショウは優しくイッキの手を止めた。

「私に任せてくれ。何故だか分らぬが。今なら、私一人での愚か者たちをやれる」

ロクショウの雰囲気がいつもと異なる。口調こそそのままだけど、猛獸のように燃えたきる戦闘意欲と標的を見据えた殺し屋の冷徹性が同居したようだ。

ロボロボ団もロクショウの異変を感じ取っていた。幹部の者が命令する。

「…お前たち、何をぼさつとしておる。いい的ではないか。次はあのクワガタムシを片付ける！」

ロボロボ団メダロットがミサイルを発射しようとすると、ロクショウはゆらりと刃を上に向けた。

「ふおふおふお…。せめて、一体でも多く道連れにしようという腹積もりか。甘いぞい。ヘッドシザースの格闘攻撃がいくら強力でも、わしの特別チユーンナップ仕様のメダロットたちはそんな生半可な戦法じや破れんぞ」

幹部の男の号令と同時に、ロクショウの体が輝いた。

「な、何だ？」

双方が同じように驚いている次の瞬間、網膜を焦がさんばかりの光が薄暗い森を照らし出した。凄まじいまでの光に、イッキたちは目を閉じるしかなかった。

どのくらい経つたのだろう。眩すぎる光をまともに直視し、少々頭が頭痛を起こしていた。感覚が正常になると、イッキは眼前の状況を見て啞然とした。

五体のロボロボ団メダロットは首、あるいは上下半身がばつさり切り落とされていた。ロクショウは、どういわけか体があちこち溶けていた。

部下に支えられて立つた幹部の者も、これには驚きを隠せずにいられなかつた。

「な、な、何だ！ 何だ！ 何だあーーー？ 何が起こつたーーー？」

支える部下が答えた。

「よ、よく分かりませんが。光つた次の瞬間、細い糸状の物があるメダロットの腕から伸びたロボ…」

「本当か…」

訳の分からぬうちに味方メダロットを大量に失い、謎の光と力、更に幹部の大男に凄まれて、部下のロボロボ団は怯えきつた声で「ほ、本当ですロボよー」と言つた。

慌てふためくロボロボ団に、ロウジが居丈高々に出た。

「さあ、どうする？ お望みとあらば、まだ戦つていいぞ」

アーチュ、プラスがロボロボ団に銃口を向ける。ロボロボ団は一歩ずつ後ずさり、幹部の男が懐から何か取り出した。

「覚えておれよー！」

「ほん！ もうもうと黒い煙がわきたつ。

「煙幕か」

「ロウジがアーチュに攻撃命令を出させたが、ロボロボ団はとつくのとうに森の奥へと姿をくらましていた。イッキが土下座姿勢のロクショウに駆け寄る。

「ロクショウ、どうしたんだよ一体？ 何をしたんだお前？」

イッキが所々溶けたロクショウの体を抱きかかえる。ダメージをうけていないのに、パーシから洩れた装甲下の配線が目に付く。ロクショウは掠れた声を絞り出した。

「分からぬ。今から機能停止するが、安心しろ。…ただの…エネルギー切れだ」

ロクショウのカメラアイから光が失われた。

「ロクショウー！」

イッキの一^{こだま}度目の悲痛な叫びが木靈する。

ロボロボ団との交戦後の始末は大変だった。僕たちはカンちゃん、タロウを家まで送り、すぐに旧式の黒電話で警察へと繋いだ。同時に警察へ匿名の電話が入り、おどろ山近辺の閉鎖された廃工場に強奪されたメダロットたちが保管されていたようだ。

廃工場内では、何とロボロボ団が既に何者かに捕えられていた。セレクト隊も事情聴取に関わり、ロボロボ団の話から、廃工場のロボロボ団を捕縛したのは怪盗レトルトだと判明した。

怪盗レトルトはメダロットを主に盗みの対象とした神出鬼没の大泥棒。その大泥棒がどのような事情があつてロボロボ団と戦い、しかも、保管されていたメダロットたちを奪わなかつたのか。警察とセレクト隊は共同で捜査を行つてゐるらしい。

僕たちといえば、もうそりや、大目玉を食らつた。警察の人の長々とした事情聴取、その警察の人たちからのお説教に、両親からの雷をおおいに貰つた。ママはもちろん、パパの静かに怒りが籠もつた声音は一生に耳に残りそうだ。罰として、ゴールデンウィーク中は許可が無い限り絶対外出禁止。そして、もう一度と自分たちだけでは山に登らない、ちゃんと親に話せという誓約書まで書かされた。最後にメダロットたちについて。

ロクショウはセレクト隊の看護メダロットの介護もあつて、翌日には自宅に届けられた。

次にカリンちゃんのメダロット。

カリンちゃんのメダロットも廃工場に保管されていたようだ。修

復と聴取が済んだ次の日には、自宅に届けられた。ゴールデンウイーク五日目、土砂降りの雨の日に真っ白なベンツが僕とアリカの家の中間に止まつた。カリンちゃんとセントナース、それと、礼装服の男性がお礼に訪ねてきた。

突然の大金持ちの訪問にママに僕もびっくりした。カリンちゃんと執事の人を見て、ママに僕もかしこばつた挨拶を送るしかなかつた。カリンちゃんの愛機、セントナースのナースは主人と似て物腰柔らかく。

「イツキさん、メタビーさん。このご恩はお忘れしません」

人間でいうところの可愛子ちゃんにこう言われて、ロクショウはぎこちなく。光太郎は調子良さげに返事した。

次にヤナギについて。

ヤナギはあまりにも損傷が深く、介護メダロットはこの傷は治せないと言った。肩落とす僕たちに、トックリという眼鏡をかけたセレクト隊の人「大丈夫ですよ。彼はメダロット博士のところに送りますから」と聞かされて、僕らは一安心した。

もう一つ、ヤナギがロボロボ団に協力した理由。

無垢なヤナギはロボロボ団に騙されたのだ。カンちゃんの孫娘のナツコさんが海外に転勤してから一日経つた日、ヤナギはロボロボ団とばつたりと出会い、捕まつた。捕えられたロボロボ団の話によると、リーダーの男。本名かどうか分からぬが、シオカラというの大男がヤナギを使った幽霊騒動を思いついた。

ナツコは海外転勤ではなく、会社での失敗を拭うために、否応に海外へ飛ばされた。シオカラはこんな嘘をヤナギについた。

ヤナギとて、少しは疑つたりした。だが、シオカラは何らかの脅しも加えてヤナギを納得させて、ヤナギを幽霊として仕立て上げた。付け加えれば、ヤナギ自体は脅迫の声に捕えたメダロットの運搬を手伝つただけで、メダロットを直接攻撃したのは専らロボロボ団のようだ。

ついでにスクリューズ。警察に話すと、当然奴らも呼び出されて、

親から然るべき処置を『えられた』こと。

「ホールディングスイーク最終日。

僕は両親に許可を貰い、ママが運転してあるとこへ連れて行つた。
「時間がきたら、電話しなさいよ」

ママと車を見送つてから、お土産を持ってロクショウ、光太郎と歩いた。おどる山の登山口から離れて西側。そこをずっと歩いた先に、田舎の古風な民家が見えた。

声をかけても返事がない。イッキは横開き式のドアを開けて、中を覗こうとしたら、

「ひーひっひっひっひ。…勝手に入るのは誰だあ…」

と、この世の者とは思えない声だ。イッキ、光太郎はやれやれと首を振り、「勝手に入つて申し訳ありません。さよなら」と帰ろうとしたら、声の主は慌ててイッキたちを押し止めた。

「「めん、「」めんーちょっと、悪ふざけが過ぎちやつた」

家屋から、新品と見紛つほど綺麗になつたミスティゴーストのヤナギが現れた。

「おふざけも大概にな」

ロクショウに注意されて、ヤナギは何度も謝つた。

「ところで、カンちゃんは?」とイッキ。

「カンちゃんなら、アリカちゃんと監督と一緒に山菜取りに行つたの。それで、僕はお留守番しているの」

イッキ、ロクショウ、光太郎もヤナギのお留守番に付き合つことになつた。小一時間後、元気一杯にアリカがただいまと帰つてきた。アリカの長靴は泥だらけだつた。

「イッキたちも來ていたのね。ほら、樂してたんだからあんたらも外に出て、山菜洗うの手伝いなさい。これから、お昼にするから。あと、ヤナギ。カンちゃんがヤナギに見せたい物があるんだって」

外に出ると、プラスの他に五体のメダロットたちがそこにいた。カンちゃんの手には手紙が握られていた。カンちゃんが嬉しそうに手招きして、ヤナギに手紙を見せると…。ヤナギは喜びのあまり、天に召されんばかりの勢いで高く宙に浮いた。

手紙には、ナツコさんが七月の下旬には日本へ帰ってくることが直筆で書かれていた。

その日、イッキはママが迎えに来るまでの間、カンちゃんにカンちゃんのメダロットたちと楽しい時を過ごした。

7・ねじり山編は終了。

次回は一、二話ねじり本編（原作）には無い話を盛り込み。その後、また本編のストーリーに入りたいと思います。

「ゴーラーテン・ウイークの事件を当事者視点から執筆した三部構成の記事「おどろ山探索記」は、ギンジヨウ小学校の歴代新聞記事で最も高い評価を受けた。

実際の評判もあり、お陰でアリカ、イッキは一躍学校で有名人。一週間。アリカ、イッキの話題もそろそろ薄れる頃、校内はまた別の噂でもちきりになった。

「ねえ、イッキ」

隣の席のアリカが話しかけてきた。

「海外からの転校生の話だけさ。何でも、ナイジェリアの出身らしいわ」

「ナイジェリアって…。アフリカあたりだっけ?」

「私も詳しくは知らないけど、確か石油が掘れて。イスラムやキリストとかの宗教が混ざっているらしいわね」

「それで、そのナイジェリアの人はどうしたの?」

「んもう! ちょっとメダロット以外のこと興味持ちなさいよ! そのナイジェリアの人はね。私たちと同じ年で、転入先のクラスは私たちの三年一組だつて」

イッキは適当に相槌を打つといた。メダロットのことしか考えてないと言われて否定はしない。ただ、好きな物に熱中する類ではなく、この場合は考えるざるをえないと言つたほうが正しい。

メダロポリスから来たというカリンちゃんとコウジ。突如、活動を再開したロボロボ団。そして、そのロボロボ団を謎の力で瞬殺したロクショウ。一つ目と二つ目は理解できるが、三つ目はどう考へても分からぬ。インターネットで検索しても分からぬ。メダロ

ット博士にも聞いてみたが、あの博士すら、ロクショウの発した力については分からないと答えた。

「メダロットのメダルの謎は解明されておらん。君のメダロットが発したその力を解明すれば、メダルに隠された数々の秘密を解き明かすことができるかもしれん。イッキ君、その当時の状況を詳しく教えてもらえんか」

そう言われても、あの慌ただしい状況では何が起こったか当事者にも判別しかねた。イッキは光つたことと、ロボロボ団の一人が言ったことを博士に伝えた。

イッキの空想を打ち破るように、朝のホームルーム開始を告げる、筋骨隆々なジャージ姿のオトコヤマ先生が野太いバリトン声でおはようと挨拶した。

「既に知っている者もいると思うが、ナイジェリアの子がギンジョウ学校に転校してくる。そして、転入先のクラスは我が三年一組だ。因みにその子は男の子らしい。今週金曜日の終わりのホームルームに来るから、皆、歓迎の準備をしておくよ」

その後、簡単な連絡事項と挨拶でホームルームは終了した。

イッキは特に準備はしなかつた。どうせ、挨拶は先生にクラス委員長が代表として言うし、来たばかりの彼に深く尋ねるのもどうか。イッキは簡単な挨拶だけを考えた。

オトコヤマ先生は、歓迎の時のみ自分のメダロットをメダロッチから出していいと言つていた。

当日、三年一組のクラスはホームルーム前だというのに、二つ離れた教室に賑わいが届くほど盛り上がつていた。それもそのはず。元気一杯の子供たちに加えて、今日は皆のご自慢のメダロットたちまでいるのだから、はしゃがないほうがおかしい。

ロクショウ、光太郎は他の生徒の愛機と混じつっていた。エネルギー

ーの消費が激しく日常においては支障をきたすから、普段、光太郎は飛行系パー^ツ以外の脚部を付けて生活している。

両親についてだが、意外にもすんなり光太郎の存在を受け入れてくれた。光太郎の性格も関係しているだろうが、イッキを助けにきたという点が一番の理由だそうだ。

オトコヤマ先生が教室の扉を開けた。

「こり、お前たち！メダロットを連れてきてはいいと言つたが、二つ先の教室に届くはどうるさく騒いでいいとは言つておらんぞ！」

オトコヤマ先生の一喝で教室は静まり返った。

「よろしい…。ゴホン！ それでは、どうぞ入つてください」

オトコヤマは外で待機する人に入つてくるよう促した。そろそろと、天然パー^マ頭の薄紫のス^{ーツ}を着た真っ黒な肌の黒人女性が、クラスの皆に会釈して、かしこまつた姿勢で小さな手を握りながら教室に入つた。女性に手を繋がれて入つた男の子は、短パンに、横並びの黄と新緑の組み合わせ縞模様のTシャツを着た、これまたニュースなどでよく見かける真っ黒い肌をした典型的なアフリカ人の男の子だった。頭も、坊主に剃つている。

男の子と母親。クラスメイトに担任、メダロットも、皆一様に押し黙つた。学校側の配慮と向こう側の都合で、まずは金曜の終了ホームルームに顔出しし、来週月曜日の朝礼で初めて彼を全校生徒に紹介する手筈になつている。

同じで人間であることは間違いない。が、国籍に雰囲気、そもそも外見からして違う人種に生徒一同はどう応じれば内心、戸惑い気味だ。このままではまずいと、オトコヤマ先生がまたわざとらしく咳払いした。

「エッホン！えー…では、ウチエボさんたち自らじご紹介をしてもらいましょう」

ウチエボと呼ばれた女性は機転を利かし、すぐに愛想ある笑顔を浮かべた。

「みなさん、こんにちわ。私、スージ・ウチエボと言います。ドウ

ゾ、息子のことよろしくお願ひします」

片言ながら、スージという人は聞き取れる日本語で自己紹介した。委員長がよろしくじいますと挨拶して、他の生徒も委員長に続いて挨拶した。

スージは男の子の耳元で囁いた。生徒に担任にも聞いたことがないような言語だ。恐らく、母国語で息子に早く挨拶しなさい、とでも言つてゐるのだろう。

男の子はぎくしゃくと黒板に向かい、白墨で文字を書き始めた。お世辞にも綺麗とは言えない。本人もそれを理解しており、小さな手で懸命に文字を大きく書いた。

オニエカチ・ウチエボ。黒板にはそう書かれた。

男の子が前を向いて、片言な日本語で挨拶を述べた。

「エット…。ボク、コクバに書いた文字のトオリ。オニエカチ・ウチエボという名前です。みなさん、短い間ですが、お願ひします」

後半の挨拶が流暢だつたのは、日常用語に関してオニエカチはある程度習得しているらしい。委員長の短い代表挨拶をし、クラスメイトは歓迎の拍手をオニエカチ君に贈つた。オニエカチ君はイッキの後部座席に着席した。そして、今日は終了のホームルームの間だけ学校にて、終わると母親と共に下校した。

後で聞いたところによると、オニエカチ君の父親はIT関連の大企業に勤めていて、二年前の四月から日本に滞在している。何でも、引っ越しはこれで三度目のようだ、今年の八月の初旬にはアメリカに本籍を構える。父親的には色々な文化を経験させたほうが良いと考えているようだが、子供にはそうではないようだ。

オニエカチ君が来てから六日。クラスで誰彼隔てなく話を取れる奴に、イッキもそれとなく話しかけたが、表面的な社交辞令で終わってしまう。イッキに他のクラスメイトもオニエカチ君と仲良くしたいとは思つてゐるが、オニエカチ君自身が周囲に近寄らせないリアーのような物を作り、日本人とかけ離れた外見も相まって、オニエカチ君はまだクラスで友達と呼べるような者は一人もいない。

ママとパパにそのことを話すと、パパが発泡酒を一口呑んでから、

「当然だろ?」と言った。

「そのオーニュ力チ君も本当は話したいんだ。ただ、来たばかりで不安でしあうがないんだ。それに、日本にいる間だけで三度も引っ越しして、八月にはアメリカへ本格的に移住するのだろう。ひょっとしたら、親しくなったときの別れを思うと、怖くて寂しいから、そのせいで上手く付き合えんのかもしれない」

パパの言つたことは最もかもしれない。国内であれ、年に何度も引っ越ししてはあまり落ち着いていられないだろう。そう理解しても、イツキは後部座席のオーニュ力チと上手く話せないまま、あつという間に一週間経つた。

その日の午後、帰りがけの途中、イツキは宿題のプリントを学校に置き忘れたことを思い出した。引き返そうとしたところ、親切にも光太郎が取つてくると言つた。

「まかせてえなあ。軽一く飛んで、すぐに戻つてくるさかい。イツキやんは、家でロクショウと待つててな」

「ありがとう、光太郎」

イツキは光太郎の脚部パーツを元のドラゴンビートルに戻し、光太郎は学校へ向かつて飛んだ。

光太郎は迂回して、三年生の教室がある校舎裏側まで飛んだ。教室内を見ると、オーニュ力チ君が一人、ぼつんと教室に座つていた。光太郎は窓際まで近寄り、オーニュ力チに一声かけた。

「なあ、ボン。ちよいと用事があるんやけど、ここに開けてくれへんかな?」

窓の外から、いきなり大阪弁の飛行メダロットに話しかけられてオーニュ力チは動搖していた。

「『めん、ごめん、驚かして。わいのこと覚えておらん? ほら、君の前の座席に座つているイツキやんのメダロットや』

オーニュ力チは机に蹲つた。そして、どうやら思い出してくれたようだ。オーニュ力チは窓を開けて、光太郎を教室に入れてやつた。

「おおきに。イッキやんが宿題のプリント忘れてなあ。しゃあないから、代わりに取りにきたんや」

光太郎はイッキの机を探り、プリントを両手で挟むと、器用に胸部のハツチでプリントを挿んだ。そんな光太郎のことをいつこう気にせず、オニエカチはただ、時計を見つめていた。家庭での会話でオニエカチの事情を何となく知った光太郎は、一つ、物は試しにオニエカチとの対話を試みた。

余計なお節介かもしけんけど。

「…オニエカチ君。教室に居るんは、お母さんを待つてるからか？」
オニエカチはおもむろに振り返つて光太郎を見やり、小さくうなずき返した。

「そうか。そんなに遠いん？」

少し間を空けてから、オニエカチははにかみながら口を開いた。
「歩いて…につじゅふんぐらいのところ。歩いて帰ると、他の人が変な目で見ているような気がして…。それが嫌だから、ママにお願いして、迎えにきてもらつている…」

「つじゅふんとは、『一十分』のことやな。

「ふーん。まあ、確かに肌の色からして眞と違うけど。でも、毎日そんなで楽しい？短い期間でも、眞と帰つたほうが楽しいと思えるで」

「君、コーラロウだつけ？イッキのメダロシトだよね？」

「そうやけど、それが何か？」

「イッキ、ボクに声をかけてくれる。だけど、ボク、八月にはアメリカで永住することになる。ホントは眞と話たい。けど、何だか分からなけれど、話そうとしても話せないし。話しかけられても、何故か返せないんだ…」

光太郎はオニエカチ君のような子供を何人か見たことがある。生前のマスターしているとき、周囲と合わせようとせず、こちらから話しかけても、それを拒むような子供がいた。そういう子供はやはり、地道に付き合う努力が必要。

あまり悪口は言いたくないが。おじいさんはできた人だつたのに、親族の人たちは最後までメダロットのことを理解してくれんかつた。一人、魔の十日間事件で死にそうな目に遭つたのは同情するが、まさかそれで自分を捨ててしまつとは。おじいさんと同様、虫好きな人がおればなあ……。いかん、いかん。今更、気に病んでもしょうがない。今は今、昔は昔。しばらくイッキやんのところで住まわせてもらおう。光太郎は意識をオニエカチ君に戻した。

「オニエカチ君。絶対とは言わへんが、今度、うちのイッキやんと一緒に帰ろと誘つてみいへん? 無理にとは言わんから」

「どうして?」

要らぬお節介は不要だと、オニエカチは光太郎を厳しく問い詰める口調だ。

「どうして、ボクにかまうの?」

「これは例え話やけど。近くで人が転びそうになつて、ちょうどその人を支えられたり体を掴める位置にいたら、自分ならどうする?」

「…手を伸ばす…」

「それやそれ! 言つとくけど、わいきて毎回こんなんちゃうで。偶然とはいえ一度君という存在に手を伸ばした以上、そのまま放してこけさす真似なんて出来へんやろ。ただ、その手を振り払うのは君の自由や。わいきて、これはお節介と自覚しとるし」

頃合いだな。光太郎はそろそろと、教室の開け放たれた窓へ向かつた。太陽熱の残りか、校舎の周りで吹く風はほんのり熱氣が宿っている。オニエカチは光太郎を見上げながら、窓を閉めた。どう転ぶか知れた物だが。一日の休みもあれば、落ち着いて考える時間は十分にあるはず。予定外のことと遅くなり、イッキが心配するかもしれないで、光太郎は真っ直ぐ天領家の方角を目指した。

オニエカチはただ一人、教室で母を待つ。

夕食を済ませた夜、オニエカチは母親と会話した。ただし、使用言語はナイジエリア言語の一種、ハウサ語。ここでは、ハウサ語を訳した形で記す。

「ねえ、母さん。僕が友達と帰ってきたら、母さんどう思つ?」

母親のスージは瞬きして息子の質問に目を丸くするも、白い調度品に囲まれ、色合いからして浮いている赤茶けたソファに座る愛しいオニエカチに、スージは微笑む。

「私としては嬉しいわ。だつて、あなたが進んでお友達を連れてくるのは、ナイジェリアにいた時以来……」

スージはしまったと手で口を塞いだが、遅かつた。足をじっと覗く息子の顔付きが険しくなつた。この子がこういう性格になつた原因、今は決して触れてはいけない。

「ど、とにかくあなたにもようやくジャポンで親しい友達ができたのね」

話を逸らしたが、息子は心非ずと上の空な表情。

思えば、この子には苦労をさせたものだ。ナイジェリアにいたときはあんなことがあり、これはチャンスと安全な日本に逃げ込む形で移転した。しかし、現実はそう甘くなつた。二年前は苛めに遭い、半年で転校。一校目ではそれなりに上手くやつていけたが、夫の都合で転勤。この終わりが無いと思えた長い転勤生活も今年の八月、アメリカに本籍を構えることにより、やつと腰を落ち着けられる。

それでも、折角一年間も海外に滞在したのに、子供が良い想い出もなく日本を去るのは親としては少々悲しい。母や姉には考えすぎと言われたが、このままオニエカチが俯いたままアメリカに籍を構えても、移住先でこの子が自ら人と付き合えるか不安だ。

「それで、その子は何て名前なの?」

「まだ、連れてくると決めたわけじゃないよ」

オニエカチは宿題をすると言い、一階の自室に籠もつた。スージがソファに座り込むと、アメリカに行つたとき、自宅や子供の警備用として買ったカミキリムシ型メダロットのエイシイストことアルコが紅茶を運んできた。アルコは去年の暮れに買ったメダロット。初めはロボットだなんてと思つたけど、今では一家の一員となつて

いる。

スージは紅茶を受け取り、僅かに啜るとガラス張りのテーブルにティーカップを置いた。一人で自室にいるオニエカチ。オニエカチは、友達ができない自分を母親が心配していることを当然知つていた。

並大抵のことでは自分を変えられない。その自分に、イッキのメダロットはチャンスをくれた。悩むオニエカチの背をアルコが呼んだ。

「坊ちゃん。そんな風に腰を曲げていたら、早くから腰だけお年寄りになってしまいますよ」

オニエカチは窓の外に顔を向けたまま喋つた。

「アルコ。迷つているときに誰かが手を差し伸べたら、お前ならどうする？」

「そうですね…。世の中色んな考え方がありますから、人によつては手を振り払つたほうがいいかもしれません。信用できるとお思いなら、相手が待つてくれている間に手を伸ばしたほうがいいですね」

アルコはお菓子を置いて部屋を出た。オニエカチはすぐに手を付けず、外の景色を眺めた。

一日間、オニエカチは深海で空気を求めて彷徨うように悩んだ。そのオニエカチを、スージ、父親、アルコは見守つた。

月曜日。終礼が済んでとつとと家へ帰りつとしたら、イッキはアリカに呼び止められた。

「イッキ。今日、暇？」

「…特に予定はないけど」

「良かつた！あのね、今から取材に同行してくれない？」

「ここ最近、周辺で事件性があるものとかはないけど」

「ジャーナリストが必ずしも事件を追うとは限らない。ときには、地域や身近な物を題材に取材したら、意外な事実が見えてくることもあるし、己が視野を広げることにも繋がる。というわけで、鞄を置いたら商店街に行きましょ」

迷うイッキに、オニエカチがか細く声をかけた。

「…あの、イッキ君。今日、一緒に帰れる？」

イッキ、アリカは目を剥いた。今の今までクラスから浮いていたあのオニエカチ君が、話しかけてもお世辞めいた返事しかなかつたオニエカチ君が、自ら話しかけてきたからだ。イッキが良いよと言う前に、アリカが身を乗り出した。

「オニエカチ君は、今日予定とかある？」

「無いよ」

「そう！じゃ、良い機会だから、私たちと一緒に商店街の取材に行つてみない!? オニエカチ君は行つたことがある」

「車で何度も通つたことがあるだけで。、ボク、行つたことない。でも、前から一度行つてみたいと思つていた」

「決まりね！」

三人で待ち合わせ場所を決め、イッキ、アリカ。それと、オニエカチはまだちょっと引きずる感じで肩を並べて校門を出た。光太郎からオニエカチについての事を打ち明けられていたロクショウであるが、あえて口を出さず、メダロツチ越しから成り行きを黙つて見ていた。

オニエカチ君の家から一番近い場所、広いグラウンドがある五丁目公園が集合場所。

オニエカチは何故か光太郎も連れてきてほしいと頼んだので、イッキはロクショウ、光太郎のメダルをメダロツチに挿入した。商店街を取材し回るから、イッキ、アリカは自転車に乗つて五丁目公園に向かつた。六分もして、植林樹と高いフェンスネットに覆われた五丁目公園が視野に入る。入つて右奥のベンチ、オニエカチ君が座

つっていた。二人はオニエカチに手を振り、気付いたオニエカチも同じく手を振った。

イツキがオニエカチの手前で自転車を止めた。

「お待たせ！」

「オウツ！バイクで行くんだ。ちょっと待つて、すぐに取りに戻るから」

オニエカチが自転車に乗つて公園に戻ると、アリカを先頭に取材陣は出発した。

これまで、この五丁目公園に周辺を散歩しただけのオニエカチにとつて、アリカの取材同行は正に未知の世界への切符を手にしたみたいだ。アリカは学校に許可を貰い、毎週商店街の店一件を取材し、記事にしている。イツキもしばし同行させられているから、イツキ、アリカは商店街の顔馴染みとなっている。今回は裏角のお団子屋さんの取材。待つている間、三人はみたらし団子を一本貰つた。三人はそれぞれ礼を言つてから、ありがたくお団子を食した。スーパーで売つている物とは違い、出来立てほやほやで、砂糖醤油の葛飴にお店の秘密の調味料を加えた団子はほっぺが落ちそうだ。

オニエカチ君も、おずおずと一口、パクリ！齡五十のおじさんが味はどうかと聞くと、オニエカチは満面の笑みで「美味しい」と答えた。

取材後、イツキ、アリカは気を利かし、オニエカチ君に今まで取材したお店とその店員の人を紹介した。商店街の人たちは皆優しく、変な目付きもせず、オニエカチを普通の子供として扱つた。更に二人は、本当は近寄ることすら禁じられているおどろ山までオニエカチを連れた。

公園から出るまでもまだどこか引きずつていたが、今やすっかりそんな気持ちは消え去り。オニエカチはひたすらイツキ、アリカとの時間を楽しんだ。メダロッチの時計が五時を告げる。集合場所に戻り、解散しようとしたら、オニエカチがイツキの光太郎に会わせてくれとお願いした。

断る理由もなく。イツキは光太郎を転送した。

転送された光太郎に、オニエカチは一言「ありがとう」と呟いた。光太郎は無言でオニエカチに腰を曲げた。イツキ、アリカはこのやり取りを見てきょとんとした。

そうして、三人は互いに別れを交わした。自宅前で、イツキは光太郎にオニエカチのお礼の意味を問うたが、光太郎は「イツキちゃんはええ子やでと言つただけや」と、上手くはぐらかした。唯一人、オニエカチとは別に事情を知るロクショウはメダロッチの中でほくそ笑んだ。

8・異国からの転校生（後書き）

いつもなら、「イツキは」これまでの間に、回ロボトルとして、云勝うんじょう敗うぶんした」で始まつていましたが、今回はそれも含め、できる限りロボトル関連で話を繋げないよう心掛けた。

同時に、前回は最終的にロクショウ、ヤナギなどに存在感を奪われた光太郎を田立せようとも心掛けた。

しかし、見返したら、今回メダロット側の主人公の台詞ロクショウが一言も無かつたな。次回からはアルコも絡ませて上で、ちゃんとロクショウも喋しゃべらせます。

9・メダラクロス（前書き）

然るべき知識（国際事情）に詳しい方から見たら、おかしな点があるかもしれません。

9・メダラクロス

メダロットに関するスポーツといえば、ロボトルが代表的。だが、自分の愛機が無用に傷付く姿を見たく無いという人も多い。そこで、数年前からメダロット版障害物競争のメダロードレースが誕生した。障害物がなくとも、一定の距離を走れる場所があるならば、メダロードレースはどこでもできる。メダロードレース誕生により、ロボトルせずともメダロットは体を動かせる機会を得た。

五年前、社員の一人がロボトル以外のメダロットのスポーツ拡大を夢見て、メダロットによる球技運動の企画書を提出した。

メダロット社社長の二毛作タイヒは理解がある野心溢れる人物で、この企画書にゴーサインを出した。

まず、最初にメダベースボールなるものを試みた。だが、メダロットによっては手が無かつたり、足が無かつたり、そこにメダロット用のグローブやボールにバットを作るとなれば、一チーム分作るだけでも莫大な費用がかかるので、メダベースボールは企画段階で終了した。

一つ目はメダサッカー。これもまた、上記と同じ理由により、企画段階で没。中々、メダロット向けの球技が見当たらない。

一年間の糸余曲折を経て、遂にメダラクロス案に他一つが通つた。手や指が無いメダロットには、ゴムベルト製の物をラケットに付ければ問題は解消された。

早速、腕しかない飛行型と浮遊型メダロットに低空飛行でラクロスをさせたところ、五機ずつに分かれた試合は意外な白熱ぶり。十分間の試合の末、推進力がある飛行メダロットチームが勝利した。決して圧勝ではなく、飛行型チームも残るは一機だけだった。

メダロットによる球技、略してメダボールのルール制定などにあたり、二毛作タイヒがこんな意見を出した。

「メダロットらしい物も取り入れたらどうだ? ただのラクロスなど、

面白味に欠ける

「毛作タイヒは単に腕を使うのではなく、メダロットのパートを使って試合してもどうかと言った。しかし、二毛作社長の意見に反対する者は多かった。投げるだけなら、問題無い。だが、メダロットのパートによる攻撃ルールを加えたらロボトルと何ら変わりなく、ラクロスの道具が持ち堪えれそうにないし、ルールも複雑化する。君たち、もう少し頭を捻つたらどうかね？ それなら、耐えられる道具を作ればいいだけの話だ。そして、メダラクロス用の新ルールを作ればいい。メダボール用のボールを作り出せば、きっと利益になる」

細かなルール制定に、メダボール用のボール開発も同時に進められた。半年の歳月をかけてルールを作成し、そこから更に一年と三ヶ月も費やして、念願のメダラクロス専用ボールが完成した。

特性ラケットはメタルビートルのミサイル、ヘッドシザースのソードを物とせず、ボールはロールスターの頭部の強烈なレーザーに耐えた。

メダロット社はメダロボリスの名門小学校花園学園に、メダボール宣伝のための公開試合をしてくれないかと依頼した。一件目での返事は無いと思われていたが、学園長は一つ返事で良いと答えた。花園学園は二毛作社長の出身校であり、現学園長は社長の学友であったからだ。文部省の役人に沢山のマスコミの立会いの下、花園学園六年生所有のメダロットによる一種のメダボール球技が行われた。試合後日、全国からメダボールルールブックにメダボール専用用具の注文が殺到した。二毛作はすぐに発売はしなかつた。文部省からの通達がないからだ。一週間後、文部省の通知が届いた。社長が皆の前で通知の手紙を開く。

ざつと文面を読むと、社長は重役の一人に尋ねた。

「注文件数は？」

「学校関連だけでも、既にボール一千個分以上の予約注文が来ております」

社長が不敵に微笑む。社員一同は文部省の通知を読まずとも、社長の表情だけで書かれていることを理解した。

「一ヶ月後の発売にも併せて、工場はフル稼働だ！これから忙しくなるぞ！」

社長と社員による一斉啖呵がメダロット社中から木霊する。こうして、メダロットの世界がまた一つ拡がった。

ギンジョウ小学校ではメダロット関連の行事が二つある。一つは、四月中旬に行われる校内ロボトル大会。そして、二つ目はメダロットの運動会だ。

メダロットによるスポーツといえば、メダロードレース、メダボール球技の二種のみ。ギンジョウ小学校にはメダドッジ用の道具にルールブックは無く、メダロットによる球技はメダラクロスしかできない。ラクロスは何かと細かいルールが細かいので、小学生たちにはメダドッジ用のが欲しかったというのが本音。だが、やってみると意外にも嵌まり、そんじゃそこらの大人よりラクロスの知識について詳しく述べた。

どの学年がどのスポーツをやるかは、学校教員の会議で決まる。体力面を考慮し、一、二年生は六月末、三、四年生と五、六年生は七月の初旬に行われる。

真夏にスポーツ大会はどうかと思われるが、するのはあくまでメダロット。人間は応援役兼監視者。それに、ソーラーシステムを組み込まれたメダロットたちにとつては秋の曇り空よりも、日差しが強い真夏日のほうがかえつて調子が良い。

今年の三年生はメダラクロスに決定した。原因はオトコヤマ先生と畠田先生の二人に起因する。

二人は昔、バスケ部に所属していた。バスケとラクロス、球技という点を除けばあまり接点は無いが、実は二人は中学校から高校に

かけて同級生だった。そのとき、女子ラクロス部には男子の憧れともいすべき高嶺の花が存在した。二人がその高嶺の花に告白した結果、相手は畠田先生を選んだ。理由は、爽やかスポーツ青年のほうが好みだかららしい。どうでもいいが、二人は一年の交際を経て破局した。

いやいや、その憧れの人を取り合う前から、二人は何かと衝突しており、何の運命の悪戯であろうか、オトコヤマがギンジョウ小学校教員に任命されたら、畠田先生も同時期に教員として来たのであつた。

表面的には素振りすら見せないが、一人の奥底には互いに負けず譲れぬ闘争心が今も燃えている。

その畠田先生クラスには、かの悪名高いスクリューズがいる。いつもなら、二人の闘争心に辟易するが、今年は事情が違う。

番格的存在で、特にメダロット関連で痛い目を見た三年生は、せめてメダスボーツぐらいでもスクリューズをぎやふんと言わせてやりたいと燃えている。そんな訳で、今年のメダロット運動会の三年生は一部を除き、担任に生徒も大いにやる気満々。

校内ロボトル大会で辛酸を舐めさせられたイッキ、アリカ、ロクショウも雪辱を果たす絶好の機会がきたと浮き立つた。

七月三日月曜日。三年生によるメダスボーツ大会。

校内ロボトル大会と比べれば、いささか盛り上がりに欠けるが、幾人かの保護者の姿が見受けられる。

「ロクちゃん、頑張ってね」

応援するイッキママの右横には、オニエカチの母親スージ婦人もいた。オニエカチは特別許可を貰い、カミキリムシ型メダロットのアルコをメンバーとして連れてきた。

一回戦の対戦相手はガリ勉イメージが強い三年二組。だが、メダ

ロッター自身の運動神経は大したことはないが、それとメダロットの扱いは別だ。二組の腕前は全くの未知数。

男子ラクロスを例に挙げれば、人数は一チーム十一人まで。メダラクロスでは、プラス五体で十五対十五で試合する。

メダラクロスのルールとして、各チームのメダロットは頭部、右腕、左腕パーツのどれか一つを一回限り使用可能。そして、出来る限り相手メダロットに当たないよう注意しなければならない。相手を傷つけてしまった場合、故意と判断されなければその機体は試合続行が可能。

メダロットの扱いが上手いと見られたイッキは、ロクショウ、光太郎の二体を出場させることになった。イッキは光太郎の両腕をチヤーリベア、脚部をヒパクリトに替えた。

「皆、ファイトね！」

補欠のオニエカチとアルゴが声援を送る。

オトコヤマが審判として中央に立つ。

「スポーツマンシップに則り、まずは正々堂々挨拶からだ。メダロットとて、それは変わりない」

互いのメダロットが挨拶を交え、オトコヤマのホイッシュルで試合開始。

ガリ勉というだけあって、きっとメダロットたちの操作は巧みだと予想していた一組であったが、そんなこともなかつた。

蓋を開けてみたら、二六対一。二十五点差で圧勝した。ペットは主人と似るというが、二組のメダロットたちの動きはてんでばらばらで、気持ちいいくらいシユートが決まった。

メダロットたちに応援するメダロッターたちも、互いの手をタッチした。この分だと、四組スクリューズ相手にも勝てる。

イッキ以外はそう考えた。だが、四組対三組の試合を見て目を疑つた。スクリューズはロボトル以外でも強かつた。セリーニヤ、ブルースドッグ、鋼太夫。この三機が当然四組を牽引する形となり、三組の試合に挑む。

結果、三十対四と、一十六点差で勝利。ゴーリーの鋼太夫がシュー
トを跳ね返し、ティフーンスのブルースドッグの守り、セリーニ
ヤのすばしっこい動きに相手はタジタジ。

「……ロボトル以外でも強えなあいつら。やっぱ、難しいかな
「そんなこともあるまい」

耳ざとく聞きつけたロクショウが反論する。一組の生徒とメダロ
ットがロクショウ、金衛門の周りに集う。

「そんなこともあるまいって……。根拠はあるのか？」

「お主ら、試合をよく見ていたか？」

「何つて……スクリューズが中心となって活躍していたなって」

「確かにそうだ。だが、他のプレイヤーはどうであった？」

ロクショウの言つことがまだ分からぬ者もいたが、大体の者は
気が付いた。

「……そういえば、セリーニヤ、鋼太夫、ブルースドッグ以外の奴は、

あまり動きが良くなかった」

「そう言われれば、そうだな」

「あと、勝つたとき残っていた機体はあいつらの二機と、運良く残
つた感じのが一機ぐらいだったわ」

「んで、わいらは？」

光太郎の問いに、鈍い者もようやく悟つた。イッキが応える。

「僕たちは連携が取れていた！」

「そのとおりだ、イッキ」

ロクショウが満足そうに頷く。

「いくら強くても、あやつら三機を一つとすれば。四組はただのワ
ンマンチーム。しかも、四組はスクリューズに従つてゐる感じであ
り、チームワーク自体は取れてない」

光太郎がロクショウの台詞を先取る。

「つまり、相手がどんなに強力なワンマンチームやううど。こつち
や普通にチームプレイすれば、勝てへんわけ無い！ちゅうこつちゅ
「……それは、私の台詞だ」ロクショウがささやかに文句を言つ。

試合前の敗色雰囲気を、ロクショウ、光太郎は搔き消した。一組一同のやる気が点火。その光景を見て、「青春だー！」と感涙でむせるオトコヤマ先生。

「応援してるよ、アルコ」

「任せてください」

この試合では、アルコをオフェンスとして出場させた。機体構造的にアルコのほうが交代選手より優れているせいもあるが、日本最後の想い出として、オニエカチたちを出場させて、優勝を飾ろうという一組の想いもある。

「あらあら、お高いメダロットだ」と。傷付かないよう注意するこつたね」とキクヒメ。

「へつへ。俺らがロボトルしかできないお思いなら、そりや勘違いも甚だしいさ」とイワノイ。

「うんうん。洗濯ミスだね、ほんと」とカガミヤマ。

そのスクリューズの野次に対し、アルコは挑戦的に三人を睥睨する。四組と試合開始！

試合は初っ端から白熱した。一点を取られれば、お返しに一点入れ返す。二十五分まで双方七点。実力は同格。

試合が動いたのは、ハーフタイム残り時間六分の時。セリーニヤがボールを弾いた際、近接していたアルコが感電した。反則かどうか教員同士の協議結果、セリーニヤはルールに反していないと判断された。

腕や頭の隙間から煙が洩れるアルコ。そのアルコを見て、尋常ならざるショックを受けるオニエカチ。イッキや他のクラスメイトが慰めるが、オニエカチの震えはどうにもとまらない。仕方なく、アルコを選手交代、体調を崩したオニエカチはスージ夫人に連れられ保健室へ。

キクヒメの得意そうな笑み。これを見て、一組生徒、特にイッキ、ロクショウは燃え上がった。

そこから、一組、特にロクショウは反則すれすれの猛攻を仕掛け

てきた。あまりの気迫、そして、スクリューズの反則に怒った一組は益々一致団結を固め、残り時間一分、十対八となつた。

「」のままでは終われない。ロクショウは、一矢報いる形でいいからこりしめてやりたいと考えていた。そこで、プラスや他のメダロットに相談した。残り三十秒、ロクショウは他の者たちに迷惑をかけることを承知で、左腕パークを使用した。

セリーーニヤ、ブルースドッグが固まり、ボールを取りうとしたところを、ぱつきーん！

「一体はどうと仰向けに倒れた。

「反則だ！」

キクヒメが高らかに抗議を申し出た。試合は一時中断。一組、四組の生徒は固唾を飲んで見守る。担任同士の協議の結果、ロクショウは退場。負傷したセリーーニヤ、ブルースドッグは交代。主力二人が抜けたことにより、四組はかえつて肩の荷が降りたようだ。後二十秒にも関わらず、良いチームプレイをして、懸命にボールに食らいついたが、惜しくも一点差で敗北した。

試合は十対一で一組の勝利！反面、ロクショウはうなだれていた。「…済まぬな、イッキ…」。我ながら、大人げないことをしたと自覚している。しかし、私は耐えられなかつた。前のおどろ山のコソ泥紛いの件といい、一度でいいから、あやつらの伸びた鼻の下をひっぱたいてやりたかったのだ

「僕もだよ、ロクショウ。でも、次は正々堂々打ち負かしてやるうつな

「無論だ」

「辛氣臭い話は終わりでつか？」

光太郎がさり気無い感じで間にに入る。

「ほら、今は盛り上がりましょ！」

同二年生たちに、試合を観戦していた他の学年からも拍手喝采が贈られる。四組の生徒からも「あいつら歯軋りしていたよ。一度、あいつらをぎやふんと言わせてやりたいと思っていたんだ」と言う

者が出来る始末。応援席のメタロッターとメタロットたちがやんや、やんやと歓喜する。

一方、ホエヒヤヤマ先生と畠先生。ホエヒヤヤマ先生は畠先生を小馬鹿にするよつなじめ一言も言わず、黙つて互いに握手を交わした。

「ほちらとて」
「次の人に間による運動会では負けませんぞ」

爽やかなスポーツマンシップに則つた行動の裏では、互いに火花を散らしていた。

オニエカチ・ウチエボがギンジヨウ小学校に転校してからはや二ヶ月。光太郎の計らい、イツキ、アリカとの触れ合いもあり、オニエカチは徐々にクラスや学校に馴染んできた。それはいいとして、一つ疑問がある。この前のメダスポーツ会のとき、損傷したアルコを見たオニエカチの態度だ。

自分の愛機が傷付きショックを受ける気持ちは理解できるが、そこまで震えるとは尋常。探りを入れても、オニエ力チ君が答えたがらないので、イッキもそれ以上の追及はよした。

クラス一同のお別れ会の前に、オニエ力チは少数の友人と最後に遊びたいと望んだ。夏休み二日前、移転三日前、タチヤーナはイツキ、アリカの二人を自宅に来ないかと誘つた。

「来てくれる… イッキ、アリカ」

イッキ、アリカはもちろんだと返事した。オニエカチはイッキと

同じ地味な部類に入る男子だと、短い付き合いながら分かつた。どこかイッキと通じるところもあり、イッキとオニエカチはよく雑談した。一番田に、度々イッキと絡むアリカと仲が良かつた。

オニエカチの家は赤煉瓦塀で囲まれた、右寄りに塗んだ箇所がある真四角な形の白い家だ。窓の上は窓、区切るように小さな雨避けがあり、その下に表玄関がある。黒く塗られた鉄柱門越しから、様々な家庭菜園が育てられている。通路状に沿つて向日葵も植えられていた。

アリカがインタホーンを押した。どなたですか?と、少々年配らしき女性が応じた。オニエカチの母親、スージだろう。

「ウチエボさんですか?私たち、オニエカチ君のお友達です。今日、オニエカチに誘われてきたのです」

「オニエカチのお友達!…オニエカチ!お友達が来たわよ」
インタホーンの向こうから、どたばたとオニエカチらしき足音が階下を降りる。ガチャヤリ、オニエカチが扉を開けて、勢いで段差も飛び越した。オニエカチはささつと門に寄り、門の鍵を開けた。
「来てくれてありがとうございます!イッキ、アリカゆっくり寬いでね」
一人を招き入れたら、オニエカチは門を施錠した。

「する必要あるの?」

「日本は安全だけど、ママやパパは用心に越したことはないからって」

「それにも、見事に育つてるね」

イッキは庭を埋め尽くす家庭菜園を見て言った。夏の日差しと栄養たっぷりの葉土に根を張り育つた野菜はどれも活きがよさそうで、ナスやトマトはぶりつぶりに丸く膨らんでいる。

「ママの趣味なんだ。…明日には、パパや業者の人と一緒に片付けるべきやいけないけど

三人揃つて玄関戸口に入ると、微笑むスージ夫人と渋い深緑の色合いのカミキリムシ型メダロットのエイシイストことアルコがイツキ、アリカを歓迎してくれた。オニエカチが夫人とメダロットを紹介する。

「もう知つてゐると思つけど、こつちはママ。そして、この子の名前はアルコ」

「こんにちわーどうぞ、寬いでくだされ」

アルコというエイシイストはペコリとお辞儀した。アルコの声もまた渋めで、声だけ聽けば、きっと三十路ぐらいの厳格な軍人を連想されていただろう。イツキ、アリカはスージ夫人とアルコに挨拶を交わした。

二人はオニエカチと共に一階に上がる。

既に準備は終わつてゐるのだろう、オニエカチの部屋はダンボールで囲まれていた。

「何して遊ぶの？ それとも、外でロボトルする」

部屋を見回しながらアリカがオニエカチに聞く。オニエカチは嫌々と首を縦に振る。

「ちょっと…ロボトルは…」

「あつ！ 親から許可ないと駄目何だっけ

「それもあるけど……」

「オニエカチ君。オニエカチ君つて、どうしてロボトルとかを避けるの？ ロボトルがそんなに嫌いなの？」

イツキは思い切つて尋ねてみた。オニエカチが身を固くする。イツキはすぐに態度を改めた。

「ごめん、話したくないんだよね…」

「…いや、いいよ。これも何かの縁かもしれないし…。でも、心して聞いてね」

イツキ、アリカは思わず正座した。オニエカチはベッドや椅子に座るよう促すが、二人は断つた。オニエカチも床の上で胡坐をかいだ。

今日ほど、イッキは自分の迂闊な口を呪つた日はない。

オニエ力チはナイジエリアに居たとき、親がイスラムを信仰する友達がいた。彼は貧乏、オニエ力チは金持ち。だが、当人たちはそんなことを一向に気にせず、暇があれば遊んだ。ある日、オニエ力チはいつも通り彼と表通りの目立つ場所で待ち合わせたが、彼はその日来なかつた。次の日も、その次の日も来ない。おかしいと思つたオニエ力チは、親に断りなく友達の家まで向かつた。彼の家はオニエ力チの家よりずっと小さく、次男の彼を含めて五人も兄弟がいた。

オニエ力チの訪問に、一家は顔を不快感をあらわにした。オニエ力チの親族はキリスト系を信仰する家柄、その為、彼の一家は彼とオニエ力チが付き合うことを快く思つていなかつた。

オニエ力チが彼はどこに居ると尋ねると、十一歳になる長男がいきなりオニエ力チの胸倉を掴んだ。

「お前のせいだ！お前が、仲良く付き合わなきや……！」

長男は母親に頬をはたかれた。焦るオニエ力チに、彼の母親は思々しげに口を開いた。

「もう、金輪際こないでおくれ！あんたが来ないだけで、うちらはまだ幸せに暮らせるもんだよ！」

彼の母親は凄まじい勢いでドアを閉めた。その母親の態度に、オニエ力チはまるで自分が我が家から追い出された気分を味わつた。数日後、彼が帰還した。ただし、死体となつて。

オニエ力チはこつそり家を抜け出し、彼の家を目指した。人だかりを搔き分けて見えた物は、血がべつとりついた白い一枚布が被せられた何かだつた。立て続けに眩暈、吐き気をもよおした。

後に知ることだが、内臓が抜き取られていたので、恐らく、臓器売買の類を目的とした強盗殺人だらうと判断された。

そんなことより、父親を除き、彼の一家はオニエ力チにも責任の一端があると思つてゐるようだ。息子がキリスト信仰系の子供と付き合つてゐる。そのせいで、息子が殺された。母親は今回の事件は

イスラム過激派と無関係なことは頭では理解していても、オニエカチを見るとどうしても憎しみをぶつけられず、周囲のまことしやかな会話と母親の態度を見て、他の兄弟はオニエカチに責任があると思い込んだ。

以来、オニエカチは両親から極力外出を控えるよう命じられた。そんな折、転勤の話が舞い込んだ。父親は息子の安全を考えて、妻と子と共に海外移転した。単に、多文化経験させる目的ではなかったのだ。

そうして、今に至る。

オニエカチは口を閉ざした。語り手、イッキ、アリカ、メダロッチ越しから会話を聞いていたメダロットたちも、皆一葉に口を閉ざした。

何となく知っていた程度のこと。自分たちとは関係ない事柄。ニュース、学校の授業で何気なく耳にするぐらい。今までそう思っていたことを、実際に経験した者から語られると何も言えない。

学校の授業では表面を繕つた小奇麗な文章を読み上げればそれで済むが、いざ、その当事者を前にして、イッキ、アリカは言うべき言葉を思いつかない。

それでも、口を開かないと始まらない。イッキは、導火線に点火する思いで口を開いた。

「……口ボトルが嫌なのは、何というか。その……」

「重なつちやうんだ。違うとは分かっているけど、メダロットが傷付く様を見ると、あの、あの血布から浮かび上がった彼の形を思い出してしまうんだ……自分でもよく分からんけど……」

オニエカチは嗚咽を漏らした。二人とメダロットたちは何も言えなかつた。

「……。イッキも涙を流した。何故かはわからない。同情ではなく、泣くしかなかつた。

「えぐ……ごめんよ、オニエカチ君。話したくないこと話させちゃって……」「ごめんよ、うぐ」

何でか知らないけど、アリカも涙目になつた。オニエカチも一人もまだ九歳。周囲に流されやすいのもあえたり前かもしれない。

涙ぐむイッキを、オニエカチは逆に慰めた。

「泣かないで、イッキ。僕が勝手に話しただけだから」「…でも…」

「ううん…。それに、日本に来てこのことを話せるのは君とアリカが初めてなんだ」

「えつ？」

「最初に、次の学校でも、親しく話せる人はいなかつたんだ。このまま、ジャパンでは誰とも友達にならなくていいやと思っていた…。そんなとき、君の光太郎のお陰で僕は君らと話し合えた…。こんな言い方は変かもしれないけど、話したくないこと話せるほど、僕はイッキ、アリカに君らのメダロットたちと親しくなれたんだと思う」イッキとオニエカチが見つめ合つ。言語、習慣、文化、経済、国。あまりにも違うし、世界全てと手を繋ぐなんて所詮夢。ただ、ここにいる一人はもう、それらの垣根を超えていた。

さて、ここは精神年齢が上の私がしつかりしなくちゃね。気を取り直して、アリカはぱんぱんと頬を張る。そのアリカを見て、二人は訝しがる。

「さ、互いに腹を割つたようだし。とにもかくにも気分を変えて、何して遊ぶ？」

三人は外へ出た。オニエカチが母親に許可を貰い、アルコも連れてきた。息子が言わずとも、スージは今日、オニエカチが友達と呼べる者たちいるのを知り、喜んだ。

イッキが隠れ鬼ごっこをしようと言つた。

「隠れ鬼ごっこ? かくれんぼなら聞いたことあるけど、それ何?」遊ぶ前に、アリカは隠れ鬼ごっここのルールを手早くオニエカチに説明した。

二人を気遣い、アリカが鬼役を貰つて出た。

「光太郎、大空飛んで隠れるのなしね」

「はは！ばれてもうたか！」

イッキは光太郎の脚部をヒパクリトの物に替えた。アリカが公園の樹に顔を伏せて、数を数え始めた。

プラス、光太郎、ロクショウはばらばらに。イッキ、オニエカチは連れだつて隠れた。

アリカがひつひと怪しく笑いながら忍び寄つてきた。

「…ひつひつひ。悪い子はいねがあ、悪い子はいねがあ」

アリカのなまはげ演技に、イッキ、オニエカチ、近くに隠れたロクショウは笑いを必死に殺した。

こうして、陽が暮れかかるまで、三人と四機は精一杯貴重な時間を遊びに注いだ。

帰り際、オニエカチはそれぞれの顔を見つめ、順番に握手した。

「短い間だつたけど、僕、楽しかつた…。イッキ、アリカ。…また、いつかどこで会えるといいね」

オニエカチはイッキ、光太郎とはがつちりと握手した。

夏休み前日のお別れ送別会の次の日、夏休み初日。ウチエボ一家は早朝、アメリカへ向かつてフライトする。

今まさに車で飛行場へ行こうとする一家に、数名の一組生徒が最後のお別れに来た。正真正銘、オニエカチは最後のお別れの挨拶を交わした。直前、イッキがオニエカチにアーマーバラディンの左腕を、アリカシアンドッグの脚部をオニエカチに渡した。

「エイシイストは高威力を得る代わりに装甲を犠牲にしているから、これがあれば少しはましになると思うよ」

「過分なお心遣い痛み入る」

社内からアルコが格式ばつた礼を述べる。ロクショウと馬が合ひかもしけない。

「ありがとう、イッキ、アリカ…。大切にするね。あと、イッキ」

「何だい？」

オニエカチはこうささやいた。

「アリカを大切にしろよ」

イッキはなんのことやらと首を捻り、アリカは一瞬赤面した。

車のブラインドから、オニエカチが手を振る。車が見えなくなり、他の者が帰つても、イッキ、アリカに、二人の愛機三機はしばらくそこに立ち尽くした。

ナイジエリア、日本。普通に暮らしている自分たちには考えられないような移動生活のオニエカチ。今後、彼がアメリカどういう人生を送るかは分からぬ。こんなことしかできないが、二人は考えられる限りの贈り物としてパーツをオニエカチにあげた。アリカが、目と鼻の先まで顔面をイッキに近づけた。

「な……何だよ」

「じゃ、ラジオ体操でも行こー!」

「うん、いいよ」

イッキは淡泊な口調で返事した。

そんなイッキを、アリカは元気づけるように腕を引っ張つりラジオ体操へ連れて行く。光太郎、プラスは相変わらずだと苦笑し、口クショウは暖かな気持ちで二人の背を見た。

9・メダラクロス（後書き）

カブトでも述べたことですが、前半部の下りはおまけみたいなもの。後半が本編。

首を縦に振る動作は、確かアメリカではそれが「拒否」を意味するから。ぶっちゃけたら、ナイジェリアで拒否を意味する動作が分からなかつたので、とりあえず首を縦に振らせたのが真相。

*後で調べてみた結果、アメリカではなくブルガリアでした。色々間違えて済みません。

次回から、「メダロッ島」編に突入します。一話続いてロボトル描写が皆無だったから、メダロッ島編からはふんだんにロボトル（戦闘シーン）を盛り込むようにします。

彼はある人からの指令を請けて、メダロツ島へ向かう。常に微笑む白い仮面を付け、ぱさりと漆黒のマントを翻し、彼は愛機と共にメダロツ島へと出発した。

金魚鉢ヘルメットを被り、全身白いアンダースーツを着込んだいがにも変質者な風体の人物が、こそそそと下水道を移動する。見張りらしき者に合い言葉を伝え、下水内部の更に下、密会所があるマンホールに潜る。

口ボロボ、口ボロボ、口ボロボ！

わいわい、がやがやとは騒がず、金魚鉢集団は男も女も口ボロボと騒いだ。そう、ここは悪の秘密結社口ボロボの秘密の集会所。上座の太いアホ毛を伸ばした男は団員が集合したのを見やり、立ち上がりて簡単な挨拶を述べる。その男を含む上座に座る四人だけ、何故か全身を黒いアンダースーツで身を包み、頭には先が丸っこい一本の角を生やしていた。

四人の中でも一際大柄の男は傍目から見ても、明らかに気を落としていることが見て取れた。大柄の男は、おどろ山にてイッキたちと交戦した、口ボロボ団幹部シオカラであった。おどろ山での失態を、シオカラはリーダーに同格の幹部たちから酷く糾弾されたのだ。おつほん！アホ毛の男が気取った咳払いをする。

「諸君も既に周知のとおりであろうが。今宵、我々口ボロボ団は例のマル秘大作戦を実行するときが来た。そして、今回の陣頭指揮はサラミが取る」

四人の中でも一番背の低い、おしゃぶりをつけたせいぜい五歳から七歳ぐらいの男の子が壇上に立つ。サラミと思しき男の子は、幼

い声ながらアホ毛の男以上に気取つた喋り方をした。

「手筈は整つておる。後は、諸君らは工作員として乗り込むだけだ。田下のところ、私は諸君らの報告を受けるだけだ。だが、急を要するときは私自らが手を下す。それは即ち、幹部であるボクちや……私が自ら現場に赴かなければならぬほどの非常事態である。できれば、諸君らの迅速かつ優秀な働きにより、私自らが手を下さなければならぬ事態が起きないことを願つ。……では、散開！ 健闘を祈る！」

掛け声と共に、白い集団は「キブリの如き速々で密会所から一斉に移動した。

オニエカチ君と別れて五日、つすら寂しく思つイッキに追い打ちをかけるように、夏休みのメダロッ島旅行に行けそつにないとパパは言った。

「言ひ方が悪かつた。正しくはメダロッ島には一緒に行けないだけだ」

「どういひと？」

「パパはちょうどビイッキたちが行く前日には、仕事でメダロッ島へ出張するんだ。毎日は無理だが、イッキがママと滞在している一週間のどこで暇を作るよつ上司に頼んだ。だから、滞在期間の間に三日間ほどぐらうなり、一緒に遊んでやれるぞ」

食べている時にも関わらず、イッキは嬉しさのあまり飛び跳ねて椅子からこけてしまい、チドリママに叱られた。

話を聞いていた光太郎が口クシヨウにこつそり尋ねる。

「口クシヨウ、どうせ？」

「どうとせ？」

「わいな、一度は行つてみたいと思っていたんや。いやー、こうも早う実現するとは……互いにマスターがイッキやんで良かつたな！」

現金な奴めと、ロクショウは苦笑した。

メダロツ島出港當日。イッキはお気に入りの漫画数冊、携帯ゲーム機、母親に読むように言われて無理矢理詰められたズツコケ三人組に十五少年漂流記などの児童文学小説一冊など暇つぶし用の荷物が入ったバッグは自分で担ぎ、着替えのバッグはロクショウに担がせた。ソルティは、ご近所の萩野さんに預かってくれた。

イッキは、チドリ、ロクショウの三人は、萩野おばさんが運転する車で送つてもらつた。

メダロツ島の夏休み一般便の出港時間は、朝の八時四十五分、十時五十分、十三時二十分の三便に分けて出稿する。イッキたちは最終便の一時二十分発に乗船する。

「萩野さんありがとうね。お土産ちゃんと買つてくるわ」

チドリ、イッキ、ロクショウは萩野さんにペこりとお辞儀をした。港に着いた大抵の人は船を見上げた。船の大きさもあるが、鮫をモデルとした青く奇抜な船型が珍しいからだ。メダロツ島運航船、かのシャーク号とはこれのこと。チドリは思わず携帯のカメラで撮影してしまつた。

今日はあいにくの曇天。天気予報では台風の恐れはないらしく、船は通常どおり運航。また、一週間の間は概ね晴れと予測された。チドリはうきうきとする我が子の手をしっかりと握り、船員に乗船券を見せた。

「どうぞ、じゅるりと船の旅をお楽しみください」

船員のマニコアルドおりの挨拶を受けて、三人は乗船した。

「イッキー！あんたもきたのね！あっ！おばさんもこんにちわ！」

船縁から身を乗り出して元気よく声をかけたのは、アリカだった。そのアリカを、背後から甘酒おばさんが注意した。

入船すると、イッキは、お前らは！と大声を上げそうになつた。

それは、お前らと言われそうになつた者たちも同じだ。

キクヒメ、イワノイ、カガミヤマ。あのスクリューズの三人も乗船していた。スクリューズに挟まれて、眼鏡をかけた気の弱そうなイワノイの父親がいた。イワノイの父親は天領親子の存在に気づき、挨拶をした。

保護者同士が穏やかに挨拶を交わす中、当の子供たちとそのメダロットの間では、一種の緊迫感が漂つた。

そこへ、また懐かしい二人が乱入してきた。

「よう、イツキ。久しぶりだな」

「あら？ 皆さんお久しぶりです」

右側通路を見たら、カリンちゃんとコウジ、そして、見知らぬ男性と執事っぽい男性がカリンとコウジに付き添つていた。さらにさらに、アリカと甘酒おばさんも加入した。

保護者や一部の者を除き、子供たちの多くはメダロット島で一波乱起きることを予想した。

ただ一人、ロクショウは船先に佇んでいた。保護者の方々もいるので騒動は避けたが、どうも嫌な予感がしてならない。メダロットを使用した犯罪を警戒して、セレクト隊もメダロット島警備に就くと、イツキの母上から聞かされた。

スクリューズ、高名な家柄の親族と思われる例の子供一人、セレクト隊。もしも……だが……これで、ロボロボ団に怪盗レトルトまで現れれば、役者が勢揃いすることになる。

考えすぎだな。単なる杞憂にしか過ぎんだろう。ロクショウが船先からとつこのとうに遠のいた御神籠町を見つめていたら、イツキ、光太郎もきた。

しばらく、じつと遠のく景色を眺めた。これから、一週間はメダロット島でバカansasを過ごす。イツキや子供たちは楽しみでしうが

なかつたのに、じつして町から離れると、何やら物寂しい感情も湧いた。

メダロッ島バカンス初日は、曇天ながら快適な旅立ちだった。シ

ヤーク号のけたたましい気的が鳴る。

10・メタロッ島（初日）（後書き）

登場人物の視点がこりこり変わりすぎたかもしない。

11・メタロシ酸(初田・山田)(通書)

遅れて申し訳あつません。

波にゆらゆら五時間、天領一家の居る部屋からでもメダロツ島の島影が見えた。

メダロツ島はシーズン毎に客を分けていて、天領家が選んだ夏休み第一シーズンでは、スタッフを含む総勢一二万人もの大衆が、最小一日から最長一週間メダロツ島に滞在する。夏休みのシーズンでは、外国人のゲストを招いた大規模なメダロツトの大会を開催するので、毎年、十万人超えは当たり前。

シャーク号が港に着くまで、子供たちはメダロツトとともに甲冑や船内を探索し、親はのんびりと船室で寛いだ。一時間ほど前から小雨が振り出さしたので、イッキは携帯ゲーム機に興じ、光太郎は何となく漫画を手に持ち、ロクショウはイッキがママに持たされた十五少年漂流記を読書、チドリは小雨が降る四十分ぐらい前から仮眠していた。

そうして時間を潰していたら、船内アナウンスが後二十分で船は港に着くと放送した。

チドリはむづくりと起き上がり、船室内の洗面付きトイレで洗顔して目を覚ますと、イッキに下船の支度をするよう伝え、自身は身近な物をバッグにまとめた。

ぱー！ぱー！

シャーク号は一回汽笛を鳴らし、船内アナウンスが残り五分で港に着くことを告げる。

天領一家に甘酒親娘は下船口近くのカフェで荷物を置いて待機していた。

体感からして船が止まるのに気づく、イッキは何となく外を見やる。中世ヨーロッパの城下町城門を思わせる作りのメダロツ島遊園地入場口が聳え立っていた。チドリは目覚めのコーヒー代金の支払いを手早く済ませ、天領一家は一拍遅れて甘酒親子の背を追う。船

上からでも、既に膨大な人間が港やメダロツ島で動き回る姿が確認できる。

イツキたちが泊まる予定のホテルは、港から海沿いを歩いて二時間ほどのところにある。歩くには遠いので、各施設から送迎用バスが送られる。

混雑した中ではぐれぬよう、チドリとイツキは互いの手をしつかりと握り合った。移動の邪魔になるかもしれないのに、ロクシヨウと光太郎はメダロツチに収納、おかげでイツキはロクシヨウに割り当てた荷物を持つことになり、重いから早く送迎バスに乗れることを願った。

「メダロツ島タカサゴホテルお泊りのお客様の方々はいらっしゃいませんか？タカサゴホテル送迎バスはこちらです！」

四十年代の男性が人混みの中、ざわめきと各施設の添乗員に負けぬぐらい大声を張り上げていた。

二組の親子は群衆を掻き分けて、送迎バス停まで何とか行けた。急ぎ、大荷物だけをバスに詰め込み、イツキは肩が楽になれた。

一組の親子が乗つてから数分後、添乗員の男性が人數を確かめると、バスは発射した。移動の間、イツキは雑談を交わしつつ、シャーク号と港、そしてバスからの景色を眺めた。

十五分ぐらいで、バスはタカサゴホテルに到着した。タカサゴホテルは四階建ての和洋折衷な建築物。天井は屋根瓦、下は薄い水色と艶やかな点々模様が塗られた近代的なビル。

パパが四月頃から、ついでに甘酒母子の分も予約していたホテル。書入れ時に合わせて、ホテルはシーズン対応の大サービス格安宿泊期間を設けた。本来、一週間の宿泊料は親子一人（メダロツトは荷物扱い）で十一万二百円もするが、サービス期間に付き、家族学生割引で六万円である。パパは会社が用意したところで眠るから、ジヨウゾウパパの宿泊代については実質ただである。

その分、食事やお土産に宴会で元を取るうという魂胆がある。

雨が本降りとなり、ホテル前の海辺で遊ぼうにも遊べず、ロボト

ルもできない。天領一家は三階の305号室、甘酒親子は一つ隔てた307号室。まずは荷物を置いた。外は予報どおりの雨。どうせ濡れるから、イッキはすぐにでも海水パンツを履いて海に行こうとしたが、チドリは波が荒れているので危険だと止めた。

部屋の窓から海を見ると、確かに波は荒れていた。が、船が転覆するほどのものでもない。イッキは波に揺られたかつたが、母親とメダロッチ越しからロクショウにも止められてしまい、諦めた。

一室の広さは十四畳の広さがあり、一人と一機で過ごすには十分過ぎる空間だつた。

テレビで刑事物ドラマの再放送を見ていたら、メダロッチから転送したプラスも連れて、アリカは天領家の部屋に訪れた。ママはアリカが部屋に入ること喜んで許した。

「イッキ、今暇でしょ？だからさあ、一緒に持ってきた宿題片付けてない」

「あら、良いアイデアだわね。アリカちゃん」

ママもアリカの言ったことに賛同した。他にすることが無いので、イッキはアリカと宿題をすることにした。ママは甘酒おばさんに用があると言つて、部屋を出た。

イッキが持ってきた宿題は一番嫌いな算数の宿題、夏休みの宿題はこれの他に、社会、国語、日記、歴史などがある。イッキは算数、日記、社会の宿題を持ってきた。アリカは社会と歴史に日記。

アリカの場合、嫌いというより好きな部類の宿題を持ってきた。

ロクショウ、光太郎、プラスが教師役として時に助言を与え、一人の宿題を手伝つた。イッキはてんで駄目で、完全にロクショウと光太郎が教師役となり、アリカに「どちらがマスターか分からぬわね」と笑われてしまった。

一日目、昨日のうちにバケツをひっくり返した天氣は日本晴れ。

九時には早速、メダロッ島遊園地行きのバスに乗った。

イッキ、それとアリカは、この日のために受けられる限りの真剣ロボトルを受けた。目的は実力向上とメダロッ島での限定品を買つ為である。

「ゴールデンウィーク三日前、メダロット研究所に寄つた時、ナインさんから一早く情報をもたらされた。メダロッ島夏休み第一シーズンにて、ヴァルキュリア型メダロットのプリティプライン三十式、人魚型メダロット・ピュアマーメイドの後続機メイティン四十式が、ティンペットと抱合せで計百体が限定販売されるという情報だ。

両機体は今年の一月に新発売されたメダロット。値段は高く、プリティープライインは八万円、メイティンは七万円、それに四万円もある女性型ティンペットも買えば、実際は十二万円と十一万円のお値段が付く。

その両機体が、今年の夏休みメダロッ島夏休み第一シーズンにて、七万円と六万円という破格の値段で売られる。

抽選予約は一万名、インターネットで受付中とのこと。自宅に帰るとイッキ、アリカは即行で抽選予約を済ませた。イッキはママとパパにこのことを話した。両親はイッキが二機目のメダロットを持つことを承諾した。ロクシヨウが一家の一員として馴染んでいたのも、両親が承諾した理由だろう。

そんなとき、ゴールデンウィークで光太郎を拾つてしまつた。ママとパパは悩んだが、一万名の応募があるので当たる訳がないだろうと思つた。

だが、両親の思惑は外れ、何という強運。イッキ、アリカはプリティープライインのセットを買える権利が当たつた。今更捨てろと言うわけにもいかず、チドリとジョウヅウはイッキが買うこと許した。

「…しあうがなわいね。でも、そろそろ人間の家族が増えてもいいなと思わない」

このとき、ママがパパに対して意味ありげな視線を送り、パパが赤面をして誤魔化すように新聞で顔を隠したのを今でも覚えている。

あれはどういう意味なのかな？

開園前だが、昨日以上に混雑を極めていた。今日の一四時から開催する国外ゲストを招いたロボトル大会の席取りを目的とした客が大半だ。イッキ、アリカは限定商品予約の際にこのロボトル大会の参加申し込みを済ませていた。ゲストの権利として、一枚無料観戦チケットが進呈される。そのため、チドリと甘酒母親の表情は余裕だ。

イッキがチドリの顔を見上げる。

「ねえ、ママ。大会まで自由に動いていい？」

「そうねえ…。アリカちゃんと一緒なら構わないわ」

アリカもイッキと同じように母親の顔を見た。

「母さん、私も大会が始まるまでは自由に動いていいでしょ？」

「イッキ君と一緒にね」

二人の親の承諾を得て、イッキとアリカは改札口はくぐると、までは一直線に売店を目指した。人を搔い潜り、押しのけられながら、目的の売店に辿り着こうとしたそのとき、待てと何者かが一人を呼び止めた。

他の誰かを呼び止めたのだろうと思い、先を急ぐとしたが、またしても待てと叫んだ。

「一体誰なんだよ？姿を表したらどうなんだ」

イッキの要望に答え、颶爽と花垣を飛び越えた人影。

忍者のような着地姿勢を取るその人物は、黄土色のダブダブのパーカーと緑色のカーゴパンツを履いた、眼光鋭い辯髪頭の少年がイッキとアリカの前に立ち塞がつた。

「そこのオトコ！ イケメンさすらいメダロッターであるこのリョウ様と勝負しろい！」

「はっ！…何言っているの？今、急いでいるんだけど」

「オトコの日本語…もとい、勝負に二言はないっ！メダロット転送ーー！」

リョウという少年はイッキとアリカに見せるように掲げたメダロ

ツチから、メダロットを転送した。リョウのメダロツチから転送されたメダロツトは、見たことが無い。右手は小さなドリル、左手は大きなドリル、脚部はブリキ玩具のような形をした四つの車輪、頭はキノコの形をした赤い配色で染められたメダロツトだ。

イッキが何か言おうとする前に、謎の少年リョウが先んじて二体のメダロツトに指令を出した。

「行くぞ、ワサキック！！」

リョウが蹴るポーズを取ると、二体の謎のメダロツトが右腕の二ドリルでイッキの足元の土を抉つた。削られた土がぴしひと服や顔に跳ね返る。

「いつたーい！危ないじゃないの！」

「女郎は黙れ！オトコの世界に顔を挟むな！」

この言葉がアリカを怒らせた。リョウに突っかかると思いつや、アリカはイッキの背中を押した。

「やつちやいなさいイッキ！」

「え…！そんなあ…」

「何を！」ちやーちやー話している一喰らえい、ワッサドリーールツ！！」

今度は左腕のでかいドリルが足元の土を抉り飛ばした。がなるドリルとリョウ少年の大声で周囲は騒ぎに気付き、危ないぞ、他所でやれと文句を言いつつ、暴れる血氣盛んなリョウを止めようとする者はいなかつた。

「何人たりとも我らの聖戦は止めさせんぞ！」

メダロツチから口クショウと光太郎が声を発した。

「イッキ、私と光太郎を転送しろ。話しが通じそうな相手ではない」

「あないな相手には、ちょいともんだる必要があるさかい」

仕方なく、イッキは口クショウと光太郎を転送した。リョウが不気味に笑い出した。

「ふつふつふ。覚悟は出来たようだな…」

「…出来てないって…」

リョウはさうと受け流した。

「ふつふつふ…！」受けてみよ、我が究極必殺奥義！ビューティ・キイツス！キラキラーン・ムチュー？」

「無茶苦茶だーー！」突つ込むイッキ。

突進するリョウのメダロットたち。応戦の構えを取るロクショウと光太郎。

「こらー！やめなさい…！」

この騒動を仲介にしきたセレクト隊員。全ては、同時に起こったことだった。リョウが振り返り、一体のメダロットもマスターと同じ行動をした。どうやら、リョウのメダロットはリョウと同じ行動を取る、一心同体なのかもしれない。イッキも隊員を見た。だが、ロクショウと光太郎はもう攻撃の手を止められなかつた。

硬い金属同士が二回接触する音が響く。一体のメダロットはキノコ頭を切られ、一体は胸部が凹み、一体は同時に機能停止した。

全ては一瞬の出来事だったので、当事者たちには何がなんだか理解不能だった。

たった一つ理解できるのは、形はどうあれ、イッキのメダロットがリョウのメダロット一体に打ち勝つた一点だ。

「ほら、これ以上、面倒事に巻き込まれちゃかなわないわ」

アリカがイッキの腕を掴んで人混みに紛れた。リョウ少年はショックで立ち尽くしていた。現場に駆け付けたセレクト隊員がリョウを羽交い締めにした。

「こらー！こんな場所で騒ぎを起こすなどけしからん奴であります！設営支部まで一時連行するであります」

そして、二体のセレクト隊御用達メダロット、アタックティラノが器用に一体の倒れたメダロットを回収した。と、リョウ少年が悔しげに叫んだ。

「クソー！次は負けんぞー…！」

「さつさとこい」

群衆の隙間から、リョウが羽交い締めのまま引き摺られていく姿

を見届けた。トラブルや余計な証言を避ける為、二人は二十分程度売店から離れた。売店近くのゲームセンターに入り、百円でゾンビを撃つショーティングをプレイ、それからゲームセンター内を適当にうろつき、売店へと向かつた。

こちらは外ほどではないが、係員が客を整列させていた。二人は引換券を見せて、列に並んだ。どうやら、自分たちが最後尾らしかった。主に若者やファミリーを中心に、プリティープラインとメイティンのパーソンが入った箱、ティンペットBOX、メダルの三点セットを持って店から出てくる。胸が高鳴ってきた。三人目にして、最後の仲間を迎える。

プリティープライン一式を買うために、戦利品であるパーソンの多くを切り売りするのは惜しまれたが、その惜しさも目的を目前にして消えた。

前に並ぶアリカがパーソン、ティンペット、メダルの三点セットを先に購入。自分も引換券とお金を渡し、さあ、ご対面。そのはずだつたが、世の中そういうイッキの思い通りにはならなかつた。女性店員が非常に済まなそうな顔で言つた。

「誠に申し訳ございません。さきほどの方でメダルは品切れとなりました。次回までの入荷は未定となります」

「そんなん。パーソンやティンペットも？メダルも一緒にないの」「いえ、パーソンやティンペットはお売りいたします。ですが、メダルは別売りとなつております」

「えー！普通、そういうのも一緒に渡す物じゃないの」

アリカがイッキの肩に手を添えた。言わずとも、今は無用なトラブルを避けると言いたいのが分かつた。イッキは渋々、大人しくプリティープラインのパーソンとティンペットだけを受け取つた。

アリカは嬉しげにシノビをメダルを陽にかざしたが、イッキは溜め息をついた。折角入手しても、メダルが無ければただの人形。動いて会話できること意味があり、そうでなければ意味が無い。かと言つて、このまま手放すこともできない。

メダロッチの時計を見た。十時中頃を指していた。こうなれば、僕ができることは一つしかない。

「何がなんでも入賞しなきやね。確か、三位はメダル、パーティ式、ティンペットのどれか一つを貰えるんだよね」

アリカはイッキの思考を読み取った。イッキは一応、聞いてみた。「勝たせてくれるの？」

「まっさかー！前は負けてあげたけど、今度は手抜きなしよ。優勝はこの私とプラスと……えーっと、何て呼べばいいかな？」

「どこか落ち着ける場所で組み立てから、名前を決めましょ」とメダロッチからプラス。

「そうね。というわけでイッキ。大会の間は、ライバル同士よ」

そう言つて、アリカは何処へと去つていつた。残されたイッキはただ一人、途方に暮れた。……なんだかなあ。まつ、愚痴を言つてももう手遅れか。こうなれば、やるだけつてみるしかないよなあ。やるのは、メダロットたちのほうだけ。イッキは俯いま言つた。

「ロクショウ、光太郎。頼んだよ」

メダロット関連の大会を行う場所は、外観は東京ドームそっくりだった。

受付で身分を証明して、選手控え室に入つた。控え室内は、黄色人種、黒人、白色人種と、人種の堀場^{るっぽ}と化していた。指定ロッカー ルームの鍵を開けて、買ったばかりの一点セットや財布などの貴重品を置き、中に敷かれたトーナメント表を見てびっくりした。出場選手の多さにもそうだが、一回戦第一試合の相手は何と、柔らかい金髪ツインテールが印象的な、美少女メダロッターカリンちゃんが相手だった。

反面、コウジやスクリューズのイワノイ、カガミヤマとは大分離れており、幸か不幸か、アリカの一回戦の対戦相手はコウジだった。

キクヒメとは、キクヒメが自分が勝てた場合の話だが、一回戦で当たる。コウジとは、準決勝で相見えることになりそうだ。ドームスピーカーが、天領イツキと純米カリンに出場を告げた。

11・メタロッジ島（初田・一田田）（後書き）

タカサゴホテルの由来は、日本酒の「高砂」から来て います。リョウの出現時期がゲームとは異なります。

簡素なコンクリートで固められた選手入出用の道を抜けて、大会場闘技台へイッキは大観衆の視線にその身をさらした。観客席の照明は仄か、逆に舞台の照明は眩しかつた。少し遅れて、カリンも闘技台反対方向へと回り、おしゃまなお辞儀をした。ふわりと、縄めいた髪とスカートが緩やかに翻る。カチコチに固まつたイッキは、意外にも物怖じしないカリンちゃんの態度に、賞賛と軽い嫉妬のようなものを覚えた。

イッキも首と背を小さく曲げた。

「船以来のご対面になりますわね。私、ロボトルに自信はあります
んが、精一杯頑張ります。よろしくお願ひします、イッキさん」

イッキは返事に困り果てた。緊張していく、しかも、可愛いらしい女の子に一体どう接したものかと迷つた。ミスター・うるちが北の通路から姿を現し、観衆と選手に深々と腰を折り、お決まりの口上を述べた。

と、カリンが何か思い付いたのか。ポンと右手で広げた左の手の平を叩き、ミスター・うるちに来るよう手招きした。カリンはうるちの耳元で何事かと囁き、観衆にイッキも少女と審判の動向に注目した。

「えー。ただ今、純米カリン選手からイッキ選手への提案で真剣ロボトルが要望されました。イッキ選手が拒否する場合、直ちに試合は賭け無しの大会ルールに乗つ取つた真剣ロボトルが行われます。イッキ選手、パートを賭けた真剣ロボトルを受諾しますか？」

「カ、カリンちゃん！どうして？」

「……実は私。コウジさんや仲の良い友達となら遊び程度のロボトルをしたことならありますけど、まだ、一度も真剣ロボトルをしたことがないのです。……いえ……本当はパートを取られることよりも、ナースちゃんたちが傷付く様を見たくないがために、これまで避け

てきたのです。ですが、この前の事件に、イッキさんやコウジさんの戦いぶりを見て、私も一度は全力を持ってロボトルを経験してみたくなったのです。…手前勝手な頼みとは承知しておりますが、どうか私の挑戦を受けてくれませんか？イッキさん」

即断即擱としたが、カリンちゃんの潤ませた真剣な眼を見たら、二の足を踏んでしまい。結局、ミスター・うるちに了承の意を伝えた。

「それでは、メダロッ島ロボトル大会第一回戦第一試合！ロボトルファーリトオ！！」

イッキはロクショウを転送、カリンはプリティブライン…それとも、プリティブラインのパートを付けたセントナースと表せばいいのだろうか。

「……カリンちゃん…それは？」

「ナースちゃんです。本當はもう一体、シルビアという子がいるのですが。ナースちゃんと比べたら、まだ経験不足なので、シルビアのパートをナースちゃんに装着したのです」

ともかく、二人と一機は試合を始めた。ナースの鞭のようになれる電流を帯びたソード攻撃を、ロクショウは難なく回避。ナースは動きがなってなく、真剣ロボトル経験が無いのは本當のようだ。イッキは出来る限り手を抜くよう指示した。

ものの数分間、追つて追われるの試合展開が続き。始めは応援していた観客も、真面目にやれという声がちらほら聞こえてきた。

仕方なく、イッキはチャンバラソードで適当に攻撃するよう言つた。

かきん…！ロクショウの力無い一撃が、左腕の盾に僅かな跡をつける。

「お待ちください！」

カリンが祈る形で両手を握り、叫んだ。そして、薄らと涙目を浮かべた。なんだよ、なんだよ。あの子、びびっちゃったのかな？こりや、次の試合まで待つか。観客から不満気な声が漏れ、闘技台の

選手たちの耳にもしかと届いた。

「…イッキ…手加減しようという気持ちは良いが。ここは、思い切つて全力で攻撃しないか?」

ロクシヨウまでも不満を言つてきた。焦るイッキに観衆を物とせず、カリンはイッキに訴えかけた。

「イッキさん!…私が最初に言つたことを覚えてますか?私は、真剣ロボトルを要望し、あなたは確かに了承してくれました。…しかし、何なのですか。これは!?イッキさんほどの実力をお持ちの方からすれば、私が全力でお相手するには力不足だとは承知します。ですが、それらを承知の上で、私のナースちゃんと戦つてくれることをあなたは承つてくれました……。短い時間とはいえ、私が前にコウジさんとのロボトルで見せた、イッキさんとロクちゃんの実力はこんなものでは無いはずです。不承を承知でお願いします。イッキさん、どうか私と真剣にロボトルをしてください!」

切々と、無垢で力強い可憐な少女の訴えかけに、惑うイッキ。不満を漏らした観衆もざわめきながら、少女の声に耳を傾けていた。

イッキは一度頬を張り、深呼吸すると、決然とした表情を浮かべてミスター・うるちに一声かけた。

「審判員さん。試合中断してご免なさい。これから、戦闘開始します」

事態をどう収集したのかと本部と相談していたるちは、先ほどとは一変したイッキの表情を見て、本部にはもう大丈夫ですと答え、高々と試合続行を告げた。

「細かな指示は僕に任せて。ロクシヨウは、自分が思つたとおりの全力アタックをしろ!」

ロクシヨウは意氣揚々に「了解」と言つた。

本気を出したロクシヨウの前に、ナースの攻撃など掠りもしなかつた。ロクシヨウがぴたりと止まる。ナースが横様に切りかかる。「腰付きや振り方がなつてない」

ロクシヨウは背を逸らした。電流ソードは空しく中を掻き切り、

ナースがバランスを大きく崩す。ロクシヨウは左の軸をちょっと蹴る、ナースはすつ転ぶ。両足でナースの剣と盾を抑え、右腕で喉を締め、左腕の三本ボトルがついたメリケン、ピコペコハンマーをいつでも降り下ろせる態勢を構えた。

会場一帯は、少女がどう判断をくだすか注目していた。

カリンは拳手し、審判に降参の意を伝えた。ミスター・うるちがイッキとロクシヨウの勝利を告げた。

「やはりお強いですね。イッキさんとロクちゃんは……では、約束通り」

カリンはメダロッチから予備用のセントナースの頭部を、にっこりと微笑みながらイッキに渡した。こうして間近で見ると、やっぱりカリンちゃんは可愛かった。

イッキは赤らめた頬を搔き、躊躇いがちにバーツを受け取った。

会場から、青春な青臭い試合を見せてくれた二人に。わざやかな拍手が送られた。

「悶着あるかなと身構えたが、意外にもコウジはイッキを咎めた
りしなかつた。

「カリンがあんなに積極的にロボトルしようとするなんて初めて見るぜ。……でも……そのお前がお前だとはな……。まつー準決勝で会おうぜ！」

キクヒメの一回戦対戦相手は、ショーチュー王国という聞いたこともないような小国の中族。キール王子が相手だった。

キール王子は中東風の顔立ちで、インドの貴族っぽい服を着ていた。まだ幼く、イッキより一つ年下だった。頭の金でできた冠が、見る者に彼を、王子様に見えないことも無いと思わせた。

対戦結果だが、試合は一分以内にキクヒメがキール王子の愛機の一機、マッドマッスルに勝利。そのまま次の試合へ……と、ミスター

一・うるちは進めたいところであつたが、キール王子は激しく喚いた。

「――#\$?+K P)・*=%(%GBI&..ギイ」

ショーチューキング独特の言語でキール王子は喚き、泣き、怒つた。通訳の日本人男性も同じく、「お…王子様落ち着いてください!トラトラ、ミハラヤマノボレ。ウンヌンカンヌン、パラポロピレ、力クカクシカジカ」と難解な言語で王子を懸命に慰めた。

ここでS Pが登場し、通訳とS Pが「一人がかりでキール王子を連れていった。

一回戦に続いて二回戦もこの有様。観客に運営担当者たちは、先行きを心配した。だが、その後、第一試合と第二試合以外は滞りなく試合が進められた。

後半戦。アリカ対コウジ。イッキはできればアリカの勝利を願つた。任せなさい!アリカは無い胸をどんどん叩いた。一分後、アリカは笑顔で控え室に帰ってきた。イッキはアリカの琴線に触れぬよう聞いた。アリカは晴れ晴れとした顔で「完敗した」と即答。

「じゃ。私、応援席に居る母さんとチドリおばさんの所に行くわ」二十分の休憩を挟み、二回戦第一試合。イッキ&ロクショウチームVSキクヒメ&セリーニャの対戦。

今まで辛酸を舐めさせられたが。今度こそはキクヒメとセリーニャに打ち勝つぞと、イッキとロクショウは燃えた。

右腕のパークを残しておいたトイワールドの物に替えて、二人は試合に臨んだ。

「はつはーん!トイワールドのルーーであたいのセリーニャの動きを封じようつてわけね…。甘いわよ。瘦せても枯れてもスクリューズのボス、このキクヒメ様がその程度の戦法を見抜けないとでも思つていたの?」

「うつ…」

見抜かれた。が、想定の範囲内だ。ここはキクヒメでなくとも、イッキがやろうとしていることは誰もがお見通しだ。イッキも、セ

リーニャをそう簡単に捕らえられないのは承知の上。ただ、イッキとロクショウはキクヒメのくせ。というかセリーニャのくせに勘づきつつあった。

ペッパー・キヤットのセリーニャが、電流を爆ぜさせた両腕で殴りかかってきた。ロクショウはハンマーで応戦。一転、二転！セリーニャの華麗なバック転。セリーニャは勢いをつけて回転跳躍。そこを、間合いを詰めていたロクショウはセリーニャの体に右腕のルアーを引っ掛けた。

ルアーを回転させ、そのまま地面に一回叩きつける。そして、ハンマーで頭を殴りつけた。セリーニャの顔半分がひしゃげ、右耳がちぎれた。ピン！横向きに倒れたセリーニャから、メダルがこぼれた。

キクヒメの多少の油断。トリッキーなセリーニャの、数少ない隙ある行動パターン。以前記録していた戦闘パターン例と、予め起動しておいた索敵で、セリーニャの動きをロクショウは分析していたのだ。

あんぐりと口を開いたキクヒメを残し、イッキとロクショウは控え室に戻った。戻るながら、イッキは右手だけ小さくガツッポーズを決めた。遂に因縁の相手、スクリューズのキクヒメとセリーニャに実力で勝てた。

三回戦前。相手選手のほうからイッキに会いに来た。

「ハアイ！『機嫌いがが、リトルボーイ』

お腹回りと僅かに胸元が露出した白いタンクトップ、ハサミでちょんぎつたかのような太腿の辺りまでしかない短いジーンズ、ボサボサの頭をポニーtailにまとめ、顔を覆うように横幅に拡がった黒いアップラウンドのサングラスを付けた。ボン、キュツ、ボンという表現がよく似合う。グラマラスな黒人美女がイッキに話しかけ

た。

イッキは思わず視線を逸らしてしまった。相手と視線を合わせたがらない日本人特有の行動ではなく、目のやり場に困ったからだ。「あら、緊張しているのアナタ? 私、ブラジル生まれのシャンティーね。次のアナタのお相手よ」

イッキはお茶濁しな挨拶を返した。それにしても、色っぽくて野性的だ。同じ大人のお姉さんでも、ナエが社交界の貴婦人だとすれば、シャンティーは都会の荒波を豪快に乗り切る気丈な女性といった感じ。

「あらあら、この子も…。意味ありげに笑い、シャンティーは去ろうとした。立ち去ろうとするシャンティーに、イッキは震えるも力の籠もつた声で言つた。

「…あの…僕、負ける気はありませんから!」

イッキの発言に、シャンティーは怪しく艶な笑みを浮かべた。

あら…ふふ…どうやら、一回戦の女や二回戦のスケベ男と違つて、このリトルボーアとの対戦は楽しめそうね。

シャンティーより遅れてイッキも闘技台にきた。使用するメダロットは光太郎。

重力系を苦手とするロクシヨウよりも、滑空する自分のほうが有利に戦えるはずだと、光太郎自らがそう提案し。ロクシヨウも、こ<着は光太郎が良いと押した。

シャンティーの愛機は、サフィオと名付けられたスフィンクスをモ<着ルとしたメダロット、キングファラオ。

転送したドラゴンビートル光太郎の頭部だけを、ソニックタンクの物に付け替えた。

「フフフ…。キュー^トなリトルボーア、お・て・あ・わ・せブリー^{ズ!}」

キングファラオが両腕をぶんぶん振り回しながら、空中の光太郎に先制攻撃を仕掛けた。鈍くて重い戦車タイプの脚部のキングファラオの素早い攻撃に、イッキと光太郎は面食らつたが冷静に対処し。空振りしたところを、左腕の重力波射撃で脚部を攻撃。が、僅かにへこんだだけだった。キングファラオの脚部装甲の厚さは、全メダロットでも指折りもの。如何に強力な攻撃でも、一発や二発じゃこの装甲は崩せない。

キングファラオのサフィオはもう一回同じ攻撃を仕掛け、光太郎は重力波射撃を浴びせてやつた。

当たらないと判断したシャンティーとサフィオは動くの止めて、重たい脚部を砲台とし、接近行動から遠隔攻撃に切り替えた。砲台としたキングファラオは、三百六十度回転可能な腕、首、胴体を光太郎の飛ぶ方向に合わせて重力波を撃ちまくつた。

光太郎も反撃したいところだが、銃口が内よりにあるドラゴンビルトの腕では撃ちづらく。仮に撃てても、相手の重力波に打ち消されてしまう。

一分間、逃げの一手が続いた。イッキはどうしたものかと思考した。キングファラオ並みの威力がある頭のナパーム弾でめくらましをも考えたが、そんな手はあまり通用しそうにないし、一発でキングファラオを落とせる自信が無い。

「くつそ！あの分厚い脚を何とかせえへんとな！」

メダロットからの通信で、光太郎が愚痴を言った。いや、めくらまし事態が効かないわけではない。要是いようだ。でも、その使い方をどうすればいいやら……。

光太郎の装甲では一発喰らうだけでも危ないから、無茶な特攻はできない。

悩むイッキに、光太郎が通信を送った。

「イッキやん。こんなときはもつたいたいと思わず、一発防がれでもナパークをぶち込むべきや！あの硬い装甲を一発じや落とせへんやううけど、活路は開けるはずやで！！」

「一発に賭けるか、めぐらましか…。よし！」うなつたら、やってみるか」

光太郎は多少、重力波を喰らつ覚悟で撃ち返した。そうして、相手の両腕が塞がり、キングファラオが頭部のナパークを撃つよりも早く、光太郎は一発のナパークを発射した。しかし、態勢が悪かつたため、一発はキングファラオの手前。一発は、シャンデーとキングファラオ阻むように硝煙が立ち上った。

ヴィイイイーン！会場の喚起装置が作動した。

「ノンノン。甘いわね。リトルボーキ。中々エキサイティングだつたけど、切り札を無くした以上、アナタの勝ちはノー ホープ。サフィオもアナタのトンボさんの動きをそろそろロックオンしたよ！」

グシャーン！

何かが硬い物に衝突した音。シャンデーは光太郎が墜落したと思い、口端を歪めた。だが、メダロッチから愛機であるサフィオの電波が途絶えた。

「W H Y ! ?

硝煙が晴れると、両腕が折れ曲がった光太郎がキングファラオの真上を旋回しており、キングファラオの背部のメダル挿入口が開いて、メダルは地面に転がっていた。

キングファラオの後頭部と顔面は潰されていた。

イッキと光太郎は必殺のナパーク一発を決めてとして使わず、大胆にも一発ともめぐらましに使用した。シャンデーとキングファラオ・サフィオの視界を遮り、光太郎は一箇所に自身を砲台として固定したサフィオの頭部を、細い両腕が折れるのも構わず空中から勢いよく叩きつけた。

キングファラオの脚部を破壊するのは到底無理だが、頭部や腕なら別。頭部と腕の装甲は、脚部の半分にも満たない。

「第三回戦、ウイナーはイッキと光太郎選手！」

「イッキアグレート！一発ともめぐらまし使うなんて、ワタシでも中々できない。グレイトな大和魂ね、アナタ！」

派手な試合ぶりに会場は大興奮。一人は速やかに控え室へ戻された。

控え室へ戻るとき、シャンデーはイッキの肩に手を置き、そつとほっぺにキスをした。大人の女性の、甘い吐息と情熱的なキス。

「素晴らしいファイトを見させてくれた。せめてものプレゼントよ。ジヤ、後半戦も頑張つてね。イッキボーカー！」

シャンデーのとびきりのご褒美に、イッキは控え室に戻ることも忘れて、通路でえへらえへらと有頂天になつた。次の試合の選手が、流し目で崩れた顔のイッキを見た。

「…イッキやん。あかんわ、目が眩んでるやろな」

「落ち着くまで辛抱するしかないな」

メダロッチに居る一機は、うら若きマスターが早いとこ正気に戻るのを苦笑混じりで待ちわびた。

眠れない。視線が勝手に天井の木目調を追いかけていた。

夏休みをおもいつきり楽しむために来たメダロット島。僕に、ロクショウ、光太郎は今日の大会で今まで培ってきた力を存分に奮い、戦つた。

満足したはず。なのに、この言葉では言い難い違和感はなんだろう？

確かにロボトル大会は楽しくて燃えた。ただ、終わってみると、イツキは得も言われぬ焦燥感に襲われた。何をやっているのだろう、僕は…。楽しくて燃えたけど、メダロットたちはどうなのだろう？機械だから痛覚は無くとも、何らかの衝撃やら変化は確実に感じるはず。そもそも、僕は何を思つてメダロットを欲したんだつけ。

家族？友人？親友？兄弟？ペット？相棒？

今日の大会も新たなる仲間となりうるかもしない。プリティープライムに似合うメダルの入手、それと、自分とメダロットたちの腕試しのために参加した。…でも、そもそも、僕は何でプリティープライムを欲しいと思ったのかな？

現在、メダロット最大収容可能数のメダロットは三体。三体目のメダロットも迎え入れられれば、ロボトル戦略の幅が拡がり、さぞかし賑やかになるだろうなど想像した。

ひよつとしたら、あくまで建前上のこと。僕は、ただ単に収集意欲を満足させるために欲しがったのかもしれない。最初にメダロットを欲した理由も、周りが持つていてるから、何とか仲間外れになりたくないという思いが僅かにあつた。

大会終了後、ヘベレケ博士という、メダロット博士よりもっとマツドサイエンティスト風情の格好をしたお爺さんが演説にきた。演説の中で、博士はこんなことを言つた。最初は何でもなかつた。

しかし、ヘベレケ博士の俺の言葉を聞けとでも言うかのよつた厳

しく問い合わせる語り口に。イッキは次第に呑まれてしまった。

「最後に一言添えたい。近頃、勘違いをされている方もおられるようだが、メダロットによるロボトルはあくまでスポーツの一環の過ぎず、メダロットは決してロボトルやメダスポーツの為だけのお遊び玩具ではありませぬ。メダロットの真なる活用性はもっと別のところにあります。そこを誤解なされぬよう、私からお願ひ申し上げます」

博士の言葉に、胸をちくりと刺されたような気がした。

僕はロクショウ、光太郎と一緒にロボトルやメダスポーツをした。それって、僕が満足するためだけにメダロットたちにやらせただけじゃないか？ロボトルの際、命令することにある種の優越感を持つてしまうときがある。その感情を抑えるようにはしているが。ふとして、そんな感情を抱いてしまつ自分を肩野郎と罵った。

もう一度、考えてみた。僕にとつてのメダロットって何？

同じ言葉の羅列がイッキの頭を過ぎる。どの言葉にも当て嵌るが、どの言葉にも当て嵌らないようにも思えなかつた。

安楽椅子に伏せる。きいきい……。揺れるがままに安楽椅子に身を任せた。

ロクショウ、光太郎に聞こうかな。

止めておこう。というより、今は聞く勇気が無い。一體とも僕より賢い、それ故にどんな答えが返ってくるか逆に不安。どうも眠れない。イッキは安楽椅子を離れ、片端の窓側に眠るチドリに寄つた。じつと立つ我が子の気配に気付き、チドリは半目開いた。

「……イッキ……どうしたの？……明日、一杯遊びたかつたら早く寝なさい」

「ママ……あの、一緒に寝ていい

チドリは理由も聞かず、イッキを布団に招いた。

「一緒に寝るなんて、小学校一年生以来ね」

イッキは一年生の頃から、一人で寝るよう心がけた。これも、周囲に既に一人で寝ている子たちがいて、アリカもとつぐのとうに

人で寝ていた。自分も負けてられない。突き詰めれば、結局は周囲に流されただけ。僕つて、あんまり変わらないなあ…。

… そうじゃない。それもあるが、一人で寝ようと思い立つたのは訳がある。パパとママが、僕を甘ちゃん扱いするしかない子供だと思っていたからだ。

何より、認めてもらいたかった。僕は、もうそこまで子供扱いする必要が無いと分かってもらいたかった。だから、部屋を暗くして一人で寝るのは怖かつたけど、もう大きくなつたんだぞというのを見せたくて、一人で寝るように心がけたんだ。

僕の部屋に度々ソルティが入ってきたから実際は一人じゃなかつたが、これは置いとく。最初は傍らにママやパパのどちらもいなくて寝付けなかつたが、何時頃かぐつすりと安眠していた。

たまに寝付けないこともあるが、適当なことを考えていたら眠れた。今日は、適当なことを考えても眠れそうにない。それで母親の布団に潜るのも情けないが、今は無性にママの布団に潜りたかった。こういうの、単なる甘え？ それとも、卑怯な逃げ方かな？

イッキはチドリに頭を撫でられ、ふんわりと包み込むあたたかな布団の中で色々なことを考えているうちに、安らかな眠りについた。

目を開けたら、チドリがいたはずの布団の中はイッキ一人が眠りこけていた。イッキはチドリより一時間遅く、九時に目を覚ました。ちょうど、ルームサービスとして朝食がテーブルに配膳されて、イッキはその匂いを嗅ぎつけた。

和洋風のテーブルに置かれた物は、ご飯、納豆、アサリの味噌汁、焼き鰯と和風物が占めていた。一つ、お丸のような形をしたガラス製のお皿にヨーグルトが盛られていた。

洗顔を済ませ、朝食を一人で召し上がつた。

和風にヨーグルトが混ざるのは違和感がありすぎたが、食べる段

階になるととして気にならなくなつた。

イッキは昨夜の悩みなど嘘のよう、ヨーグルトを口にかしこみ、焼き鯖と納豆盛りご飯をぺろりと平らげ、最後は程々に熱くなつたアサリの味噌汁を啜つた。

ママはヨーグルト、焼き鯖、味噌汁を食べ終わり、ようやく納豆といい飯にかかるところだった。自分のベッドに座り、テレビをつけた。しばし、ニュースを見て時間を潰す。

降水確率は10%

太陽がさんさんと海を照らし、今すぐ海に飛び込みたい気持ちにさせられた。赤いジャケットを着たライフガードの男性が、カッパ型のカッパーロードを連れて浜辺を監視していた。

「イッキ、今日は海でのんびりしない？」

「うん、僕もそのつもりだよ」

イッキはバッグからくしゃくしゃに折り畳まれた浮き輪を取り出し、口で直接空気を吹き込んだ。

話す気はなさそうね。普段と変わらぬイッキを見て、チドリはそう思つた。昨日、ヘベレケ博士という何とも言い表しにくい人物の演説を聞いた後、チドリはイッキの微妙な変化を感じていた。あって聞かなかつた。息子が話したいときには話してくれれば良かつた。イッキは何も言わなかつたが、見た感じ、もつ動搖はしてない様子だ。

十時に女中さんが部屋を訪れ、朝食セットを片付けた。

女中さんが出ていつたら、浴室から海水パンツ姿のイッキが姿を現した。

「ロクショウたちと先に行つていい」

チドリが良いと頷くと、イッキは素早くひつたぐるよひメダロツチを腕に巻き、浮き輪を担いでドアを開けた。

手を繋ぐカップル。砂のお城を作る祖父と孫娘。浜辺で寝そべるお姉さん。ヨットにボートを乗り回す人。そして、人々に挟まれて遊ぶメダロット。どこにでもある真夏の海水浴場の光景。

アリカとイッキ、メダロットたちはまずは遊泳を満喫した。口クショウは静かに浜辺で海を見上げ、一脚パンツを付けた光太郎は砂に寝転がてのんびり日光浴。海で一緒に泳いだのは、スクール水着のアリカと潜水パンツを付けたプラスだけだった。海から、水着の上に服を着た甘酒あばさんと、肩にタオル羽織った柄にもなく水色のビキニを着たママがビーチパラソルの下で座っていた。

正直言って、ビキニは止めもらいたかったな。だが、たまに通る男性がちらりとイッキママに視線を送るのを見て、何とも言えない喜びと恥ずかしさが湧いた。

お昼までたっぷり遊泳を楽しみ、次は昼食。海の家での焼きそば。普通に食べるならどうということない。こうして海を眺めての焼きそばは何割か美味しさが増している気がする。

お昼を済ましたあと、アリカは散策すると言い。カメラを持つてどこかへと行つた。多分、記事のネタ探しが目的だろう。

イッキは一旦ホテルに戻り、口クショウを交えて磯釣をした。昨夜、パパがホテルに訪れた際、職場に置けないからと言って釣り道具を置いてつたのだ。

「…うむ、私には砂遊びよりかは釣りが向いているな」

と言い、口クショウは静かに座禅した。アイカメラの光が消えているので、これでは機能しているのか起動しているのか判別に困る。その内、光太郎も加わった。静寂。なんとなくだが、イッキはお年寄りに挟まれたような気持ちになつた。

言おうかな。今、僕が口クショウ、光太郎に対して思つたことを

…。

「…やあ言おうとするとき、急に周囲の音が聞こえなくなり、自分の心音や息遣いしか聞こえなくなつた。

…、…、…。イッキは口を開いた。

「ねえ、あのや。一つ聞いて欲しいことがあるんだけど」

ロクシヨウのカメラアイに光が灯る。

辿たどしく、イッキは昨夜の心境を語った。ロクシヨウ、光太郎は最後まで口を挟まず。イッキが語り終えるまで待った。

イッキはそつと一体の顔を窺つた。変わることがないその機械の表情からは、何を考えているのか計り知れない。やがて、光太郎はしようもなとぼやいた。

「珍しく深刻な顔してるなと思いきや。あんさん、そげえなことで悩んどつたん？」

「えつ？ だつて…」

「ほな、聞くけど。イッキやんは普段から、わいらのことを単なる人形と考えとんのか？」

「そんなこと思つてないよ！ ただ、常にじやないけど、こんな風に考えてしまつ俺はメダロッターとしても人としてもどうかなつて…」

…

「イッキやんがあからさまに見下した態度取るなら別やけど。そう考えてもしまうことがあるだけで、あんたはそうしたいわけやないやろ。なら、そんでええやん。わいの前の持主の家族なんて、機械が人間臭い行動取るのにめっちゃ不愉快を示すような人たちやつた。その点、イッキやんはメダロットによつ理解がある人や。だから、そんなこととはいえ、イッキがわいらのこととそんなんに真剣に悩んどうつたことを知つて感激したで。ほんま」

「いや… でもさあ…」

「そう気に病むなイッキ」

ロクシヨウが竿を振るい、一匹のキスが釣れた。ロクシヨウはそれをバケツに入れてから、イッキを見た。

「光太郎が良いと言つていい。ならば、今はそれで良いではないか。気持ちばかり焦り、何かを無理にしようとして何もできなかつたり、却つて余計に悪化するようななら、何もしなくても良いではないか。お前にはまだ時間があり、それに、私や光太郎というメダロット以

外にも支えとなる存在がいる。

だから、そう事を急くな。魚が

逃げてしまうぞ」

「ロクヨン…じゃなくて、ロクやんの言つ通りやで」

苦笑いするしかなかつた。イッキが思つていたより、一体のメダロットは主人より大人びていた。

「メダロッターとしてはまだ半人前やけど、人としてはその考えは立派やと思うで」

光太郎は気軽に半人前と言つた。その発言にイッキはこけそうになり、益々顔を半笑いで歪めた。その顔のまま空を見上げる。小さな雲が所狭しに点在するが、太陽を遮るほどの規模は無かつた。昨日、眠れないかもしぬないほど悩んだが、一体はそれほど気に留めなかつた。

何だか、だんだんどうでもよくなつてきた。

元気が出た。イッキはロクショウに負けずと釣りに取り掛からうとしたら、お昼時にネタ探しの散策に出張つたアリカが帰つてきた。

「あら…イッキ。何か、お昼前の時と違つて憑き物が落ちたような

顔してゐるわね」

「憑き物が落ちたつて何？」

「それはともかく。良い情報を入手したわよ」

アリカがショルダーバッグからこれ見よがしに手帳をチラ見せた。

「ふーん…で」

「ふーん…で…てつ。もう少し反応したらどうなの？」

気持ちが落ち着いた今。イッキとしては今だけはロクショウ、光太郎と一緒に居たく、アリカに煩わされたくなかった。アリカが唇を尖らし、腕を組んでそっぽを向いた。

「あつそ。じゃあ、いいわ。あーあ、次の対戦相手を偶然取材出来たつてのに。イッキが要らないなら、コウジ君にでも教えちゃおうかな」

四回戦の相手は顔に僅かながら面貌があり、黒縁丸眼鏡をかけ、

その割りにはオタクっぽさを感じさせず、爽やかさと神秘性がある目鼻筋整った黒髪のネイティップアメリカンの青年。名はジョー・スイハン。一回戦はトイレに行って、二回戦はシャンティーさんの色気に惑わされ見逃してしまった。

確かに二回戦ではティーピーを使っていたような気がする。試合は二十秒で片がついた。僕はよく分からなかつたが、一体はジョー・スイハンの実力を見抜いていた。ロクショウは見ていて体が疼くと言い、光太郎は実力を出し切つてないと述べた。

「いやー、凄いなアリカは。ジャーナリストを目指しているだけあって、目の付け所が違うね。本当」

イッキはすわと態度を改め、へりくだつた調子で遠回りに見せてと言つた。だが、イッキの媚売りはあまりにも下手だつた。アリカはますますそつぽを向いた。

「そんなんじゃ見せて上げない」

「……そんなんじゃつて。お願い！アリカ！さつき言つたこと反省するから！だから、どんな事でもいいから聞かせてちょうだい！」

アリカはイッキのほうを振り返り、口を大きく歪めた。本人は笑つているつもりだろうが、イッキには不気味に思えた。

「じゃあ、約束してくれる」

「何を……？」

「絶対に勝つこと。これが条件よ。ジャーナリストが骨身を削つて得た情報を入手する代金。と言つより、あんたに提示する条件としては安い物でしょ？」

「うん。確かに情報量としては安い物だ」

ロクショウが不敵に答えた。

よし！イッキは心の中で気合を発した。ともかくにも、大会でやれるとここまでやつてみるしかないが。だが、今は磯釣りに専念した。

13・メダロット島（リリード）（後書き）

ロクシヨウの台詞はメダロット4（漫画）での、とある人物（動物）が発した台詞を捻つたものです。

もう一つ付け加えれば、武士も「うん」とか言つたりします。

クワガタでアメリカ代表如何な物かなと思いましたが。漫画版での勝負、カブトでのロシアの女の子との関係を考慮し、クワガタの対戦相手はアメリカ代表にしました。

14・メタロラ 壁(図四三)(温帶)

なまらぬで。

メダロツ島ロボトル大会。一日前の試合で人数は絞られたので、今日は四回戦から決勝戦まで執り行う。

また、四回戦からの追加ルールで最大三体まで使用可能となる。向こうが一体使用に対し、同意さえ得られれば、参戦最台数の三体まで使用できる。

イッキの相手、ジョー・スイハンは一回戦ではニンニンジャ。二回戦はティーピー。三回戦はサムライを使用したことがアリカの情報で分かった。ジョー・スイハンは、高速型の格闘タイプを好んで戦うスタイルのようだ。主力機がネイティブアメリカンをモデルとしたティーピーなのは納得できるが、他一機がニンニンジャとサムライとは、随分日本的に思えた。

取材したアリカによると、ジョー・スイハンは親日派らしい。

十年前、日本で開催された世界大会に参戦したのがきっかけで。以来、日本文化に興味と憧れを抱くようになった。もう一つ、父親のジャー・スイハンと共に参戦した際、準決勝で戦つたとある日本人メダロツター、名は「ヒカル」という自分と同い年の人物との再戦を果たす目的もあり、大学研究論文作成のついでにメダロツ島の大会に参加した。

アリカが身近にいる同姓同名のヒカルのことを告げたら、ジョー・スイハンは一笑に付した。

まさか、ヒカルをそんな不真面目な「コンビニ店員と一緒にしないほうがいい。

否定の理由に、イッキとアリカは妙に納得してしまった。あのおさぼりヒカル店員がとてもじゃないが、魔の十日間事件を解決した伝説的なメダロツターとは到底思い浮かばない。

ロクショウ、光太郎と相談した結果。装甲が薄いティーピー、ニンニンジャはロクショウが。装甲は厚いが、一機と比べたら幾分か

鈍闇なサムライは光太郎が相手をすることにした。

しかし、相手が三体を使用してくる可能性は十分に有りうる。

「使わせればよい。相手が量を持つて攻めるならば。」こちらは、一

瞬の決断と知恵で対処すればいい」

大胆にも、ロクシショウはこう言つた。

だが、アリカから聞いた感じ、ジョー・スイハンはそういった戦い方をあまりしなさそう。こちらが一対一を望めば、応じてくれそうだ。

選手控え室。初日は人種の坩堝と化していたロッカールームも今や残すところ十六人となり、賑わう外と打つて変わって、静寂だつた。

ジョー・スイハンは目を閉じ、十年前の記憶に遡つていた。

叔父がスポンサーとなり、私と父はメダロットの研究に専念できた。その叔父の工場が経営難に陥り、閉鎖されるかもしれない。叔父の経営する、メダロットを含む部品請負の工場により地元は潤っている。叔父の工場が潰れれば、研究資金が乏しくなるだけではなく、地元のインディアンたちの就職先が失われることにほかならない。

私と父は叔父が経営するメダロット工場を救うため、日本のメダロット社に却下されたオリジナルメダロット・ティー・ピーを使い、世界大会に出場した。この大会で上位成績を収めれば、デザインがダサいという理由でメダロット社が却下したティー・ピーの実力が認められ、ひいては工場の宣伝にも繋がり、一定数の注文が入れば、工場と地元は救われる。

今だから明せるが、攻撃しかできない機体三機で勝ち抜くのは、正直辛かつた。

だが、私と父であるジャー・スイハンはメダロットに一生を捧げ

ることにした馬鹿。今ここで、その知識を持て余した時間有効利用しなくてどうする。

毎度苦戦を強いられるも、育て上げたメダルと完成された親子の「コンビプレイで勝ち進んでいった。

：そして、運命の準決勝戦。父が体調を崩し、私一人で挑むことになつた。相手は私と同じ年の日本人。しかも、たつた一人で三機を操作してきた。昔のこととて一番記憶に刻まれたことを挙げるなら、あの日のヒカルとの試合を挙げる。

父の一機と相手の一機は同時に倒れ、リーダー機である私のティーピーとヒカルのヘッドシザースを残すのみ。小細工無用の真正面からの壮絶な殴り合いの末、私は敗退してしまつた。

負けたショックは大きく、私は父と叔父、故郷の同胞に会わせる顔がなかつた。

だが、事態は好転した。

事情を知つたメティアがドラマチックに報道してくれたお陰もあり、叔父の工場にティーピーの注文が殺到。また、メダロットとメダロッターの実力を加味しても、純正攻撃機体三機で準決勝まで勝ち抜けたのは賞賛に値する、と。メダロット社の評価と資金援助も受けて、地元の大手就職先である工場は救われた。

ジョー・スイハンは眼鏡をかけたガリ勉青年にしか過ぎないと思われているが、ロボトルになると内なる闘志をたぎらせる。

今日の四回戦の相手。天領イツキ君だつて？九歳という年齢ながら、強敵相手にドラマ的な試合展開で勝利し、おまけに愛機はヘッズシザースときた。運命のような物を感じずにはいられなかつた。

闘技台出入口まで、赤い半袖シャツを着たちよんまげ頭の少年が、一機のメダロットと何やら真剣に話し合つていた。

少年が私に気付き、会釈した。

「やあ、どうも。君は天領イツキ君だね。私はジョー・スイハンと申します。以後お見知りおきを」

ジョーが手を差し出すと、しどろもどろにイツキはジョーの手を

握った。勤勉そうな優男な外見と反して、ジョー・スイハンの握力は意外と強かつた。

「…あつ。どうも。よろしくお願ひします」

「私と親戚一同で開発したメダロットの力、お見せしますよ」

黒縁眼鏡の奥の柔軟な瞳が、一瞬キラリと光つたような気がした。

二日前同様、ミスター・うるちが開幕を宣言した。

「レディース＆ジェントルメンの皆さん！大会を観戦するため、今回もご足労いただき感謝感激の極みでございます。それでは、後半第四回戦第一試合は若手注目度N.O.2の天領イツキ選手のお相手は……。メダロットの研究と開発を行われている若き天才、さらりと靡く黒髪と円かな瞳が神秘的、本国アメリカで通称”歩くメダロット図鑑”と呼ばれるジョー・スイハン選手！！

さて、好カード面白押しの後半戦。若きメダロッターたちは白日の下、如何な戦いぶりを見せてくれるか私も観客席の皆様方も期待しております。…では、両者位置について

イツキとジョー・スイハンは闘技台前まで寄ると、腕に巻いたメダロットチを掲げた。ジョーのメダロットチから、ティーピーが転送された。イツキはロクショウを転送した。

「場外。時間内におけるダメージ量の合計。あるいは、どちらかのメダロットが機能停止したら試合終了です！それでは、ロボトルフアーリトオ！！」

ロクショウが舞い、ティーピーも舞う。ロクショウが切りかれば、ティーピーは緑のボクシンググローブの形をした腕で殴り返す。どちらも、紙一重のところで攻撃を避けられている。

ティーピーのグローブ型の両腕が上下角度八十度に開き、そこから、圧縮された幾つもの硫酸が砲丸となつて闘技台に迸る。コンクリートの表面がじゅわじゅわと音を立てて溶け、強烈な臭いが会場

内に漂う。換気装置がフル作動して、懸命に臭気を浄化して外へ流す。

観客はもちろん。イッキは袖で鼻を覆い、ミスター・うるちはハンカチで鼻を抑えた。ティーピーのマスターであるジョー・スイハンは風邪防止用マスクを装着していた。

鼻という五感機能が無いメダロットたちは臭いなど気にせず。マスターの指示が無くとも戦いの手を緩めなかつた。イッキもロクショウも、ティーピーから放たれる強力な硫酸砲には注意した。

試合は数秒経つごとに白熱した。ロクショウ、ティーピーは、互いに首の皮一枚のところで攻撃を当てるようになつてきた。グシャン！大口を開けたティーピーの右腕がロクショウの肩に付いた羽状の肩当てをもぎれば、ロクショウも仕返しにと、ティーピーの頭に付いたインディアンの羽飾りを模した物をハンマーでへし折つた。

臭氣で辟易していた観客も、いつの間にか、手に汗握る試合に見とれていた。

ミスター・うるちとジョー・スイハンは、既視感を感じた。三対三ではなく、一対一という違いはあるが、あの日あの時の試合展開と瓜二つではないか。

ジョーのメダロットに、ティーピーが通信を送つた。

「あいつは新型だが、同機種であることには間違いない。どうだ、ジョー？ あいつをあの日のあいつに見立てて、今度こそ勝利しないか？」

普段、こちらから求めなければ口を開くことが無いティーピーが自ら意思表示したことにより、ジョーは驚いた。どうやら、私のメダロットには熊。あるいは、狼の魂が宿っているのかもしれない。

「存分にやれ」

声こそ聞こえなかつたが、イッキとジョー・スイハンは同じ指示を出していた。

両機、攻撃の手を止めて、正視し合つ。次の瞬間。両機は踊るようにぐるぐると動き回り出し、戦闘を再開した。戦略も糞もない。ヘッドシザースとティーピー、一体のメダロットは原始的。本能的とでも言つべきか、激しい殴り合いをした。

パークの装甲が切れ飛び、金属が衝突する鈍い音が途切れることなくドーム内に響く。もしも人間なら、皮がめくれ、爪は剥がれ、折れた骨が体から飛び出すといつ、見るも耐え難い光景になつていただろう。

ロクショウの捻れたソードがティーピーの右足を抉れば、ティーピーも右腕でロクショウの右足を破壊した。ロクショウとティーピーは左足に全体重を載せて、渾身の重い左ストレートを顔面に食らわせた。両機体の顔が大きく歪む、どちらもまともに必殺の一撃が頭部に直撃した。

あわや、両方機能停止かと思われたとき。ロクショウの左膝が揺らぐ。イッキはあつ！と、叫びそうになつた。だが、それよりも先にティーピーのほうがロクショウの足元に崩れ落ち、メダルが外れた。

また、負けてしまつたか。九歳の自分なら、今頃号泣していただろつが。あの日と今では事情が違う。悔しい感情はあるが、どこか清々しくも思えた。重荷を背負わず、自分とメダロットがやりたいように戦つたからかな。イッキはロクショウを、ジョーはティーピーを回収しに闘技台に上がつた。イッキとジョーは歩み寄る形となり、ジョーはイッキに謝辞を述べた。

「ありがとうございます。前途ある日本のメダロッターと全力で戦えて、光栄の至りです」

「いや……あの……それほどでも。それに、頑張ったのはメダロットですし。それにしても、日本語お上手ですね」

「日本は何かと思い出の多い国ですからね。この大会でのロボトルは、今後のメダロットの研究に活かしたいと思います」

この言葉に、イッキは「光栄です！！」と元気よく返答した。

人間の技師と回復機能を持つメダロットがロクショウの治療に当たる中、イッキは次の対戦相手を見て、溜め息をついた。

次の相手は、二日前、プリティープライムのパーティを買いに行く途中、突如としてイッキたちに突っかかるつてきた、あの中国人風の謎のメダロッターが相手だからだ。実力は定かではないが、ここまで来たということは、決してまぐれや偶然だけでは来れない。あのハイテンションぶりとへんてこりんな雄叫びといい、イッキに意味不明な理由で勝負を申し込んだといい。あんなのと戦うかと思えば、別の意味で緊張してきた。

そこへ、耳障りな笑い声。嫌な予感がした。

横を向くと、謎のメダロッターが仁王立ちしていた。

「…………また……」

「ふつふつふ。遂にこのときが来たようだな。いざ、尋常に勝負」「わあっ！早また真似するなつてば」

と、騒ぎを聞きつけて、出入口で選手にエールを送る係員の男性が二人の間に割って入った。

「こらー！何をしておる！闘技台意外でのロボトルは原則禁止だ。やるんなら、次の試合まで待て」

意外にも少年は大人しく引き下がった。

「ふつ……。命拾いしたな」

そう言つて、謎の少年はイッキの前から消えた。

試合前から、早くもこの展開。ここまできて試合放棄をするわけにはいかないが。できることなら、相手を変えて欲しかった。

五分前にはロクショウの修復が完了。光太郎の両腕パーティだけ付

け替え、試合に臨む。イッキはメダロットたちに聞いてみた。

「あの男の子。見たことないメダロット使つてきたけど、どうこつた戦い方してくるかな？」

光太郎が気の抜けた声で言つた。

「分からんなんあ、見た目は格闘系やけど。そもそも、何考へているから分からん」

「うむ。それに、前のジョー・スイハンという方はこちらが一対一の戦いを望めば、それに応えてくれたが。あの少年は、何を考へているのか理解できない。だが、一度戦つて勝つたことには間違いないから、リベンジとして同じ一体を使用してくる可能性があるな」
イッキもロクショウと同じことを考へていた。あの少年が何を考へているのか不明ではあるが、リベンジとして、あの一体のメダロットを使用してくることは十分有りうる話。

イッキたちが早く闘技台に着いた。イッキたちの予想通り、少年はあの一体のメダロットを連れて出場した。

「これより、第五回戦第一試合。天領イッキ君VS。イッキ君を何故かライバル呼ばわりする、毒貝型アンボイナを使用する謎の上海出身の中国人メダロッター・リョウ少年との試合を行います」

ミスター・うるちの宣言で、初めて少年の名前と国籍、そしてメダロットの名称を知つた。試合前だといつに、リョウはイッキにつつかかつた。

「正義の名の下に葬つてくれる。お前の名を聞いておこいつか？名無しさんでは墓も作れまい？」

「だ・か・らあ…。どうして、そう僕に突つかかつの？しかも、僕の名前なら審判の人が言つたばかりじゃないか」

「理由？ そんなの無い！『侍を倒せ』。そうじいちゃんに言われただけだ！ お前の髪型とお前の使つてゐるメダロットは、どう見てもその類だ」

「えつ！？ そんな理由で…」

「それでは、ロボトルファイトオー！！」

これ以上、無駄な会話で引き伸ばされてはたまらない。ミスター・うるちは強引に試合開始を告げた。

光太郎は限界まで体を縮め、右のナイトシールドで全身を隠し。ロクショウはソードを抜き、メリケン型のハンマーを構えた。

「む！そっちのクワガタは良いとして、そっちのトンボの態度はなんだ！もうお手上げという合図か？例え戦う意思を見せなくとも、俺は手を緩めんぞ。いけーーえ！ビューティ・キッシュス！キラキラーン・ムチュー？」

一体の毒貝は、ドリルという海洋生物らしからぬ武器を回転させて、ロクショウと光太郎に突進した。車輪タイプの脚部だけあって、コンクリートなど整備された平坦な場所での移動は素早い。あの勢いでドリルでぶん殴られたら、如何に硬い装甲を持つメダロットでも無事では済まされない。

イッキから見て、左はロクショウ、右は光太郎に向かった。

二メートル手前、ロクショウは高々と跳躍し、アンボイナの背後に回ったが、アンボイナも負けじと急旋回。ロクショウと向き合つた。一方、光太郎は微動だにせず体を丸めたまま、アンボイナが来るのを待つた。

「一体貰つたあ！」

リョウが勝鬨を上げる。だが、それはすぐに何！？という驚愕の台詞に変わった。

ドリルで光太郎を殴る直前、アンボイナがピタリと静止した。アンボイナの左腕に、沢山の針が深々とアンボイナの腕に突き刺さっていた。アンボイナが右腕で殴り返そうとしたら、今度は右腕にどこからともなく針が突き刺さった。光太郎がひょっこりと盾から顔を上げて、戸惑うアンボイナに至近距離から頭部の重力波射撃を撃つた。一体、機能停止。

盾から姿を現した光太郎の右腕を見ると、発射されるまで見えない針のトラップを自信の周囲に張り巡らす、トラップ系攻撃のシュートスピайдの腕を装着していた。気取られぬよう、イッキと光太

郎が案じた苦肉の策に、リョウは見事に引っかかってくれた。

「己一！卑怯千万許すまじ！正義の名の下に、絶対に負けんぞ」

ロクショウと相対していたリーダー機は、正に獅子奮迅の如き抵抗を見せた。ここまで来ただけの実力はあり、残る一体はしぶとかつた。だが、時間の問題であった。

光太郎が頭部の全エネルギーをアンボイナの足止め。動きが止まつたアンボイナを、ロクショウが目にも止まらぬ早業で一回斬った。一体のアンボイナをメダロッチに収納したりョウは、「さあ、煮るなり焼くなり好きにしろい！」と叫び、失笑を買つた。自分が笑われたわけではないのに、イッキは赤面した。

「糞う！このまま退がつては、生き恥を晒すのもいいとこだ。おい、お前！これを受けとれい！」

リョウはいきなりポンと、イッキの足元にアンボイナのパーティ式を置いた。

そうして、何も喋らず疾風迅雷の勢いで会場から去つた。結局、リョウが具体的に何をしたかったのか最後まで分からずじまいだつた。ともかく、イッキはありがたくこのアンボイナ一式を頂戴した。

お昼休憩一時半間後に、準決勝。決勝前にも十分の休憩がある。しかし、イッキと準決勝で相見えるコウジにとつては、準決勝こそ実質上決勝のようなものであった。

昼休み。ほほ、全員集合した。ママ、パパ、アリカ、甘酒おばさん、プラス、アリカの新しい仲間であるプリティーブラインのマリアンが。昼食を取りながら、イッキ、ロクショウ、光太郎の健闘を褒め称えた。

風で流れてジョウゾウの足元に転がってきたゴミを、モンキーさんがひょいと背中のポリバケツに捨てた。ちらほらと、数体のモ

ンキー・ゴングや後続機・ターンモンキーなどの猿型メダロットたちが、人間と共に施設の清掃やゴミ拾いを行なっていた。

後続機であるターンモンキーが発売されて、あわや生産終了かと思われがちだが、清掃業務など細かな技量が要求される仕事ではまだ需要がある。

ロボトルでの活躍はもはや機体できないが、その身軽さ故に、メダロットでは現役バリバリのメダロットとして活躍している。

新しい物を求めがちな僕が偉そうなこと言えないけど。やっぱ、人もメダロットも使いようだな。

皆揃つてのお昼の時間はまたたく間に過ぎてしまい。イッキは手つ取り早く用を足した。控え室に行く前、ジョウゾウがイッキに一声かけた。

「イッキ。勝つ負けるかは置いといて、自分とイッキが育て上げたメダロットたちの力を信じて、全力でぶつかってこい。パパから言えるのは、これだけだ。…おっと、もう十分前か。お前のことだから、一人で落ち着く時間が欲しいだろう？邪魔をして悪かったな。んじゃ、パパは観客席で応援しているよ」

ジョウゾウは飄々と氣の抜けた表情で、客席に向かつた。

「イッキやんのおとんて。なんか、意外にも掴み所が無い感じやねんな」

光太郎が独り言を呴いた。

「この先に熱いバトルが待つていて。準備は出来たかい？」

「はい」

準決勝でも、選手闘技台出入口前で立つ係員の男性はいつもと変わらぬことを言った。

いよいよ、コウジとそのメダロットたちのバトル。おどろ山のときは運で勝てたが。今度はもう、小手先の知恵や運だけでは勝てない

さやうだ。もつとも、それはこの大会で戦ってきた全ての相手に言えること。

事前にメダロットを転送するという真似もしない。ロクシショウ、右腕にナイトシールドを着けた光太郎を初めから転送した状態で、闘技台に向かつた。

「そうか。お前はまだ一體しかいないもんな。なら、俺も正々堂々一體でやるぜ」

後ろから、コウジがきざつたらしい喋り方をした。コウジはウォーバニットのアーチェに、セキゾーの右腕を装着したアーマーパラディンを転送した。

「コウジの言動に、イッキはちょっとむかついた。

「いいよ。別に三体使用してきても」

「ああ、そうだな。三体使えば楽勝かもな。だが、それじゃ意味がねえ。緊急時、じゃない限り、俺は相手と対等といえる状況で戦い、そして勝つ！ましてや、まぐれとはい、お前は俺とアーチェを一度負かしたんだ。だからこそ、今度も俺はお前と対等の条件で戦いたんだ。俺にとつては、それこそ意味があるんだ」

「いいよ。でも、今回も負けるつもりはないから」

イッキが珍しく強気の口調で言つた。

「俺もだ。イッキ、お前とは今日こそ決着をつけてやるぜ！」

人間だけではない。メダロット同士も相手を意識していた。戦う前から、二人と四機のメダロットは互いに火花を散らした。

「長らくお待たせいたしました。これより、準決勝第一試合を執り行いたいと思います。若手選手で注目されている選手一名が、よもやの準決勝進出！数々の勝負の審判をしてきた私ですが、柄にもなく鼓動が高鳴つております。では、合意と見てよろしいですか？」

イッキとコウジは頷いた。

「……さあ、それでは。ロボトルファイト——！」

四機のメダロットは闘技台を周回した。ここまでくれば、メダロットターは時折間違った修正の指示、あるいは状況をよく観察することだけを求められる。

ウォーバニットのアーチェが先制攻撃。ロクショウ回避：と思いまや、右腕上腕部に命中した。アーチェは前より更に射撃の熟練度が上昇していた。

アーマーパラディンが右腕のトマホークを発射！弾道は見事、飛び回る光太郎に命中。咄嗟に構えた盾で機能停止には至らなかつたが、爆発による衝撃は大きい。そうこうしているうちに、アーチェはアーマーパラディンの影に隠れ、弾丸を雨霰の如く撃ち、その上、アーマーパラディンのトマホークというおまけ付き。

互いの長所を生かしあつた戦いに、イッキは舌を巻いた。こんな戦い方をされたら、大抵の相手はやられてしまう。かといって、同じ戦い方をすれば勝てるというわけではない。

光太郎も懸命に打ち返し、アーマーパラディンの装甲を地味に削つた。イッキはウォーバニットのライフルがロクショウを狙つていることを素早く告げた。間一髪、ロクショウは脚部の破壊を避けえた。

光太郎の努力が実り、遂に鉄壁アーマーパラディンが崩れた。同時に、光太郎も場外に墜落した。

「あかん！頭以外もう動かへん」

光太郎が叫んだ。機能停止はしてないが、光太郎は場外アウトの判定をくだされた。

空を飛び回り、ただでさえ狙われやすい立場にいるのに。アーマーパラディンのトマホークを一発と、ウォーバニットの弾丸を無数に食らつてしまい、頭以外のパーツが壊れて飛べなくなつてしまつたようだ。

だが、光太郎はしっかりと仕事をしていた。アーマーパラディン

の右腕パークは完全に大破しており、分厚い装甲もあちこち凹み、片側の車輪が外れてバランスに欠けていた。

防御役は迅速に仲間を護衛することこそ本命。機動力を失い、あなぽこだらけになったとあれば、防御役としての機能は失ったも当然。

実質、機能停止したも同然のアーマーパラディンの影から出でたアーチェに、ロクシヨウが低姿勢で一気に詰め寄る。アーチェの弾丸が先か、ロクシヨウの刃が先か。と、ここでアーマーパラディンが最後の行動を見せた。右にもたれかかっている状態にも関わらず、左側の車輪が壊れるのも一向に構わずアーマーパラディンは左側に倒れて、ロクシヨウの進路を塞いだ。

衝突直前で跳躍。イッキは危ないと叫んだ。跳躍したことにより、無防備となつたロクシヨウの胸に、アーチェの右腕のライフルが発射された。凄まじい勢いでロクシヨウは空中で一回転した。

しかし、機能停止状態にも関わらず。ロクシヨウはウォーバニットの右腕を縦に切断するという意地を見せて、機能停止した。

「準決勝第一試合は…辛口コウジ選手の勝利！」しかし、素晴らしいファイトでした！私は、両名とそのメダロットたちに心からの祝杯を送らせてもらいます」

観衆に。観戦していた参加者たちに。そして、ミスター・うるちはナイズファイトを見せてくれた二名のメダロッターとメダロットたちに惜しみない声援と拍手を送つた。

慣れた様子で手を振り返すコウジ。反面、イッキの耳には多少、耳障りに思えた。

……。
落ち着け…負けた経験はこれが初めてじゃない。大体、前は運で勝つような相手だ。これが、今の実力差だろう。

「イッキやん」

光太郎がイッキを呼んだ。

「気持ちは分かるで。でも、とりあえずあんたの為に応援してくれた両親やら友人に観客の人たちに、せめて顔を上げたらどうや?」
負けたばかりなのに、光太郎は観客に応えろと言った。メダロットのほうが僕より精神年齢で上だな。イッキは手を振り返さなかつたが、顔だけは懸命に上げた。そうして、拍手喝采が鳴り止む頃に、係員の人と一緒にロクショウと光太郎を選手控え室の治療室に連れていった。

少し遅れて、コウジも治療室にきた。

「怒らずに聞いてくれるか?」

無言で首を縦に動かした。

「俺、今まで単純に勝つことだけ考えてきたけどさあ。イッキとの戦いって、何というか、他の奴よりもっと勝ちたって気持ちにさせられるんだよな。俺も具体的には言い表せないけど、お前との戦いって何だかわくわくするんだよな」

「コウジさん、イッキさん。お疲れ様」

どこからともなくカリンがきて、コウジとイッキに労いの言葉をかけた。カリンに続くように、パパたちもきた。ジョウゾウがコウジにお辞儀をし、コウジもお辞儀を返した。

「やあ、コウジくんだね。私はイッキの父親だよ。いやー、見るも熱いものを見せてもらつたよ。一人とも」

「ありがとうございます」

アリカが座る一人を写真に収めた。

「いやあ、ロクショウも光太郎も善戦していたわね。二人とメダロットたちの戦いを記事の特集にしようかな」

イッキ以外の人物は軽い雑談をした。準決勝第一試合で敗北した選手が治療室に来る頃には、コウジのウォーバニットとアーマーパラディンは完治していた。光太郎は後一分、ロクショウはもう少し時間がかかるようだ。

「俺たちもひつじヶ原の島に滞在する。機会があれば、また会おうぜ」

「わよひな、姫さん。イッキさん、口クセちゃんと光太郎さんころりじへ言つてください」

「コウジとカリンが治療室を出ると、イッキは瞳から涙を滲ませた。涙なんて出ない。そう思つていたが、コウジとカリンちゃんが部屋を出たら、堰を切つたように流れ出した。負けた悔しさと、傷つき倒れたメダロットたち。悔しさと不甲斐なさで泣いてしまった。服の袖が鼻水と涙で濡れるのも気にせず拭いた。

静かに泣くイッキに、チドリはそっとハンカチを手渡した。

14・メダロッ島（五日田）（後書き）

次回でイッキの新たなる仲間となる、ヴァルキュリア型メダロット・プリティプリンの名前を募集したいと思います。

応募締切は、メダロッ島（五日田）を掲載するまで。どなたか、新キャラクターに名前を『えてくれませんか？

* 応募が無い場合、ジャンヌ・ダルクの名前を取つて「ジャンヌ」となります。

決勝戦。多くの日本人はコウジの優勝を期待したが、勝ったのは有名なレッド・マタドール使い、スペイン出身の闘牛士シャモジールだった。シャモジールはコンビロボトル世界ランク十一位、タイマント・真剣ロボトル三十一位の実力者。そのシャモジール相手にコウジは「一対一」で挑み、敗退した。

シャモジールは優勝賞品を断り、賞金とトロフィーだけを頂いた。コウジは賞品と賞金も断り、小さな銀のカップだけを受け取った。準決勝まで進められた選手には賞状、そして賞品か賞金のどちらかを得る権利がある。

当初の目的は、最低でも賞品を得られる順位まで勝ち抜くこと。イッキは気を取り直し、すらりと並べられたメダルを前にして、悩んだ。

燐々と、金色にメダルは輝いていた。馴染みのあるクワガタ、クマもあれば、カブト、フニックス、ヘ・ビー、クモ、マーメイド、ネコメダルという珍品まである。他に、発見されてまだもなく、知名度も低いがそのうち市場を新たに席巻するであろうと予測されているウイッチ、ビーグル、マシーン、フレイムなんてメダルまでケースに保管されていた。

この輝きにすっかり魅了されてしまい。イッキは全て我が物にしたい衝動に駆られた。一旦、光り輝く物体から視線を逸らし、気持ちを静めた。

手中の賞状を握り締め、メダルケース群に向き直り、イッキは品定めした。選ぶメダルは三種類。一つはそこそこ攻撃ができる、防御が得意なナイトメダル。一つは、そこそこ防御ができる、攻撃が得意なクイーンメダル。もう一つは、両者の中間ともいえるニンジヤメダル。

どれにしようかな。三つに焦点を定めたが、その分、三つのメダ

ルは余計に輝いていたように見えた。

運営委員の女性が焦れったそうにしている。予定では、ナイトメダルを購入するはずだった。イッキは腹を決めて、迷いをかなぐり捨ててナイトメダルが入ったメダルケースを駆け込んだ。

夕方まで遊園地の乗り物で遊び回り、ホテルに戻った。帰つたら一風呂浴びて、すぐに夕食。

もう疲れたし、プリティープラインを組み立てるのは明日にした。ジヨウゾウはイッキが寝静まる頃に、職場が用意した寝所へと帰つていった。

日が顔を出し始めたとき、イッキは目覚めた。時計の針は六時十分辺りをさしていた。昨日、九時になる前には眠ってしまった。九時間以上も寝たことになる。ママが寝ている今のうちに、イッキはパーツを組み立てることにした。

起こしては悪いと思い、部屋のベランダに出て作業をした。海沿いに建つてはいるためか、朝は寒い。部屋に戻り、上着を着てから開始した。

ロクショウのときもあり、パーツを一から組み立てティンペットに装着するのは慣れた。三十分ぐらいで、女性型ティンペットにはプリティープラインのパーツ一式が装着完了した。メダルを背中に挿入するのはまだにした。ナイトメダルは概ね、落ち着いた性格が多いが、このナイトメダルも必ずしもそうとは限らない。口煩い奴かもしれない。眠るチドリに対する気遣いに、チドリへの紹介もかねてイッキはメダルを挿入するのは後にして。

ベッドに戻り、もう一眠りした。八時近くにはチドリが目を覚ました。イッキはチドリが朝の用事を済ましたタイミングを狙い、メダルを着けた。

メダロットの目に光が宿った。無事にプリティープラインは起動し

た。

「ママ。見て、僕たちのパーティーに新しく加わった子だよ」

「…あら、初めましてって言えばいいのかしら。私はイッキの母親で、チドリって名前よ。あなたの名前はなんていうの？」

ママの言葉に、イッキはこのメダロットに名前を付けていないことに気が付いた。

「もういえば、まだ名前をつけてやらなかつたな」

「やうなの？じゃあ、イッキ。私が命名しても構わないかしら？口をちゃんとソルティも、イッキが今まで名付けていたでしょ？だから、たまにはママが名付け親になつてもいいでしょ？」

自分が付けたかったが、それだと一時間以上の時間を要するし、女の子っぽい名前はせいぜい幸子や清美とか普通な感じのものしか思い浮かばない。ママがどんな命名をするかも興味がある。

「…ん。じゃあ、いこよ。でも、変な名前にはしないでよ」

チドリは心配に無用と応えた。

ママは少しの間黙りこへつた。その間、名も無きメダロットはじつと、イッキやチドリの動向を観察していた。チドリは右手を下に添え、左手で軽くポンと叩いた。

「巴御前の名前を取つて、カタカナでトモヒと呼ぶのはどうかしら？昔の日本には、女性の武将だつていたんだし。ジャンヌつて名前も良いかなど考えたけど、その名前だと先行きがちょっと不安だし。何より、イッキのメダロット君たちはみんな和風っぽい名前でしょ？西洋風より、ここは和風にしたほうが統一感があるわ」

「お前……君はこの名前でいいと思う？」

しかし、やつきから彼、あるいは彼女と呼ぶべきか。メダロットはずつと口を開かなかつた。イッキに命名のことを聞かれて、メダロットはよつやく重たそうに口を開いた。

「…………トモヒですか……。了承しました。それが、私の名称ですね」
プリティーブライン。もとい、トモヒの声には凛とした響きがあり、意志の強さと蝶ることを好み寂黙さを感じられた。声音の年齢を

人間でいえば、二十代ぐらいの女性であろうか。

イッキとチドリ。そして、メダロツチから転送されたロクショウ、光太郎はそれぞれトモエに自己紹介した。

誰彼の挨拶に対しても、トモエは平静な装いを崩さなかった。

武士道精神、浪花弁の陽気者、寡黙で頑固そうな女。結構、出揃つてきたような気がした。何が出揃つたかと問われれば、答えに窮するが。

チドリはイッキの手を離さぬよう、しつかりと握つて歩いた。

何もなければ、自由行動も許可したが、昨夜、ジョウゾウから知られたことを聞き、そうもいかなくなつた。そのジョウゾウは、今日は家族と水入らずの休暇を過ごすはずであつたが取消となつた。理由は以下にある。

一日前。メダロツ島ロボトル大会の前半戦当日。一人の男の子が姿をくらました。小学六年生グループの子達で、その子達だけで島に来ていた。だが、もとよりその子は一人で勝手に行動する癖（へき）があるらしく。グループの子達も、一応、見つけたら注意して連れ戻してくださいと、本気で心配してなかつた。以前、その子は修学旅行中にもどこかへと行つたことがあるからだ。という訳で、このとき報告を受けたセレクト隊員は全く事態の重さを把握していなかつた。翌日。今度は二人の兄妹が行方をくらました。これは保護者同伴の旅行であり、島内で放送をしてもらい、夜になつても姿を表さないことを不安に思い。保護者二名はセレクトに通報した。

更に翌日。メダロツ島ロボトル大会後半戦。メダロツ島遊園地が最も混む日。この日には、何と六人の子供が行方をくらました。これには、島内関係者とセレクト設営本部も事態の重さを憂慮し、セレクト隊指導の下、各スポンサーが雇つた警備員も捜索に協力した。

ジョウゾウも、子供捜索の人員として駆り出された。

これとは別に、財布や携帯、メダロッヂやメダルが盗難されたことも報告されていたが、その事件はさして重要視されていなかつた。パパは急にお仕事が入つたの。チドリはこの一言以外、一切の事情をイッキに伝えなかつた。しかし、何気ない素振りの中に、周囲を探るような目付きがあることをイッキは薄々勘づいていた。それよりも前におかしいと気づいたのは、娘の行動に口煩くないはずの甘酒おばさんが、いつになくアリカの行動を制限していたからだ。日常を送つているうえで、もしもこの手合いの出来事がニュースで流れるどこそこかの県を超えた事件の場合なら特にどうと思わない。が、その事件が現在自分たちが滞在している島で起きた出来事ならば、話は別。チドリと甘酒おばさんは、明日一番の出稿便で帰ることをイッキとアリカに告げた。一人は当然、不満の声を上げたが、チドリとアリカの母親は一人の言い分を一切合財無視した。

代わりに、今日は好きなだけ遊園地の乗り物を巡り、ロボトル大会の次に目玉のパレード見物で満足しなさいと言つた。

母親たちの変貌ぶりにイッキとアリカは混乱したが、反論できる材料もないでの従つた。六日目で予定してあつた、遊園地の反対側にある、世界中の料理を集めたワールド・フード・シティに行けなかつたのが残念極まりない。

最初に、ジェットコースターに乗つた。三分間と、長めにスリルを味わえる。終着地点付近でストロボフラッシュがたかれた。当然、フラッシュを気に掛ける者はいなかつた。

一体、誰が予想したであらうか。子供の誘拐疑惑、盗難事件、遊園地内に幾つか点在する監視カメラとストロボフラッシュ。一見、繋がりがないこれら三つが、実は全て一つに集約していたなどと。

今日が最後というので、一人の子供は遠慮なくあちこち歩き回り。

おかげで、お昼には一人の親はすっかりくたびれていた。休憩も兼ねて、レストランで食事をした。

「ママ。トイレ行ってくるね」

今居るレストランのトイレは外にある。昼間で、人目も多く、セレクト隊員の姿も目とどまり、さしものチドリも気が緩んだ。余計な所には出歩かず、用を済ましたらすぐ戻ってきてなさいとだけ言つておいた。

レストラン裏のトイレに回り、用を済まして戻ろうとしたその時。誰かがグイと、イッキの袖を引っ張つた。見ると、イッキより二歳か三歳年上で、純白のワンピースを着た、柔らかな金髪巻き毛の西洋人形のような美少女がイッキの傍にいた。

口で指をはみ、うるると見上げるような瞳と表情がいたましい。人目がなれば、抱きしめていたかもしれない。仮に人目がなくても、自分の度胸では抱きしめる勇氣なんて無いが…。

「あ…あの…何か御用ですか？」

少女は可愛げにつぶやいた。

「……私、ミルシイというの。初対面の人にはこんなことをいきなり言つのも何だけど。私と一緒に来てくれないかしら、イッキさん」見も知らずの少女と一緒に来てくれと言われただけでも驚きなのに、自分の名前まで知っているのは仰天した。いや、待てよ。ひとつしたら、ロボトル大会を見に来ていたのかもしれないこの子は。イッキは恐る恐る、期待を込めて聞いた。

「ひょっとして、大会を見ていたの？」

少女は白い歯をみせてほほえんだ。天使という言葉が当てはまりそうだ。

「ええ、そうよ。あなたとあなたのメダロットさんたちの活躍は見て貰つたわ。もう一方の子も凄くかっこよかつたけど、私はあなたのほうがずっとかっこよく見えたわ」

誰だつて、可愛らしい子に褒められたら悪い気はしない。イッキはどこ吹く風な態度を取つたが、内心はにやにやしていた。

「それで、ミルシイさんは僕に何の用があつてきたの」

「最初に言つたでしょ？私と一緒に来てつて。小一時間ほどでいいから、私とデートして頂戴。日本の想い出として」

問題がなければ、イツキは小一時間どころか今日一日デートして良いと思つた。だが、ママの言つていたことに変貌ぶりが気になる。イツキがそのことを言つと、ミルシイは笑つてこう提案した。

「迷子の女の子の親を探していいたといえば、一時間姿を消した理由としては苦しくないわ」

「イツキ…。人間の色事は分からぬが、控えておけ」

ロクショウは忠告したが、イツキは聞く耳を持たなかつた。一時間程度なら、ちょっと叱られるだけで済むだろ。イツキはママとのお約束より、美少女ミルシイとのデートを選択した。

イツキはまず、魔女のお城ツアーに行つてみようかと言つた。ミルシイは喜んで賛成してくれた。アリカと違うタイプの女の子。どちらかというと、カリンちゃんに近いかも。

ミルシイは両手をイツキの右腕に回した。イツキは恥ずかしかつたが、まあ短い夏休みの想い出にでもと思い。気に留めないようにした。魔女のお城入場前、ミルシイはこつそりと後ろを振り返り、ぱつちりと係員にウインクした。係員は密かにグッドサインをミルシイに送つた。

「そういえば、君つて見たことがあるような気がするんだよね」

「えつ？誰と似ているの？」

「うーん…確かに。あつ！ほら、お城ツアーのマスコットキャラの魔女『ミルキー』と似てているんだよ」

イツキは魔女のお城ツアーの張り紙を指して言つた。魔女のお城の案内人、魔女のミルキーとミルシイはよく似ていた。外見だけではなく、名前もミルキー、ミルシイと似通つていた。

イツキとミルシイが魔女のお城に入場直前、係りの男性の一人がイツキとミルシイを呼び止めた。

「君は天領イツキ君とミルシイちゃんだね。君らの親から連絡があ

つてね。ちょっと来てくれないかい？」

一人はぎくりとした。そして、互いに顔を見合せた。ミルシイも、親に内緒で出歩いたんだ。

一人は園内の裏側に連れてこられた。裏側に事務所でもあるのだろづか。

「あの…それで、ママは何と言つてきたんですか？」

突如、係員の男性は意地悪そうに笑い出した。

「はつはつはつは！親に内緒でデートとは。中々、見所がありそうな奴口ボボね！言つておくけど、今の俺の顔はこの世に存在しない口ボよ」

「えつ！口ボ…！まさか」

気付いた時には既に遅し。ミルシイはくすむらから出現した金魚鉢頭の口ボロボ団員とそのメダロットたちに捕えられてしまった。イッキは口クショウ、光太郎で応戦しようとしたが、係員に扮装した口ボロボ団に羽交い絞めにされてしまい、メダロッチを強奪された。声を出したくとも、猿轡さるくわのよつて口にタオルをきつく巻かれ、頭に布を被された。

布を被される前、ミルシイの泣き顔が目にちらついた。抵抗しうにも、体と腕を縛られてはどうしようもない。

メダロッチを奪われ、口ボロボ団にへまして捕まり、女の子一人も助けられなかつた。大きなショックの連続に、イッキの心は停止してしまつた。

15・メタロシ島（五日三）（後書き）

新キャラクターの名前は選考の末、忌夜火さん提案の「トモエ」に決定しました。

後書きからお礼を申し上げさせてもらいます。
この度は、忌夜火さんと一般兵 高天原Aさんの募集ありがとうございました。

16・メタロ芝居（メロコ・メロコ）（前書き）

今回、両バージョンの話に違いはほとんどありません。
もう一方の主役であるメタロ芝居（ロクシコウなど）が出ないせい
であります。

二つまで経つても帰つてこないイッキの身を案じ、チドリは店内に居る客とレストランの近辺を歩く者たちに話を伺つた。何名か、その子なら金髪巻き毛の可愛らしい子と手を繋いでいたと答えた。目撃者に詳しくその時の様子を尋ねると、『テート』にも見えたが、迷子の子を送つているようにも見えた。

チドリとしては、我が子は困つた可愛い子ちゃんを紳士に送つていることを願つた。相手は同じ年の女の子のようなので、誘拐されたとは考えにくい。チドリは甘酒親子と一緒に別れ、自らはプリティーブラインのトモエを連れてイッキを探した。まずは外の世界に慣れさせたほうが良いとイッキは考え、ロクショウと光太郎は要所で出し入れしたが、トモエだけは外へ出していた。

一四時になつても見つからなければ、園内放送をしてもうらうことにした。園内放送してから更に一時間後、一六時でも姿を現さないようなら、セレクト隊に相談しようと決めた。

チドリは携帯からパパへ連絡したが、繋がらない。仕方なく、メールを送信しておいた。

『イッキの姿が見えないの。お仕事のときに申し訳ないけど、それとなくイッキを探してくれないかしら?』

チドリはまず、イッキが好む乗り物の周囲を探つた。『ヒーハカップ、メリーゴーランド、空中回転ブランコ、乗り物の形はジェットコースターの形をしたメリーゴーランドの高速タイプ。足早に、しつかり目を光らせながら各アトラクションを巡つたが、イッキとその少女と思しき人物は影も形もない。

可能性は低いが、イッキが女の子に見栄を張つた場合を想定した。ジェットコースター系、名絶叫アトラクション、お化け屋敷、迷路。ジェットコースターと迷路はともかく、それ以外はイッキが苦手なアトラクションだ。

ヒーローショー会場も訪れたが、そこで甘酒親子と出くわし、一人はここにイツキ君はいないと告げた。

最後は魔女のお城へと出向いた。しかし、ここでも係員の男性はそんな一人は知らないと答えた。去り際、係員の男性が怪しくほくそえんだのが気に食わず、問い質した。

「私が息子を探すことのどこがおかしいのですか？」

「えつ？ いや、口……。済みません、僕は幼い頃からおかしくもないのになぜか笑つてしうまのです。ご気分を害して済みませんでした。以後、注意します。それと、息子さんもできる範囲で探しておきます」

「そうですか。すみませんねえ、歩きつ放しで苛立つていたものですから。つい、あなたに当たつてしましました」

係員は低姿勢を崩さず、お構いなくと言つた。ここにいないとなれば、遊園地から離れて別の場所へ行つている可能性がある。ワールド・フード・シティに行きたがつていたが、そこへ女の子と一緒に向かつた可能性は十分ありうる。

時計の針は一時を指していた。真夏の日差しの中を走り回り、チドリは額から玉のような汗を流していた。

このまま行くのはみつともない。公衆便所でハンカチを濡らし、顔や脇の汗を拭いてから、園内放送がある事務所へと向かつた。

午後六時。通報を請けて、一人のセレクト隊員がメダロツ島テーマパーク内を探索していた。

四角い縁なし眼鏡をかけて、下顎がいやに尖つており、頭部も茶色にとんがつている目立ちやすい出で立ちの男性セレクト隊員が目を光させていた。

彼の名は、トックリ。セレクト東京支部機動部隊二番隊所属の副隊長。それが彼の肩書き。因みに、ノンキャリアである。

セレクト隊は警察とは違う。メダロットを使用して国家犯罪対策や治安維持を担う、国連所属のメダロット使用防衛組織。であるはずだが、こうした公の場での警固任務にもあたつたりする。

セレクト隊の日本支部は東京都の他、神奈川、大阪、京都、沖縄にも点在する。

権威としては、警視庁、警察庁近くに建てられた東京支部が一番である。その東京支部所属であり、起動部隊の副隊長ともなれば、彼はそれ相応の権威を持つているはず。その副隊長が、部下にやらせるべき現地捜査を自らの手でやつているのには訳がある。

この事情を語るには、文字数を要する。

一番隊を取り仕切るのはアワモリという男。トッククリら隊員からすれば、本来は誘拐疑惑がある子供の捜査を最優先にすべきなのだが、アワモリ隊長の自論は違っていた。

「現在、パレードで島は渦中と化しておる。そんな中で、子供の捜索を行なつてみる。群集に余計な混乱を引き、混乱に乘じ、誘拐犯共に絶好の機会を与えてしまうことになる。だから、子供の捜索はメダロット島第一シーズンの客がある程度引いたのを見計らつてから、本格的な捜査を行う」

とは言つていたが、アワモリ隊長は子供の捜査より、パレードで目立つことのほうが先決であるのは部下共々承知であった。十年前、魔の十日間事件にはセレクト隊内部の者及び、一部警察の者まで絡んでいた。このことは、当時世界の一大センセーショナルな話題であり、日本所属のセレクト隊と警察組織はしばらくの間、冷ややかな目で世間に注目された。

以来、警察。特に主犯格が内部に存在したセレクト隊はイメージアップに躍起した。そのツケは、当然のように現場に回つてくる。

アワモリ隊長は確かに取つ付きにくい人柄ではあるが、昔は眞面目で正義感に燃える男だった。しかし、魔の十日間事件であらぬ疑いをかけられ、追い打ちをかけるような上層部のイメージアップに繋がる行動を求める催促。正義を掲げているが、アワモリも組織の

人間。初めこそ自分のやり方を押し通していたが、それでは組織では生き辛く、いつしか上層部に恭順するようになった。そうして、アワモリは徐々に卑屈な性格となり、燃える正義漢は愚鈍な男へと成り果てた。

今回のパレードには、セレクト隊の直接参加もある。アワモリ隊長はそこで目立ちやすい位置に立ち、パレード見物客にライトアップされた状態で手を振ることになつていて。

混乱の渦中で探すのは不味いと言つていたが、端々に「パレード」という言葉が目立つてゐるところから推測する限り、アワモリは子供搜索より、パレードでセレクト隊を人々に印象付けるほうが大事らしい。

そして、現状では、あたかも損な役回りかのようにトックリ副隊長に搜索が一任された。しかし、広いメダロッ島を探すには人員があまりにも足りない。アワモリ隊長が、パレード参加とその警固と整備の大半に人員を尽くしているせいだ。

参加する以上、多少の警固と整備協力は致し方ない。だが、裂く人員があまりにも偏つてゐると言わざるをえない。

アワモリ隊長に提言しても、頑なに拒否された。アワモリ隊長は上層部とはまた別の繋がりがあり、意見することで自分の昇進や給与に影響するのではないかと思い、思い切つて強く意見を述べれる者はいない。

という訳で、副隊長格であるトックリが人員困窮に対処するため、自らも現場に出向いた。嫌とは思わない。自分はデスクワークよりも現場のほうに向いていると思つてゐるからだ。

午後四時。天領チドリという女性からの通報で、息子の天領イツキがいつまで経つてもトイレから行つたきり戻つてこないと言つた。目撃者の情報では、見知らぬ少女と腕を組んで歩いていたらしい。その少女も事件に巻き込まれた可能性を視野に入れている。

魔女のお城周辺で、それらしき一人を見かけたとのこと。魔女のお城担当係員に話を伺つたが、そんな一人は知らないと言われた。

それでも、念には念を入れて地道な聞き込みをしていくうちに、気が掛かりな証言を得た。魔女のお城に居る係員の一人が、一回ほど、語尾に「口ボ」を付けていた、と。

語尾に口ボを付ける＝口ボロボ団員とは限らない。口ボロボ団員が悪戯集団だと思われていた時、口ボが流行語大賞第一位を受賞したことがある。現在でも、ふざけて口ボを付ける輩がいる。つまり、その係員が一回ほど語尾に口ボを付けただけでは、口ボロボ団の証拠としては薄い。

トックリは、一つ賭けに出ることにした。Rと掘られた一つの銀色メダルがトックリのポケットには入っている。近頃、口ボロボ団の活動がまた活発になってしまっていることを憂慮し、本部は極秘に各部隊の数名の隊員たちに口ボロボ団の証である、偽造口ボロボメダルを持たせた。いざというときは、これで仲間のふりをしてその場で潜入捜査をしろということだ。

事前に情報が入つていれば、セレクト隊員ではなく一般人の変装をして口ボロボメダルを見せたが、一度顔を見せてしまつたのでどうもゆかない。

そこで、近隣の隊員に協力を呼びかけた。すぐに一名、返答してきた。率先して子供搜索に名乗り上げた隊員だ。トックリはトイレでその隊員と短い相談を済ませた後、一時間、ある作業に時間を割いた。

トックリはセレクト隊員の恰好のまま魔女のお城に立ち寄った。係りの男は、呆れ気味に嫌気が差した表情を隠さなかつた。

「何ですか？話はさつきは済んだのじや」

「いえ。それとは別に、ちょっとお話が。重要な話なので、できれば裏の事務所でお願いできませんか？お時間は取らせません」

やれやれと、男は別の係員に持ち場を任せ、トックリを事務所まで案内した。

「……それで、話とは？」

「手筈は上手くいっているのか？」

頬がぴくりと動いた。男は平静さを崩さず、こう返した。

「手筈？ああ、パレードの準備ならご安心を。セレクト隊の方が沢山手伝ってくれてますから」「

嫌味が籠もつた口調も気にせず、トックリは話を続けた。

「そうじゃない。お前は勘違いしている口ボ」

語尾の口ボに、男は狼狽した。

「口…口ボって……セレクト隊さん。冗談ついですよ、そんな口ボ口ボ団みたいな口調なんか」

食いついてきた。今がチャンス。トックリはそっとポケットに手を突っ込み、偽造口ボロボメダルを握った。偽造といつても、素材は本物と同質である。男は緊張して面持ちでトックリの握りしめられた拳を見つめた。トックリはそっと開き、口ボロボメダルを男に見せた。男はトックリの顔を窺つた、トックリは小さく頷いた。男は震える手でメダルをつまみ、何度も裏表をひっくり返し、太陽に翳したりもした。偽口ボロボメダルの裏には、小さな×マークも彫られていた。

吉と出るか。凶と出るか。この男が本当に無関係ならば、男は隙をみて、自分を口ボロボ団と勘違いして通報することになる。

確認が済んだのか。男はトックリの手にメダルを戻した。そして、男は笑顔でトックリにお茶を出した。

「はつははは！まさか、話には聞いていたけど、セレクト隊にも口ボロボ団が潜り込んでいた口ボね。さあ仲間よ。まずはお茶でも飲む口ボよ」

上手くいったようだ。トックリは胸を撫で下ろした。口ボロボ団員と偽口ボロボ団員はしばらく話し込み、情報を交換しあつた。トックリを部屋から送った後、口ボロボ団員はすぐに秘密の内線を使つた。

「サラミ様。サラミ様の予想通り、セレクト隊が来た口ボよ。しかも、偽口ボロボメダルの手口まで明かしてくれた口ボ！」「よくやつたでちゅ！お前の褒賞は何か考えておくでちゅ。それに

しても、偽口ボロボメダルとはセレクト隊もやるでちゅね。で、そのセレクト隊と偽口ボロボメダルの特徴は？」

下つ端口ボロボ団は、詳細を幼児幹部・サラミに伝えた。

「なるほど、なるほど……。裏に×マークでしゅか。ふふふ、迂闊な奴でしゅね。やっぱ、馬鹿のまま大人にはなりたくないものでちゅね。よし、お前は引き続き監視任務に就きなさい口ボ

下つ端団員は元気よくラジャロボと応えた。

と、セレクト隊の極秘手口がばれたにも関わらず、トックリは至つて呑氣そうだ。最初から最後まで状況をつぶさに観察していたある傍観者は、そのトックリを褒めた。

「ほう、中々やるじやないかあのセレクト隊員」

七時半。パレードの時間帯。一人の男が再び魔女のお城に訪れ、口ボロボメダルを見せた。彼の口ボロボメダルには傷一つなく、口ボロボ団は安心して彼を城へと招き入れた。一度目に口ボロボメダルを見せた男は濃い無精髭を剃った跡が目立つ、四十年と思しき男性だ。

イッキはフローリングの床に敷かれた座布団に座り、肘を机に置いて読書していた。テレビもあるが、見る気は起きない。かといって、このままじっとしているのも退屈だから、読書した。気晴らしに外に出たくても、出られない。何故なら、鉄格子で阻まれているからだ。

布を被され、猿轡を嵌められ、連れてこられたのがこの牢獄だ。監房には、自分以外に一人ぐらいの男の子がいた。一人は小学六年生の男子で、イッキから見ても男前な顔立ちをしていた。一人は小学四年生の男の子で、女の子と見間違うほど可愛らしい顔だった。向かいの房には、四人の少女が入れられている。三人とも、小学生のようだ。捕えられた七名の中に、イッキをデートに誘ったミル

シイの姿は見当たらない。

今思い出しても腹が立つ。ミルシイは、何とロボロボ団の協力者であったのだ。同房内の男子に聞くといひによれば、二人ともミルシイに連れられて、魔女のお城以外の場所で捕まつた。

ミルシイは去り際、これが私の正体と言い、どこからともなく取り出した杖を振るつた。イッキは目を剥いた。そこには、どう見ても魔女のお城ツアーケ内人であるミルキーその人が立つていたからだ。

「なんでこんなことをするんだよつ！あなたはijiの従業員じゃないの！？」

「勘違いしないでね、ノーマルフェイス坊や。私はミルキーじゃなくて、ミルシイよ。ミルキーとはまた違う存在よ！特別に答えてあげるわ。私はね、ロボロボン団と協力して可愛い子供たちを集め、その子達を愛でて、ロボロボ団として教育するのが目的なの。でも、私にとってロボロボ団に教育するのはどうでもいいの。私はキュートでハンサムな子たちと貴重なひと時を過ごせればそれで満足なの」「じゃ……じゃあなんで僕なんか」

「当然の疑問よね。そこまで可愛くもなければ、イケメンフェイスでもないあなたが選ばれたのは疑問よね。あなたが選ばれた理由はただ一つ。それは、あなたがメダロッ島ロボトル大会上位入賞するほどの腕前であり、同時に、レアメダルを託された一人でもあるからよ」

ミルシイの言葉にイラつかされたが、堪えて疑問をぶつけた。

「レ…レアメダル？前半はともかく、託されたってなんだよ！」

「知らない。私はただ、言われただけのことをやつただけだから。本当はもう一人の、準優勝したあのハンサムな男の子を加えたかつたけど。ガードが堅い上に、おまけに結構私好みの可愛い女の子と一緒にいたから声をかけそびれてしまったの。じゃ、話はここまであとはイッキがどう足搔いて叫んでも、魔女の恰好をしたミルシイとロボロボ団は耳を貸さなかつた。

怒りをぶつける対象がいなくなつたイッキは、鉄格子を蹴つた。だが、それは自分の足を痛めただけだった。見るに見かねて、六年生の男の子、キクスイという男の子がイッキを諫めた。

「無駄だよ。ヘビー級プロレスラーが蹴つたとしても、この鉄格子はビクともしないよ」

鉄格子は太さ五センチもある真鍮製。並の体力しかない小学生のイッキが十年蹴り続けたとしても折れそうにない。

短い人生の中で、どれが一番悔しくて愚かかと問われれば、間違いなく今と即答する。

大会に準決勝まで進出し、すっかり鼻を伸ばしてしまった。その慢心を突かれてしまい、ママから勝手に離れ、見知らぬ女の子の誘いにデレデレと鼻を伸ばし、拳句の果てに命より大事な口クショウと光太郎一体のメダロットを収納したメダロッチを奪われ、こんな牢獄に監禁された。

後悔し、罵倒されて、暴力を振るわれることによって外へ出され、メダロットたちを返して貰えるのならばいくらでもそうするつもりだ。現実、そうしたところで外へ出されるわけないし、メダロットたちを返して貰えるわけがない。七時を過ぎた頃、頭を冷やしたイッキは、一先ず本でも読んで脱出を摸索することにした。

八時、ミルシイが口ボロボロにペッパーイヤットを背負わせて戻ってきた。そのペッパーイヤットを見て、イッキは思わず鉄格子を掴んだ。見間違えるわけない。頭部の雷模様の下にある、赤くキとペイントされた文字。キクヒメのペッパーイヤットだ。

「セリーーヤー！セリーーヤじゃないか！どうしてこんなところに？なんで、キクヒメのところにいないんだ」

イッキがいくら呼びかけても、セリーーヤは反応しなかつた。セリーーヤの瞳孔から、光がない。セリーーヤは無傷であるが、どうやら機能停止状態のようだ。

「お知り合い？でも、声をかけても無駄よ。この子、今はメダルをはめ込んでないもの」

「どうしてセリーニャまで」

「この子ね。一人でその辺をほつつきあるいていたの。猫型メダロットだからといって、必ずしもニャーとか鳴かないわよ。でも、この子つたら「ぐぐく」自然に猫っぽい喋り方をするし。意外にも人懐っこいから、連れてきちゃつたの。本当、なんであるマスターにこんな可愛らしい性格の子がいるか不思議だわ」

そういうえば、キクヒメはペッパー・キャットの散歩を許していた。まさか、本人は善意がこんな形で裏目に出来るのは思いも寄らないだろ？。メダロット島内でメダロット関連の盗難もあつたが、これも口ボロボ団の仕業と考えるべきだろ？。

「じゃあ、島のメダロット関連の盗難も…」

ミルシィは親指でクイと後ろの金魚鉢頭を指した。

「私は知らないけど、彼らはそっち方面にご執心のようね」

「お前なあ。魔法使いだか何だか知らないが、ペラペラと余計なこと喋りすぎ口ボよ」

「」ここで、イッキ以外の捕えられの身の子供たちも騒ぎ出した。

「一体、どういう事情があつて僕たちをちらつたんだ！」

「そうよ、そうよ！理不尽よ！」んなの」

「つるさい奴ら口ボ。そんなに騒がなくても、今夜にでも我らの幹部様が事情を説明する口ボ。それまで、待つ口ボよ」

夜十時。その例の幹部を見て唖然とした。てっきり、どんなヤクザな者が来るかと身構えたが、大の大人を従えた幼稚園児ぐらいいの男の子が訪れた。

誰かがくつと笑いを漏らすと、サラミと名乗った幹部は一喝した。

「黙りなさい！人を見かけで判断するんじゃないでしゅよ。あたいはこうみえて、あなたたちよりずっと強くて賢いんでしゅからね。では、心して拝聴しなさい。あなたたちは、口ボロボ団の未来を担うべき連れてこられてのでしゅ！」

サラミのこの発言に、ブーイングが送られた。

「いくら吠えても無駄でしゅ。お前たちはもつ、我らの手中にある。黙つて、自分の定められた運命を受け入れて、いずれ世界をわが物にできるお手伝いができることを光栄に思いなぢやいつ！以上、演説終わり！後、もう一人メンバー追加でしゅ」

三名のロボロボ団員は、一人の少年と少女を羽交い絞めにしたままそれの監房に収監した。

時間が刻々と過ぎていく。消灯の時間になつても誰も寝付けなかつた。時計の針は十一時を越えた。これで、メダロツ島滞在六日目となる。

イッキはじつと、暗い天井を見上げた。

*

*

この島にいるある人物は、ひたすら傍観者に徹していた。どうやら、そろそろそ傍観者の役目は一旦忘れ、世間に本業と思われていることをやらねばならないときがきた。悪事は防がねばいかん。例え、それが蛇の道としても。この救出の真の目的は、セレクト隊よりも早く少年と出会い、おめおめとメダロツを奪われた少年の力量と真意を問う為でもある。

漆黒の盲闇と同じ色に染まつた彼のマントがばさりと翻る。

17・メタロラ 鹿(六田三) (楷書モ)

誤字脱字が目立つかも。

「コン。フローリングの床に何かが投げ込まれた。イッキは自分の近くに投げられたそれを、布団に入つたまま掘んだ。硬い石のような物に包まれた紙だ。イッキは人目を避け、起きてトイレに入った。口ボロボが誘拐した子供を入れるために作ったこの監房。風呂こそないが、トイレ、浄水器付きの水、テレビ、本など外出以外の自由はなかつた。数日前に捕まつた子の話によれば、自隠しされてシヤワー室へ何度も連れていかれたりした、と。

トイレに入り、早速、石にくるまれた紙を解いた。

今宵。真夜中の二時、君らを迎えて参る。

誰だ？口ボロボ団？いや、いくら口ボロボ団が犯罪悪戯集団とはいえ、こんな悪戯をして一体何になる。だからといって、正体不明の手紙の送り主をどう信頼できたものか。何故なら、つい数時間前に騙されたばかりのだから。さりとて、閉じ込められたイッキに脱出の手立てはなかつた。

せっかく、眠りかけていたところであつたが、イッキはもう一度騙されてみるとこにした。真夜中の二時、今から一時間ちょっととてところか。

それまでの間、布団で大人しくふりをするしかない。

魔女のお城の地下にある秘密の監房に石が放り込まれるより遙ること、三十分。

港の倉庫では、口ボロボ団の団員たちが盗んだメダルやメダロット収納状態のメダロッヂを一般客の荷物に偽装し、運ぶ準備をしていた。

団員七名。影がなく、視界が聞くところから監視する運搬陣頭指

揮に当たる者が一名と回りを固めるメダロットが一体、他六名はそれぞれのメダロットを一体ずつ転送して運搬の手伝いをさせていた。恐らく、敵メダロット総数は二十から一一といつところだろ。三号は別の仕事に向かわせたので、一体で相手することになる。

倒せない数ではないが、迂闊に正面からやれば手間取る。この暗闇を利用し、ミサイルやナパームで一気に片付けるのが得策。彼は転送済みの一體に命じた。

「一号。闇を利用して移動しながら敵を屠れ。一号。ロボロボ共がメダロットを全面に出したら、一気に置め。……それでは、解！」

韋駄天の如き速度で、一号と呼ばれた機体は影から影へと移動し、ロボロボ団のメダロットたちを一刀両断！突如として倒れたメダロットを見て、団員たちに混乱が生じた。

「な！なんだ！？」

「て…敵襲ロボ！」

「セレクト隊に情報が漏れたかロボ？」

陣頭指揮に当たる上級団員が下級団員を一括した。

「慌てるなロボ！まずはここに集まって、メダロットたちを転送しろ。また、姿を現したところを一斉にかかつて抑えるんだロボ」団員たちは一つに集い、全メダロットを転送した。辺りを探るロボロボ団に、一号が物陰から影をのぞかせた。

「いたよ。じゃ、前後左右からこつそりと…」

ロボロボ団のメダロットが塊、更に注意が上から逸れた。ここだ！一号が全ての砲門を開いた。数え切れないほど大量のミサイルがロボロボ団のメダロットに降り注ぐ。

「どどおーん……！」

真夜中の爆発音に、港警備の者たちとセレクト隊員もようやく異常を察した。セレクト隊が来る前に片を付ける。難を逃れた敵に一号の容赦なき刃が降り下ろされる。そして、一号は上級団員の背後にソードを突きつけた。そうせずとも、人間のロボロボ団はメダロットたちを失い既に戦意を喪失していた。

一号と呼ばれたメダロットは全身を黒マントで被つて正体が掴めない。ソードの形状からして、KWG・クワガタ型メダロットとは推測される。

マントを跳ね除け、倉庫の天井から怪盗レトルトその人が立ち上がりつた。

「か……怪盗……！」

叫ぼうとした団員は、一号に背中をソードでちゅんとつつかれて押し黙つた。

怪盗レトルトは一切語らず。一号と同じく黒マントで身を包む二号を従え、手に握つた何かでしきりに運搬するはずであつたメダル・メダロットが収納された荷物を探つた。

ピー……ピー……。微かな受信音。上級団員の隣にある、高やうなトランクから反応が示す。

「悪いがそれをこちらに横してもらおう。他には興味がない。私が用があるのはそのトランクだけだ。後、出来ればトランクをこちらに転がしてくれれば助かる」

ロボロボ団は文句を言いたげだつたが、メダロットたちが全て機能停止した今、反抗する術はない。上級団員は大人しく怪盗レトルトの要求どおり、トランクを怪盗レトルトに向かつて滑らした。

「ご苦労！ああ、それと。今の爆発音を聞いて、多分、そろそろ警備員やセレクト隊が駆け付けてくるだろうから。メダルやメダロットが入つたそのお荷物の回収は諦めることだな。……では、さらばだ！」

上級団員の動きを封じていたメダロットはメダロットに戻り、二号機のマントから翼と飛行タイプのエンジンが飛び出し、怪盗レトルトは一号にさつと飛び乗り夜空へと消えた。

ロボロボ団が撤収する頃に、セレクト隊と港の関係者は現場に到着した。

真夜中、突然ロボロボ団が騒ぎ出した。何事かと、子供たちは布団から聞き耳を立てた。

「港……ロボ。……盗……トガ……で、運搬……駄目になつ……ロボ！」

残念ながらあまり聞き取れなかつたが、港と運搬という単語が何回か使用された。港から船で何か運びだそうとして、何かに妨害されて失敗したのか？

急遽、一名のロボロボ団と一体の浮遊型脚部を付けたメダロットが監房前の見張りに立つた。

隣に横たわる、小学六年生のキクスイはイッキに小声で話しかけてきた。

「誰かが牢番に立つなんて初めてだ。ちょっとだけ話をロボロボから聞いたんだけど、見張りは監房外の入口にしか置くのが決まりだつて言つていた。絶対、見張りをつける必要があるトラブルが起きたんだな。こりや、上手くいけばこつから出られるかもしんねえぞ」「あんま関係ないけどさあ。キクスイのメダロットは？」

「…笑わないつて約束するか？」

「うん、する」

「俺……くの一型のゲットレディが相棒なんだ。同学年に忍者型を持つているのが三人いて、被るのが嫌なのも合つたけど。単純に、ゲットレディのほうがカッコイイと思ったから相棒にしたんだ。一言多い性格だけど、結構気配り上手な面もあるんだ。…それが、ここに来たときメダロットを奪われちまつて…」

「僕も、最近。というより、つい昨日新しく三体目を迎えたんだ。そいつは女性型だよ。相性が合うなら、別に性別はなんだつていいじゃないか」

「静かにするロボ！」

頭部と脚部がチャーリーベアのロボロボメダロットが、イッキとキクスイの会話を妨げた。二人は更に声を潜めた。

「あのさあ。最後に一言付け加えていい」

イツキはキクスイに紙のことを伝えた。キクスイは対して驚いた素振りを見せなかつた。

「何か投げ込まれた音はしたけど、口ボロボロの悪戯かなんかかなど思つて無視したんだ。そつか、夜の一時にお迎えか？」

二人はちらりと時計のほうを見やつた。時刻は一時五一分。時間厳守なら、残り九分でお迎えとやらが来ることになる。

午前一時。見張り役の団員に通信が入り、メダロットには前後を、自身は左右の監房を見張つた。

バツキーン！突如、入口の扉が無理矢理こじ開けられ、球体状の物体が一つ放り込まれた。

「目鼻口を塞げ！！」

有無を言わせぬ強い口調に、子供たちは布団を被つた状態で目鼻口を塞いだ。ぼぼん！と、二つの球体は破裂し、厚い煙が発生した。そして、切断音と破碎音が同時に鳴り響き、見張り役の口ボロボロが氣絶していた。監房の施錠が外れる音がした。

「早く出ろ。薄目を開けて、俺に付いてこい」

言われるがまま、子供たちは監房内から出た。一警すると、一体は上下半身を切り分けられ、チャーチーベアの頭を付けた奴は顔半分がひしゃげていた。真上から、硬い物が降りおろされた形跡がある。

子供たちに命じる者は、黒マントで体を被つていた。そして、チャカチャカとメダロットらしき足音をわざとらしく立てながら、子供たちを秘密の地下牢から外へと先導した。

「もう塞がなくてもよい」

真四角に区切られた地下の出入口から外へ出た際、閉じ込められていた場所がどこか把握した。秘密の地下牢は、魔女のお城の内壁と外壁の間にあら敷地に通じていたのだ。ここなら、外からも内からも見えず、安心して入手した物を保管できる。内壁と外壁の間から出るには、内側にある一箇所の鉄製の扉しかない。

黒マントで被われたメダロットは右に曲がった。鉄製扉付近に、氣絶したロボロボ団一名と機能停止した三体のメダロットが壁にもたれかかっていた。

鉄製の扉を出たとき、イッキは他の子より先んじて謎のメダロットに聞いた。

「君は誰だい？ どうして、僕らを助け出したの？」

黒マントを羽織るメダロットは答えない。と、上空から笑い声が轟く。子供たちはさつと身構えたが、謎のメダロットは至つて警戒している様子はなかつた。肩を僅かに動かす動作は、何やら呆れているようにさえ見えた。

「ふははははは！ 彩りましょう食卓を。皆で防げりまみぐい。常温保存で愛を包み込むカレーなるメダロッター… 怪盗レトルトだいま参上！ 悪事あるところ怪盗レトルト有りだ！」

塔の先端に、ゆらゆらと風であらゆる方向に歪めく存在、半笑いの笑みを浮かべた白面の仮面を付けた怪盗レトルトがそこにいた。巷で噂の大泥棒。神出鬼没の怪人・怪盗レトルト。想像を越えた人物の登場に、子供たちはショックで言葉を失つた。

怪盗レトルトの右手には、一つのメダロッチが握られていた。レトルト本人の者ではなさそうだ。怪盗レトルトは、下を指してこう言つた。

「君らの救出料として、そこちよんまげ頭君の、特別なメダルが入つたこの特別仕様のメダロッチを戴くことにしよう」

この場でちよんまげ頭といえは唯一人。イッキしかいない。イッキは慌てて叫んだ。

「ちょ、ちょっと待て！ 助けてくれたことは感謝するよ。けど、それがなんで僕のメダロットたちを取る理由になるんだよ… その特別仕様だつていうメダロッチが欲しいなら上げるよ。でも、二人を… メダロットたちは返してくれよ！」

「ふつ… おめおめと色香に惑わされて大事な物を取られた奴が言う科白とは思えんな」

「ふつ… おめおめと色香に惑わされて大事な物を取られた奴が言う科白とは思えんな」

怪盗レトルトは見下したように笑った。

「た……確かに鼻を伸ばして、命と同じくらい大事な一人を盗られたのは失敗だ。…でも、もうそんなことはしない。今度はどんなことがあつても、メダロットを。いや、メダロットたちは手放さい！お願いだから、返してくれ」

「そりだそりだ！なーにが怪盗だ！ただのイカした変態コスプレマントマンじゃないか！」

「そりよ！こんな私より小さい子から奪おうなんてするなんて、最低の変態仮面じゃない」

子供たちはイッキの味方をし、怪盗レトルトに向かつて口々に罵倒した。

「言葉だけでは足りない。ビリしてもと諦めのなら、行動で示すがよい」

怪盗レトルトが塔の先端から消えた。追いかけようとするイッキの前に、ロボロボ団と黒いタイツスースを着た、グラサンをかけた幼児が立ちはだかる。

「全く！大人は駄目でしゅね。肝心なときは役に立たないでちゅ。今からでも遅くない、早く牢に戻りなさい」

そこへ、黒マントを被るメダロットと、どこからともなく色んな射撃型パーツと隠蔽パーツをつけたメダロットが飛び降り、子供たちとロボロボ団の間に割つて入った。

「何ですかお前らは！？逆らう者は、どんな奴でも容赦しませんよ！」

行けということだらうか？イッキは訳が分からなかつた。この二体は、どう見ても怪盗レトルトの愛機。その一機が、どうして僕らを手助けしてくれるのだらう。今の主人の行動が目に余るものだからなのか？事情を聞いても話してくれそうにないし、話を聞く余裕もない。イッキと子供たちは反対方向へと回り込んだ。何駄か、ロボロボの物と思わしきメダロットが転がっている。それらを無視し、イッキは空を飛ぶレトルトの陰影を追いかける。

「……か……返せーー！あつ！」

イツキは石に蹴つづまいまいすいて素つ転んだ。鼻血が流れ、膝が擦りむけても、イツキは痛みを堪えてレトルトを追いかけた。閉じられた園内の出口に着いた。怪盗レトルトは安安と門を乗り越えた。間に合いそうにない。

「ち……畜生」

キクスイが背後で舌打ちした。もう駄目だ。怪盗レトルトは、夜闇へと紛れてしまった。もう追いかけられない。ぜえぜえと、子供たちは汗だくで、肩を息をしていた。……ここまで来て……せつかく牢から出られたのに……いけない方法で手に入れたってのは、骨の随に染みるほど理解している。それでも、手離せと言われたら嫌だと答える。

メダロットや人間の関係がどうたらとか、難しいことは分からない。けど、これだけは言える。僕は……口クショウと光太郎、それと、新たに仲間となつたトモエと別れたくない、と。

「頼むから……一人を返せーー！」

イツキは鼻血が口に入るのも気にせず、天に慟哭した。分かつている。こんな風に叫んでも、もう手遅れだつてことぐらい。口に入つた血を吐き出した。

だが、イツキの叫びがレトルトに通じたのか。夜闇へと消えたはずの怪盗レトルトが、門の向こうからひょっこり顔を出した。

白面の仮面から、レトルトのその表情は伺い知れない。そうして、レトルトはぽいとメダロッチを放り投げた。落としになるのを、キクスイがキャッチしてくれた。

「はつきりと答えを聞いたわけでもないが。言葉にせずとも、君のその風体を見れば、君のメダロットに対する想いは通じた。……だが、忘れるな少年よ。今度こんなことがあれば、その時はまた君の前に現れるであろうことが。その前に、メダロットたちが君に愛想を尽かすかもしれません」

「さつきから何をじちゅうじちゅうと……。セレクト隊呼ぶぞ！」

キクスイが怪盗レトルトに食つてかかつた。

「それは困る。まだ、捕まる訳にはいかん。…少年よ。今一度、最後に私の言葉を聞くのだ。

「真実を見抜く目を養え。見えている物だけが本当の悪とは限らないぞ。灰汁とは煮込むほどに出てくるのだ。また君とは会つかもしれん。それでは、アデュー！」

怪盗レトルトは再び、夜闇へと紛れてしまった。

「何だつたんだ一体。…おつと！ほら、これ。お前のだらう」キクスイが丁寧に、イッキの腕にメダロッチを付けてくれた。メダロッチを見ると、何と作動状態だった。どう話しかけたか迷つていると、ロクショウが一声を発した。

「イッキ。メダロッチからではどうなつてているかは見えんが、怪我は大丈夫か」

平素な。それでいて、労わる口調。ロクショウの声にはイッキを責めるようなところはなかつた。

「ほんま。あんた厄介事によう首つっこみなん。そういう産まれかいな。…まあ、今はまた一つに集えたことを喜ぼうか」光太郎が憎まれ口叩いた。ロクショウと同じく、怒つたり、落胆しているように見えなかつた。イッキは泣き出してしまつた。

「なんだ、また泣くのかイッキ？傷が痛いのか？」

傷が痛くてしうがないもある。ただ、それ以上に嬉しい気持ちが溢れ、涙が止まらない。キクスイが貰い泣きしていた。

「行こうか」キクスイがイッキの肩を抱いた。

肩を担がれ歩いているその途中、イッキたちを挟むように一組の存在が現れた。

北からは、黒タイツスーツを先頭に来たロボロボ団。ロボロボ団に混じり、魔法使いの格好したミルシィの姿も見受けられた。南東、

ジエットコースター側からきたのはスクリューズだった。イワノイ、カガミヤマはブルースドッグ、キースタートルを転送済み。

「お前らなんでここにいるんだー!?」

「イッキ、それはあたいらのセリフだよ。私は夜通しでセリーニヤを探しにきたのさ。で、その金魚鉢集団と黒タイツのガキンチョー誰だい?」

「ガ…ガキンチョだと…無礼者! 我こそはロボロボ団幹部サラミ様だぞ。お前ら普通の子供とは、強さもおつむのできも違うでしゅ! ふつー!と、キクヒメに従うイワノイとカガミヤマが吹き出した。

「でしゅだつて…。ふふつー! こんなのが幹部だなんて、ロボロボ団も底が知れているぜ」

「うん、ほんと。洗濯し直さなきゃ」

カガミヤマが意味不明な同意をした。

「キクヒメ。そのロボロボ団とミルシイがお前のペッパーイヤットを攫つた張本人だ」

「へえ。あたいのセリーニヤに手出しするなんて。随分と命知らずなやつらもいたもんだ」

キクヒメはヤクザのようになりの利いた声で、ロボロボ団をがんつけた。普段は快く思つてないスクリューズだが、今はありがたい救援者であった。ミルシイが杖を持つ手に力を込めて、睨み返した。「ふう、ん。あーんな可愛らしい子が、あんたみたいな可愛い子のメダロットだなんて驚きだわ」

「ちょっと、あんた。こんなことして良いと思つていいの? 大人しくツアーケ内してりやいい物を」

「うん、いいの。私は可愛い子たちと可愛いメダロットたちに囲まれれば幸せなの。後、よく間違えられるけど。私はミルキーとは全く違う存在よ。逃げる前に、ムカツクあなたを置んでから行かせてもらひうわ」

キクヒメとミルシイの目に、炎が宿つていた。女同士の熾烈な争いに、スクリューズの子分もロボロボ団もたじろいでいた。

「キクスイ。皆を連れて行つてくれないか」

「お前はいいのか」

「うん、大丈夫。それに、気に食わないけどロボトルの腕前は頼れる奴らがいるから」

語らずとも、ロクショウと光太郎は自らの役割を理解した。

「イッキ、俺たちを早く転送しろ。体がウズウズする。怪盗レトルト以上に奴らが気に食わん」

ロクショウが俺と呼称した。どうやら、相当暴れたいようだ。キクスイたちの背中を見送り、イッキは転送装置を押した。

「メダロット転送ー！」

ロクショウ、光太郎の一體が眼前に出現した。

「ところでキクヒメ。セリーニヤがいなくて戦えるのか？」

「あんたに心配される筋合はないよ。新しく、スクリューズに加入した三体がいるさ。あたいらよりもあんたは自分の傷を心配なさい。」

キクヒメのメダロットから雪達磨のような形をしたメダロット、フランツペが転送された。

イワノイはカマキリのようなヒパクリト。カガミヤマのは頭部はロールスター、右はゴーフバレット、左はカッパーロード、脚部はランドローター。一見、珍妙極まりない組み合わせであるが、案外理に適っている組み方だ。

「イワノイ、あんたは私の援護。カガミヤマは不本意だらうが、イッキと協力してやりな」

よもや。こんな場所、こんな機会でスクリューズと共同戦線を張るとは思わなかつた。子供だけなら力づくで押しのけれよいが、メダロットを持つていてのならば話は別。まず、メダロットを片付けた必要があると判断したロボロボ団六名はそれぞれメダロットを転送した。

ミルシィの杖型メダロットからは、魔女型のサンウイッシューが一休と、協力なビーム攻撃を持つ花型のチャージドシーブー一体が転送

された。

幹部と名乗るサラミのメダロットは、神話に出てくる巨人をモチーフにしたジェントルハーツ三台。重量級の外見に反し、キャタピラによる速い稼働を可能とし、両腕のじつい扁平長方形のハンマーを武器とする。

「ゴミル、行きな！」

キクヒメにゴミルと名付けられたフラッペがサンウイッチーに向かう。そのユミルを援護すべく、ブルースドッグがライフルで左のドシーズを攻撃、ヒパクリトは右のドシーズに獲物を向けた。

カガミママはキースタートルの鋼太夫を集団から一定の距離を保ち、レーザーを発射させた。そのキースタートルへの進路を阻むよう。光太郎は空中から、ロクショウとロールスターはロボロボ団の周囲を回転するように動き、攬乱しながら攻撃した。

数だけといえば、圧倒的なこの不利な状況をイッキとスクリューズは不承不承ながら応戦した。

攬乱戦法が功を奏し、ロボロボメダロットの半数は戦闘不能に陥った。しかし、こちらも全くの無傷で済まされなかつた。ロクショウは右肩に被弾し、攬乱戦法に当たる三機の中で一番遅いロールスターは既にボロボロの状態だつた。

キクヒメ＆イワノイチームは、ミルシイと一進一退の攻防を繰り広げていた。ミルシイは意外にもロボトルが出来るようだ。

ロクショウが一台のジェントルハーツに切りかかる。ロールスターのビームと鋼太夫のレーザーが火を吹く。ロクショウに気を取られた隙に、一台のジェントルハーツは一体の光学攻撃が直撃してしまい、全身に稲光が走り、近くにいた一体も巻き添えを食らつた。一体、仕留めた。

敵討ちにと。一台のジェントルハーツが輪から離れ、ロールスターを地面に叩きつけた。

「ああっ！」

カガミママのロールスターも機能が停止した。

「昨日の敵は今日の友！これでも食らいや！」

光太郎はエネルギーが尽きるといわんばかりに、大量の重力波を放つた。防御役一体が倒れ、逃げ遅れたオヤカタエクセルは脚部と腕が使い物にならなくなつた。

そして、光太郎はゆっくりとイッキとカガミヤマの背後に着地した。

「すまん。もう、地面すれすれに浮くぐらいのエネルギーしか残つておらん」

言われなくとも、メダロッチの光太郎のエネルギー残量を見れば一目瞭然。キクヒメとイワノイの戦況を見ると、ミルシィは徐々に押されていた。

「ふふ。攬乱戦法はこれでしまいでしゅ。一気に始末するわよ」ジエントルハーツ一台に続き、残る部下二体も鋼太夫に接近。鋼太夫は大量のエネルギーを放出したばかりで、動けない。そこを狙われてしまい、袋叩きにあつた。カガミヤマがまた、「ああっ！」と悲痛な声を出した。

ロクショウも黙つてはいなかつた。オケ・ドグーのパーティを中心には組まれた機体に何度も斬り付け、鋼太夫が倒れて直ぐにオケ・ドグーも倒れた。

一方、キクヒメ＆イワノイコンビは遂にミルシィを撃破した。左のチャージドシーズを片付けたブルースドッグが新米ヒパクリトの援護に辺り、もう一体のチャージドシーズを早々に潰し。ヒパクリトはミルシィとサンウェイツチーの背後に回り、ブルースドッグは射撃、ニッチもサッチもゆかなくつたサンウェイツチーをユミルは一気に畳み掛けた。

「うつそーん！私の自慢の子達が！」ミルシィは驚きを隠せなかつた。

「さあ、年貢の収めどきよ。大人しくお縄に頂戴しな」キクヒメが時代劇風な口調で決めゼリフを吐いた。

「ううん。そもそもゆかない。ここで捕まる訳にはいかないわ。じゃ

あ、さよなら。口ボロボ団の皆さん。そして、さよなら。思った以上に手強かつた生意気な子供達よ」

ミルシイは杖を振るうと、足元から湯気のような煙が立ち上った。コミルが煙に突っ込んだが、危うくヒパクリトに衝突しそうになつた。煙が晴れると、ミルシイは忽然と魔法のように姿をくらました。ミルシイのメダロットたちもいつの間にかいなくなつた。

「メダロットのほうは遠くから転送したとして、本人はどこに消えちまつたんだい！？」

これで五対三。形成逆転。しかし、相手の主力機であるジエントルハーツ一台は今だ無傷なのに対し、コミル、ブルースドッグ、ヒパクリトの損傷は思つたより酷く、光太郎はエネルギー残量が幾許かの状態。無傷なのはロクショウだけだ。サラミが甲高く笑う。

「わっはははは！ 数字的にはお前たちのほうが有利であるが。戦闘力において、そのヘッドシザース以外の奴らは実質戦力外に等しい。そのドラゴンビートルに至つては、エネルギーが切れかけてるではないか」

このピンチに、イッキとスクリューズは冷静だ。こういつ時こそ、落ち着かなければならぬ。ロクショウが口ボロボ団に聞こえない程度で味方に語つた。

「黙つて聞いてくれ。今の私は、この前のおどろ山ほどではないが、あの時の力を發揮できる」

キクヒメが口クショウを見下ろす。

「その力は気になるが、あいつら倒せるかい？」

「無理だ。捕まつたときには本体から僅かにエネルギーを抜かれたようだ。この前ほどの威力はない。が、あの主力一体の戦闘力は奪えるはず」

イッキとロクショウは見つめ合ひ、頷きあつた。

「キクヒメ、イワノイ、カガミヤマ。目を閉じたほうがいいかもしないぞ。眩しいから」

「おい！何の話だよ！」

「ええい！何を！」
「ああや、ああやと…。」
一弓、一弓。あんな奴らを押し

つぶいちやえ

一台のジントルハーツが押し寄せてくる。優に一メートルを超える、横に幅広のメダロットが迫ってくるのは威圧感がある。口クショウは身構えたまま、前面に出た。

ショウは身構えたまま、前面に出た。

「お前」ときにケンカが止めるものでしゅか」

漏れ出した。

「左右に散る」
左の手に持つ。右の手に持つ。

遡かつた。ロクシードのソードから一本の細い光の筋が広がる。一台のジョントルハーツは両腕で防御したが、ジョントルハーツの両腕はえなくティンペッドだと切断された。サリマは驚嘆した。同時に、ロクシードのパーティが蓮かに容れた。

「何という威力！シオカラから聞いたほどではないが、あの一台の腕をティンペットごと切り裂いてしまうとは」

「サラミ様ー！ 一体、我々はどうすればいいロボ

一一台のジョントルハーツは戦闘能力を失い、残る一体は今のを見
て、怯えて仕掛けるのを躊躇つていた。と、沢山の声とライトがこ
ちらに近づいてきた。

「不味い！撤退でしゅ！メダロットは離れたところから特殊電波で回収！貴重なデータを撮れて、メダルに戦闘経験させただけでも儲けものでちゅ」

「データ！？」

イッキの咳きを無視し、ロボロボ団と幼児幹部サラリはゴキブリの如き勢いで逃げ去つた。ロボロボが逃げ去つた後も、ロクショウは仁王立ちしていた。僅かに溶けたその全身から、鬼気迫る物を感じた。イッキは、静かに、そつと呼んだ。

「ロクショウ。もういいよ。ロボロボの奴らは逃げ去つた。動けそ

うか？」

返事がない。セレクト隊が周りを取り囲んだとき、ようやくロクショウは気だるそうに「つむ」と返事した。

三人の子供は無傷のようだが、ちょんまげ頭の水色のシャツを着た子は怪我をしていた。ティッシュを詰めた鼻は鼻血で真っ赤に染まり、服は土埃で汚れ、擦りむいた右膝には血と泥が混じり合い、見るも痛々しい。

一人のセレクト隊員が平静な面持ちでイッキに近寄った。ヘルメットを被っているので顔は見えないが。

「よく頑張った。あとのことは我々に任せます」

その一言で緊張の糸が切れたのだろうか。イッキはそのセレクト隊員にもたれるよう崩れた。セレクト隊員は、強く、優しく少年を抱擁した。慎重に言葉を選び、感情が溢れぬよう自制した。

「よくぞ無事で……。必ずや、君の勇気は無駄にしない」

人間とメダロットの救護班たちは、負傷した少年と数体のメダロットを運んだ。

17・メダロッ島（六四三）（後書き）

キクヒメのフラッペ・コミルのネームは、高天原△さんの新キャラクター募集のネームを使わせてもらいました。思えば、この最近（二話分）戦闘が無かつたので、今回は『気合』を込めてスムーズに書けました。

次回で長かったメダロッ島は終了します。

何度か視点変更があるので、仕切りました。

メダロッジ島にある、とあるホテルの静謐な一室での通信器を使用した密談。

無事、任務完了しました。ええ、彼が転んで怪我をするという想定外のアクシデントが発生しましたが。その点は、深く反省しております。しかし、彼があんな怪我を負つてまで懸命に追いかけたのは、こちらとしても嬉しい誤算でしたよ。他の子供たちが追いかけたことも。他の子供たちを動かしたのは、彼と親しくしていきたリーダーシップを取つていた男の子が追いかけたことも関係しているでしょうが、その男の子を動かしたのも元はといえば彼ですからね。

多少、他の子より浮き沈みが激しく、流れやすい一面もありますが、意外にも大した器の持ち主でしたよ。

彼が追いかけてこなかつたらどうしたって？……もちろん、それでも返しましたよ。ですが、分かりますでしょう？その場合、近いうち、自らの意思でメダロッジたちは彼から離れたでしょうね。

今回、口ボロボロのここに犯した悪事といえば、すり、誘拐、不法侵入、建築物の違法建造、器物破損。どれも罪といえば罪ですが、どうも本筋とはあまり関係なさそうな行動ですね。

そうですか。了解。では、今後も私は彼女と共に奴らの妨害工作。捜査。及び、暇なら彼らの観察を続けねば良いのですね。では、グッジョブ！

報告も終わった。これで、一息つける。今日は自分と相棒たちの褒美として、ビアーガーデンに行つてみるか。

それにして……。彼の力量を測るためにしたこととはいえ、子

供から罵倒されるのが酷く心を抉るとは、この歳になつて初めて気が付いた。それ以上に、自身では最上級にカッコイイと考えたこの格好が、あんなにボロカス言われたことが普通の悪口より堪えた。何だか、別の意味で泣けてきた。

*

*

- ・ある記者に送られたセレクト隊員Aさんの告白を元にした文章
- 私が今回、このような告解を貴方に送つたのは。私が不当な移転処置を受けたところに所以する。

理由は本文に記載。

本当なら、怪盗レトルトよりも一足先にロボロボ団の潜伏地に突入できるはずだった。だが、機動一番隊のA隊長は、余計な混乱を招く恐れがあるかもしれないし、確定できる証拠までは掴めてないというのうで、捜査は延期。しかし、T副隊長に協力して潜入捜査を行なつた隊員の証言を伺う限り、その隊員の有力な証言だけでも、魔女のお城という場所への捜査を行えるに足る確かな証拠であった。もし、もつと早い突入を行えていれば、怪盗レトルトによつて罪もない子供が傷付くということは無かつたはずだし。上級団員二名以下、サラミという、有力な情報を握つてているはずの子供幹部の容疑者も捕縛できたはず。

下つ端団員の大半は捕らえたが、どれも大した情報を持つておらず。ゲーム感覚で危険を味わえる仕事をしたかつたという馬鹿者もいれば、金がなく、悪事と理解していくも食つために手を貸してしまつたという者もいた。なお、子供幹部の名前が判明したのは、捕らえた下つ端団員の中に二名ほど正規雇用の者がいたからである。

口ボロボのメダロットたちからも情報を得ようとしたが、残念ながらそれは不可能であった。何故なら、メダロッチにメダルが存在しなかつたからだ。

捕られた団員たちの証言だと、間違いなくメダロッチに入つていたとのこと。我々が口ボロボを追いかけていた時、ごく短時間、電波障害が発生した。一人の少年の証言を信じれば、特殊な電波とやらを使った回収であろう。当然、団員たちに問い合わせたが、そのような物があるとしか聞いてないと答えた。厳しく追求していくがあまり良い返答は聞けそうにない。

私にも全く責任は無いとは言わない。それでも、私は二番隊A隊長以下、今回の事件で上層部のA隊長に対する責任追求が軽いことに不満を覚えた私は、A隊長と上層部を批判する旨をしたためた文を送り付けた。その結果、私は大阪支部の小さな事務に移転された。警察。検察。そして、セレクト隊。魔の十日間事件以降、国の治安を守るはずのこれら三つの組織はどこか捻れてしまったよう思える。

口ボロボ団のようにメダロットを使った犯罪集団が増えるのも懸念だが、国を守る組織は腐敗していないか。これも、今の私が抱える懸念の一つである。

P . S .

余談であるが、私のもう一つの懸念はメダロット排泄主義運動の高まりである。私の大阪にいる知人で、彼は現在、親族とは縁を切り、一家共有の財産として一台のメダロットを所有している。

彼の祖父は蜻蛉型のメダロットを所有していた。その祖父の方が亡くなられた際、あるうことか、彼の親類はその蜻蛉型を含む数台のメダロットを仕事の際に立ち寄つたどこかに、エネルギーを抜いて不法投棄した。どうやら、彼の親類は排泄運動に関わるついでに、メダロットなど然るべき手続きを踏んで処分する必要がある物を危険物を投棄する行為にも関わっていたらしい。

人間同様な意思を持ち、人間のような行動を可能とする存在。それらの存在に人間が不条理な嫌悪感や嫉妬を抱くのは致し方ないことはいえ、彼らを見つけ、彼らに体を与えたのは、その人間であるということも忘れてはいけない。

エネルギーを抜かれても、メダロットたちは僅かながら意識下での行動ができるることは最近立証された。そんなメダロットたちが再び動けるようになつた時、人間に危害を加えないという保障はない。私個人の意見では、セレクト隊はメダロットを使用して人間を守るだけでなく。このような、不当な扱いを受ける人間に近い意思を持つた「彼ら」も守るべきだと提言したい。

*

*

予定では、朝一番の便の乗るはずだったが、帰航は夕方の便に変更となつた。

六日目は丸一日病室で寝泊り。次の日の昼ごろ、保護者同伴可でのセレクト隊による事情聴取を受けた。といつても、救出されて間もなく、子供だから心身による疲弊は大きいだろうと配慮され、簡単な受け答えで終了した。

保護者の方から、少しずつでもいいから子様から聞いて下さいませんか?と、病室の向こう側から聞こえてきた。

今日、救護施設から退院し、今は船室内のベッドに座つた状態で外を眺めている。パパとも一緒に帰りたかったが、パパは一仕事あるというので帰りは後日となる。ただ、見送りには来てくれた。イッキはもう大丈夫だよと言つたが、チドリとジョウゾウは聞く耳は持たず。安静しなさいと厳しく言つた。

短くも長く感じたメダロッ島での滞在。人生の波乱万丈を一つに

凝縮したよつな目に遭つてしまつた。正直、陸の孤島から離れられて、ある程度陸続きな身近な地へと戻れるのをイツキは喜んでいた。ゆりり…。ゆりり…。波に揺れる海面は夕陽を反射し、一瞬の閃光が幾重にも重なりシャーク号とその船室に届く。船内放送が出港まで後十分だと告げた。

考えたいことは正程あるけど、今は「うし」、ママとメダロットたちと一緒に静かに夕陽と揺れる海面を眺めていたかった。

「…外からだと更に良い眺めかもな」

ロクショウがぼそりと呟いた。

18 メダロッ島（帰航日）（後書き）

予定していた話数や文字数よりも長くなってしまったメダロッ島編、遂に完結！

今回、新たな仲間となつたメダロットの活躍の場がありませんでしたので、次回は会話だけでもいいから目立てる場面を提供したい。

一、二話ほど閑話休題的な話を挟んでから、また本編に突入したいと考えています。

19・気ままに過ぐす者達（前書き）

「3・一人の日常」に出てきた人物が再登場。

メダロツ島事件から十日。現在、イッキは自室で大人しく、電子ノートに算数の解答をタッチペンで書き込んでいた。ゲームもしていいし、漫画も読んでいい。今はそのどちらもやる気が起きない。だから、今のうちに少しでも宿題の中でも嫌いな物を科目を片付けようとしていた。メダロツ島滞在時からちょっとずつやつてきたお陰で、算数の宿題は残すところ四分の一である。

外は曇り空だが、雨は降りそうにないので、遊びに行けそうもない。仮にかんかん照りだとしても、イッキは外へ出ることは無かつただろう。何故なら、時刻はもう十六時を過ぎているからだ。この前のメダロツ島で起きた事には、いつもは甘いパパもさすがに厳しい態度に出た。そして、イッキを自宅軟禁に…。とまではいかないが、外出時間が朝の十時から夕方の四時まで制限された。おどろ山の時は外出規制に不満を持ったが、今回は自分の落ち度が大きいと理解しているので、イッキは素直に承諾した。ただ、夏休み終わりまでは可哀想だと、夏休み残り一週間の期間は外出規制は無しにすると言われた。

反面、メダロットの待遇はそれほどでもなく。むしろ、チドリとジョウゾウはそれとなく監視してほしいとさえ頼んでいた。メダロットたちは普通に行動するだけなら、イッキほどの制約は無かつた。

光太郎はアンボイナの「トッコー」という脚部を着けて、ソルティとのんびり散歩を満喫していた。飛行タイプだと安定が利きにくく、ソルティの首を宙吊りにする恐れがあるので、脚部をイッキに変えてもらつた。

ソルティは熱い日の散歩を避けたがり（大抵の生物に当て嵌まる

が）、こうした曇りがちの日や、早朝や夕方の涼しい時間帯での散歩を好む。エネルギー補充方の一つにソーラーシステムを採用したメダロットにとつては、熱い日の散歩のほうが調子は良いが、それならソルティの散歩の日意外に動けば良い話。こんな良い暮らしを送ることができていいのに、これ以上の贅沢は望ましくない。

イッキがこんな状態なので、ママやメダロットたちが交代でソルティの散歩をしていた。光太郎は散歩好きだ。前のご主人の趣味の一つが散策だつた。

同じ自然は一つとしてない。同じよつでいて、毎秒、目に見えないぐらい変化している。散歩による、こうした日々の緩やかな動きを見るのが楽しみだつた。

曇り空を見上げる。

わしはある世を有るとも思つてないが、無いとも思つてない。あの世とは、暗闇を恐れる臆病な人間の逃げ道という者もいる。しかし、漫画やゲームの世界に出てくる超人ならまだしも、実際の世界において恐怖を持たない人間なんてあるわけない。

もしも、そんな人間がいるとしたら。それはきっと、戦争などで生死の感覚が麻痺した人間か。あるいは、年老いて達観の境地に至つた者だろう。メダロットにも寿命はある。ただ、それがいつになるかは想像し難い。一つ言えることは、途方もない歳月を要するであろう。今の主人は若い。けど、いつしか年老い、別れる。

このことを言つ気はない。子供で何かと迷いややすい時期にいるあの子に、余計な重荷を背負わしたくない。それに、自分は死がない。時間は無限大にある、と思いがちな時に言つてもあまり効果はないやろな。

「二、三度かぶりを振つた。楽しい散歩のはずが、余計なこと考えすぎてしもつた。あの人に、そのことで度々笑われた。

「ソルティ。家までひとつ走りするで！」

鬱々とした気持ちを追つ払うように、光太郎は車輪の速度を上げた。後ろを振り返るのも悪かねえ。でもな、こういうときは余計な

考えなど捨てて、正しいと決めた答えに向かつて思い切った行動に出るもんだ。九十六歳まで生きたあの人は、いつもそういうて伏し目がちな若者たちより活発に動いていた。

楽しむときは楽しむもんや。じゃなきや、人生（？）損損。

アリカはセーラーマルチのプラスとプリティーブラインのマリアン。それと、マリアンと同種のイッキのプリティーブラインのトモエを連れて、今日もネタがないかと御神籠町内をさまよっていた。

「外出制限で自由に動き回れないし、外に出る時間も限られている。だからさあ、僕の代わりにトモエを連れて行ってくれない？僕だとどうせ動く範囲なんて決まっているし、意外としつかりしているけど、それでもまだ色々と分からぬことが多いトモエ一人で外を歩かせるのは不安だから」

「何でそんなことを私に頼むの？」

「人生経験はさせといたほうがいい。こんなことを誰かが言つていた気がするから。ああ、でも。変なことは吹き込まないでくれよ」
いかのやり取りがあり、アリカはトモエを取材に同行させていた。一行は河原に沿つて歩いていた。

トモエにとつて、アリカと他者の持ち物であるメダロットたちとの行動はもちろんのこと。外の世界を見聞きするのは驚きと発見の連続だった。トモエはそのことでアリカに感謝しているが、古風な性格の為、口数が少なく、いつも遠回しな表現で礼をのべているたのでアリカにいまいち伝わっていない。

「えーと。じゃあ、このまま真っ直ぐ河原を下つて。何も起こらなければもう帰りましょうか」

アリカより一回り小さい男の子が虫取り網で樹を叩く。目測が外れ、樹に止まっていたアブラゼミは何処へと飛翔した。雲行きが、先ほどより一段と怪しくなっていた。

「アリカちゃん。天気予報だと、一十分後ぐらいには一雨降るらし
いわ」

プラスが脳内に受信した天気予報の情報をアリカに教えた。

「…そう。じゃ、帰りましょ。勘だけど、多分、今日はこの町内で
は何も起きないと思うし。傘も持つてないから」

そう言って、アリカは河原の対岸を見た。対岸に行けば、メダロ
ポリスという都市がある。対岸付近には変わり映えしない住宅街し
かないが、少し遠く見やれば、折り重なるように聳え立つ高層ビル
群が建つ。御神籠町では精々軽犯罪だが、メダロポリスほどの高層
ビル群が立ち並ぶ街ともなれば、犯罪や都市部特有の問題が多くあ
る。

アリカも不謹慎だと理解はしているが、それでも、メダロポリス
に足繁く通つてスクープを物にしたい。アリカのジャーナリストを
目指す志は本物だが、経済・犯罪・地元密着と、一つに絞らず取材
をかけるのは何故だろうという疑問が湧く。

そこで、トモエは失礼を承知でアリカの真意を尋ねた。

「アリカのジャーナリストを目指す気持ちは分かりました。ですが、
そのスクープに対する拘りは何ですか？」

言葉使いに気を付けたつもり。しかし、今の言い方とイッキから
冷たそうと指摘された口調ではまるで咎めているようだ。若干、ブ
ラスとマリアンの目付きが不穏だ。

アリカは決まり悪げに空を見やり、そして半笑いの表情をアリエ
ルに向けた。

「…そうか。私、あなたにそう思われていたんだ」

「い、いや。済まぬ。私の言い方が悪かった。私のこの口調は生ま
れつきの物でな。アリカを咎めている訳ではない。単に興味が湧い
たから尋ねただけだ。気分を害させて真に申し訳ない」

「うーん…。でも、このままじゃ私の気分が晴れない。じゃ、私が
ジャーナリストを目指した訳を聞いてくれない？興味を持つたつて
ことは、私という人間を知りたいからでしょ」

トモエは無言で頷いた。プラスとマリアンの目から不穏な物が消えた。アリカのこの返しに、トモエは称賛した。いやはや、何とも大人びた対応する少女だ。私もまだまだ見習わなければ。

アリカはポツポツと過去を語った。

「私が小学一年生ぐらいの時かな。友達と一緒にね、電車に乗つてメダロポリスに行つたことがあるの。因みにその友達はイツキじやないわよ。理由とかは特にないの。ただ、一人で行つちゃ駄目という場所に行きたかったから、だから、気の合う子と一緒にメダロポリスに行つたの。お母さん、『一人では』行つちゃ駄目と行つたしね。

で、飽きて、駅に隣接したメダロッターズを目印にして帰ろうとした。そこで、大勢の人にはねながら懸命に改札口へ向かつたとき、記念として一枚撮つていこうと友達が言つたの。私がカメラを取り出そうとしたら、男の人がその子にどんどんぶつかつて、私との子は互いに頭突きしあつた拍子に思わずシャッターを押しちゃつた。その子がおかしいと言つて、背中のポケットを探つたら財布が無くなつていた。背中が膨れていたし、誰から見ても財布が入つていることが一目瞭然だつたからね。多分、それで目を付けられたのかもしがれない。

幸いというべきかな。それ、お父さんのポロライドカメラだつたの。そこですぐに現像された写真が出てきて、ぱつちりと抜く瞬間を捉えていた。女の駅員さんにその写真を見せたら、親切に対応してくれた。それから、十分か二十分ぐらい経つて駅員さんに連れられてその男の人がきた。そして、ハナちゃんの財布が戻ってきたの。男の人が悔しそうにこつち睨んでハナちゃんは怯えたけど、私は逆に睨み返してこう言つてやつたの。『いくらお金が欲しいからつて、こんな小さい子を睨んで怖がらせたり、しかもお金まで奪つて何が楽しいの!』 そうしたら、その人、憑き物が落ちたようにハツとした顔になつて、決まり悪そうに私たちから視線を逸らした。

で、一時間としないうちに両親が迎えにきて、私たちは家へ帰つ

た。帰り際、私たちの話に耳を傾けてくれた駅員さんが、よく勇気を持つて言えたね。君のおかげでその子のお財布は戻ってきて、あの男性も自分の仕出かしたことに気が付けた。『協力ありがと』ございます！ そう、感謝されたの。

でも、これからはちゃんとお父さんやお母さんここで行くべからいからかな。事あるごとにシャッターチャンスとか言って撮つたり、ジャーナリストという仕事を知つたのは、事あるごとに写真を撮りたがるから、お父さんがお古のカメラをくれたの。だから、世間からどんなに非難されようとも、時間がある今だからこそそんなジャンルを取材対象にしてジャーナリストとしての地力をつけたい。……といつても、栄誉を掴んでみたいという気持ちもあるにはあるけどね』

「そして、現在はプラスとマリアンと共に取材の日々を……」

最後の言葉はトモ工が継いだ。

アリカという少女の一面を知れた。したたかで油断ならぬ一面もあるが、思いやりのある正義の心も持ち合わせていた。良き話を聞けた。イッキと似合いかも。なんて余計なことまで考えてしまい、心の中で一笑に付した。

「お聞かせ下さりありがと」

トモ工は両手を添えて、心からお辞儀した。トモ工に突然お礼の意を述べられて、アリカは慌ててカメラを持ってない左手を振った。「えつ……そ、そんなお礼言われるほどのこととした訳じゃないし！ 腰まで曲げなくていいわよ」

その二人の様子を、プラスとマリアンは愉快そうに見ていた。

公園で一体のクワガタ型メダロットと一人の幼女が遊んでいた。

「曇天が厚くなつたな。そろそろお暇しないか？」

「えー！そな雲ないし、遊べるよー。とにかく、糸田って何口クちやん？」

口クショウの提言を幼い少女はあやふやな言葉使いで否定した。口クショウはどうした物かと迷った。口クショウに話しかけているのは、天領家の近所に住まう萩野家長女・萩野香織。

大分前、ソルティの散歩の帰りに公園でカメレオン型メダロットと遊んでいた少女だ。あの時、口クショウはまた遊ぶと約束していた。だが、小学生の持ち物である口クショウと幼稚園児である香織では時間が食い違い、挨拶はできても遊べるほどの時間がなかつた。口クショウはもちろん、香織もしつかりと約束を覚えており、今日一人で散歩していたらばつたりと少女と出会い、口クショウは二ヶ月ぶりに萩野香織の遊び相手をしてあげた。

「…糸田ではなく暇だ。そろそろ、さよならしましょとでも言えばいいか」

「何でそんな難しい言い方したの？」

「癖だ」

「じゃあさあ、最後に田隠し鬼しない」

田隠し鬼をしようつと言つのは、萩野と同じ幼稚園に通つ富玲といふれい
う少女。

田隠し鬼か。鬼は誰?と分かりきつたことを聞くと、香織と富玲は声を合させて口クショウと名指した。やはり。鬼じっこも、かくれんぼも。鬼役は皆私。かくれんぼはメダロットの感知機能をもつてすれば簡単。下げても変わらない。よって、口クショウが鬼役をやっても意味はない。鬼じっこも、子供と自分の速度では圧倒的な差がある。

田隠し鬼なら、視覚機能を切り、聴覚機能の感度も下げればいけないこともないかも。

口クショウは視覚機能を切り、聴覚機能を半減。これなら、この子らとじつと同格だらう。

そして、口クショウと香織と富玲は楽しく追いかけっこ。じつに

う時、自分がメダロットで良かつたと思う。自分が人間の大人なら、下手すれば警察に通報されていたかもしれないからだ。今の自分の追いかけている姿はさぞかし滑稽だろう。内心、諦めついたような苦笑を漏らした。

十分ぐらいして、ロクショウは一人の少女にタッチした。さあ、これで仕舞だよとＮＨＫのお兄さん風に言ってみたものの、駄々こねられたので、ロクショウはもう一回だけ変態見たいな鬼役をする羽目になった。

空を見上げると、曇天が更に広がっていた。

「ほら、本当に一雨降りそうだ。香織、富玲。遊びはここまでだ」

ロクショウと香織は富玲にさよならを告げた。富玲は公園の近くに住んでいる。

「ロクちゃん。帰ろ」

ロクショウより小さい女の子は、体温とはまた違う温かみを帯びたか細い腕をロクショウの左腕にギュッとしがみつくように巻いた。ロクショウは帰りの道中、今日のソルティ散歩係の光太郎と遭遇。更に、アリカのジャー・ナリスト一行と歩くトモエとも会った。大集団の帰宅に、香織は嬉しそうに浮き足立っていた。

時刻は五時を下回っていた。ママは週に一日のパートの稼ぎで六時になるまで帰らない。迎えに行くか。一問の算数の問題を残す電子ノートを一旦閉じ、イッキは玄関口に置いてある傘立てから一本抜き取り、メタビーたちがいないかと外に出た。

家を出て右側の方向を見ると、主にメダロットたちで占められた集団がきた。

「イッキyan！ おかんに五時以降は家を出ちゃダメだつて言われてただろ！」

光太郎が冗談で大声で喋った。イッキは慌てた様子で後ろを振り

返つた。そつすぐには帰つてこないと分かっていても、地獄耳という言葉があるし、聞かれてしないやかと焦つた。

トモエはきちんと甘酒家の門前でアリカ達に別れの挨拶を述べて、ロクシヨウは六軒先にある萩野家まで香織を送つた。

イッキ、トモエ、光太郎にソルティ、遅れてロクシヨウは家に入つた。見計らつたように、雨が降り出してきた。

「危うかつたな」とロクシヨウ。

六時にママが帰つてくるまでの間、イッキはメダロットたちから休日の感想を聞いた。自分の感想では、一行で済んでしまいそうだから、メダロットたちの話を聞くことによつて少しでも絵日記の行を埋めようと心掛けた。

六時、パートからママが帰宅。食事前に日記を済ましておこうと、イッキは紙でできた絵日記帳を開いた。どれだけ技術が進んでも、手で文字を書くことは必要。その為、現代でも学校は国語や絵日記など一部に限り、手書きによる提出物を求めている。

今日の夕食は豚カツ。作りすぎて余つた豚カツは、明日の昼食であるインスタントカレーに添えられる。それが楽しみすぎて、日記は適当な物に仕上がつた。もつとも、鉱物のカツカレーで集中を乱されなくとも、イッキは絵日記を適当に仕上げただろうが。

『光太郎はソルティとの散歩で季節を感じとり、人生観について考えた。トモエはアリカたちとの取材でとにかくいろんなことを学び。ロクシヨウは、近所の幼稚園児の子たちと楽しく遊んだ。僕は、頑張つて算数の宿題とこの絵日記に取り組んだ。いじょう！』

文章は適当だが、仕上げの上手いとはいえない絵だけは色鉛筆で熱中して描いた。

19・仮説による者達（後編）

カブトとは展開が一部異なります。

博士に頼まれて、主にロクショウのメダル成長とロボトルの記録を詳細に記した報告書を入れたランドセルを背負い。アリカも伴い、久しぶりにメダロット研究所を訪れた。

メダロットを始めてから既に三ヶ月。「ロクショウ」と名付けられたクワガタメダルの成長は著しく、蛹化から成虫へと脱皮しそうだ。

おどろ山にカンちゃんというおばあさんと暮らすメダロットの一家、ヤナギに背中のメダルを特別に見せて貰つたことはあるが、ヤナギのメダルは初期の絵柄のまま成長が止まつていた。ロボトル経験が無きに等しいので致し方ないとして、そのヤナギよりもロボトル経験が豊富なプラスと名付けられたカブトメダルすら蛹化段階の途中だというのに、目覚めてからたつた三ヶ月のロクショウの成長具合は異常だ。

博士からも電話でその事は指摘された。

外出規制は解禁されてないが、メダロット博士がチドリを説得したおかげで、今日だけイッキは六時までは外出していいことになった。

メダロツ島での「ゴタゴタ以来、ろくに電話すらしていなかつた。昨日、思い出したように電話をしたら、メダロット博士は待つてましたとばかりに電話に出て、直接来てくれて欲しいと言られた。

憧れの人物から頼みとあつては行かざるおえない。最後に、博士はこう付け加えた。

君の友達のアリカという子も連れてきてくれないか。ナエが、例の開発中の物について伝えたいことがある、と。

ナエさんが関わる例の開発中の物といえば、エレメンタルシリーズしか思い浮かばない。四体とも女性型で、パーツを他のメダロットに変換して戦う珍しい変化系メダロットだったと記憶している。

完成したのだろうか。博士とメダロットの談義、ロクショウから発せられた謎の光と力の考察、ナエさんが携わるエレメンタルシリーズの開発がどの程度進んだのかも気になる。

二人は、期待に胸を膨らませてメダロット研究所に向かった。

メダロット研究所の白い建物が見えてきた。門をくぐり、受付嬢のアポ確認を済ませ、二人は客室まで案内された。

五分経ち、メダロット博士とナエが直接出迎えにきた。

「お忙しい中、お時間を取つていただきありがとうございます」

一人して、声を揃えてぎこちなく硬い挨拶をした。

「イッキくん、アリカさん。こちらこそ来ていただきありがとうございます」

ナエは丁寧に返した。

「よう、久方ぶりじゃな二人とも。まあ、そう硬くならんでもえて。来てくれてと頼んだのはこちらのほうじゃしな」

博士は相も変わらず碎けた調子だ。

「そうですか…。じゃあ、お言葉に甘えて」

アリカは合わせた腿と腿の間隔を開いた。イッキは躊躇いがちに

「コンマニミリほど開いた。

「さて、来て早々お茶も出せず悪いが。ナエ、アリカ君はお前の研究室へ。イッキ君はわしの個人研究室へ来てくれんか?」

「えつ…?」

てっきり、一人してメダロット博士の研究所か書斎へ行き、その後ナエさんの研究室へ行くという順番だとばかり思っていたので。アリカは驚きを口にし、イッキは多少面食らった。

「どうして別れる必要があるのでですか?」

「イッキ君とは個人で話したい事があるのでな。アリカ君はまた今度の機会ということです。代わりに、好きなだけナエに取材をかけてもよいぞ」

「…お爺様…」

ナエは祖父の言葉に困った風に首を傾げてみせた。先にアリカがナエの個人研究室へ案内されて、続いてメダロット博士がイッキを自分の研究室へと連れた。

研究室の椅子に腰を落ち着けて博士と向かい合つと、イッキはロクショウを転送した。博士はじかにロクショウとも会話してがつていたからだ。転送されたロクショウに博士は「ちょこつとメダルを見せてくれんか。悪いようにせんから」と掌を合わせた。

ロクショウは不承不承ながら、ソードをちらつかせて「妙な真似をしたら許しませんぞ！」という脅し文句もつけてメダルを博士に見せた。博士は片手にカメラを持つて、一分間、ロクショウのメダルを撮影した。

「もうよいぞ」

ロクショウは細工でもされてないかと背中のメダルをさすり、無事だと判断すると、安心したようにメダルハッチを閉じた。

イッキは博士に資料を手渡すと、本題に入った。イッキ、ロクショウ、メダロット博士、更にメダロットチから光太郎とトモエまで議論に口を挟んだので、博士の個人研究室はいつもより賑やかだつた。

炎を身に纏つたような灼熱のフレイムティサラ。重厚と重圧感溢れる深緑色のアースクロノー。軽やかに大空へ羽ばたきそうな青空のウインドセシル。そして、海の妖精を連想させるような美しさと可憐さを備えたアクアクラウン。透明度が高い高価そうな四つの力プセル内部に、四体の精靈は静かに鎮座していた。

「…綺麗…！」

見惚れたアリカは思わず本音を呴いてしまった。

メダロットを見て可愛いとか、かっこいいとか、酷いときはダサいとか思つたりするが、「綺麗」という感想を抱いたのは初めてか

もしれない。

前来たときは何とも思わなかつた。そのときは、あちこちピースが欠けた状態のパズルみたいな不格好な姿だつた。今は違つ。四体はピースがしつかりとはめ込まれ、防腐用の淡いライトの反射のせいで、四体の精靈は芸術品の域へまで達していた。

「どうぞ寬いでください」

ナエはソファに座るよう勧めた。ナエに声をかけられて、アリカはエレメンタルシリーズから視線を外し、ひたとナエに目線を定めた。

「さつそく質問していいですか？まとめて」

「私の知識で答えられる範囲ならば」

「どうしてイッキと私を分けたんですか？私はまだしも、イッキは一度手間なんじや。それと、エレメンタルシリーズの開発はどの程度進んでいるのですか？」

ナエは直ぐ様回答した。

「アリカさんの一つ目の質問ですが……すみませんが、私からはお答えできません。というより、私も詳しい事情は知りません」

「どうして！？」

「……さあ、祖父は男と男の秘密じやからなとしか言いませんでした。イッキくんのメダロッターとしての成長と、彼の相棒の『口クショウ』と名付けられたメダルの成長を聞くのが楽しみでしちゃうがない。以前、こう語つていましたわね」

「ナエさんはそれについてどう思つているんですか？」

「それもちょっと…。関係あるかどうかわかりませんが。特殊な事情からメダロットを手に入れたケースだから、と」

「…特殊な事情。確かに、言われてみればそうだ。光太郎も特殊な例だが、カンちゃんのように、野良メダロットを拾つて更生させるケースは全くない訳ではない。トモエに至つては、安売りで入手するというたいして珍しくもない方法だ。

しかし、口クショウは違う。光太郎のように新たな主人の代わり

になるわけでもなければ、トモエのよう普通に購入して手に入れただのでもない。イッキから聞いた怪盗レトルトの言葉を借りれば、特殊な仕様のメダロットに入った特殊なメダルを、イッキのお父さんが帰り道で謎の人物から貰うという奇つ怪極まりない方法で入手したのだ。

ヘッドシザース購入記念一千人目にイッキがなったから、二つの品物を無償で送った。謎の人物はこう語っていた。

後で調べたところによると、そういうキャンペーンは有るには有った。だが、そのキャンペーンは急遽仕組まれた物であり、後でメダロット社に、千人目の購入者である中年メダロットマニアから自分にも寄こせという抗議の電話がきたらしい。

ロクショウのあの謎の光が特殊なメダルの正体の一つであることには間違いないが、それが何なのかまでは分からぬ。また、特殊な仕様メダロットも気になる。アリカや一般のメダロッターが身につけるメダロットは、メダロットのメダルを最大三つまで収容できる。だが、イッキのメダロットは驚いたことに、最大四つまでのメダルを収容可能としていた。つまり、ロボトルで仮定すれば、一体を補欠要因として使えるのである。

イッキも自分の入手法に関しては疑問を感じていたが、今更、返せと言わなくても絶対に返さないと断言していた。

この事に関して意地悪な質問を一度してみた。ロクショウから離れたいと抜かしたらどうするの。するとイッキは真面目な表情で。説得は試みるけど、どうしても折れないときは悲しいけど、所有者の責任者としてロクショウの新たな門出を祝うと答えた。他人に流されがちなイッキにしては、珍しく強い口調であった。

推理の論点がずれてきた。ともかく、他二体はいいとして、どうしてロクショウとメダロットは前例がない方法で入手したのか。また、メダロット博士のイッキに対するこだわりは何故なのか。

そして、イッキに二つの貴重な品物を贈った謎の人物の正体は？ アリカのジャーナリスト魂をくすぐるには十分過ぎる材料が揃つ

ていた。

目下の所、メダロット博士を問い合わせるのが手っ取り早い。でも、その人って意外にも食えない感じがするのよね。突っ込んだ質問しても、上手いことはぐらかされちゃいそう。

「あのー、アリカさん？」

「どうふりと思考に浸るアリカに、ナエが顔を覗き込んで一声かけた。

「……ん？ ああ、すいません。私、ふとしたら考え過ぎちゃうものですから」

ナエの呼び掛けで現実に戻ったアリカは、一言ナエに詫びた。そして、二つ目の質問であるエレメンタルシリーズの開発状況を尋ねた。聞きたくて考えたいことは山程あるけど、ナエさんは事情を知らなさそうだし。何より、せっかくきたのにこのまま長々とした思考に浸るだけではここに来た意味がない。

本題の話題がきて、ナエは安堵の表情を浮かべた。
「エレメンタルシリーズはほぼ完成しております。一二百種類の耐性実験をパスし、試験的機動も終了しました。ですが、後一つ足りない物があります」

「足りない物？」

「実際に使用する方達の感想です。研究員だけの声だけではなく、メダロット社と我々開発者一同は一般の方達がこの子たちを使用して、どういった感想を抱くのか気になるのです。例えば、パートの変化するパターンが乏しいとか。私たちが見落とした欠点や優良点を聞きたいのです」

「要は、テストプレイってことですね」

その通りだと、ナエは微笑んだ。笑みばかり浮かべる人は信用ならないが、ナエの「ごく自然に身についたような笑みには嫌気や怖気などは感じられず、こちらもつい微笑み返してしまつ。

「はい。そして、そのテストプレイヤーの一人としてお願ひできませんか？ アリカさん」

耳を疑つた。また推論にのめりそうになる自分を抑え、ナエに聞き返した。

「えーっと…。私がエレメンタルシリーズのテストプレイヤー？それなら、イッキに頼めばいいんじや。メダロットに対する愛情というか、想いはイッキのほうが上だと思うし」

「ええ、そうかもしません。しかし、私や数名の研究者はアリカさんの方が適切だと考えています。九歳の年齢にしては中々物事を筋立てて考えられて、大人の私たちは気が付かない子供ならではの視点で意外な発見をしてくれると期待して、あなたにテストプレイヤーをお願いしたいのです。無理にとは申しません。あなたが断つた場合、第二候補のイッキくんがテストプレイヤーとなります」

イッキに譲るうつと思つたが、アリカは踏みとどまつた。

「ここんとこ、イッキばかり美味しい汁を吸つているような気がする。本人にその気はないだろうが、少なくとも、アリカはそう感じてしまつた。ほんとは、美味しい汁を吸つているというよりかは、いつの間にかロボトルの経験やメダロットの数に置いて差を付けたイッキに嫉妬を感じているだけなのかも。それでも、素直に権利を譲るのはイッキに自分の運を大人しく譲渡するようで癪だ。

アリカは僅かに考えたのち、エレメンタルシリーズのテストプレイヤーになることを受諾した。

「ありがとうございます。では、アクアクラウンを除く三台から選んでください」

「えつ？その青色のアクアクラウンとかいうのはまだ未完成なのですか」

「あー先に申してあげておくべきでした。エレメンタルシリーズは一台につき、三名の方にテストプレイをしてもらうことになつていいのです。そのカプセルに入っているアクアクラウンは、今週の土曜日に試験者の一人が引き取りに来ることになつています。アクアクラウンは既に先週中に三名の方の予約を済ませたので、申し訳ありませんが、アクアクラウン以外の三台から選んでくれませんか。

パーツに装着していいるティンペットはあげます

ナエは申し訳なさそうに説明して、再び謝罪した。

一台選べなくなつたのは残念であるが、まだ、三台もいる。事前に見聞きした情報では、フレイムは攻撃。アースは防御。ウインドは妨害や特殊行動。アクアは回復。

アリカは即決した。宙に浮かぶ、あるいは飛べたりする機体がいい。

「それにします」

アリカが指した方向には、フレイムティサラがいた。

「フレイムティサラですか」

「はい。ウインドで現場へ急行もありかと思いましたが、情報とは即ち組み立てる物。フレイムティサラで宙に浮いて、上空でゆっくりと現場を観察するのも手の一つだと考えました」

「なるほど。アリカさんらしいですわね」

「じゃ、プラスとマリアン。どちらに着けるか考えなきゃね」

「その必要はありません」

アリカは眉を顰め、何でですかと問い合わせた。

「いいえ、パーツを上げないという意味ではありません。私から一つ、変化系パーツを得意とするメダルをお貸します」

この申し出に、アリカは小さく叫んだ。テストプレイ用のフレイムティサラ一式とティンペット、それに、メダルまで付いてくるなんて。イッキ並みの前代未聞の入手法だ。

「付け加えれば、試験帰還終了後、もしそのメダロットとあなたの間に一定の信頼関係があるようならば。その場合、完成品のエレメンタルシリーズのパーツと一緒にティンペットとメダルもあなたに差し上げます」

「よかつたわね、アリカちゃん」

メダロットからプラスが音声を発した。

当のアリカは呆然としていてプラスの呼び掛けが耳に届かなかつた。上手くいきすぎる。何か裏もあるのだろうか。試しに頬をつ

ねつてみた。痛かつた。棚から牡丹餅ならぬ、棚から金のインゴットが転がり落ちてきたようだ。

アリカは嬉しさのあまり、大声で飛び上がりそうになつた。

ナエの助手を務めるセントナースとは別タイプの看護師メダロット・ナインテンガールが四つのメダルケースを載せたカーボを押してきた。エイリアン、西と刻まれたウエストメダル、鏡模様のミラージュ、竜巻が渦巻くウインド。装着するメダルは既に決めてあつた。

「フレイムじや相性悪いし……」には……同じ自然現象をモチーフにしたウインドメダルを！」

アリカがケースの中のメダルを手にした瞬間、イッキがロクショウを連れてナエの研究室前まできた。

「パーツだけじゃなくて、メダルとティンペットまで……いいなあ」アリカは早速起きたことを話し、イッキから羨ましがられた。イッキが甘い汁を吸つているとか思つちゃつたけど、イッキは一度私のせいで何かと悲惨な目に遭つてるし、むしろ私のほうが美味しい汁を吸つていいわね。アリカは自嘲気味に口端を歪めた。イッキやナエがどうしたと聞いても、興奮して口が引きつただけだと誤魔化した。

話題を替えて、アリカは、イッキとメダロット博士がどう会話したのか根ほり葉ほり問いただしたが、期待していた返答は得られなかつた。

「だつて、メダロット博士でも分からぬことが僕なんかに理解できるわけないじゃん。それよりも、アリカ」

「何」

「日月水曜日は暇？」

「うーん。まあ、特に予定はないわね。で、あんた何が言いたいの」

「メダロット博士がね。メダルの生態記録をつけたいから協力してくれと言つて、日月水曜日なら、研究所のロボトル試験場を自由に使つていいってさ！ そのついでに、パートの性能を確かめたいから、エレメンタルシリーズのパートを貰うはずのアリカも誘つてくれつて」

「え！ 嘘！」

二人は生態記録という単語に引っ掛けたが、間断なき興奮と喜びの連続で、細かいところまで思考が及ばなかつた。

「二人とも、お茶でもいかがですか？」

「はい」とイッキ。

「…あの、えつと…」

三点セットを譲つてもらい、その上お茶まで出してもらつことにアリカは気が引けた。ナエは遠慮しないでと笑いかけた。その笑いに誘われるようにな、アリカは俯きがちに「戴かせて貰います」と言つた。

イッキとアリカはココアとクッキーをほおばり、雑談し、改めてエレメンタルシリーズを見学したのち、メダロット博士とナエの二人に心から礼を述べて、午後五時頃に帰宅した。

「今や希少種となつた純和風日本美人やな。ナエさんは」

光太郎のこの発言が口火となり、帰りは時間をかけて歩みながらじっくりとお喋りした。

20・ナエからの頼み（後書き）

ナエからHレメンタルシリーズとメダルを受け取るのは原作ではイツキでしたが、アリカに変更しました。因みに、カブトでは別の機体を受け取っています。

ナインテンガールは「メダロットR」に登場するメダロット。ウインドメダルはメダロット2以降に登場するメダルです。

2作目以降のメダルをしてしまったので、機会があれば、どこかでメダロット3に登場するメダロットも出してみようと思います。

次回から、本編（原作）のストーリーに戻ります。

21・暴走（前書き）

旧作（一作目）から三名がモブとして登場

夏季はありとあらゆる生物が最も活発な時期。犯罪に限り、季節は当て嵌らない。

おどろ山での行為を皮切りに、十年ぶりに口ボロボ団が活動を開したのは全国規模で知られた。どんなに防犯技術が発達しても、嘲笑うかのように悪事は絶えなかつた。

都市部はただでさえ人の出入りが激しく、交通整理や治安維持を行つ警察とセレクト隊は口ボロボ団の台頭に頭を悩ませていた。壁の落書き。子供にデコピンをしてキヤンディを奪う。焼イカの耳だけを食べて他は捨てる。ピンポンダッシュなどはまだ可愛らしい物。

悪質な物を挙げれば、高級レストランでの無銭飲食。コンビニやデパートのメダロット強奪。

メダロットの生産工程は機械で一割、人の手による工程は八割を占めている。仕入れ側にとっても安い買い物ではないので、メダロット関連の盗品は懐が非常に痛い。また、近頃東日本を中心に起きた子供の消失も、先月起きたメダロット島騒動と繋がつて口ボロボ団の手の者による犯行ではないかと疑われている。

他、夜中の清掃活動。口ボロボ印のシールが貼られた植林活動など、稀に良いことをしているのも謎である。

昨日、遂に長い制約生活期間が終了し、イッキは晴れて自由の身になつた。そして、アリカのメダロポリス行きの取材に付き合わされることになつた。嫌とは思わない。むしろ、久々に親に気兼ねなく遠出できるのは楽しみだつた。

ガタン。ドトン。

電車はウエストシティを通り、メダロッターズがあるノースシティへ向かう。

メダロポリスは日本国外からも注目されている都市。単にでかいからではなく、四都市にそれぞれの特色があるからだ。

メダロポリスはノース、ウエスト、イースト、サウスシティの東西南北四都市に分けられており。この四都市全てを総称したのが「メダロポリス」である。

ウエストシティは平均的な住宅街と雑居ビル群で分け隔てられ、ノース駅近くのウエスト区域にはセレクト隊東京第一支部が門を構えている。イーストシティには閑静な高級住宅街と、名門である小中高一貫の花園学園に花園大学と花園総合体育大学の一いつが聳え立つ。サウスシティは広々とした公園とアパートと繁華街が隣接し、かの有名なメダロット本社がある。そして、イッキたちが目指すノースシティはメダロッターズなどの娯楽施設が建ち並ぶ。また、メダロポリスはメダロットに関することは開放的であり、日常茶飯事にメダロットに関する行事が要所で開催されている。

尚、四都市中央にはメダロポリス市役所が建立。

市役所はどうでもいいとして、電車に乗る小学生二名とメダロッタから出でている彼らの愛機三体は車内外の光景を満喫していた。ヘッドシザースとプリティプランは主人より幾分落ち着いていたが、興味津々な気持ちは隠せずやはり興味津々な気持ちは隠せず、視線が流すように彷徨つっていた。隣のセーラーマルチの体を着た者も同様だ。今日、初めて電車に乗るから致し方ないことかも。電子広告と揺れる紙媒体の広告を見たあとは、座っている人たちを見た。

携帯を熱心に操作する女子高生三人。頭頂がバーコードのように禿げた五十代のサラリーマン。そのサラリーマンより更に老けている割には、綺麗に髪を七三分にした渋柿スースを着たお爺さん。目も当てられぬほどニキビがあり、太って眼鏡をかけたお兄さん。金髪に染めてギターを背負ったイカした人。髪を団子状に纏めてキリ

りと目鼻筋が通つた都会派な〇〇。中国語で真面目そうに会話する二人。シアンンドッグ、イエロータートル、マゼンタキャットのメダロットを従え、談笑する大学生ぐらいの男一人と女。半笑いの表情でモゴモゴと何かを呟く、知能障がいの気があると思しき女性。電車に乗り慣れたアリカにとつては何でもない光景だが、あまり乗つたことがないイッキに、初めて乗車したロクショウとトモエには新鮮だった。

こうやって電車に乘ると、世の中、色んな世界と人間がいることを改めて気付かされる。などと、知つたかぶりに考えていたら、乗務員が「えー！間もなく、ノースシティ。ノースシティに到着。荷物をお忘れなきよう、お降りください」と放送したので、急ぎ、ポケットの中の乗車券を確認した。

乗車券はきちんとポケットにあつた。ホッとしたが、電車から降りるまでは用心して、券を握つたまま改札口まで向かつた。

「あんた、心配し過ぎよ」

と、アリカに自身の小心を笑われた。構うもんか。無くして、無駄金払うよりかはましだと心の中で叫んだ。

改札口を抜けて、事件の現場となつた駅前付近のメダロッターズに立ち寄つた。

三日前、大雨の中、白昼堂々メダロッターズ店内で強盗事件が発生した。格好からして明らかに口ボロボロ団の犯行によるものであり、しかも、背丈からして子供かと思われる。身長は120cm程度、手が異様に長くて妙な機械音がし、体を赤から青く染め上げた三体のホッピングスターを使用。と、ニュースでおおまかな情報は入手している。

噂の子供団員＝＝＝ロボロボの犯した行為は、犯罪低年齢化問題でマスコミを騒がせた。

現場で聞き込みすれば、何か掴めるかもしれないアリカに誘われてきたが。イッキたちとしては、本当は事件捜査よりウインドショッピングを洒落こみたい。そのついでに、ロボトルやメダスポート

を相手してくれる誰かがいれば言う事はない。

ジャーナリスト魂を揺さぶられたからだが、アリカにも樂しみたい気持ちは少しあり、聞き込みのついでならと素直ではない言い方をした。

駅構内を出てすぐ、二つのタワー・登上部に挟まれるように直径七メートルもあるMの文字が彫られたメダルの彫像が飾られた、近未来的なツインタワー・メダロット・ターズの全容が視界に入った。全長200M超え、階数30超えの巨大タワーは地上を見下ろしているかのようだ。設計者は当初、ティンペットの形をしたビルを建築したかったようだが、当然却下され、泣く泣く一から設計図を書き直したとかなんとか。

右側のタワーはデパート。メダロット以外にも様々な商品を扱っている。左側の下から三分の一はロボトルとメダスポート施設で占めており、その上からは総合商社ビルとして様々な企業や会社の支部が置かれている。

200M超えで30階建てなのは、利用者に窮屈さを感じさせよう、天井を高く設計してあるからだ。

アリカが一枚撮った後、正面口へ向かう。イッキも携帯の写メでもあれば撮りたかったが、生憎、まだ携帯は持っていない。家の方針で、携帯は中学生からという決まりだ。

まずは右のデパートから。一階から十三階までは吹き抜けのロビーであり、その裏は駐車場である。一階と二階の半分は食料品店である。

子供だからといつ理由で話を聞く前に追い払われることが多々あるので、警察は避けて、警備員や店員から話を伺うこととした。

まずは一、二階の食品店で働くおばちゃん一人に話を伺つたが、ニュースで見聞きしたのと大体同じような内容だった。次に、被害の現場であるメダロット・パーソ専門店にエスカレーターで向かつた十五階ではあからさまに警備員やそれらしき私服監視員が警戒に当たつっていた。エスカレーターの反対側を真つ直ぐ行つた先に、現

場がある。エスカレーターの反対側に回ると、遠目からでも、刑事ドラマとかでよく見られるお馴染みのあの黄色いテープがまだ貼られていた。

ここで、イッキはアリカと一旦別行動をとなつた。

「私が取材している間、好きに回つていいわよ」

「でも、僕携帯持つてないよ。はぐれたら、どう合流するの？」

「じゃあ、この階で待つといてくれない。どうせ、あんたのことだからパーツを眺めているだけで時間を潰せるでしょ」

反論できない。プリティープラインことトモエのセット一式を購入した際のお金は余つてはいるが、今日の子供電車料金（90円）を差し引き、2170円ぐらいしかないので、メダロット関連はとてもじゃないが手が出せない。

それでも、この宝庫にいて、色々なメダロットたちを眺められるだけでも満足だ。アリカはイッキの無言を了解と受け取り、別れた。ケースが割れ、中に置かれていたはずの珍品メダロット・アンノン・エッグの姿が消えていた。

エレメンタルシリーズのフレイムティサラ」とフレイヤやマリアンでは目立ちすぎるの、プラスが隠れたところからメモを取ることにした。

「あのー、私は甘酒アリカと申します。犯人は小人症か、あるいは小学生による犯行路線が濃厚とニュースで見ましたが、私と同じ学校の生徒は疑われていませんか。：私、不安なんです。自分の同じ学校の人が悪いことした考えると怖くて」

嘘だ。と、イッキは言いそうになつた。アリカのことだから、自分の学校の生徒が犯人だとしても、嘆くどころか遠出する手間が省けたと嬉々として取材するだろ。こんなしおらしい素振りをするのは、自分を可愛らしく見せて、警官の態度を和らげようという魂胆があるに違いない。

事実。警官の人はアリカに気を許してしまい、「君の学校は」と尋ねた。

「ギンジョウ小学校です」

「ギンジョウ小学校か。気休めかもしれないけど、テレビや新聞の情報はあまり鵜呑みにしないほうがいいよ。それに、犯人はまだ小学生と断定したわけではないし。何より、僕…私としては、出身校から悪人が出たなんて信じたくないからね」

まさか、同校出身者の警官。いわば、先輩が相手だったとは、チヤンスね。アリカはしおらしげな態度を崩さず、慎重に、何となく思つたこと口走つた感じに「えーと。まさか、この近くの小学校とか」

「まあ、その疑いがあるにはある。花園学園とか…」

ハツと喋りすぎたことに気付き、警官は急に口を閉ざした。アリカは二ツコリと子供らしく微笑み、両手をお腹の上に重ねて「お忙しい中、ありがとうございました」と綺麗に腰を曲げた。

去るついで、アリカはカメラを向けた。

「一つ、記念に。後輩の頼みとして！」

警官はアリカの本性を疑い始めたが、仕方なしに、一枚ほど撮らせてやつた。

こうして、アリカは警官の口から直接情報を聞き出し、現場写真まで撮影できた。

早歩きで一階を駆け回り、三人組を見つけた。

「ペットは主人と似るか」

イツキとロクショウは、パークが入った箱を骨董品のように大事に持つて眺めては、ふむふむと頷いていた。トモエは興味なさそうだったが、自分と同種のパークが入った箱にはちらちらと視線を投げかけていた。

パークとしている三人を連れて、三階にはエレベーターで登つた。十六階はメダスピーツ用具、ペイント、メダロットにつけるアクセサリーのお洒落道具を販売している。十七階では、メダルとティンペット、高級オーダーメイドを承つている。

同じメダロット商品売り場なので、一階の食料品店より情報は得

られるかもしれない」と期待したが、ニュースで見聞きした情報として変わらなかつた。

「もう、用はないわね。後は… そうだ。一度、オークション会場に寄つてみない」

「オークション会場とは、物を競るところだな?」

ロクショウはアリカに聞いた。

「そうよ。ところで、何で知つてんの?」

「さる小説に詳しくそのシステムが書かれていた」

親がいたら、きっと大人の世界に首を突っ込むのはまだ早いと言つに決まつてゐる。一人と三機は遠慮なしにオークション会場がある29階に寄つてみたものの、どうしたことか、受付の女性に入室を断られた。

「申し訳ないね。今日は特別で、予約がないと一般やお子様の入場は断つてゐるんだ。ところで、チラシ見なかつたの」

「はあ、見落とししてしまいまして…。ところで、どうして今日に限つて」とイッキ。

「琥珀に入ったメダルとか、何百万する代物が競りに賭けられるの。済まないわね。また今度来て」

ああ、だからか。いつもより警備が厳重なのは、そういう事情もあつたからなのか。それにしても、チラシを見落としたのはかなりの落ち度であつた。

「じゃあ、次は僕の行きたい場所…」

「今まで言わなくていい。ロボトルとメダスポーツ施設がある隣のビルに行きたいんでしょ」

一行は、次の目的地を定めた。

実践ロボトル場は一階。シミュレーションロボトル・メダリングクは一階（高さでいえば実質は五階）。二階はメダスポーツのメダリ

ンクバージョンが設置。このビルの外にはグラウンドがあり、メダスピードはもちろん、人間が運動できるようにも設計されている。

実践ロボトル場でロボトルしたかつたが、平日にもかかわらず人が並んでおり、更にフィールド使用料が八百円と、今のイッキには痛い出費額なので、諦めて一階のメダリングに行くことにした。

その一階で意外な人物二名と出会ってしまった。

「ヘベレケ博士！…と、あの時の高校生」

白衣を赤く染めて、電球のような帽子を被り、機械仕掛けの片目眼鏡を着けたマッドサイエンティストのような白髪の老人 ヘベレケ博士。そのヘベレケ博士の傍にいるのは、イッキがメダロットを初めて日が浅い頃に真剣ロボトルで戦い、イッキたちのロボトルにおける主力パートであるソニッケタンクの頭部をくれた茶髪リーゼントの高校生だ。左右にいる不良めいた格好の二人は、彼の“ダチ”だらう。

「あつ！お前は…」

その高校生はイッキの存在に気が付いた。

「その隣のいるヘッドシザースは… そうか、いつぞやの小学生か」
ロクショウがズイと前に出た。

「おい、ロクショウ」

まさか、こんなところでリアルファイトだけは避けたい。人目につかない場所でもしたくないが。彼は学ランの右袖をたくし上げて、手首に巻いた燃え上がる炎のような絵が塗られたメダロッチを見せた。

「へー安心しろーお前のような小学生をよつてたかつてボコるほど落ちぶれちゃあいない。ここは平和的に、また真剣ロボトルといこうじやねえか！」

おほんと、ヘベレケはわざとらしく咳払いした。

「では、この勝負。わしと彼女が見届け人となるう。よいか？」

ヘベレケはさつと子供たちを見回した。アリカは小さく頷いた。

「お願ひします！」イッキと彼は同時に答えた。

アリカは高校生三人とヘベレケ博士を見比べて、一つ質問した。

「あのー。ヘベレケ博士はこの人たちと知り合いなのですか？」

「ん? 違うぞい。わしがここにいたら、数分前、こやつらもここにきた。それだけの関係じゃ。まあ、一言アドバイスを送つてやつたりもしたがな」

始める前、ヘベレケに登録を済ませたのか聞かれ、イッキとアリカは受付嬢にメダロット使用許可証とメダロッチを見せて、使用パスカードを受け取った。

このカードをメダリング機会の隣にある挿入口に差し込み、百円入れて、メダルとバーツを収納したメダロッチを3Dリアル画面の下にある、台の上に固定してプラグを付ける。バーツやメダルの選択は、画面横に置かれたノートPCからする。そこからメダロッチから伝道されて、画面にメダロットが立体的に映し出される。

フィールドは、メダロッター同士の話し合いで決められる。

勝負は互いのメダロット（主にリーダー機）を機能停止に追い込むか。タッチパネルの隅っこにある「降参」と書かれたボタンを相手が押せば、決着。

高校生たちはサイバーを選んだ。水中以外ならどこでも良いので、同意した。博士に言られてアリカとプラスのバーツを着たフレイヤが反対の高校生側、ヘベレケはイッキの背後から一メートルほど離れた。「アキハバラの奴と同じく、わしが目にかけている子供の内一人にお前さんが含まれている。じっくり、その成長ぶりを見物させてもらうぞい」

メダロット博士とナエさん、ヘベレケ博士。ヘベレケ博士はメダロット博士ほどじゃないけど、メダロット界の権威の一人。こんな身近にいる凄い人たち三名から注目されるとは。自分の調子良い一面が出てきた半面、怖いような疑うような気持ちもわいてきた。

「はい! ご期待添えるにわかりませんが、やれるだけやってみます」

インターネットで他の三台と繋がり、いよいよシリートロボトル開始。

画面で立体的にメダロットたちが再現される。手を伸ばせば触れることができそうだ。

こちらはいつも「面子が三体。光太郎の頭部をソニックタンクのに替えた。相手はリーダー機がソニックタンク純正。一番手は、キースター・トルの両腕、カツパードの脚部と頭部をパーツを着けた機体。三番手は、キン・タローの右腕、クルクルマンの左腕と脚部、ハニワゴーレムの頭部を着けた機体だった。

四名のメダロッターはスタートボタンを押し、戦闘開始。血気盛んな三人と三名に反し、イッキとロクショウたちは冷静そのものだ。

勝負は意外なほど呆気なく片付いた。光太郎が先制のナバーム弾をカツパードにぶち込み、ロクショウがハンマーで顔面を強打。切りかかってきた三番手の右斧をトモエは盾でしかと受け止めて、ロクショウが目にも留まらぬ速さで丶字に切断。

一定の轟音をシャットダウンする仕組みになつており、強化ガラス越しから間近に観戦しているようだ。

リーダー機のソニックタンクはしつこかつた。

「ファイトだあ！！ロクショウ！！」高校生が叫ぶ。

イッキとロクショウは驚いた。相手のソニックタンクも伝説のメダロットと同じ名前だったとは。

「出来ることなら、私が止めを刺してやりたいものだ」

機械仕掛けの体の内側から燃える闘魂が見て取れた。

降り掛かるミニ焼夷弾を、重力波で誘爆させる光太郎。そこを、ロクショウがソードで脚部を一撃。「油断するな。ソニックタンクの装甲は固い。前と同様、もう一撃だロクショウ」ロクショウは追撃のハンマーを振るう。手元にあるデータ画面から、ソニックタンクの起動を表示する部分が暗くなつた。

”ウイナー・天領イッキチーム”と双方のスピーカーから洩れた。ナエさんとアリカ。たまに暇を持て余した研究員と一ヶ月の間、定期的にロボトルをしたことにより、メダルが相當に成長したのがこれで実感できた。

画面の中でロクシヨウが小さく手を握りしめ、光太郎はトモエにハイタッチしていた。

メダリンク装置からメダロッヂを取り出した三人組がイッキを囲む。リアルファイト！？そう警戒したが、茶髪リーゼントの彼が神妙な顔つきでイッキの肩に手を置いた。

「まいったぜ。手抜きなしの真剣勝負で俺達と俺のメタビーを打ち負かすとは……。大した奴だぜ」

他の一人も綺麗さっぱり負けて満足げだ。それほどではと頭を搔くイッキに「ただし、ゲームもそうだがロボトルばかりに嵌まるなよ。薬にかかるたように熱中しすぎて、メダロットから縁を切られた奴もいるからな」と、彼は一言添えた。

「じゃあ、ちょっと待つてろよ坊主」

そう言うと、三人は突然じょんけんを始めた。四回目のあいこで、鼻に小さく濃い鬚を生やした一人がチヨキを出して独り負けした。やられすぎだと、髪面は一人に小突かれた。

「ちえ！よし、じゃあ、俺の相棒の頭をやるよ」

彼はメダロッヂからカツバーロードの頭部をイッキに渡した。やられすぎとは、そういう意味か。

「ハイ！みんなこっち向いて！」

アリカにカメラを向けられ、三人は子供のように勢いよくピースを向いた。格好こそ不良っぽいが、根は悪人ではないようだ。メダロッヂを取り出したら、ヘベレケ博士がイッキに挑戦を申しした。

「のう、お前さん。次はわしと一勝負せんか？」

「どうする？」イッキはメダロッヂの三体に聞いてみた。

「ええで」と光太郎。「つむ」とロクシヨウ。「後一度なら」とトモエ。

イッキはヘベレケ博士の目を見て、「お願いします」と言つた。「そうか。では、お前さんの料金はわしが受け持とう。遠慮するでない。…おつと…」

ヘベレケ博士の腰のポーチからホールが鳴つた。

「しばし待たれい。すぐ戻る」

メダロット博士は階段に行き、こそそと何か話し始めた。イッキがサラカラビームを収納しようとしたら、ロクショウが呟いた。

「…聞こえる…」

「何が?」

「イッキ。私をメダロッチから出してくれ。そのほうが、より明澄になりそうだ」

言われるがまま、イッキはロクショウをメダロッチから出した。

「それで、何が聞こえるんだよメタビー」

「…分からぬ…。雑音のよつな物が混じり…ビツヤ、苦しみでいるような気が…」

ロクショウが訳のわからないことを口走つて、その時、受付のほうから女性の悲鳴と破壊音が上がつた。アリカとフレイヤ、イッキとロクショウ、その他数名が受付に向かつた。ヘベレケ博士はまだ通話中だった。

便宜上。二人の受付嬢はAとBと呼ぶことにする。

後輩のAはいつも通り、パソコンの画面を操作していた。メダリングシステムはロボトル以外にも、日本国外からパーツを転送することも可能。

「あら?」とAは呟いた。普通なら、パーツ、稀にメダルやティンペットを送る者はいるが、セット一式丸々送り付けてくる者は滅多にいない。誕生日のプレゼント。それとも、上有るメダロット支社宛の荷物かしら?

画面を見ると、エラーを表示していた。どうやら、配送ミスのようだ。一旦受け取り、電話して、送り返せば済む。いつものように冷静に対応すれば、問題なし。そのはずであった。だがしかし、隣のB先輩がパーソナル名称を見て眉を顰めた。

「どうかで、二つを見た」とある気がした。

「私メダロットは詳しくありませんけど、別に危険な物ではありませんよ。」

「せんべいね？」

後輩Aの質問に、Bは首を傾げた。すると、ピー！ピー！とPCが警告音を発した。急ぎ画面を覗くと、ファイアウォールやウイルスシステムが突如として破壊されていた。そして、異常な速度でメダロットセットが向かってきた。

「あ！」Bは声を抑え、そして、Aに命じた。

あなたは上のメダロット支社の人を呼んできなさい。メダリング開発担当の人がいるはずだから。私は警備員と警備メダロットを呼ぶぞ！

どがあん！メダリンク転送内部をぶち破り、ガラスが飛び散り、イレギュラーな配送物が正体を表した。

「やめやめやめ……」

招かれざる客の乱暴な登場で飛び散ったガラス破片を浴びたAは悲鳴を上げた。

メダリングが警告音を発し、シミコレートロボトルの回線を強制切断及び、メダロッヂまで強制排除した。力チヤ力チヤ力チヤ力チヤ…！何十個ものメダロッヂが床に落ちて響いた。

受付に、騒ぎを聞きつけた客と、文句を陳情しにきた客の人集りができた。

文句の一つでも言つてやろうとした客は、ガラス破片が降りかか
つた受付嬢を見て、口を閉ざした。

「大丈夫！？どこも痛くない」

別の受付嬢が掛かつたガラス破片を振り払っていた。

「は…はい。どこも痛くありません」

Bがホツとしたのも束の間、後ろを見て口を大きく開いた。白い物が天井近くまで飛び上がり、音を立てて受付の台に着地した。見たことがないメダロットだ。配色は全体的に白で、関節部や真四角な形をしたスタンプのような腕先は黒い。頭は、映画エイリアンで人の体から歯を剥き出しにしたエイリアンの子供が飛び出すシン用であるが、そのメダロットの頭部は、そのエイリアンの子供が前後左右から飛び出しているようであり、ウネウネと動き、蛇みたいな形の口から覗く赤く点滅するカメラアイは見る者をゾッとさせた。市販されているメダロットより一回りでかいのも、周囲の人間に不安をもたらした。

しばらく意味もなく動いていた四つの蛇頭は、ピタリとある一点にカメラを向けた。客たちも蛇頭と同じ方を見た。そこには、少年とヘッドシザース。正確には、イッキとロクショウがいた。

謎の来訪物と幾人かの視線が一人に注がれる。イッキはいたまれなくなり、どうしたものかと迷った。

集団心理。日本人には特に強い傾向。そのせいで、誰も動こうとしなかつた。その中で、茶髪リーゼントの高校生やアリカなど、一部の人間はそのメダロットに對し、明らかに恐怖を抱いていた。

ベベレケ博士が一つの間にか背後に立ち、「また次の機会に」と言つて通話を切つた。それが合図かのように、謎のメダロットが声を出した。

「…ロ…ロウ…クウショーウ…」

耳を疑つた。今度ははつきりと「ロクショウ…！」と雄叫びを上げて襲いかかってきた。一斉に散開。床が碎け散る。震災対策で頑丈に造られた床を、謎のメダロットはいとも容易く破壊した。

「何をしてある。奴はストンミラーという対人兵器として造られたメダロットじや！早う、逃げろ！殺されるぞい…！」

ヘベレケ博士が階全体に聞こえるほど大声を出した。ヘベレケ博士の呼び掛けで集団心理の糸が切れて、客や受付嬢はそろそろと逃げ出した。謎のメダロットはまたロクシヨウと叫び、メダリンク装置を腕のひと振りで叩き潰した。電流と爆発音が迸る。ここで、何人かが悲鳴を上げた。

完全に糸が切れた。人々は「ござつて、我先に」と階段を降り始めた。謎のメダロット。もとい、ストンミラーはメダリンクのコードが変に絡まつてしまい、一時的に身動きが取れなくなつていた。ふすふすと、ストンミラーの体から煙が漏れていた。いや、煙だけではない。弱々しいが、ロクシヨウと同じ謎の光が体の内側から発せられていた。

「あれは！」

「何してんの！…とつと逃げるわよ」

イッキの疑問をよそに、アリカはイッキとフレイヤの腕を掴んで走り出した。一足遅れて、ロクシヨウも後を追つた。

そのロクシヨウの頭にまた声が聞こえた。今度は、明確に。

…苦しい…熱い…熱い…誰か…ここから…この体から出していくれ。

「お主か？私を呼んだのは」

ロクシヨウはストンミラーを見ずに言つた。ロクシヨウの問い合わせに答えるように、ストンミラーはまたしても体の内側から謎の光を発して、絡まつたコード「」とメダリンクの台を引っこ抜き、左腕でそれらを木つ端微塵にした。鉄とアルミニとコードの破片が飛散する。

「ウガガガガアアアア！」

再び、猛獸の雄叫びが一階と上階に轟く。

一階の実践ロボトル場では、待ち人や接客の係が何事かと逃げ惑う人々を眺めていた。受付嬢の一人、後輩に庇われたBが素早くベテランの勤務係に事態を告げた。

「お客様の方々、当ビル内で火災が発生しました。係員の誘導の下、

落ち着いて避難してください」

ベテラン勤務係は嘘をついた。だが、事実よりこの嘘のほうが効果があつたらしく、見物人を含む階下の客を速やかにビル内から避難でき、余計な混乱を生まずにすんだ。ベテラン勤務員のファンプレーであつた。

イッキはアリカとフレイヤに先に行くよう促し、自身はロクショウの説得に当たつた。イッキはロクショウの腕を掴んで外へ行こうとしたが、ロクショウは拒んだ。

「何してんだよメタビーーーあいつの相手はセレクト隊にでも任せても早く逃げよう」

「駄目だ！…あやつは私を求めている。何故かは知らぬが、今一度、会わなければ」

揉めているメダロッターとメダロットに受付嬢が早く行きなさいと一喝した。

「ウガアー！…またもや猛獸のような声を上げて、ストンミラーが階下にきた。その姿を見て、ビル関係者たちとイッキは固唾を飲んだ。

「と…溶けている」

イッキが生唾を飲み込んで言葉にした。ストンミラーは全身のパーソやティンペットがドロドロに溶けており、そこから熱を帯びた薄い光が漏れだし、陽炎が生じていた。溶けたパーソの下のティンペットを見る限り、ストンミラーが女性型であることが判明した。

「ロウ！ロウク…。ロウク…ショオオオ！」

音声装置が故障したのか、ストンミラーの発音は先ほどより聞き取りづらくなつていた。

ロクショウの脳内に声が届く。

「ああああー熱い熱い熱い熱い熱い熱い！もう、嫌だ！早く、全てから開放してくれ！…死にたい。」

最後の死にたいは、やや一の足を踏んでいた。

ロクショウはゆっくりとストンミラーに歩み寄った。イッキも、誰も。メタビーを止める者はいない。

ストンミラーは腕を振り上げ、ロクショウがいるロボトル実践場の床を叩いた。ビームにすら耐える特殊な素材を用いた床に亀裂が走り、ストンミラーの右腕は砕け、左膝が溶け折れた。

ロクショウはじつとストンミラーを見つめた。何を考えているのか、イッキには計り知れなかつた。

ロクショウはストンミラーから視線を外さなかつた。

「お主は良いのか？ 介錯をどこの馬の骨とも知れぬ奴に任すとは、ストンミラーは何も言わない。音声装置が完全に壊れたのだ。ストンミラーはドロドロに溶けたティンペツトの腕で胸をこじ開けた。……いい……やつてくれ。どうせ、私は助からないようになつている。恨みはしない。

ロクショウはソードを抜いた。瞬間、イッキが一直線にロクショウに向かつた。

「やめろロクショウ」

ドシュ！ 斬撃が無音の空間に木靈する。チャンバラソードの一刺しでストンミラーの体はバラバラに引き千切れ、溶けたパーティとティンペツトが散らばつた。…そして、メダロツトの命ともいいくべきメダルも同様に…。

イッキは立ち尽くした。ロクショウは何も喋らない。すたすたと勤務員のおじさんが近寄り、有無を言わせぬ口調で言つ。

「一度外に出なさい。ただし、あの女人に付いていくようだ」

「あのパーティ…あのパーティがあれば奴を……どうして」呆然自失に独り言イッキ。ロクショウはそつと、イッキを見上げた。

ロクショウが「イッキ」と名を呼び、手を差し出した。イッキはその手に触れぬよう、腕を素早く引いてしまつた。汚い物をうつかり触りそうになり、本能的に手を引く。イッキの動作は正にそれで、当人は今の自分の動作が信じられないようだ。ロクショウの手が空を掴む。

見かねた勤務員がロクショウを、受付嬢がイッキを外に連れ出した。

密かにこの光景を窺っていたアリカとフレイヤは言葉を失っていた。外に出た俯きがちの二人に声をかけようとしたが、言葉が出ない。

よくわからない。何でこんなことが起きたのかわからない。ただ、二つ判ることがある。正体不明の悪意のせいで一体のメダロットが命を落とし、あるメダロッターとメダロットの間に微かな溝が出来てしまったのが。

「アリカさん。こんな状況でなんだけど、元気を出して」フレイヤがアリカを励ました。アリカはうつすらと微笑み、セフィスの手を握った。

「そういえば」

アリカは辺りを見回した。

「ヘベレケ博士はどこに」

そのヘベレケ博士は受付嬢に連れて行かれるイッキの隣にいた。アリカとフレイヤは頷き合い、彼らの背をつけた。ここでようやくパトカーのサイレンが鳴り、セレクト隊も到着した。

* 与太話

久美沙織「MOTHERシリーズ、ドラゴンクエスト」

高屋敷英彦「ドラゴンクエスト」

宮部みゆき「ICO」

他、世界樹の迷宮と風来のシレン。このゲーム原作を書く際、文体はこれらの作品を参考にしている。

特に、高屋敷先生の説明的文章と、久美先生の短くあつさりした戦闘シーンの描写。両名の作品は幼い頃から読んでいるので影響が強いかも。

今年最後の投稿。

ヘベレケ博士とほか数名が証言したくられたおかげで、イッキとロクショウは正当防衛を理由にお咎めなく済んだ。それよりも、イッキは自分がロクショウに対してしたあの行動にショックを受けていた。

あの時、ロクショウは僕に手を伸ばした。なのに、僕はその手を振り払ってしまった。何故！？

誰かが無理矢理使わした力のせいで命を落とした、あの可哀想なメダロット。そのメダロットにロクショウが行つた行為。外出規制期間が終了し、いつもどおりにアリカの取材に付き合い、楽しく都会を歩き回る。そんな変わらない日常のはずだったのに、どうして。こんな…。

ロクショウは必要なこと以外は語らず、弁解しにくい。外出規制されるかもしれない。鬱鬱とした心で更に深く余計な物まで考えてしまい、気落ちした。幾ら考えても答えが出ず、疲れてきた。イッキは、一旦物思いをやめた。

帰りの電車、アリカはヘベレケ博士から聞いたことをイッキに語つた。イッキとロクショウが何も言わないので、アリカが一方的に喋つた。

「あんたたちが連れて行かれた後、すぐにセレクト隊や警察が駆け付けたでしょ？……そこで、現場の暴走メダロットの破片とかを回収しようとしたけど、パーツやティンペットの殆どが泥々に溶けていて、回収や後片付けに手間取ったようだわ。……メダルも…溶けていたようよ

「溶けていた？」

家に着くまで黙りの腹積もりだったが、反応を隠せなかつた。ロクショウも、メダルが溶けていたことには反応を示した。

「そう…パーツほどじゃないけど、砕けたメダルもあちこち溶けて

いて……」

アリカは最後の言葉を呑み、ゆっくりと、遠回しに表現した。

「何もしなくとも、どの道助からなかつたらしいわ」

イツキも、アリカも無意識に口クショウに視線を注いだ。口クショウはその視線に答えるように、臆さず、重々しく口を開いた。その響きには、死者をいとおしむものが感じられた。

「奴が来る前はただのこつるさいノイズにしか感じなかつたが、奴が姿を現してから、はつきりと奴の声が私の頭に響いた。……熱いとか……苦しいとか……地獄だとか……死にたいとか。そんな思念が何度も、そう、例えれば、炎で焼かれて真っ赤に熱が籠もつた槍が突き刺さるよう」。私の頭に届いた。

奴のイメージから伝わった。メダロットの頭脳であり、心臓であり、魂であるメダル。そのメダルが少しずつ溶けていき、意識が遠のき、自分の命が蝕まれるイメージ。明確な死への恐怖。想像してくれ。自分が狭い通風口しかない鉄条の物に閉じ込められて、外側から火で炙られる場面を。窒息死しようにも、通風口があり、耐え切れずにそこから息を吸つてしまい、生きたまま自分の皮膚や肉が焼かれていく様を。……地獄だろう。私を奴を介錯した。いや、介錯しざるをえなかつた

そうして、口クショウは口を閉ざした。アリカが目を逸らし、耳を閉じたがっていた。口クショウのその顔に口はない。仮にあっても、今はバールを使つてもこじ開けられないそうにない。

頭の中では幾らでも言葉が紡ぎだされる。ただ、いざ声に出そうとしたら、どう言えばいいかわからず困惑してしまう。あの光景と、その光景の中で自分がした行為がちらつき、何も言えなかつた。一分一秒でも早く、御神籠町に着くのを願つた。

駅前で、チドリが日産エルシオで迎えに来た。

「お帰りなさい。ベベレケ博士や警察の人たちから話は伺つたわ。とりあえず、五体満足でイッキとアリカちゃん、ロクちゃんが帰つてきてくれただけで満足よ。ほら、乗りなさい」

信号に阻まれなかつたので、車はスムーズに進み。三分程度で家に着いた。アリカが礼を言つて別れた。

どう、言い訳したものか。また、外出時間が規制されるのか。イッキの考へていることはお見通しなのか。玄関のドアを潜ると、チドリはイッキを見下ろした。

「まつ、しようがないわね。この前と違つて、今回は向こうからトラブルが舞い込んだようだし。あんまり縛るのもためにならないし」「え？ じゃあ、外出規制とかは…」

「もちろんなしよ。一ヶ月の間、ちゃんと約束を守つていたし。ただし、むやみやたらと変なお誘いは受けないでよ。同年代ぐらいの、金髪で可愛らしい女の子からのお誘いだとしても」

チドリはイッキの鼻を人差し指でちょっと突くと、玄関から歩幅四歩ほどにある右側のリビングに入った。イッキも続いて靴を脱ぎ、まずは一階に上がつた。ロクショウは…一階に上がると、イッキの部屋に入らず、一階玄関口の上に位置する窓側に立つた。

イッキはロクショウの背に声をかけず、部屋に入るなり、俯せでベッドに横たわつた。

目を覚ます。部屋は暗い、時計の「ED」は夜の八時を表示していた。俯せから仰向けに向いていて、体に毛布がかけられていた。ママが気を利かしてくれたのだろう。

闇の中、目を凝らしてみた。自分のパートナーがそこにいないか。淡い月の光が差し込んでいるから、この闇でもあの白いボディは目立つ。しかし、部屋には自分以外の影は存在しなかつた。まだ窓際か、もしくは、階下に居ることを期待して部屋を出た。さすがにも

う、窓際には立っていない。次に、階下を降りた。玄関に父・ジョウゾウの革靴はない。今日は定例会議があるので、真夜中過ぎに帰宅すると、そつママから伝えられた。

リビングに居座るママに一言おはようと告げ、リビングとリビングに繋がる台所をざつと見渡した。ソルティはテレビ台の傍にいたが、一本の立派な角を生やした白いボディの者はいなかつた。

「ママ。ロクショウの奴は」

「ロクちゃんならね、ついわざと外へ出たわよ。深刻な表情と聲音で。一日の間に事が目まぐるしく起こつて、頭の整理が追いつかない。しばし、夜の外出で一度、熱を冷ましたいって。まあ、メダロットだから、何を考えているのか表情からじやわからぬけど」

「ママ！なんで止めなかつたの。もしかたら、ロクショウの奴…」

「イッキ。落ち着きなさい。まずは、座つて私の話を聞きなさい。

おおかたの事情はロクちゃんとアリカちゃんから聞いた」

チドリはイッキを見据えた。イッキは小さく顎を動かし、ソファに腰を落ち着けた。ソルティがくうんと鳴き、慰めるよつて足元に寄り添つた。イッキはソルティの顎を軽く撫でてやつた。

チドリは静かに。そつと、語りかけた。

「その人には仲の良い友達がいたんだけど、ある日、その友達が勝手にその子のお弁当の好物を食べちゃつたの。ほんの些細なこと。けど、その人は神経質で、おまけにその時は虫の居所が非情に悪くて、大喧嘩した。以来、一人は謝りもせず。互いを無視し合つようになつた。いない人の批判をするのは気が引けるけど、その一人の性格が普通の人より問題があつたのは間違いない。

「でもね。お弁当の好物を一つ取つた。軽い言い間違いをした。人はね、大袈裟な理由がなくても、たつてこれだけのことで仲違いの原因となるの。ロクちゃんから事情は聞いているわ、イッキ。そのメダロットはさぞかし辛く苦しかつたでしょうね……。ロクちゃんのしたことが、白か黒かは問わない。それはきっと、ロクちゃん自身にしか見つけられない。けれども、イッキ、あなたはどうなの？」

あなたにとつての口クちゃんは何？家族。友達。相棒。ペット。個人の所有物。願望を満足させる物。それとも、まさか恋人？

「ママにとつてメダロットは何？」

「ん？ そうねえ。あなたが家族の一員なら家族。ペットならペットね。三体合わせて一割電気代増しちゃつたけど」

「すんまへん」光太郎がメダロットからしょんぼりと声を出すと、チドリは笑顔で気にする必要はないと言つた。

イッキはチドリから顔を逸らした。

「僕は……」

手を所在なげに動かす。イッキの手に合わせようつて、ソルティも顔をぐらぐらと揺らす。

「僕は」イッキは意を決したよつてソファから立ち上がつた。

「ママ、行つてくる」

部屋から出ようとするイッキを、チドリは呼び止めた。

「待ちなさい。行くんなら、ソルティを連れていきなさい。面倒臭がりのソルティが散歩するには良い時間帯だと思うし、大人や警察に見つかっても言い訳になるわね」

外出しようとするイッキに、チドリはもう一回、手短に語つた。

「イッキ。人と仲違いするのは簡単なきつかけがあれば十分だけど。人と仲良くするのも簡単なきつかけがあれば良いのよ。それとね、その二人はもう仲良くなつたのよ」

「それつてまさか」

チドリは答えず、にっこりと笑顔でつてらつしゃこと手を振り

リビングに戻つた。

ソルティの首輪に散歩用の綱を着けると、イッキは円と星空がきらめく外へ飛び出した。

都市部だと怖いが、この近辺の住宅街なら、夜でもそう危ない日

に遭う確立は滅多にない。空は月と星が輝き、ソルティもいて、メダロットには頼もしいのが一体もいるので、怖さはなかつた。三丁目の公園、コンビニ、少し遠回りして学校にも向かつたが、それらしきものはいなかつた。

とすれば、川原の土手。最悪、おどろ山に行つた可能性がある。学校から土手方面へ足を向けた。学校帰りの寄り道、ソルティの散歩、別の遊び場へ行くときなど、度々通るあの土手。多分、あそこにはいる。というより、あの土手以外に他に居る場所は考えられない。わざわざ遠回りな探索を選んだのは、ロクショウと同じく、自分も気持ちを整理してから会いたかったのかもしれない。

広々とした土手がみえた。川の存在で辺りは住宅街より放射冷却が進んでおり、風も吹き抜けているので涼しかつた。

月と星で自室よりはるかに明るいから、すぐに見つけられるはず。土手の半ばまで降りて、もう一度見渡す。この夜での白いボディは目立つ。そしていた。橋の柱のたもと、背が高い草を背に、白いボディの者が立つたまま川を見つめていた。

「気づいているぞ」

ロクショウが先んじて開口した。

「いつから」

「お前が土手に少し来る前からだ。メダロットの感覚機能は人間より優れている。特に、私やプラスには索敵用のレーダーがあるから、それでな」

そうして、ふつつりと言葉を切つた。イッキは土手から降りて一、三歩近寄つた。そのまま一分ほど、ソルティの足音と息以外の音は途絶えた。と、上流辺りで小さな打ち上げ花火が上がつた。夏休み最後の想い出として、花火をしているのか。イッキはロクショウから、ロクショウは一瞬上を向いた。

イッキは向き直ると、たどたどしく話しう出した。

「やっぱり。怒つているの」

「何を、だ？」

「あのメダロットにあんな細工をした奴と……僕がお前にしたこと
に

「ああ、そうだな。あの名無しの権兵衛と化した奴が、何故、あん
な目に遭つたのか。いや、遭わされたのか。気掛かりでもあり、思
い出しただけでも怒りがわいてくる。だが、お前がしたことについて
ては」

ロクショウは僅かに首を左右に動かした。

「全くショックを受けなかつたといえば嘘になるが、怒つてはおら
ん。身近な存在があのよつた行為をすれば、驚くのは当然の反応だ
ろ？」「う

ちくりと胸が痛む。違う。僕はあの時、救いを求めるように手を
伸ばしたメダロットの手を振り払つたのは、衝撃以上に、恐ろしさ
と得も言われぬ汚らしさを感じてしまったからだ。絶対自分の物に
すると決めて、憧れていたヘッドデザースだつたのに。イッキは震
える声で、吐露した。

ロクショウはその言葉に動じなかつた。しばしの沈黙ののち、ロ
クショウはぽつりと言つた。落ち着いた物腰はいつもどおりだが、
単に根暗な奴が語つているような言い方だ。

「私は未熟者だ。それなのに、ここ最近の勝利と特訓で少々浮かれ
てしまつたようだ。いや、違うな。臆病者だ」

「そんなことはない！」

イッキは思わず大声で否定した。

「そんなわけないよ。だつて、お前は僕より強くて。賢くて。しつ
かり者じゃないか」

「私がイッキが思つてゐるよつた奴ではない。今日の一件でそれが
よづく理解できた。

私が奴を介錯した。情けもあるが、それとは別に。私は奴の苦痛
の叫びを疎ましく感じた。言つただろう。熱した槍が直接突き刺さ
つてくるようだ、と。初めは同情したが、段々とその騒音以上にう
るさい叫びが嫌になり、黙れと返してしまつた。そう、つまり、私

は奴を心の底から情けを持つて介錯したのではない。人間だと鼓膜がどうに破れているレベルのやかましい心の叫びから逃れたい一心で、介錯したのだ」

「ここで、ロクショウの言動が震えだした。

「奴を介錯する前。彼、あるいは彼女かな。奴は、そんな本音を漏らした私を許すといい、そんな気持ちを持つて介錯する私を恨みはしないと受け入れた……。つくづく自分の弱さを呪いたいものだ。私は奴を救えず。心持からして、そもそも奴を介錯するような権利はないというのに。私は、一生罪の十字架を背負うのだ」

話を聞いているうちに、イッキはあることに思い至った。そうだ。いくらロクショウが僕より頼りになるからといって、ロクショウは人間でいえば、まだ一歳にも達してない。とはいっても、九歳からそこの僕じやどう言えばいいのか。重たい沈黙が降りてきた。

「イッキ。華美装飾をした綺麗事で慰める必要はない。今のロクショウには、あなたの気持ちに素直に従つた言葉で語りかけたほうがよい」

三分ぐらい経つてからだらうか。何を言うか迷うイッキに、トモエが小声でメダロッチから後押しした。イッキはありがとうと返し、顔を上げた。

「ロクショウ。僕はお前の気持ちのはつきり言つてわからない。お前のしたことが正しいかどうかもわからない。ただ、ただ……これからも、僕と一緒にいてくれないか？人の伸ばした手を振り払つた奴のどの口が言うかと思うかもしれない。だとしても、僕と一緒にいてくれ。それで、答えを考える時間をくれないか。見つけられるかどうか自身は無いけど」

イッキは率直に、論理性も合理性もないことを言つた。だが、その目は真剣であった。ロクショウはおもむろにイッキと目線を合わせると、「何を言つておる？」と首を傾げた。

「え？だから、これからも僕と一緒にいて……」

「何を言つておる？私はお前の所有物だらう。探せばいくらでもあ

るかもしけんが、目下の所、私が帰るとこりはお前の家だろつ。抛り所がない野良メダロットになつても何の得にもならんし。それとも、お前は私を捨てるのか？」

「しないよそんなこと…」

「そうであるう。そんなことをしたら、子供と言えど犯罪行為をした咎で周囲から冷たい目でみられるだろつし。第一、あのアリカがこんな美味しい物を見逃すはずない。きっと、スクープとして取り上げるであろうな」

「…ロクシヨウも、何を言つて居るの」

イッキは間抜けな感じで口をぽけっと開いた。

「お前こそだ。恐らく、イッキのロブリから察するに、私が手を振り払われたシヨツクで家を出るとでも考えたのだろつ。違つか？」

イッキはうんと頷いた。そのイッキを見て、ロクシヨウは一笑に付した。別の意味で肩を落とした。僕が追いかけた意味は一体。重たい空気が薄れたのを感じたのか、ソルティがさつきより盛んに尻尾を振つた。

ロクシヨウはくつくと笑うのを止めて、河原の方を向いた。

「やはりか。案ずるな、私はどこにも行かん。しかし、お前が出て行つて欲しいと願うなら出るし。今日このことで何かよからぬことが起ころうならば、どこかへと身を隠す」

「行かなくていい」イッキはきっぱりと言い放つ。

「お前にはまだ出てほしくないし。これから先、また変な事が起きたとしても、家にいていい。第一、お前は僕の物なんだぞ。いけない方法で買つたけど、誰がなんといおうがお前は僕のメダロットだ」

そうかと、ロクシヨウは河原を見たまま呟いた。やがて、またイッキの顔を見た。

「帰宅しよう。今日、私とイッキの身に起きたことは、一日や一日で答えが出るような問題でもないしな。何より、チドリ殿が心配されているだろつ」

ロクシヨウはちらりと左手の上を見やつた。イッキもつられて同

じほうを見た。

「どうしたの？」

「…ふつ。気にするな。それと、イッキ。母上は決して鬼ではないぞ」

「鬼つて…。まあ、そりや。厳しくて、叱られるといつゝといつしく思うけどさあ。一人とも好きだよ」

「いくら安全でも。子一人で、夜の町中を行かせる訳はないということが。もしも、ジョウゾウ殿もいれば喜んだであろうな、今の科せりふ白。

「あんじょうよう整つたな。ほな、帰りましょ」

光太郎が嬉しげに喋った。

「光太郎。なんで黙っていたの？」

「いやなに。ここは、若いもん同士が腹を割つたほうがええと考えたんや。あんまりにもこじれるような口出ししたがな」

「そ者は言つていますが。本当は、止める自身が無かつただけではありませんか光太郎さん」と、トモエが突っ込んだ。

「酷いなあ。さて、あんさんらより長生きしとるさかい。止める口ツは一応、心得てある」

イッキとロクショウは笑つた。事が事だけに、さすがに心の底から笑えはしないが、沈んでいた気持ちが僅かに軽くなつた。

ほんの数分。二人はソルティの散歩をしたら、帰宅した。帰つて早々、チドリにいきなり、もうお買い物のお金を使わないでよときつく言われた。ロクショウの思つた通り、チドリはイッキとソルティを見守つていたのだ。

22・絆（後書き）

ことを急いた。いくらなんでも、起きたその日で仲直りは早かつたかもしれない。せめて、最低でも一日経つてからでも良かった。他にも、取り調べがこんな簡単に済むのか？など、投稿する今になつて疑問が尽きない。

ご指摘がある場合、できる限り改善するよう努めます。

23・花園学園（前書き）

アニメ版（世界大会編）のキャラクターが生徒役として登場。

とある山奥の小屋。男が一人、通信器を使って各地に指令を飛ばしていた。

「決行は八月二八日。午後の特別なお勉強会をする時間帯を狙う。これは、我らの脅威を世間に知らしめると同時に、お前たちの意志と強さをにつくべき大人共に知らしめるチャンスでもある。放送終了」

見えなくとも見える。餓鬼共が悦に浸り、自分たちは他の無知の奴らでは到底できないことをして、凄く偉くなつたと勘違いしている様が。自分たちもその無知な奴らとも気付かず、呑気なものよ。男は、最初の電波とはまた違う電波で通信した。

「諸君。時はきた。明日、馬鹿な餓鬼共が盛大に騒ぎを起こしてくれる。君らはその隙に乘じ、きちんと仕事を果たしてくれたまえ。尚、嗅ぎつかれると厄介なので、電波による通信はしばらく控える。では、健闘を祈る」

男は背筋を伸ばし、椅子から立ち上がつた。小屋の中には、男以外に七名が控えていた。みな、どこかの王様に対する敬意を示すような姿勢で座つていた。

「我々は餓鬼共を信頼させる証として、俺様の他、お前たち三名にも同行してもらら」

男は七名の中でも一番大会の良い者。体付きからして女性としき者。腕に小さな腕章を巻いている点を除けば、彼らにとつては下端でしかない格好をした者を一名選んだ。不満げに唸る者がいた。体格の一番良い者だ。

「餓鬼共の世話とはな」

男は体格の良い者を、抑揚のない、静かな声で宥めた。

「世間様からすれば、大事。だが、我らにとつては小事。全ては真の作戦を成功させる為の然るべき行動。そう、愚痴をこぼすな。」

…それに、くつくつ。今回はメダロット社のメダロットをわざわざお披露目させてやるのだしな。メダロット社の連中には感謝して貰わねば」

天気予報では雨は降らないと報道していたが、見事に外れ。この調子だと、明日は傘を持つていく必要がありそうだ。
傘は：要らないな。あの服はそこらの雨合羽よりよっぽど防水仕様が優れているからな。

前日の夜。緊張と武者震いで眠れない。違う。これは、武者震いだけではない。この震えには、恐怖も混じっていた。

何日も前に、自分はしてはならぬ悪事を犯した。もう、後戻りはできない。どこまで直進して、自分がお金持ち様様だけの輩ではないことを、知らしめてやるんだ。きっと、自らの力に怯えひれ伏し、恐れをもって自分を認めるだらう。友達なんていらない。僕はとてもなく強いのだ。うるさい奴は、札束で横っ面を引っぱたけばいい。

肌寒く感じた。冷房を切り、羽毛布団で体を巻いた。しかし、緊張と溢れる恐怖から一向に寝付けなかつた。小一時間後、午前四時には自然と眠りにつけた。

「…パパ。…ママ。早く帰ってきてよ」
「…やむにやむにやと、寝言を呟く。

*

*

事件から翌日。イツキはメダロット研究所のアキハバラ博士の書斎に居た。自宅にて、メダロット博士が電話で来るよう頼まれたからだ。博士に会うと、イツキは昨日のことを語った。博士は鎮痛な面持ちで「事件は報道で知ったよ。まつこと…酷い話じやて」メダロット博士は名もわからぬメダロットの為に、哀悼の意を述べた。イツキも博士に倣い、しばし、黙祷した。

黙祷してから一分過ぎ、イツキはそつと、用は何ですかと催促した。

「おお、そうだな。本題を言おう。お前さんのメダロットである口クショウ、並びに昨日の暴走メダロットが発していた”謎の光”。あるいは、”謎の光の力”とでも呼べばよからうか。実は、メダロットのそういう事例は僅かながら、以前にもあつたんじや。最初の事例は確か十年前ぐらいかのう……。当時、九歳になる男の子の格闘メダロットが、光の刃を飛ばすという、本来そのメダロットに備わっていない機能を発動させたのが最初の事例かのう」

「あのー：それで。そのことが、僕を呼んだこととどう関係しているんですか？」

「せつかちな奴じや。この事は、世間ではまだ公にされておらん。何故かといえば、今はまだ、この力は人の手には有り余る代物だからだ」

人の手に有り余るか。そうかもしれない。メダロットの魂である小さな魂である”メダル”から、あんな莫大なエネルギーが生み出されることが知れたら、良からぬ事を企む人間がこそつて、益々メダロットを悪用するだろう。

それよりも、博士は本題に入ろうと言つておきながら、ちつとも本題に入つてないよう気がする。

「博士え。一体を何を言いたいのですか」

「うん？いや、まだどうこうできる段階には入つておらん。…あつ！こりや失礼！またもや、本題からずれたな。いちいち、謎の光と

か謎の力と称するのは面倒だし。何より、飽きないか？じゃから、わしとナエでぴったりなネーミングをつけた。…その名も…メダルの力、略して”メダフォース”！どうじゃ、かつこいいじゃひ

どや顔で聞く博士に、イッキは呆れた。

「僕が呼ばれた理由つて。ひょっとして、メダルから発する謎の光る現象の名称を聞く為だけですか？」

「そうだ。それだけじゃ。もう帰つても良いぞ」

がつくりときた。てつきり、事件について細かな詳細を聞けるか。謎の現象について新たなことを窺い知れると期待していたのに。

「はははは！ そう肩を落とすな。学会にも発表していないことを知れたのだぞ。もっと、喜べ」

そう言つて、メダロット博士はイッキの気持ちなどお構いなしに笑つた。こういう身勝手な一面もあるからこそ、学者として成功したんだろうなど、子供ながら悟つた。それでも、憎めないのは本人の人徳のなせる賜物だろう。

博士は笑いを止めて、イッキに向き直つた。

「もう一つ。いや、二つ目。メダフォースの名称は決して口外しないこと」

がらりと好好爺の調子から一変。妥協を許さぬ研究者の口調で言つた。イッキは、無言の威圧から、ただ黙つて首を縦に動かした。博士はそれを見ると満足げに頷き、再び、好好爺の雰囲気に戻つた。

「二つ目はな。昨日のような強制的に発動させられる事態も考慮しお前さんに例のパーティをやるう」

メダロット博士は、イッキが上の空で呴いた「あのパーティ」を机の上に置いた。それは、ハーピー。あの、上半身は美しい女性で、下半身は鳥の姿をしたギリシャ神話に登場する怪物である。

このメダロットの名称は、S-L-N型トランキュリイ。由来はトランキリテ、フランス語で静けさを表す単語をもじつた名前である。

このメダロットは一般発売の予定はない。何故なら、このメダロットはメダフォースの制御実験をするためだけに開発された。アリ

力と一ヶ月の間、ロボトル試験場で訓練していた期間。イッキとロクショウは一回、アリカに内緒でメダフォースの実験に付き合つた。一度目の実験は、自然発生のメダフォースの制御。ロクショウがメダフォースを発動するのに気の遠くなるような時間が要したが、メタビーが謎の光。もとい、メダフォースを発動する直前で、メダフォースの抑制制御に成功した。

二度目は、メダフォースの強制発生実験。メダフォースを発生させるのは、十分程度で済んだ。その時、世にも恐ろしいことが发生了。メダフォースが暴走したのだ。

暴走したメダフォースは、戦車用ライフルの弾丸にも耐えうる強化ガラスもぶち破つた。事態はそれだけでは留まらなかつた。メタビーのメダフォースが暴走した際、研究所にいたクワガタメダル着用のメダロットたちが自我を失い、狂暴化した。

幸い、トランキュリイ三体がフルパワーでメダフォースを抑制したおかげで、被害は早い内に沈静化したが、ロクショウの傷が酷かつた。ロクショウはティンペットとメダルを残し、バーツが全てどうどろに溶けており、惨たらしい容姿をさらしていた。

こんなことがあつたので、実験は即中止。イッキとしても、ロクショウが無意味に無残になる様は見たくなかったし、ロクショウも勘弁してくれと語氣を荒げた。

メダロット博士とナエは平謝りに平謝り、お詫びとして、その場で新品の改良型ヘッドシザースのバーツ式とティンペットを二人に譲つた。その一品は遠慮なく頂戴したが、イッキとロクショウはそれ以上の謝罪と品を拒んだ。酷い目に遭つたが、一つ返事で気軽に実験に付き合つた自分たちにも非があると思い、二人は博士とナエを責めなかつた。

イッキが言つたあのバーツ。このトランキュリイのバーツを使えば、無理矢理メダフォースを使わされて、苦しみのうちに亡くなつたあのストンミラーを救えた可能性がある。

「いいんですか。これって、一般販売を想定していないバーツですよ

ね。僕が持つのは不味いんじゃ」

「イッキ君。このパーツを譲るのは、君のメダロットを守る為だけではない。メダル所有者たる資格があると判断された、君への信頼の証である。わしはとナエは、君なら、このパーツの使用法を道を誤らずに使えると信じている。だから、頼む。このパーツを受け取ってくれ、イッキ君」

メダロット博士は真剣な眼差しで、イッキの側にトランキュリィのパーツを押して、頭まで下げた。尊敬する人物にここまでされでは、受け取るしかない。実をいうと、ここに来たもう一つの目的は、このトランキュリィのパーツを譲つて貰う為でもあった。

博士のほうから直接、受け取つて欲しいと頭まで下げられたのは予期せぬ事だつたが、イッキはトランキュリィのパーツ一式を譲り受けた。

イッキとアリカ。いつも一人は今日、メダロポリスのイーストシティにいた。時刻は午前十時。

イーストシティは三つの名門校が隣接し、閑静な高級住宅街が並ぶ街である。メダロッ島滞在中の時、コウジとカリンから、メダロポリスのイーストシティに住んでいることを知つた。どこに通つているかまでは言わなかつたが、近くの花園学園に通つていると考えるのが妥当だろう。

荷物は財布、水筒、メダロッチ、ママに雨が降るから持つて行けともたされた折り畳み傘。

アリカはこの前のうつかり屋さんの警官を頼りに花園へと取材をしにきたが、イッキは、一ヶ月ぶりにコウジとカリンちゃんに再会するのが楽しみだつた。花園学園は駅から徒歩一五分ぐらいで着く。「良い建築物だ。ただ外装とでかさだけを求めたばかりではない、生徒の生活面にも心を配つてているな」

ロクショウの素直な感心に、イッキとアリカは肯定するほかなかつた。

その辺によくある感じのギンジョウ小学校とは異なり、花園学園は外観からして規格外だった。清潔感はその言葉どおり、学校周囲と門の隙間から見える限り、ちり一つ見当たらない。また、とてつもなく広大だ。学校の左右にはギンジョウ小学校のより大きなグラウンドが整備され、プールも二つも有り、海外など遠方からきた学生の為の、学生寮とお風呂まである。防犯対策も完備、二四時間態勢で拳銃所持の警備員が待機。

いくらなんでも、馬車が過ぎたり、門が純金の造りだつたり、遊園地まではないが。とかく、花園学園は全てにおいてギンジョウ小学校とは別世界であつた。

今日を取材日に選んだのは、一般開放の日だからだ。この日を逃せば、次の一般開放は平日。夏休みの後となる。アリカは何としても、今日中に事件解明のネタをプロのマスコミよりも一足先に掴みたいと望んでいた。

警備員にギンジョウ小学校の生徒手帳を見せて、入門した。

その名は聞き及んでいるが、入るのはこれが初めてだつた。警備員に聞けば場所は教えてくれるだろうが、案内まではしてくれそうにない。そこで、アリカは適当に歩き回つている一人に声をかけた。アリカは意図してだろうか、声をかけられた人物は一人よりやや年上で、白金色の美しいショートヘアに、深いサファイアな眼の美少年だつた。単調な水色のシャツと紺色のジーンズと、服装は小さつぱりしていた。一目で海外出身、正確には北欧辺りの出身だと判る。アリカに声をかけられた人物は嫌気も見せず、爽やかな笑顔で呼び掛けに応じた。甘いマスクとは、彼ののような人を指すのだろう。

「何かご用ですか？」

彼が流暢な日本語で喋つたことに、二人は内心安堵の溜め息をついた。最悪、ハローーやデスイズアベンなど滅茶苦茶な英語で誤魔化そうと考えていた。

「えーっと、私はギンジョウ小学校新聞部所属の三年生で、甘酒アリカっていいます。で、こっちのちゃんまげは私の助手で天領イツキという名前です。よろしくお願いします」

「そう、いらっしゃようしきね。甘酒さん、天領さん

「あつ！ いえ、名前で呼んでくださって結構ですよ」

「じゃあ、改めて。よろしく、アリカさん、イツキさん。僕はアイスランド出身で、性はブレンニヴィン、名はベルモット。花園学園メダロット部所属の五年生です。それで、君たちはどうゆう用事があつてここにきたんだい？」

本当のことと言つのは不味いので、アリカはお金持ち学生の実態を調査しに来たと告げた。そう言つと、ベルモットは可笑しくて堪らない様子で笑つた。

「はははは！ 金持ち生徒の実態調査か！ ユニークな取材目的だね。ところで、イツキさん。君は、辛口コウジって知つているかい？」
いきなり話を振られて、イツキはしどろもどろに答えた。

「…えつ？ まあ、何度か戦つたことはありますけど

「やつぱりそうか！」と言つて、ベルモットの目が輝いた。

「コウジもここにメダロット部に所属しているんだ。僕より年下だけど、コウジは強いよ。僕も十回ぐらい手合させしたことあるけど、結果は三勝七敗と散々なものだ。そのコウジから、最近面白い奴がいるつて聞かされて、外見的特徴や使つてゐるメダロットからしてもしやと思つたけど。どうやら、ビンゴらしげね。イツキさん、今日時間はあるかい？」

「一応、あるといえますけど」

「そうか。では、僕が君らをエスコートするよ。…その代わりに、アリカさん。エスコートした後、君の助手君とロボトルさせてくれないか。時間は取らせないから

この申し出にアリカは一つ返事でオーケーした。

「はいはい！ どうぞ煮るなり焼くなり好きに使つてやつてください！ イツキとメタビーはロボトルが大好きですから！ 私はその間、適

当に人を捕まえて取材しています」

早速、ベルモットの案内でイッキとアリカ、ロクシヨウと転送されたプラスは学園の隅々を案内された。

ベルモットの滑舌ははきはきしており、時折ジョークも交え、彼のエスコートは一行を退屈させなかつた。施設紹介から、学校の関係者しか知らなさそうなちょっとした裏事情まで教えてくれた。彼は心得ているところもあり、生徒一人一人の情報まで話すような無作法な言動は慎んでいた。

ベルモットと共に歩いている時、年齢や国籍に関係なく、彼が会う人から声をかけられているのを見ても、彼が開放的で人から好かれやすいタイプの人間だというのが知れる。金持ち学校だから、嫌味な奴が多いと勝手に思つていたが、意外とそうでもなかつた。

無駄に広い造りなので、全てを見て回るのに三十分も要したが、不思議と有意義に過ごせたと思えた。

「そら、最後に案内する箇所はあそこさ」

ベルモットの指す方角は小中校用の体育館の右隣にある建造物「あそこが花園学園のロボトル館さ」

ここで、アリカたちと別れた。

「何も起きないと思うけど、皆を困らせるようなことはしないでくれよ」

ベルモットの注意にアリカは強気に「失礼ですね。私をイエロー ジャーナリズムと一緒にしたくないで」と返した。

アリカが背を向けると、ベルモットはイッキに両手を広げて驚きを示した。

「彼女、中々強気な大和女子だね」

ベルモットの言葉に、イッキは苦笑いを浮かべた。

うつかり警官の言動を頼りに花園に来たものの、ここに居るとい

う確証はない。いないことだって十分有りうる。それでも、今は今日というチャンスを生かし、聞き込みするしか手立てはない。

小中校のグラウンドでは、多くの部活動が行われていた。ランニング、素振り、筋力トレーニングしかしてないからだろう。さり気なく話を聞こうとしたら、アリカの方から声をかけられて、ロボトルする破目になった。

「やつてやるうじやないの！頼むわよ、プラス、マリアン」

ロボトルが始まると否や、大半の者が練習の手を止めて見学にきた。

相手は帰宅部の六年生。午後の勉強会前の気晴らしを理由に真剣ロボトルを仕掛けた。使用メダロットはクルクルマンの両腕をついたチャーリーベアと、サーキュリスの右腕とペッパー・キャットの左腕をつけたボトムフラッシュ。チャーリーベアで身を守りつつ重力攻撃をし、ボトムフラッシュはその援護と接近する相手の撃退役といつたところかな。

相手が口でカーン！と叫び、ロボトルファイト！

プラスがパリティバルカンでボトムフラッシュを攻撃。チャーリーベアが味方を救出するべく、見えない衝撃波を打ち出すが、プリティープライイン・マリアンの厚いシールドに阻まれた。

ガトリング系で身動きが取れなくなつたボトムフラッシュへ、左腕のライフルを一発！「ゲッチュウ！」とプラスの可愛らしい叫びがグラウンドに響く。ボトムフラッシュのメダルが外れる。

チャーリーベアが仇を取るべく、出力を上げて重力波を放つ。マリアンの盾が凹みをみせた。プラスが右腕のガトリングでチャーリーベアを牽制。にしちもさつちもゆかなくなつたチャーリーベアは、マリアンの鞭のようにしなる電流を帶びたソードを胸部に叩きつけられて、機能停止。

プラス＆マリアンチームが勝利した。

「ギンジヨウ小学校の生徒も結構やるわね。ちょっと待つてね。予備の綺麗なパートを上げるわ」

アリカ達は戦利品として、サー・キュリスのパーティを貰つた。殴る攻撃の代用品としても使え、魔女型サンウェイツチーのように怪電波で相手を妨害するパーティだ。違つ点が幾つか。サンウェイツチーは数秒ほど相手を混乱させるのに対し、こちらは電気指令系統を狂わせる。鈍らせるという表現が正しいかもしない。

取材をするはずが思わぬ戦利品を手に入れられて、アリカは顔がほころんだ。

そのアリカを、じつと軽蔑をもつて見つめる人物がいた。

アリカが人混みから離れると、その人物はアリカを呼び止めた。

「君もメダロッターかい？」

振り返ると、アリカより背が低い男の子がいた。アリカを見上げるその目付きは、どこか見下しているところがあつた。アリカはその目付きを気にせず、男の子に聞き返した。

「そうよ、それで君は私に何か用なの？」

「ん？ 別に。ただね、あんな弱い奴と戦つて君がお得意そつにしている顔を見たら、吹き出すのを堪えるのに必死だっただけさ」

この言動に、アリカは当然切れた。

「ちょっと、なによあんた！ 初対面の相手にいきなりその言葉はないでしょ！ 親の教育がなつてないのね」

「なつていなのは君だろう。やれやれ、警備員さんもこんな庶民の子をほいほいと入れてもらいたくないもんだ。我が校の品位が疑われるよ」

カーッと頭に血が激流する。自分が何かをしでかして非難されるのならまだしも、ロボトルで勝利してちょっと喜んだだけでこの言われよう。

「初対面の相手をよくもまあ…そこまで足蹴に。いいわ、グラウンドに来なさい。相手をしてあげる」

「ふつ…。知らないのかい？ ここには、ロボトル館という場所があるんだよ。もつとも、君のようないいロボトル挑戦されたいつでも受け立つ輩には縁遠いな」

「御託はいいから、さつさとロボトル館に行くわよ。ところで、あんたの名前は？」

少年は居丈高に「名乗る義理は無い」と答えた。予想はしていたが、やはり腹が立つ。相手が名乗らない以上、アリカもこの少年に名乗らなかつた。

館に入ると、ベルモットとイッキの他四名がそこにいた。それはいいとして、ベルモットの全身がびしょ濡れているのは何故？

メタビーは嬉しげにロボトル館へと乗り込んだ。中では、既に四名の先客が練習ロボトルを繰り広げていた。どうやら、一人はベルモットの同級生であり、後の三人は後輩に当たるようだ。彼らは練習を終えると、気軽にベルモットとイッキに場所を貸した。

「見ててご覧」

ベルモットが入口にあるスイッチの一つを押すと、床が割れ、直径20mの円形プールが出現した。一つ、足場として小さな円盤と大きな円盤があつた。

「潜水タイプ用のロボトルフィールドさ。僕の相棒はスターフィッシュのスタフィ。でも、君が望むなら、陸用パーソンに替えて戦つてもいいよ」

この挑発に、イッキとロクショウは乗つた。二人が出会つて間もない頃、一度、水中タイプのメダロットに負けた経験がある。その時はアリカに男性型のアンチシーを貸してもらい、リターンマッチを果たせた。今度は、アンチシーパーツ無しでどれほど戦える、メダロット研究所での一ヶ月に及ぶロボトルでどれほど成長したか、このロボトルで証明することにした。

一体の相手に対し三体使用するのは別に構わないが、正々堂々の戦いにそれは無粋。当然、相手をするのはメタビー。陸でも意外とすばしこく、水中だと恐ろしい速さを誇るマリンキラー対策として、

アンボイナの両腕を着けた。

一人がレフエリーを務め、ロボトル開始！

メタビーが大きな円盤の中央に飛び乗る。スターフィッシュことスタフィイは水中で高速回転。水飛沫が迸る、ロクショウが待つてましたと言わんばかりに両のドリルを向けたが、スタフィイはいなかつた。反対方向から突如として水飛沫が上がり、スタフィイはロクショウに高速体当たりを食らわすと、飛び出た勢いに任せて水中へ戻った。

ざばーっと、水飛沫が上がる。すぐに後ろからも水飛沫が出現。ロクショウは背後にドリルを構えたが…。またしても、次は横から水飛沫が上がり、そこからスタフィイは飛び跳ねた。

「飛沫の柱が一つだけとは限らないよ」

ロクショウは索敵機能をフル作動させたが、相手が早すぎて、捕縛に時間がかかりそうだ。

手強い。だが、コウジはこのベルモットに七勝もしたのだ。この人が弱いと言いたいのではないが、ここで負けるようなら、自分とロクショウはまだコウジには勝てない。

スタフィイがまたしても水の柱を出現させた。瞬間的に出現した四つの柱にロクショウはたじろいだ。その隙を逃すはずもなく、スタフィイは北よりの水柱から突進してきた。

じわじわと装甲が削られ、どこから来るか皆田見当がつかない。

「うーぬ。腰を落ち着けない不安定な場所だな」

ロクショウが愚痴をこぼした。ロクショウのこの愚痴がイッキにヒントを与えた。

そういえば、マーリンは一直線にしか突進してない。それに、床が揺れるということは…。

「ロクショウ。スタフィイが上がつてきたら、反対方向の端にドリルを叩きつける」

ロクショウはイッキの作戦を理解した。

「相談は終わったかい」反対側のベルモットが声を上げた。

「でもね。マーリンは水柱以外も出せるよ」

言つが早いか、左から円盤を覆うほどの波が出現した。この波にイッキは動搖したが、ロクショウは意外なほど冷静だつた。そして、己の勘で左へと避けた。勘は的中、スタフイは波とは違う方角から出現したが、避けられた。スタフイの突進を避けると同時にロクショウは動いていた、円盤の端を両のドリルで力一杯叩きつけ、瞬時に真ん中の取つ掛りに引き返した。円盤の端が跳ね上がり、波を防ぎ、勢いよく飛んだスタフイを弾き飛す。

スタフイはメタビーが向いているほうに素つ飛ばされて、浮いた。強い衝撃で痙攣かヒスでも起こしたのかも知れない。

「今だ！」イッキが叫ぶ。

「悪いな」ロクショウは一言謝ると、目を覚ましたスタフイを左のドリルパンチで一撃！スタフイのメダルが外れた。と、ベルモットが水中へと飛び込み、自分の相棒のメダルをすくつた。

プールからあがり、水も滴る良い男になつたベルモットはイッキに手を指し延ばした。

「参つた。この戦法は短期決戦型だから、時間がかかれば相手に気付かれてしまうのが欠点だな。……いや、言い訳はよそう。完敗だよ、君と君の相棒には」

イッキは濡れたベルモットの手を握り返した。ベルモットの後輩に当たる男子生徒がベルモットにタオルを持ってきて、ベルモットはサンキューと言って、タオルを受け取つた。

「……ふうー。話には聞いていたけど、あのコウジと渡り合えるだけあつて、やっぱ強いね君ら」

後輩が同調する。

「そつすね。コウジの奴も含めれば、内で十指に入るメダロッターといえば、ベルモットさん。コウジ、部長、ある意味ではカリンちゃん。それと……」

後輩男子は口をつぐみ、ロボトル館の新たな来訪者を見た。一人はアリカ。一人は蝶ネクタイをした、綺麗に切り揃えられた髪型や

外見、何よりその顔付きからして、いかにも、嫌なボンボンの一人といつた雰囲気だ。

あの子は?とイッキはベルモットに聞いた。

「…彼はハチロウ…。今、内田が言おうとしていた我が校の十指に入るメダロッターの一人」

陽気なベルモットの口調が一変、どこか苦々しく、刺々しくさえあつた。

アニメでは苗字はありませんが、一応つけた。
因みにブランニーワインとは、アイスランドの地酒です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5680v/>

メダロット2 ~クワガタversion~

2012年1月10日10時54分発行